弘前大学農学生命科学部・農学生命科学研究科

令和元年度　教育改善に向けたアンケート調査

報　告　書

令和 2 年 12 月 16 日

弘前大学農学生命科学部

自己評価委員会

巻　頭　言

農学生命科学部長　佐々木　長市

平成 14 年度に開始された「卒業・修了生を対象としたアンケート調査」は、今年で 17 回目になります。この内容は、学部の教育改善の明確化や特徴などを示唆してくれる貴重なデータとなっています。この取り組みは、学部では自己評価委員会が解析の労を執り、教育改善委員会とともに検討し、構成員に FD として公開しています。この情報は、各教員の教育研究における有意義な情報及び改善点を提示してくれている貴重なものです。特に、新任の教員にとっては有効性が高いと考えています。なお、このアンケートは、「学部・大学院教育のあり方」と「教員対象の教育評価アンケート」が大きな特色です。

今日では、大学及び学部も学生教育における質の向上を図るため、学生の意見を聞きながら改善を図ってきております。学部・研究科の教育理念、教育目的、教育目標、学科の教育目標さらにはアドミッションポリシーなどの指針に基づき教育がなされております。こうした明確な指針に沿った教育は、大衆化した時代の教育の質の保証には重要なことと考えられます。また、内容や評価の公表は、大学あるいは学部の個性的な教育の深化に大いに貢献すると思われます。このデータは、学部のより良い教育や個性化に貢献する一助として大いに評価されるべきでしょう。

本アンケートからは、シラバス、専門教育に対するする学生の満足度が学部全体で約 80%と高い肯定的な意見が確認されています。施設への要望では、プロジェクターの更新や エアコンなどの設置などの改善がなされ、この質問項目への満足度を高めているようです。平成 28 年度は学部改組が行われ、今年初の卒業生が食料資源学科と国際園芸農学科の 2 学科で社会に出ます。これまでに受けた教育（カリキュラム）は、「食」と「国際化」の知識を身につける上で役立ったと感じている学生が 75%以上と高い評価を得ています。社会の評価を受けて、真に改組の目的が達成されていると考えられますが、今の時点では成功と言えるでしょう。学部の卒業研究に対する満足度は学部全体として約 90%となっております。これまでの長い間のたゆまない改善がこうした結果に結びついているのでしょう。また、今回のアンケートから、学内の相談窓口などの有効利用が少なく、快適な学生生活のためには、もっと利用を促す対策が必要と自己評価委員会及び教育改善委員会より提言がなされております。今後はこうした提言の対策を検討していきたいと考えております。

令和 2 年度には、弘前大学の第 3 期の中期目標計画の評価が行われます。この評価に対し、このアンケートが大いに役立つことを期待したいと思います。

最後に、本調査に対し、労をいとわずにとりまとめいただいた自己評価委員会の各位に衷心より謝意を申し上げます。

目　次

巻頭言　1
はしがき　3
Ⅰ．学部卒業時学生対象教育評価アンケート　4
　１．　アンケート調査内容　4
　２．　調査結果　7
Ⅱ．研究科修了時学生対象教育評価アンケート　80
　１．アンケート調査内容　80
　２．調査結果　83
Ⅲ．教員対象教育評価アンケート　110
　１．　アンケート調査内容　110
　２．　調査結果　112
Ⅳ．教員対象授業アンケート（学部授業及び研究科授業）　130
　１．　アンケート調査内容　130
　２．　学部授業に関する調査結果　133
　３．　研究科授業に関する調査結果　142
Ⅴ．アンケート調査結果に対する各学科の見解　149
　生物学科　149
　分子生命科学科　150
　食料資源学科　150
　国際園芸農学科　151
　地域環境工学科　152
Ⅵ．教育改善委員会（令和元年度教育改善にむけたアンケート調査についての意見 ）　154
　学部卒業時・研究科修了時学生対象アンケートについて　154
　教員対象授業アンケートについて　155
　教員対象教育評価アンケートについて　155

はしがき

農学生命科学部の自己評価委員会は、学部ならびに研究科の教育の適正化、カリキュラムの改善などを目的に、学部４年の卒業予定学生及び研究科２年修了予定学生を対象にした授業評価と、各教員を対象とした専門科目の授業評価についてアンケート調査を実施してきた。平成 14 年度(15 年 2 月実施)以降、これまで 16 回行われ、今回は第 17 回目である。平成 17 年度からの調査では、それ以前の内容に加えて学生と教員を対象として教育評価アンケートを実施している。そのアンケートにおいては、学生および教員対象の各アンケートに同種の質問項目を設けており、学生と教員との間における意識の相違についても読み取れる。また、 各年のアンケート結果の比較によって、 カリキュラムの改変や施設状況の変化の実態やそれらの影響、 学生の意識・要望の変化、 教員の取り組みの変化なども読み取れる。

以上のような背景から、 本年度もこれまでのアンケートとの継続性に配慮し、それらの内容を踏襲して次の４事項についてアンケートを実施した。

Ⅰ．学部卒業時学生対象教育評価アンケート
Ⅱ．研究科修了時学生対象教育評価アンケート
Ⅲ．教員対象教育評価アンケート
Ⅳ．教員対象授業アンケート（学部授業及び研究科授業）

各アンケートの設問内容は、それぞれのアンケート調査結果の冒頭に示した。設問は、 選択肢式のものと、その回答理由を記述させるもので構成した。選択肢として、「強くそう思う」、「そう思う」、「どちらとも言えない」、「そう思わない」、「全くそう思わない」等の５段階を設定した場合は、順に 1～5 の番号を付して選択するものとした。設問の回答に関する分析では、「強くそう思う」と「そう思う」を併せて「肯定的な評価」とし、「そう思わない」と「全くそう思わない」を併せて「否定的な評価」とした。また、学生の回答理由の記述は、明らかな誤字や個人名以外は、できるだけ原文のまま箇条書きで記し、各学生が選んだ選択肢番号を行頭に付し、学科あるいはコース別に記載した。

本アンケートの設問の設定については、 大きな変更はせず、設問の趣旨が的確に受け取られるような範囲の変更にとどめている。これは、 本報告書の内容は、教育改善や組織評価等に活用されると想定され、 さまざまな取り組みの成果や問題点の把握を可能にする経時的データの役割もあると考えたためである。

本アンケートの結果は教育改善に活用されるべきことから、 昨年度と同様に教育改善委員会と各学科の学科長にも本報告(案)の一読を願い、それに対する見解、意見を提出してもらい、本報告の最後に掲載した。

今回の卒業・修了時学生によるアンケート結果にも、本学部・研究科の授業や教員の教育方法に対して厳しい意見や、教育体制に関するさまざまな意見が含まれている。関係各位および教育改善委員会におかれては、カリキュラムの教育内容や方法の改善のためにはもちろん、教育体制の充実を図るためにも、それらを大いに参考にされることを望む。

Ⅰ.学部卒業時学生対象教育評価アンケート

１．アンケート調査内容

調査目的：農学生命科学部の教育内容ならびに方法の改善に役立てるため、４年間この学部で教育を受け、今まさに卒業しようとしている学生を対象に、学部教育について総合的な評価を得ることを目的とした。

調査方法:指導教員をとおして研究室所属の学生にアンケート用紙を配布し、無記名方式で行った。回収は各学科の卒業研究発表会後に行った。

調査対象：令和 2 年 3 月学部卒業予定者 201 名

調査期間：令和 2 年 1 月 23 日～2 月 21 日

有効回答者数：187 名　（回答率 93%）

調査項目：設問は以下のとおりである。(ただし、下記の[　]の項目名は、回答結果の分析にあたってグループ化のために設けたものである。)

[学部・学科の教育目標等の認識]

設問 1. あなたの所属学科をお答えください

設問 2. 本学部の教育理念、教育目的および教育目標を知っていますか。

設問 3. あなたが所属する学科の教育目的および入学者受入れ方針（アドミッションポリシー）を知っていますか。

(1) 教育目的について　　(2) アドミッションポリシーについて

設問 4.

(1)あなたが所属する学科の教育目的は添付資料の通りですが、学科のカリキュラム（21 世紀教育科目および専門教育科目）はその目標に合致していると思いますか。

(2)上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

[学科の専門教育について]

設問 5. 本学部では年度初めに学年毎にガイダンスを行っていますが、ガイダンスの内容は適切だったと思いますか。

設問 6. シラバスは受講科目の選択あるいは授業の全体的な構成の把握に役立ちましたか。

設問 7.

(1) あなたが所属する学科で受けた専門教育に満足していますか。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

[教員の指導について]

設問 8.

(1) 所属する学科の教員の、講義・実習・演習などにおける学生への指導や対応に満足していますか（卒業研究については設問 15 で別に聞きます)。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 9. 履修した科目の成績評価について質問します。

(1) 成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはありますか。

(2) 疑問や異議があったときは、学部教務に「成績評価の問い合わせ」を提出し問い合わせできることになっていますが、あなたはそれをしましたか。した場合、その回答に満足し

ましたか。具体的に記入して下さい。

［学生の主体的学習について］

設問 10．講義の受講に当たり、受講期間中にあなたは講義室での受講時間の何倍程度の時間を、講義室外での学習（予習や復習など）に当てましたか。大学設置基準では、２単位の科目の場合、90 時間の学習が必要になりますが、講義室では 30 時間（90 分を 2 時間として扱い×15 回＝30 時間）の学習時間しかありません。そこで、講義室外での学習が必要になります（講義室での 2 倍の時間）。学習時間にはインターネットを利用した関連情報の収集、課題やレポートの作成、外書講読・文献講読・専門英語の予習、小テストのための勉強、中間や期末試験のための勉強、研究室内でのプレゼン準備なども含めても構いません。ある 1 科目を想定して回答しても構いません。

設問 11．大学教育では、学生自身の主体的、意欲的な学習が要求されます。

(1) あなたは講義に対してどのような姿勢で取り組みましたか。

(2) 実験・実習についてはどうですか。

(3) 大学在学中のカリキュラム（21 世紀教育も含む）の中で、もっとも印象に残った科目があれば、その科目名と理由を記入して下さい。

それぞれについて簡潔に記入して下さい。

［学生への教育支援、施設・設備について］

設問 12．本学部や本学では皆さんに助言したり、皆さんからの相談・苦情を受け付けたり、皆さんのニーズを把握するために、下記のような 10 のルートを用意しています。在学中あなたは次の(1)～(3)の項目について主にどれを利用しましたか。（　）内に番号を記入して下さい。 (1) 学業（　　） (2) 学生生活（　　） (3) 進路（　　）

1. 学生センター　2. クラス担任と面談　3. 指導教員と面談

4. 指導教員以外の教員と面談　5. 学科長と面談　6. 学生総合相談室

7. 保健管理センター　8. 就職支援センター　9. 学部長直言箱

10. 学長直言箱　11. その他　12. 利用したことはない

設問 13．本学部の以下の施設について、どのように感じていますか。

(1)．下表の該当する欄に○を書き込んで下さい。

評価 ＼ 施設	1. 充分満足	2. ほぼ満足	3. どちらとも言えない	4. やや不充分	5. かなり不充分
1. 講義室					
2. 実験・実習室					
3. 情報処理演習室					
4. 蔵書室（４階）					
5. 学生自習室・学生控室（２階）					
6. 卒業研究を行った研究室					

(2). 各施設に対する要望がありましたら具体的に記述して下さい。

［卒業研究について］

設問 14.

(1) 卒業研究を行ったことに満足していますか。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 15.

(1) あなたの卒業後の進路は次のどれですか。

(2) 本学部のカリキュラムで学んだことは、進路の決定にどのように影響しましたか。

(3) 本学および本学部の進路支援に対する取り組みは十分だったと思いますか。

［本学部の教育のあり方について］

設問 16.

(1) あなたが本学部を卒業するに当たり、大学卒業者に相応の知識や学力を身に付けたと感じていますか（大学卒業者に相応の知識・学力は自分のイメージしたもので結構です)。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 17.

(1) 本学部の教育活動の中で最も早急に改善すべきと思われる点を、次の項目の中から一つを選んで下さい。

(2) 上記で選択した項目に関する要望を具体的に記入して下さい

設問 18.

(1) 総合的に判断して、本学部・学科の教育・研究に対する取組み・姿勢に満足していますか。

(2) 上記のように回答した理由を記入して下さい。］

設問 19. 食料資源学科と国際園芸農学科の学生のみお答えください。

農学生命科学部では、「食」と「国際化」を強化するため、既存の 2 学科（生物資源学科→食料資源学科、園芸農学科→国際園芸農学科）を改組し、皆さんが最初の卒業生となります。

(1) 皆さんの受けたカリキュラムは「食」（主に食料資源学科の皆さん）または「国際化」（主に国際園芸農学科の皆さん）の知識を身につける上で役立ったと感じていますか。

(2) 上記のように回答した理由を記入して下さい。

２．調査結果

設問 1．あなたの所属学科をお答えください。

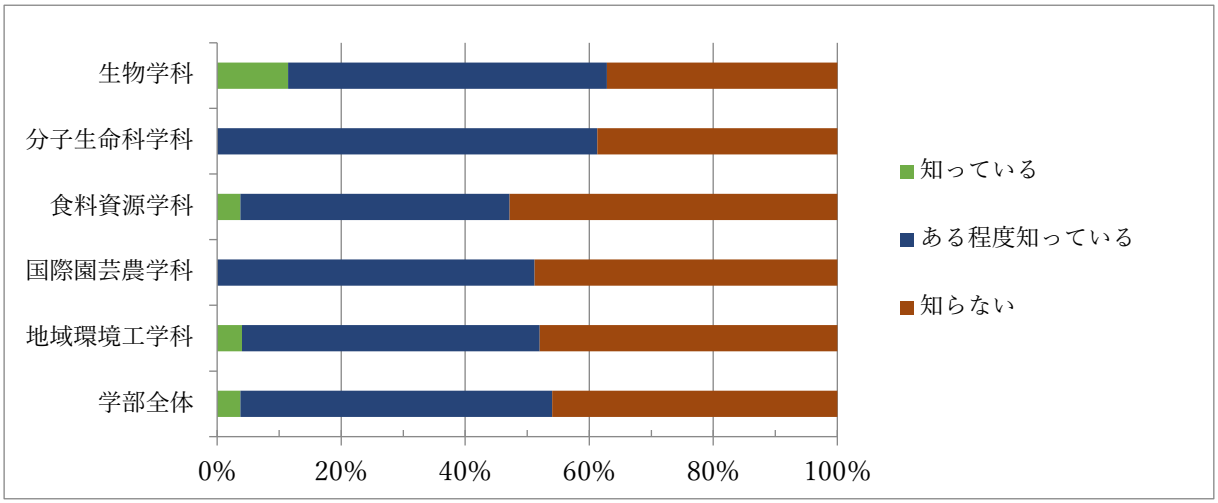
表Ｉ－１．各学科の卒業生と回答者数の推移

	令和元年度			H30 年度			H29 年度		
	卒業生数	回答者数	回答率（%）	卒業生数	回答者数	回答率（%）	卒業生数	回答者数	回答率（%）
生物学科	37	35	95	46	34	74	40	26	65
分子生命科学科	36	31	86	44	29	66	40	29	73
食料資源学科	55	53	96	37	33	89	31	31	100
国際園芸農学科	46	43	93	36	32	89	39	23	59
地域環境工学科	27	25	93	29	27	93	31	26	84
合　　計	201	187	93	192	155	81	181	135	75

平成 30 年度の回答率（81%）は平成 29 年度の回答率（75%）に比べ上昇したものの、90%には至っていないことから、今回、回答率上昇のため、卒業研究発表会前の 1 月末からアンケートを実施し、卒業研究発表会の際に学科長が回収するように要請した。その結果、令和元年度の卒業予定学生 201 名のうち、回答者は 187 名となり、回答率は 93%になった。今後もアンケートの実施方法は令和元年度の例に沿って行われると良いと考えられる。

[学部・学科の教育目標等の認識について]

設問 2．本学部の教育理念、教育目的および教育目標を知っていますか。

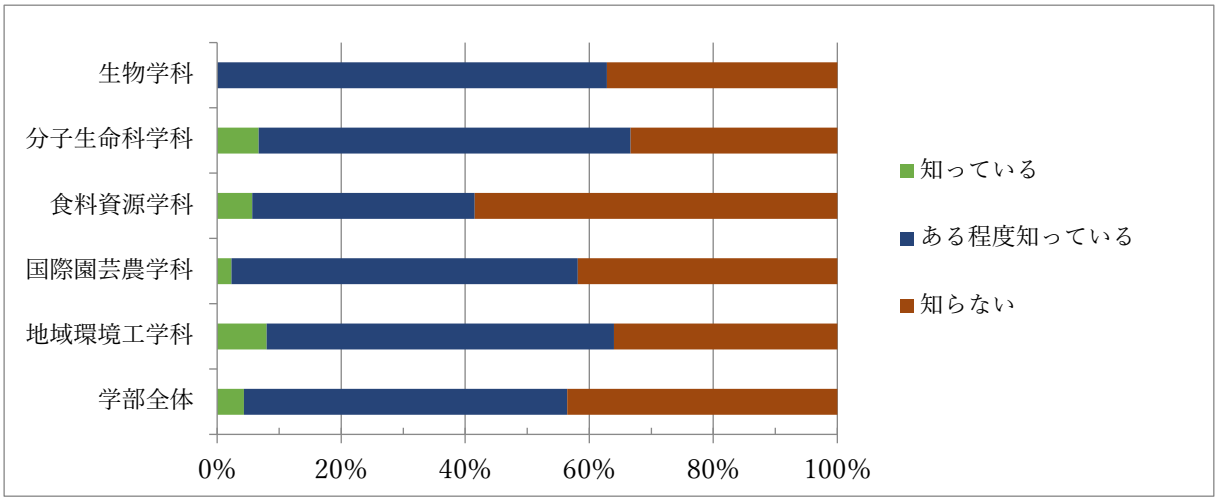


図Ｉ－２．理念、教育目的および教育目標の認識

学部全体で見ると、「知っている」と「ある程度知っている」の合計は 54%で、過去 3 年（平成 28 年度 54%、平成 29 年度 54%、平成 30 年度 54%）と比べて変化はなかった。食料資源学科では比較的「知らない」と答えた学生が多く、50%を超えた。

設問 3. あなたが所属する学科の教育目的および入学者受入れ方針（アドミッションポリシー）を知っていますか。

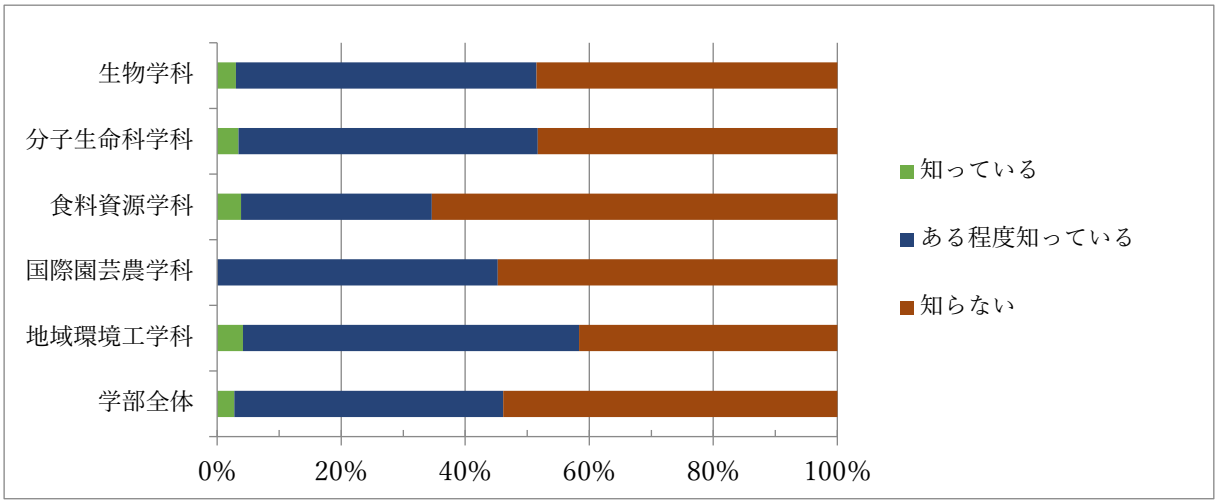
(1) 教育目的について



図Ⅰ－3(1). 学科の教育目的の認識

学部全体では、「知っている」と「ある程度知っている」の合計は 56%で、過去 3 年と同程度であった（平成 28 年度 58%、平成 29 年度 59%、平成 30 年度 51%）。生物学科、分子生命科学科、国際園芸農学科、地域環境工学科では「知っている」と「ある程度知っている」の合計がおおよそ 60%であるのに対して、食料資源学科では「知らない」の割合が 60%に近かった。

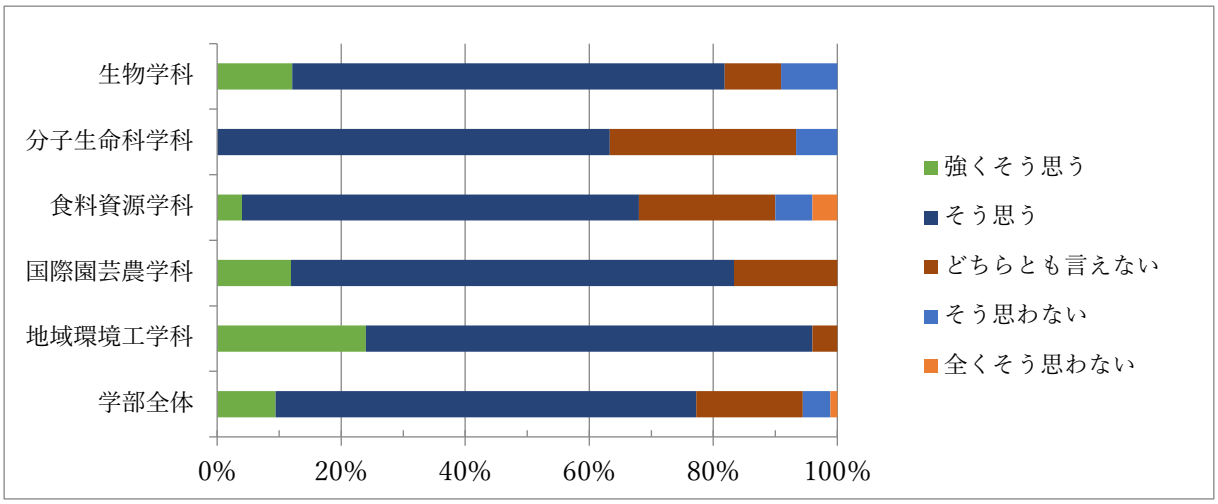
(2) アドミッションポリシーについて



図Ⅰ－3(2). 学科の入学者受け入れ方針の認識

学部全体では、「知っている」と「ある程度知っている」の合計は 46%であり、過去 3 年（平成 27 年度 44%、平成 29 年度 49%、平成 30 年度 45%）と同程度であることが分かった。食料資源学科で「知らない」の割合が高く、60%を上回った。

設問　4.（1）　あなたが所属する学科の教育目的は添付資料の通りですが、学科のカリキュラム（教養教育科目および専門教育科目）はその目標に合致していると思いますか。



図Ｉ－４．学科の教育目的とカリキュラムの合致

学部全体で見ると、肯定的な評価が 77%で、過去 3 年（平成 28 年度 68%、平成 29 年度 66%、平成 30 年度 67%）に比べて高かった。地域環境工学科は例年通り肯定的評価が特に多く、生物学科、国際園芸学科が 80%以上なのに対して、分子生命科学科と食料資源学科は 70%を下回った。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない　5. 全くそう思わない

【生物学科】

1. 教育目的の通りの学習が行うことができたから。
1. その研究が行える。
1. 目的に合った教育がなされていると思うから。
2. 体系的で実践する講義が多く、力がつくため。
2. 目標にふさわしい講義が多かったから。
2. 幅広く勉強したから。
2. 生徒の学びたい方向に合わせて、先生方が助けてくれたから。
2. おおむね合致していると思うが、少し実習が少なかった。
2. 目的に合致したと感じる勉強ができていたから。
2. 授業内容でそれらが組み込まれていると感じられる内容があったため。
2. 基礎的な知識を学ぶための授業も、フィールドワーク的な授業も行われており、それらを踏まえた応用的な思考を育てる授業も行われていると思います。
2. 限られた授業数の中で座学とフィールドワーク系の両方の科目が行われているから。
2. 専門の授業では、基礎・生態分野の幅広い科目を履修することができ、研究室に配属されるとより専門的なことや研究するスキルを学ぶことができるから。
2. 遺伝学や生理学など、ミクロな視点を重視した講義から、生態学などマクロなレベルの講義まで幅広く行われているため。
2. 授業など目的に合った経験につながるものが多かったから。

2. 添付資料に記載されているような授業があるから。
2. 講義内容や研究室毎の特徴を見て、そう思った。
2. 一年生から専門科目が多く、生物学の知識が広く学べる。
2. 様々な分野の講義があるから。
2. 学んだことがとても多かったから。かなり成長できた。そのためカリキュラムは良かったと思う。
2. 特に問題・違和感は感じていないため。
2. 三年次のコース選択で、自分がより学びたいコース・研究室を選べるため。
3. だいたいは合致できていると思うが、自然環境の保全に資する人材の育成ができているかは疑問。
3. 不要だと思われる必修科目が散見されるため。
3. 特にない。
4. 自分から積極的に機会を求めれば、多くの機会はあるのでしょうが、それを経ないと卒業できないカリキュラムとしては、それほどフィールド教育などが行われてはいなかったように感じます。
4. フィールドに出る科目が少ない。

【分子生命科学科】
2. 研究室によって異なるところはありますが、専門の分野に特化していて、良く学べると思ったから。
2. 外部の研究機関の先生がセミナーをやるために弘前大学にいらっしゃるので、様々な分野の研究を聞けるから。
2. 対応していた科目がそれぞれ複数あったから。
2. 現在分子レベルの研究を行っており、生命現象の解明を目指している。
2. 授業の内容がだいたい一致しているため。難しいとは思うが、あとは実際に実験設備を持って、体験させてほしい。（共焦点顕微鏡などの少し高度な設備）
2. 教養教育科目の必要性がわからない。
2. 生物・化学的分野について、基礎から応用まである程度は幅広く学ぶことができ、興味を持った分野について、深く学べるカリキュラムとなっているように感じたため。
2. それぞれの教授の講義の中で、学科の教育目的で挙げられている内容についての基礎的な話があったから。
2. 生物だけでなく、物理や数学などの授業もあり、より幅広い知識を習得できるようになっていると感じたから。
2. 目標にあるように色々な授業があったため。最先端という言葉が出てきているが、授業で教えてもらっているのかもしれないけれど、あまり強調されていた記憶はないので、古いものと新しいものの区別が何となくしかわからなかったため。
2. 合致している研究室や授業が多いと感じたから。
2. 目標を達成するのに十分だから。
2. 目標を達成するための基礎を身に付けるのに最適だと感じたため。
2. 専門的な学習をすることができたため。

3. あまり覚えていない。
3. ほとんど学科で授業を受けていないから。
3. 全体的に幅広く学習できる。
3. よくわからない。
3. どちらともいえない。
3. 地域や国際に役立てる人物になれたかわからないし、なれてるとも思えないので…。
3. 授業がある時、ゼミの分野によっては当てはまるが、授業が終わったり、ゼミの担当教授の考えで変わってくると思う。
4. そこまで専門分野に踏み込めていない気がする。
4. 課題探求や問題解決力を鍛えるような授業がないのではないかと思ったからです。

【食料資源学科】
1. それぞれの分野に関する授業が多くあるため。
1. 食品に関して幅広く学ぶことができた。
2. 二年次に多様な分野の実験を行い、また三年次の食品加工実習で食品の製造工程を知ることができるから。
2. 実習がもっと増えれば良いと思う。
2. 講義の内容がそれに即しているため。
2. 目標に合うカリキュラムで学べたので。
2. 幅広い授業が受けられたため。
2. 必修科目が教育目的に沿うように組み込まれていたから。一方で座学がほとんどで、社会で活躍できる専門技術を身に付けられたとは言い難い。
2. 実験の話や卒論発表の話を聞いてそう思いました。
2. 教育目的の１と２は、日々の講義と研究室での活動と合致していると思うが、3 は合致しているものが少ないと思うため。
2. 対応できる人材として、専門性の高い職業へ就いた先輩方を見ているから。
2. 食品の授業が多く、機能についてしっかりと学ぶことができたため。
2. 添付書類のような様々な分野の講義が、開講されているため。
2. 食に関わる安全性・機能性から生産に関わる環境・バイオテクノロジーと幅広く専門性の高い講義を受けることができるカリキュラムであったと感じたからです。
2. 食品衛生管理者の任用資格を取得できる点では、食品に関わる広い知識を修得できているといえるから。
2. 講義内容が合っていた。
2. 講義ではバイオテクノロジーの技術や農業について、幅広く学ぶことができた。
2. 分野ごとに多角的なことを学べる講義が組まれているため。
2. 実際に幅広い分野を学べたから。
2. 目的の教育を受けられるから。
2. 目標に合致する講義が多かったため。
2. 必修科目。
2. 食に関する専門的知識が得られた。

2. 専門的な科目に加え、教養科目の双方が、充実した学びを受けられたと感じたため。
2. 必修の授業で幅広い分野のことを学べたから。
2. 社会で活躍できるほどの専門知識の獲得は、学部生だと難しい。
2. 幅広い分野のことを学ぶことができた。
2. 授業の内容がそうだったから。
2. バイオテクノロジーを中心に、目的に合致する授業を多く行っていたから。
2. 食品科学についての知識がついた。
3. カリキュラムをあまり知らないから。
3. 入学当初の志を保ち、意欲的に勉学に励んでいれば、何らかの手ごたえがあったのかもしれないが、自分はそうでなかったため、実感がなく、合致する/しないの判断はできないと思ったから。
3. 詳しく知らないので。
3. 知らないから。
3. なし。
3. 本当にその通りにできているかわからないから。
3. 幅広い知識が得られると感じた。
3. 量・範囲が広すぎて、やるべきことのすべてカバーできていないように感じる。もう少し、狭めてくれるとよい。
3. 新学科になり、カリキュラムがどうなのかと思う。
4. 改科されたばかりなこともあり、食品に関する科目が少ないように感じた。
4. 講義の数や講義を受講するにあたっての制約が多く、実験ができる時間が少ないため、各分野の技術開発に必要な専門技術を身に付けるという点において、目標に合致していないと思う。
4. 薄く広く学習できるカリキュラムだったが、社会で活躍できるかと言われると一つ一つが薄い気がするため。
5. 食料について研究していないので、合致していないと感じた。
5. 科目自体は良いが講義の実際の様子が良くないと感じる。正直、知識が身に付かない。なぜなら、評価法が悪いから。暗記のテストを課す先生が多いが、これは全く意味がないと強く思う。問題が例年と同じなので、いかに過去問を手に入れるかが勝負になる。つまり学力ではなく、どれだけ友人が多いかを計るテストになっている。結局過去問を手に入れて、一夜漬けで覚え、テスト翌日には忘れている場合が多い。そこで思考力を試す「持ち込み可」のテストにすべきだと思う。

【国際園芸農学科】

1. 農業生産や農業をとりまく経済などについて、座学や実習で学べたと感じたため。
1. ・英語の講義が多いため。・様々な分野の授業を受けれるため。
1. 農業生産領域と農業の流通について、専門的かつ広範囲な内容を学べるカリキュラムだから。
1. 海外研修やその他の実習などを通じて、自分の目で見て考える機会があった。座学の講義でも、国際的な視点のみならず、地域のレベルのことを学べたことで、広い視野が得られたため。
1. 授業がちゃんと設定されていた。
2. 果樹学から畜産学まで、幅広く学ぶことができ、海外研修などを通して、海外の日本との違い

を知ることができたから。
2. 幅広く学ぶことで、視野が広がったため。
2. 校外学習を通した授業も豊富にあるから。
2. 国際的な内容も多かったから。
2. 海外研修が必修科目として、設定されているため。
2. 農学全般を広く学べた。様々な実習を受けられたことから、実際に体験できることができた。
2. 特に海外研修が良かった。
2. 海外研修があり、授業を通して国際化に合っていたと思う。
2. 農業生産分野から経済分野まで、幅広い知識を得ることができたから。
2. 海外研修入門や教養教育の英語の授業が、他学部・他学科よりも多いことで、「国際化」に関するカリキュラムが充分にあると感じたため。
2. 農学分野での専門知識が身についたと思うため。
2. 一、二年の時に様々な分野の講義を受けるようになっているため。
2. 海外研修が必修であり、農業現場の視察を行えたから。
2. 園芸分野では、幅広い知識を身に付けることができ、農業経済についても実際に社会に出て、通用するような人材育成ができていると思うから。
2. 国際化に対応できるように英語学習に力を入れ、留学もカリキュラムに入っている。農業に関する幅広い分野を学ぶことができる。
2. 講義に加えて、農業実習で多くのことを学ぶことができたから。
2. 将来、生きてく上で、食糧自給率や農作業の機能について、役に立ちそうだから。
2. 国際色豊かな授業や海外研修があるため。
2. 探求心や主体性など、育成する機会が多々あると思ったから。
2. 一学年、二学年次を中心に農学を広い範囲で学ぶプログラムとなっているため。
2. 海外研究等、国際化を意識した内容が盛り込まれているため。
2. 普段の講義や海外研修入門を通して、国内外の農業について学ぶことができたから。
2. 合致しているとしか言いようがない。
2. 教育目的を達成するのに、必要なことをたくさん学ぶことができるカリキュラムだったと思うから。
2. 海外研修が必修であることなど、学科の全員に海外の食料分野に触れられることが就活にも活きていると感じたから。
2. 講義内容。
2. そう思うから。
2. 経済と農業の両方を学べたから。
3. 知識・経験が身につくことは確かではあると思われるが、目的に合致するかは学生次第であるので、是非がわからない。
3. 勿論個人差はあると思うが、私自身は学科の教育目的のような力がついているとは感じないから。
3. 農業について総合的に学ぶことができ、海外研修をきっかけに視野が広がったと思う。スキルが身についたのかはわからない。
3. 国際的な学科名のわりには、あまり語学力向上につながるようなカリキュラムに感じない。

3. 本当に必要かわからない講義があったため。

【地域環境工学科】

1. 内容に沿った講義が行われていると思うから。
1. 座学だけでなく、現地見学会、実験、インターンシップを通して、幅広く学べ、技術者としての基礎を学べた。
1. 必要なことばかりだから。
1. 実際に現場で役立つ授業をしているから。
1. 農業技術者としての知識を習得し、地域の発展に貢献できる技術者の育成に尽力していた。
2. 農村、農山地、水・土・農業土木といった分野に深く関係しているから。
2. 専門科目が目標と一致しているため。
2. 土木技術者育成のための科目が充実しているため。
2. JABEE のコースや生態系等広く学ぶことができるコースを選ぶことができるため。
2. 農業土木に関連する授業カリキュラムが組まれているから。
2. 多くの分野を広く学びたいと考え、入学したため。
2. 幅広く、農魚土木についての知識を得られる。
2. 卒業後も農業土木の分野に就職する人が多いから。
2. 一年次からの授業等で、専門教科に力を入れていたため。
2. 上手に学生の興味を引き出すようにできている。
2. 四年を通して、専門的知識を習得できたため。
2. 授業内容がそれに沿っていたから。
2. JABEE の導入により、深い知識を求められるが、その後の社会活動では、十分に生かすことができる。
2. 農学に興味のある人には、いいカリキュラムだと思う。
2. 学生が意欲的に学習し、知識を習得できる取り組みがある。
3. 知識だけの講義で自分たちで考えて、アウトプットする授業が少なく、本当に身についてる感じがしない。

[学科の専門教育について]

設問 5. 本学部では年度初めに学年毎にガイダンスを行っていますが、ガイダンスの内容は適切だったと思いますか。

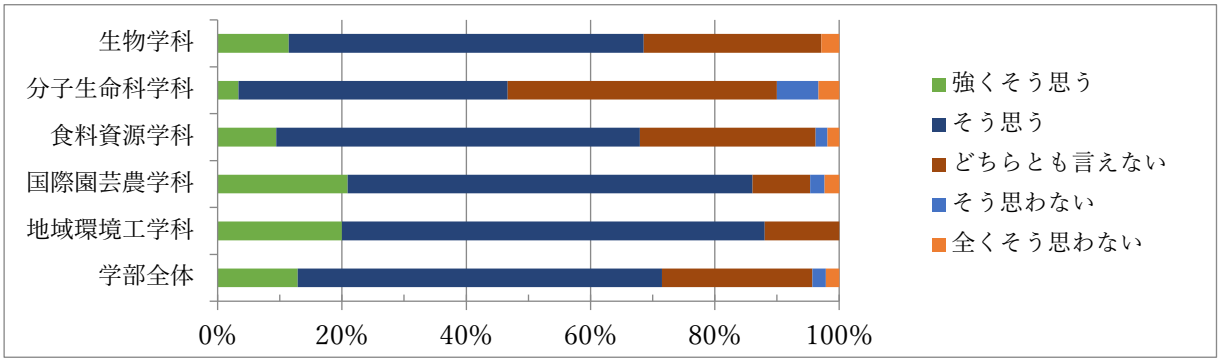


図 I－5. ガイダンス内容が適切だったか

学部全体では、肯定的な意見の割合が 72%であり、過去 3 年（平成 28 年度 72%、平成 29 年度 71%、平成 30 年度 75%）と同程度であった。国際園芸農学科と地域環境工学科で肯定的な評価が 80%以上であるのに対して、生物学科と食料資源学科はおおよそ 70%、分子生命科学科は 50%を下回った。

設問 6. シラバスは受講科目の選択あるいは授業の全体的な構成の把握に役立ちましたか。

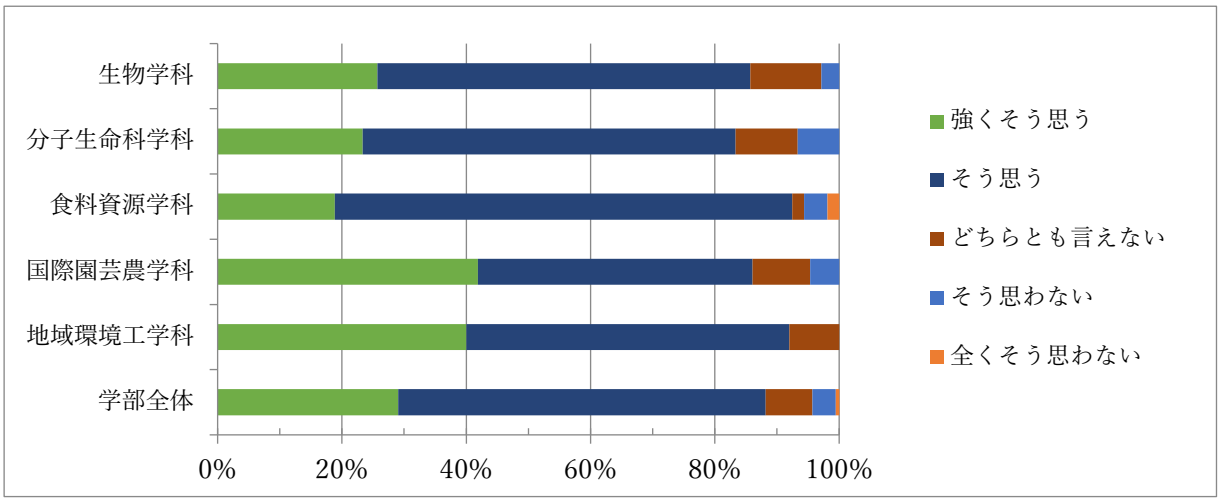


図 I－ 6. シラバスは役立ったか

学部全体での肯定的な意見は 88%で、過去 3 年間（平成 28 年度 83%、平成 29 年度 81%、平成 30 年度 83%）に比べて若干上昇した。どの学科でも肯定意見は 8 割を超えているなかでも、食料資源学科と地域環境工学科での肯定的意見の割合が高かった。

設問 7. (1) あなたが所属する学科で受けた専門教育に満足していますか。

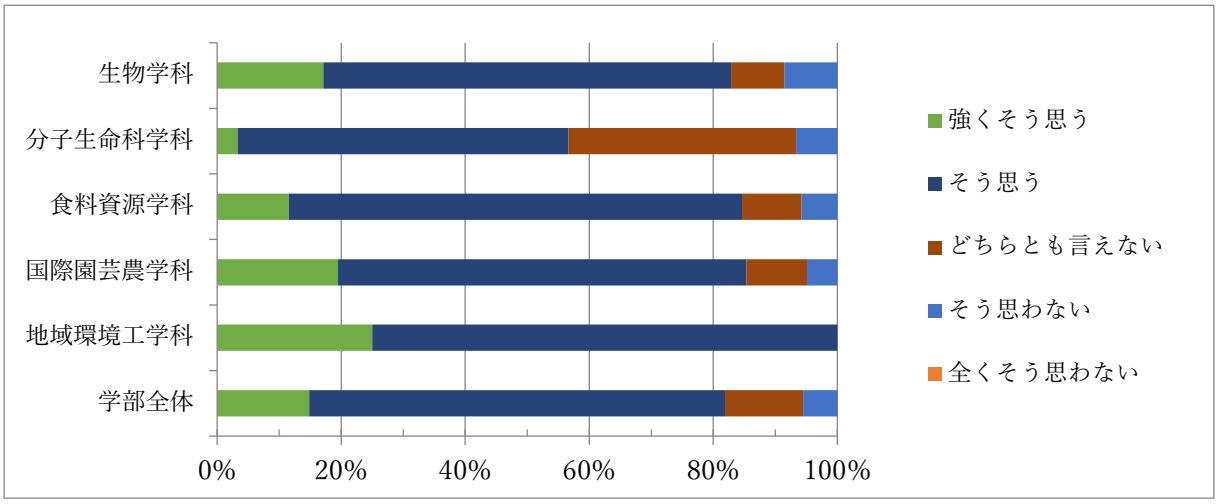


図 I－ 7(1). あなたが所属する学科で受けた専門教育に満足しているか

学部全体では、肯定的意見が 82%で過去 3 年間（平成 28 年度 78%、平成 29 年 79%、平成 30 年 81%）と同程度であった。生物学科、食料資源学科、国際園芸農学科で肯定的な意見が 80%以

上であり、例年高い評価の地域環境工学科は100%であった。一方、分子生命科学科は肯定的意見が60%を下回った。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。
1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない　5. 全くそう思わない

【生物学科】
1. 特に研究室での活動に恵まれ、充実した時間を過ごせたから。
1. 自分の望む専門教科を受けれているから。
1. より高度な知識を身に付けることにつながったから。
2. 各研究室の最新の内容が授業に盛り込まれているため。
2. どの科目も面白かったから。
2. 研究が楽しかった。
2. いくつかの科目以外では、専門知識を学ぶことができた。
2. 不満はありません。
2. 多くの講義では、優れた先生方から実り多い教育を受けることができたが、一部の先生方には、そのような講義を行わない方々がいた。
2. 深く学べました！
2. 満足している授業もあったが、そうでもない授業も感じられたため。
2. おおよそほぼすべての授業に満足していますが、一部の授業においては授業スライドが見にくい（読みにくい）、理解しにくいものがありました。その授業の先生に複数人がスライドが見にくいので改善してほしいとお願いしていましたが、最後まで改善されませんでした。授業も板書で精一杯で、先生の話をしっかり聞けなかったため残念です。
2. 授業のレベルはまちまちだが、ある程度の専門性が確保されていた。
2. 受けやすい。
2. 自分の学びたいことをより詳細に学べたから。
2. 座学以外の授業も充実していたから。
2. 生物学の基礎からそれらを応用した学問まで、生物学に関する広い分野を知ることができたため。
2. 担当の先生によっては、わかりやすい授業で、生物の専門知識がなくてもついていくことができた。
2. 研究室の環境、特に担当の先生が、よく人の話を聞いてくれる人であったため。
2. 分野ごとの知識を深められたから。
2. 高校よりも発展的なことを多く学べてよかった。
2. 基礎から生態の分野まで、基礎的なことはしっかりと学びを得ることができたため。
2. 広く深く専門科目を学ぶことができて、授業には満足している。
3. よい講義も多かったが、ムダと思うものもあったから。
3. 不要だと思われる科目が存在するため。
3. 満足できる内容の講義も多かったが、必要のないと思う講義や明らかに教育のやる気がない講義もあったので。

4. 高校生物で習った内容を繰り返し学ぶ時間が多かった。実際に卒業研究するにあたって、必要なスキルを学べる時間が少なかった。研究者を育てたい、というような方向性を大学のカリキュラムからは感じなった。
4. 実験系を考える際、知識不足がすごく感じて、院に行く人が多いなら、なおさら cell をもっと学ぶとかしたほうが良いと思う。
4. 一部の科目の内容がうすい。

【分子生命科学科】
2. 研究室に入ってから、1～2 年の間で学んだ専門教育が役に立っていると思うから。
2. 幅広い範囲だった。
2. 現在の研究に活かせる内容が多いから。
2. だいたいの授業には満足できる。学生実験の回数があまりにも短すぎることが不満であるため、1 ではなく、2 を選択した。
2. 自分の興味のある分野を学べた。
2. 面白い講義がいくつかあった。
2. 高校生物よりも、より専門的な知識を得られたから。
2. より深い知識を蓄えることができた。
2. 深くというよりは、広く教えてもらえたと思うので、必要だと思ったことを自分で勉強する足掛かりになったと思う。
2. 勉強になることが多かったから。
2. 勉強になることが多かったから。
2. 知識・実技、どちらも身に付けることができたと感じたため。
2. 専門的な知識を身に付けることができたため。
3. あまり受けていないので。
3. あまり覚えていない。
3. 先生によって、満足度が違うため。
3. 先生ごとの授業のレベルの差が大きい。
3. 満足したものと不満足なものが半々あったから。
3. 授業に関しては、様々な分野について学べて満足しているが、学生実験や卒業研究は行える期間が短く感じた。
3. 三年までの講義は非常に充実したものであったため。
3. もう少し生物学を専門的に学べると思っていた。
3. 学科内での分野が広く、学びたいものと異なる事柄が多いため。また、自分の代から入学制度が変化したこともあって、学習についていくのが大変だった。
4. 広く学べるのは良いと思ったが、掘り下げようと思ったときに、あまり役に立たなかった気がする。
4. 学生実験の分量から、あまり研究室ごとの実験には踏み込めていなかった。

【食料資源学科】
1. 知りたかったことが知れた。

1. 学びたいことが学べたから。
1. 食に特化した講義内容のものが、非常に多かったからです。
1. 専門的なことをよく学べることがあった。
1. 食品系の授業が多く、面白かったため。
2. 専門的な知識を十分に身に付けることができた。
2. おおむね満足していますが、同内容の授業が複数あったことは、少し改善した方が良いと思った。
2. バイオテクノロジー関連のことをやりたかったので。
2. 生活に役立つような専門知識を得ることができた。
2. 食に関する知識を幅広く身に付けられたため。
2. 自分が興味を持った分野を学べたから。
2. 学びたい分野の授業を詳しく学べたため。
2. 各々専門性が大きく離れた分野でありながら、芯の部分はリンクしており、包括的に修学できたから。
2. 知りたいことについて、深く知ることができたからです。
2. 専門的なことを様々学ぶことができたから。
2. ためになる知識も多く得られたと思っているから。
2. 今まで知らなかった食品について、多く学べたため。
2. ある程度の知識を身に付け、研究室での研究もそれらを深めたり、論理的に考える力が養われたと思うから。
2. 専門的な深い内容まで学べたため。
2. どの講義も大変興味深かったので。
2. 特になし。
2. 必修でないものも含めて、どれも適度な興味を持てる内容だったから。
2. やりたかった勉強ができた。
2. 楽しかったから。
2. 基礎教育から段階に専門教育を学ぶことができたため。
2. 食品分野の講義が旧学科より増えたため。
2. 広い分野を学べて、楽しかった。
2. 食品系の科目は、自分の生活に役立つことを多く学べたから。
2. 思っていた通り、食品について学べた。
2. 入学当初に学びたいと思っていた知識を学ぶことができたため。
2. 自身の興味ある分野について、良く学べた。
2. 食品に関する授業は、多くあって満足したが、その他の生産環境やバイオテクノロジーに関する授業がやや少なく感じた。
2. 自分の学びたい分野のことについて、知ることができたから。
2. 薄く広く学び、より深く知りたい分野については深く学べたと思うから。
2. 理解を深めるという点ではよかったが、重複する内容が異なる授業間で多かった。
2. 様々な知識が得られた。
2. とても勉強になったと思ったから。

2. 自分の興味のあることが多かったから。
2. 幅広い分野の知識がついてよかった。
3. 興味深い分野とそうでない分野の差が大きかった。
3. 一年生のうちに、生物を高校で学んでいない人のための時間が退屈だった。受験の時に覚えたことが、一、二年でやさしい内容を学び直すうちにすっかり抜け落ちたように感じた。
3. 幅広い分野について学べた一方、座学が多かったため。もう少し実験等で技術を身に付けたかった。
3. 食品の授業は機能性について扱う内容が多く、似たり寄ったりだと感じたため。
3. わかりにくい科目があったから。
4. その後の研究室では活かせないから。
4. 食品関係の授業が多すぎる。植物の授業を多くしてほしい。食料とバイオテクノロジーを分けてほしい。

【国際園芸農学科】
1. 様々な面から農業について知ることができたから。
1. 分かりやすかったため。
1. 高校生物では履修できなかった応用部分を始め、今後の自分にとって必要になってくると思えたから。
1. 就職試験でとても役に立った。
1. 自分が関心を持っていることについて、たくさん学ぶことができ、この学科でしか学ぶことができないことを学べたと思うから。
1. 一年生の入学時は、正直なところ社会のことを何も知らず、人から聞いたことをその通りだと思ったが、四年生になった今は、客観的・中立的に物事を判断できるようになったため。
2. 海外研修や農場実習など、この学科でしか全員が受けられない科目があったため。
2. 農業に関わるあらゆる分野の知識や経験を幅広く学べた気がするから。特に海外研修や農場実習等は、経験記憶として卒業後も忘れることのないであろう、印象深い科目であった。
2. 地域の農業だけでなく、国内や海外の農業についても、青森にいながら学べるから。
2. 農学の知識を身に付けることができたため。
2. 様々な分野のことを学べたから。
2. 果樹や畜産のようにジャンルの異なる科目が多かったから。
2. 専門的な知識を有している先生の講義を受けることができたので。
2. 知らない物事をたくさん学べた。
2. 国際園芸でしか学べないような農業の知識を学べたから。
2. いい勉強になったため。
2. 幅広く受けられた。
2. 実習的な内容が多く、そのどれも就職上重要な経験となったから。
2. 興味関心があるものが多かったため。
2. 学びたいことを適切に学ぶことができたため。
2. 果樹の授業や花の授業などをもっと多く、早くから学びたかった。
3. 学年で選択科目に指定されている科目が必修科目とかぶっていることもあり、その学年では実

質的に選択できないことがある。(学年が変われば可なので、良いと言えばよいが…。)

4. よくわかんなかったから。
4. 入ってみたら、あんまり興味がなかった。

【地域環境工学科】

1. 深く専門分野の内容を学べたから。
1. 農業土木の技術者として、基本的な知識がよく分かったから。
1. 一年～三年のうちに受けた内容が、四年生の卒論で生かせたり、就職してからもかなり役に立ちそうです。
1. 特に不満に思うようなことはないから。
1. 必要なことだから。
1. 専門的な技術を身に付けられたから。
2. 専門知識を学ぶことができたため。
2. 興味深く履修した講義が多かったため。
2. 就職先で役に立つものが多いため。
2. 山間地の授業をできれば増やしてほしいと感じたから。
2. 就職や資格試験に関連する教育を授けることができたたため。
2. 自分の計画した通りに、講義を受講できた。
2. 特に疑問に感じたことがなかったため。
2. 先生方が、質問にも親身になって、答えてくれたため。
2. 自分が授業の内容と合っていたと感じるため。
2. 公務員試験の範囲もカバーしている。
2. 農業の現場で生かせるようになっている。
2. 深い部分まで、探求できたため。
2. 農場実習など一般の学部では得られない経験を積むことができた。現状、就職後に知識を使うことは考えていないが、一般的に知られていないような知識を得ていることは武器になり得るので、満足している。
2. 十分に学べたと思うから。
2. 就職後、土木系の学科で習った内容を多く使うことになると思うので、四年間で学んだ専門的な学習は有意義なものだと思う。
2. 専門的な知識が身についたから。
2. 分かりやすい。

[教員の指導について]

設問 8. (1) 所属する学科の教員の、講義・実習・演習などにおける学生への指導や対応に満足していますか（卒業研究については設問 15 で別に聞きます）。

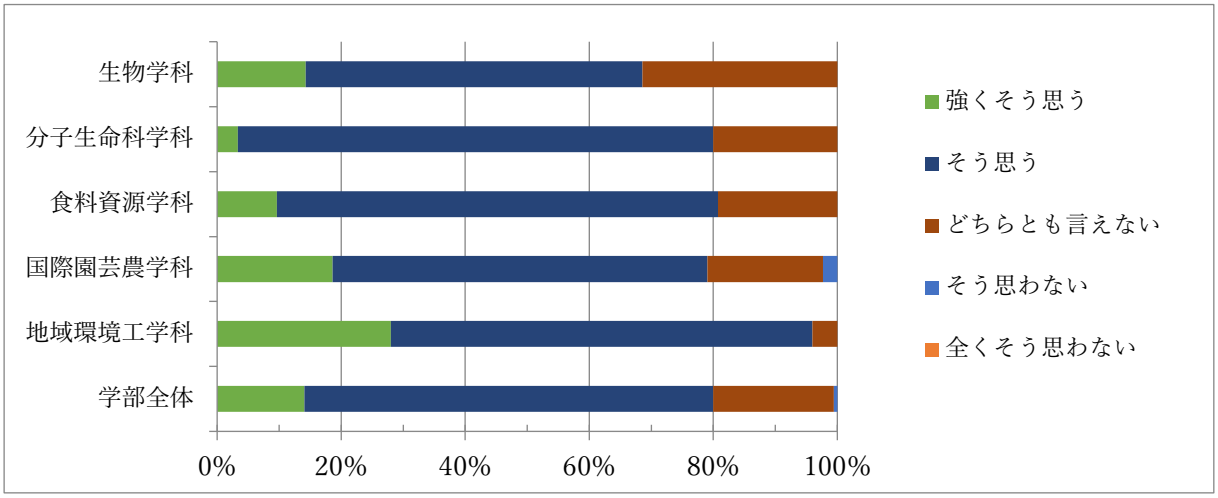


図 I－8. 教員の指導や対応に満足か

学部全体では 80%の学生が肯定的な意見であった（平成 27 年度 69%、平成 28 年度 72%、平成 29 年 74%、平成 30 年 82%）。過去 4 年間（平成 27 年度から平成 30 年度）で微増し続けていたが、今回は昨年度と同程度となった。過去 3 年の傾向では、分子生命科学科で肯定的な評価が最も低かったが今年度は 80%に上昇したのに対して、生物学科は 70%を下回った。例年通り、地域環境工学科では肯定的意見が非常に高かった。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない　5. 全くそう思わない

【生物学科】

1. 熱心に指導していただき、自分の特性などを把握できた。
1. とても優しかったです。
1. 指導教員の対応に満足しているため。
1. 学生との距離も近く、ケアも充実しているから。
2. 全体学習により協力し、集団として向上する点があるため、多いが故のデメリットも少し感じた。
2. わからないことを根気強く教えてくださったから。
2. 不満はありません。
2. 設問 7 と同様に大半の教員から満足な指導を受けれたが、一部にそうでない教員がいた。
2. 授業に関しては、講義を丁寧にしてくださる先生もいた。二年の実験に関して、物品の使い方を教えられないまま進められたり、不足した物品がある中で行われたので、不満がある。
2. 知識を教えるだけでなく、教育者としても学生に接してくれたから。
2. 特に不満なことはなかったから。
2. 教員によって差が大きいが、熱心な人が多いと思う。
2. 分からないことを分かるまで分かりやすく説明してくれたから。

2. 丁寧に対応していただいていると思うから。自由にもさせてもらっている。
2. 熱心に教えてくださる教員ばかりで、面白い授業が多かった。
2. 高度な内容でも理解しやすかったから。
3. やる気がないと感じる教員もいたから。
3. 多くの教員が努めて教育してくれていた点は、大変すばらしいと感じたが、一部の教員の質の低さが目立ってしまった。
3. 教員によって対応に差があり、その差が果てしなく大きい。
3. 教員による。
3. 教科書を読めばいいだけの授業や映し出されたスライドのただ読むだけの授業があり、単位が必要だからという理由だけで受講せざるを得ないものがあったから。
3. 先生自身の研究分野での研究も交えて講義してくれる先生がいる一方、単に教科書などを読み上げるだけの先生もいたため。
3. 対応が良い先生もいたが、学生の意見が反映されない授業もあったから。
3. 全体の質は高いように思ったが、一部まともに対応してくれない教育がいるので。
3. 人による。
3. 大半の先生方の講義や実習はとても良かった。一部の先生の講義や実習はよくわからなかったし、理不尽なこともあった。
3. 一部の教員の指導に不満を感じた。板書の量やスピードなどで。

【分子生命科学科】
1. 指導教員には、親身に教えていただいた。
2. 丁寧にかつ、熱意を持って教えてくれるので、とてもためになる。自分次第ではあるが、すごく実験を行うことができるため。
2. 授業で分からないことを聞きに行った時、指導が丁寧だったから。
2. 具体的なやり方の支持がありがたかった。ただ教員によって差が大きく感じはした。
2. 現在ストレスなく、研究できているから。
2. 真面目に取り組めば、きちんと評価をしてもらえるため。
2. 今後の実験に役立つ意見が多く得られた。
2. 専門的な知識も交えて説明してくださるため、難しさがありながらも基礎的な内容から広く興味を持って学ぶことができた。
2. 講義毎に学生の理解度を確かめるような工夫をしているような講義もあったから。
2. 優しく熱心に教えてくださった。(先生にもよるが…)
2. 先生によって、それぞれ異なったので、自分に合う先生は良いと思ったし、合わない先生は良くも悪くも思わなかったため。
2. 満足しているから。
2. 特に困ったことはなかったから。
2. 質問をしたときにしっかりとした解答がもらえたため。
2. 講義は質問等詳しく教えてもらえたので、良かったです。
2. 質問等への対応はとても丁寧にされていた。
2. 判定基準を明確に示してくれた。

2. 質問したら答えてくれたり、時間をとって教えていただいた。相手によって態度を変える方もいらっしゃるのがマイナス。
3. 覚えていない。
3. 答えられるほど、授業を受けていないので。
3. 先生により異なる。
3. 先生ごとの方針の差が大きい。
3. 熱心な方と不真面目な方がいらっしゃるから。
3. 人による。

【食料資源学科】
1. 特に問題なく指導を受けられたため。
1. 学生のことを配慮した内容や講義のペースで指導・対応してくださった先生がほとんどだったと感じるからです。
1. 講義がわかりやすい。
1. 丁寧に指導を受けた。
1. 先輩や先生が丁寧に対応してくださりました。
2. 実習・演習において、特に丁寧に指導していただけた。
2. 多くの教員の指導はわかりやすく、楽しかったから。
2. 丁寧にご指導いただきました。
2. 質問や試料について、とても分かりやすかった。
2. 各々のポリシーを揮いながらも、柔軟に対応してもらえたから。
2. 学生実験の時に強く感じました。
2. 丁寧に指導していただいたため。
2. 色々な面でバックアップしてくれたり、ご指導してくれました。
2. 専門的な分野に詳しい指導をしていただいたので、満足です。
2. 最初から最後まで、細かいところを教えてくれたため。
2. 様々な分野について、学ぶことができたため。
2. 特別不満に思う点がなかったので。
2. 講義の資料や実習前後での指導が丁寧だったから。
2. 内容が面白いから。
2. どの授業もとてもためになり、楽しかった。
2. 講義などで重要な点は配布資料にわかりやすくまとめられていたため。
2. 指導が丁寧である。そうではない教員も若干名いる。
2. 聞けば教えてもらえた。
2. 平等な講義と質疑応答の機会を設けていたから。
2. レジュメやスライドを用いて、わかりやすく説明していただいた。
2. 講義内外いずれにおいても、非常に熱意的であったため。
2. 授業楽しかった。知らないことを勉強するのは、楽しかった。
2. 学生実験では、いろんな研究室の特色が出た実験を体験できた。
2. 実習が面白かった。

2. 授業面白かったから。
2. 質問にしっかり答えていただいていたから。
2. 個別に質問した時も親切に答えてくれたから。
3. 教員間で差があったように感じた。
3. 教える気のある先生とそうでない先生がいた。
3. いくつかの講義で内容が重複している科目があった。
3. 人間だから、合う合わないと感じるのは、仕方がないと思う。
3. それぞれ違うので、一概には言えない。
3. 教員によって、バラつきがあった。
3. 教員による。
3. 知りたいことが知れない授業をする教員がいたから。
3. 当たりがきつい先生も優しい先生もそれぞれいたため。
3. 出席を丁寧に取らない先生が多いため、実際に欠席しているのに、出席になる学生がいることが不満。

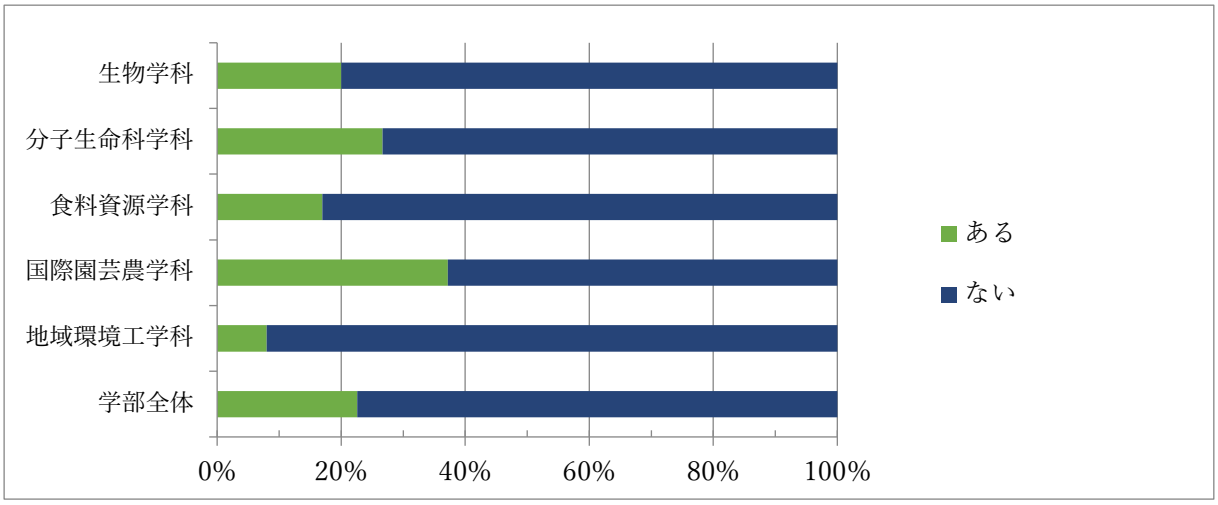
【国際園芸農学科】
1. 分かりやすかった。
1. 自分の理解が間違っている時は、違うと正しい方向へ引っ張ってくださることが多いから。
1. 分かりやすく、ためになる。日常に活かせる情報を教えてくれる。
1. 特に不満がなかったから。
1. 講義資料を毎回用意していただいた。その資料は、学生の理解を補助し、見返した時にも内容が思い出せるものになっていた。ゲストスピーカーを呼んでいただいたことも多々あり、知見が広がったため。
2. 授業での質問にかなり細かく答えていただいたので、わかりやすいものだったから。
2. 特に不満を抱くこともなかったため。
2. 学生の理解度を見ながら授業を進めていた教員が多かったと思うから。
2. 高校とは違い、ある程度自分で自由に行動できたことや、皆平等に扱われていたように感じるから。
2. 質問などにきちんと対応してもらえた。
2. 満足できなかったという理由が、特に思いつかなかったため。
2. 分かりやすかった。
2. 教員によるが、学生の質問や相談に対して、親身になってくれたから。
2. 実習などでは、班ごとにアドバイスをくれたため。
2. 特に不満足に思った理由がないから。
2. 多方面から知識を得る上で、専門となる教授の方々の講義が非常にためになったから。
2. 常にわかりやすい授業をしてくれたため。
2. 提出物に関する説明が丁寧だった。
2. 特に厳しい先生はいなく、皆さん優しく指導してくれたから。
2. 高度に専門的な知識を、その全てではないが指摘できたため。
2. 自分の至らない点を指摘し、改善に尽力していただいたため。

2. 特に不満がないため。
2. 教員ごとに個性はあるが、概ね満足している。
2. 質問に親切に答えてくれたから。
2. 丁寧に対応してもらえた。
2. 皆さん丁寧に指導くださいました。
2. 質問に対して、わかりやすい解答を得られた。
3. 教員によって、指導や対応に差があり、満足度が異なるため。
3. 満足した科目とそうではない科目があったため。
3. 講義、実習、演習の指導対応は教員によって差が大きいため、満足できるケースとあまり満足できないケースの両ケースが存在し、どちらとも言えないから。
3. 教員ごとに温度差が大きいと感じる。
3. 教員によって、異なるため。
3. 一部理不尽な暴言を吐く教員がいたため。アカハラやセクハラ等もう少し気を付けるべき。
4. 授業が面白くなかったから。

【地域環境工学科】
1. 丁寧な対応をしてもらえたから。
1. 分かりやすく、演習も実習も講義内容が身につくような内容だったから。
1. 思いが伝わったから。
1. 厳しいと感じたことはあったが、のちに役に立ったので、満足しています。
1. しっかりと対応してくれた。
1. 全て充実した内容だったから。
1. 学生に寄り添ってくれる。
2. 親身になって、指導してくれてるため。
2. 質問にわかりやすく説明して、応対していただいた。
2. 不満に思ったことがないから。
2. 質問時などで丁寧に対応してくださった。
2. 大きく思うような不満がないから。
2. 丁寧に教えてもらえると感じたため。
2. 質問に丁寧に解答してくれたから。
2. それぞれの科目ごとに学びやすい資料作りなど、学生の意欲を上げる取り組みがされていた。
2. 親身になってくれたから。
2. それぞれの講義で専門的な知識を有してる教員から高度な教育が受けられたと思う。
2. 分からないところを聞きに行っても、丁寧に教えてくれた。
3. 授業形式が公務員試験向けであったり、そうでなかったり、教員によって違うため。

設問 9. 履修した科目の成績評価について質問します。

(1) 成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはありますか。

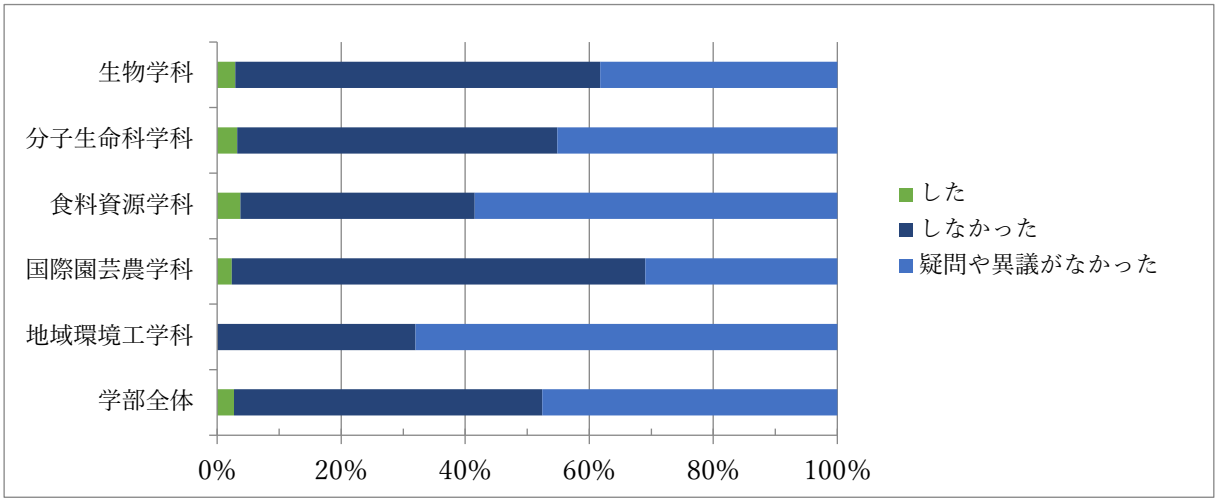


図Ⅰ－9(1). 成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはあるか

学部全体で成績評価に疑問があったと回答した学生の割合は23%で、平成30年度にくらべ5%増加した。

(2) 疑問や異議があったときは、学部教務に「成績評価の問い合わせ」を提出し問い合わせできることになっていますが、あなたはそれをしましたか。した場合、その回答に満足しましたか。具体的に記入して下さい。

1. した　2. しなかった　3. 疑問や異議がなかった



図Ⅰ－9(2). 成績評価の問い合わせをしたか

【生物学科】

1. 授業の担当の先生に問い合わせたが、対応するまで時間がかかった。
2. テストを受けたにもかかわらず、放棄扱いにされてしまいましたが、『先生へ直接問い合わせに行ってほしい』と言われたため、そのような物があると知りませんでした。

【分子生命科学科】
1. 満足した。
2. なぜ？とは思ったが、教養科目だったので、可以上であればいいか、とあきらめた。
3. 相応な評価だと思ったから。

【食料資源学科】
1. 点数開示をしたのに、点数を教えないと言われ、納得いかなかった。
1. 非常勤の教員の講義を履修したが不可になり、問い合わせをしたが、結局連絡がつかないまま、次年度違う教授に変わった。
3. なし。

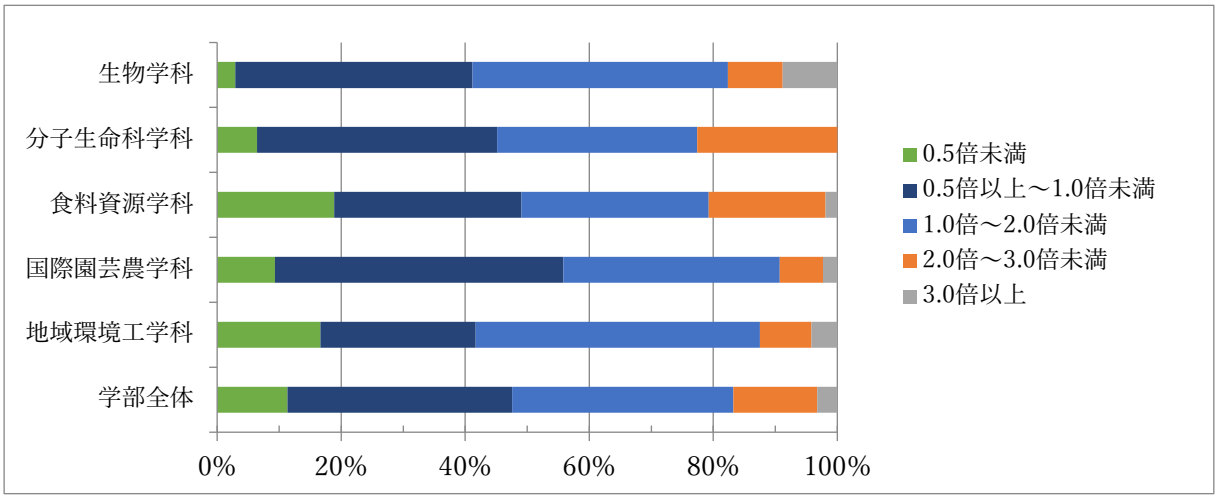
【国際園芸農学科】
1. 満足した。

【地域環境工学科】
3. 自分の成績が悪かったと、先生に言われ、納得してもう一度受けました。

[学生の主体的学習について]

設問 10. 講義や演習の受講に当たり、その講義の受講期間中にあなたは講義室での受講時間の何倍程度の時間を、講義室外での学習（予習や復習など）に当てましたか。大学設置基準では、2 単位の科目の場合、90 時間の学習が必要になりますが、講義室では 30 時間（90 分を 2 時間として扱い×15 回＝30 時間）の学習時間しかありません。そこで、講義室外での学習が必要になります（講義室での 2 倍の時間）。学習時間にはインターネットを利用した関連情報の収集、課題やレポートの作成、外書講読・文献講読・専門英語の予習、小テストのための勉強、中間や期末試験のための勉強、研究室内でのプレゼン準備なども含めても構いません。ある 1 科目を想定して回答しても構いません。

1. 0.5 倍未満　2. 0.5 倍以上～1.0 倍未満　3. 1.0 倍～2.0 倍未満
4. 2.0 倍～3.0 倍未満　5. 3.0 倍以上



図Ⅰ－10．1日平均どの程度の時間を予習や復習に充てたか

学部全体での学習時間について、昨年度までの過去 3 年の傾向は学習時間の低下が見られていた。令和元年度は「1.0 倍未満」と回答する割合が 48%、「1～2 倍未満」と回答する割合が 36%、「2.0 倍未満」と回答する割合が 16%であり、平成 30 年度の「1.0 倍未満」53%、「1～2 倍未満」33%、「2.0 倍以上」14%と比べてほぼ横ばいの状態であることがわかった。

設問 11．大学教育では、 学生自身の主体的、 意欲的な学習が要求されます。

(1) あなたは講義についてどのような姿勢で取り組みましたか。

主体的・意欲的学習を、 「学生自身が講義室外で学習したことを示す（可能性のある）記述」の有無を基準として判断すると、回答総数 164 件のうち、該当したのは 77 件 (47%) であった。設問 10 で示したとおり、1 日当たりの予習と復習時間の合計時間が講義時間の 1 倍以上と回答した学生の割合が学部全体で 52%にのぼることからすると、おおよそ半数の学生は講義外での学習に取り組んでいると思われる。

これに対して、 単位を取得することのみを目的とし、「授業は休まずしっかり聞く／理解するよう頑張って聞く」という意味の受動的であることが明白な記述も多数あり、これらも 1 日当たりの予習と復習時間の合計時間が講義時間の 1 倍未満と回答した学生の割合が学部全体で 48%にのぼっていることと関連があるように思われる。この傾向は過去 3 年間で変化していない。

今年度の学生は改組後初の世代であり、1 年次に教養教育を受け、大学での学びにおける「主体的・意欲的な学習」のあるべき姿勢について、入学直後から積極的に指導することが、基礎ゼミ・地域ゼミなどを介して行われるようになっている。しかしながら、そのような効果が表れているようには見えず、来年度以降の変化を引き続き見ていく必要がある。

【生物学科】

・ファイリングした板書で予習復習をし、質問を行うこともあった。
・真面目に取り組んだつもり。
・専門教育に対しては、熱心に取り組んだ。が、教養教育に関しては、卒業するための足掛かり程度にしか考えなかった。
・希望通りの研究室配属となれるよう、良い成績をとる。
・わからないことは先生方に聞くようにしたり、教科書を読むようにした。
・ふつう。
・自分の興味がある分野に関する知識を積極的に取り込んだ。
・わからないことは質問したり、少しでも減らせるよう心掛けました。
・今しかない学生という時間を無駄にしないために、意欲的に取り組んだ。
・話を聞きながら、メモを取っていた。
・予習をするようにした。また、講義後時間がある場合、その内容について先生に質問しに行くなどした。しかし、答えてくださらない先生は何人かいた。
・単位が取れればよい。興味のある分野には、積極的に取り組んだ。
・なるべく予習をして臨むようにした。
・受け身にただ話を聞いていた。
・真面目に取り組めた。

・自分が興味・関心のある講義には意欲的に取り組んだ。
・最高評定「秀」を取ること。
・できるだけ真面目に取り組んだが、努力が足りないものが多くあった。
・多くのことを吸収しようとする姿勢で受けた。
・強い興味がある講義や面白いと思ったものに関しては、主体的な学習ができたかもしれないが、それ以外は最低限だった。
・興味のある分野には、ある程度真剣に取り組んだ。
・積極的にメモを取った。
・講義は休まず、話をしっかり聞くようにした。（実際一回も休まなかった）
・板書や話したことを記録し、何が大事なことかと意識していた。
・あまり主体的ではなく、指示された内容をこなす感じ。
・できるだけ多くのことを学ぼうとしていた。
・一つでも多くのことを得ようと集中して取り組んだ。

【分子生命科学科】
・あまり真面目には取り組まなかった。
・先生の話を聞き漏らすことなく、なるべく自分の知識にしようと思い、取り組んだ。
・遅刻しないように。
・欠席はなるべく避ける。
・分からないところは先生に質問した。
・興味のない授業でも「秀」を取れるように、興味のある授業なら、更に深く学んで、知識をつけるように取り組んだ。
・意欲的な姿勢。
・できるだけ講義内で覚えるよう努力した。
・主体的に取り組んだ。
・積極的に取り組んだ。
・誠実な姿勢。
・ある程度の予習はして、取り組んだ。
・単位を取って、無事卒業。
・各分野に関して、基礎となる知識を身に付けようと努力した。
・その講義内容についての十分な理解ができるようにという姿勢。
・意欲的に取り組んだ。
・内容を修得しようと努力した。
・できるだけ多くのことを学べるよう、授業を聞き、メモも取るよう心掛けた。
・好き嫌いせずに授業に出席して、説明を聞いてみたり、教科書にしているものを読むようにした。
・講義内での理解に努めた。
・テストで困ることのないように、真剣に取り組んだ。
・今後に生かすことを目標に講義内容を吸収していた。
・予習や復習は自分なりにしっかりと取り組みました。友人と勉強したりもしました。

・内容を自分で解釈できるよう調べながら受けた。
・好きな科目はとことん、苦手なものはしらみつぶしに。

【食料資源学科】
・内容について自身で考案することを意識した。
・意欲的に取り組んだ。
・教員の言ってることを理解する。
・興味を持って臨んだ科目とそうでない科目の熱量の差が大きかった。
・生活に役立つかを念頭に置いて、講義を受けていた。
・卒論については、意欲的に関連事項を掘り下げて学習した。
・受動的な姿勢。
・あまり積極的な受講ではなかった。
・講義には全 15 回出席するように心がけ、相槌を打つことで、教員との円滑なコミュニケーションを図った。
・真面目に取り組みました。
・復習をした。
・興味のある、または必要だと感じた教科は積極的に、単位のために受けた講義は単位が取れればよいと考え、勉強していた。
・必要最低限になっていた。
・普段通りで受けた。
・専門分野については最新の知見やデータも含め、高校より高度な内容を身に付けたいと思った。また、専門外の講義についても、興味のあるものは、率先して受講し、幅広い知識を身に付けようと思った。
・主体的、意欲的とは言い難かった。
・単位を取れるよう努力した。
・今まで知らないことに、より興味を持てるように、テストの勉強をした。
・理解を深められるよう取り組んだ。
・スライドや板書以外に、先生が口頭で話した大切そうな部分はメモを取ったり、割と積極的に取り組めたと思います。
・意欲的。
・真面目な姿勢。
・新しい知識を得ようとする姿勢。
・一番前の席で受講。
・受け身だった。
・毎回出席と全部覚えることを目指していました。
・一度も休むことなく、集中して取り組んだ。
・教員の話す大事な部分や事例などは、メモを取るよう心掛けた。
・テストは頑張った。
・できるだけ休まず、出席する。
・真面目に取り組んだ。

・より良い成績を収められるようにした。
・復習はするようにしていた。
・講義で得た知識を忘れないように、ノートに詳しく書くようにした。
・必ず講義前に、前回の内容を復習した。
・興味のない分野のことでも、とりあえず聞く。
・寝ないように、一字一句逃さないように授業に向かった。
・受動的な姿勢。
・ある程度は、意欲的に取り組めた。
・まずは先生の話す内容に集中した。資料に書いてある内容はいつでも確認できるため。
・少し受動的なことが多かった。
・講義中で全てを理解できるように集中して授業を受け、テスト勉強に割く時間をなるべく減らした。
・話をよく聞く。
・意欲的に取り組んだ。
・自分の知識として、身に付けようとしていた。
・新しいことを学びたいという気持ちで。
・真面目に話を聞いていた。

【国際園芸農学科】
・基本的には、ほとんど知らないことについて学ぶため、その時々の授業で興味を持つものを見つけるようにして、受けていました。
・様々な分野に興味を持つよう心掛けた。
・何も考えていなかった。
・理解が追い付かないために、講義の内容を全てを後で復習する必要があった。
・黒板やパワーポイントが見えやすいよう、できるだけ前の席で講義を受けた。
・意欲的に取り組んだ。
・板書はすべてノートに取るなど、真面目に受けていた。
・意欲的に取り組んだ。
・内容については、最低限理解しようと努めていた。
・出席する。
・新たな知識を身に付け、アウトプットできるように全力で取り組んだ。
・講義から学べることは、知識として身につくように取り組んだ。
・一回の講義で全て覚えるように心掛けた。
・あまり意欲的に参加しなかった。
・授業には出席したが、講義外での自学自習はあまりやらなかった。
・単位を落とさないように頑張った。
・真剣に取り組んだ。
・自分なりにではあるが、一生懸命取り組んだつもりである。
・教えられることを積極的にインプットする姿勢で臨んだ。
・単位を取れるように頑張った。

・農業や地域が抱える問題は何か、どこにあるかなどを学ぼうとし、毎週・毎時間、講義に対しての疑問を見つけていた。
・毎回出席、復習重視、課題等はしっかりやる。
・積極的に前の席に座り、真面目に取り組んだ。
・話を聞き逃さないよう、集中して講義に臨んだ。
・受講してよかったと思えるように、理解しようと努力した。
・意欲を持って。
・積極的に。
・やや消極的であったかも知れません。
・消極的でもなく、積極的でもなく。
・親身になって取り組んだ。
・講義自体には、真面目に取り組んだ。
・先生の話をきちんと聞いた。
・知らないことが多かったので、先生の話を聞いていて、楽しいと思いながら、講義に取り組んでいた。
・自然科学はあまり得意ではなかったため、講義中に教えてもらったことを少なくともその場では理解するように、農業経済などの社会科学は好きだったため、聞いたことを実際に例に当てはめて、考えながら受講した。
・可を取れたら十分。
・テストを乗り切るために、必死で受けた。
・多くの知識を吸収しようと努力した。
・復習しやすいノート作り。
・興味がある講義はしっかり受けてた。
・授業内で理解するように取り組んだ。

【地域環境工学科】
・専門知識を深めるため、取り組んだ。
・できる限り出席した。
・しっかり授業を聞いていた。
・必要とされる知識と考え方についての理解を深めれるように努めた。
・毎日の復習を重視した。
・聞き逃しがないよう、真面目に受ける。
・知識を理解できたか、頭やノートで整理していた。
・土木の知識をつけたい！！
・なるべく欠席しないように心がけた。
・ある程度学習し、自己学習で概ね理解する。
・正直あまり真面目に取り組んでいませんでした。授業に出席し、提出物を出し、テストに向け、少し勉強くらいの最低限だけでした。
・できるだけ欠席しない、あまり後ろの席に座らない。
・単位を落とさないように取り組んだ。

・知識に身に付けるように取り組んだ。
・理解しようと前向きに取り組んだ。
・最低限単位を取るため。
・積極的にメモをしていた。
・予習・復習を積極的にやった。
・主体的に取り組んだ。
・前で聞いて、大事なところを聞き逃さないようにした。
・得意科目以外は、意欲的に取り組むことができた。
・単位を目標にしていた。
・比較的意欲的に取り組むことができた。
・休まず。
・積極的に。

(2) 実験・実習についてはどうですか。

全回答数 161 件中 56 件（35%）は、下記の回答例のように自身が行った取り組みや学習成果を具体的に記述していた（昨年度は 24%）。

回答例 :「目的や原理を理解してから、結果に対する考察をすることを心がけた。(生物学科)」、「実験操作等、各ステップの意味を理解し、目的や結果について、深く理解するよう心掛けた。(分子生命科学科)」、「学生実験については、決められた内容についてのみ行ったが、研究室では、指導教官の指導をもとに自ら考え、実験に関する必要な技術・知識のみならず、論理的思考やプレゼン能力を磨こうと思った。(食料資源学科)」、「特に実習(農場実習）は、今しか経験できないことだと思ったので、(後から自力で独学するのが難しいので) 毎回毎回大切に全力で取り組んだ。大変楽しかったし、勉強になった。実際に体を動かして経験することの重要性を強く感じた。(国際園芸学科)」、「意義と行程を理解し、何のために必要なのかを正しく理解できるように努めた。（地域環境工学科)」など。

約半数（161 件中 77 件、48%）は、「真剣に取り組んだ」、「積極的に行った」などのように前向きな記述であったが具体的な記述が無かった。

一方、下記の回答例のような受動的取り組みや否定的な記述もあった (161 件中 28 件、 17%)。特に食料資源学科は 45 件中 12 件、27%と比較的その割合が高かった。

【生物学科】
・実験は班単位で、主体的になれないと習得が難しいと思った。
・有意義な時間だったと思う。
・教員の方々が、楽しんで行えるような工夫が多くあったので、全力で臨んだ。
・技術を学びたい。
・同じグループの人にわからないことを聞きながら、理解するようにした。
・よかった。
・人によって少し差があったため、レポート等の負担の差がすごかった。
・座学では学べないことを実際に手を動かして学べるため、とても楽しみでした。
・生物学科に在学している時間を自らの糧とするため、意欲的に取り組んだ。

・手引きに沿って、真剣に取り組んだ。
・用意された物品内で実験をし、考えた。指示が不明瞭で、どのように実験を進めてよいか、物品を扱ってよいかなどわかりにくく、戸惑うことが多かった。
・積極的に取り組んだ。
・目的や原理を理解してから、結果に対する考察をすることを心がけた。
・指示されたことをやった。
・真面目に取り組めた。
・全体を通して、意欲的に取り組んだ。
・実験・研究手法について学ぶことができた。
・色々な分野に興味を持てるような実習があり、良い経験になった。
・自分から積極的に手を動かし、技能の習得に努めた。
・面白いものが多かったので、主体的に取り組めた。
・浅虫での臨海実習は、海のそばで夜遅くまで実験や観察ができるということで楽しみながら挑めた。
・新しい器具の使い方を覚えるようにした。
・普段、座学ばかりなため、楽しかった。また、学べるものが多かった。
・作業内容を確認し、手順の一つ一つにどんな意義があるか確認していた。
・進んで取り組むことができた。
・面白いものも多く、満足している。
・積極的に参加することができた。

【分子生命科学科】
・それなりに取り組んだ。
・色々な実験ができて満足しているが、グループの人間関係は辛かった。
・ある程度真面目。
・事故が起きないように手法を遵守した。
・満足している。
・自分が全く知らない実験手法や器具を使って行うものだったので、重要な部分を聞き逃すことがないよう真剣に行った。
・受けてない。
・積極的に取り組んだ。
・意欲的に取り組んだ。
・積極的に予習した。
・楽しめた。
・充実していた。ただ「これは～万円する」とかおっしゃっていた教授がいらっしゃったが、正直どうでもいいなと思いました。
・特に何も思わなかった。
・実験操作等、各ステップの意味を理解し、目的や結果について、深く理解するよう心掛けた。
・よく理解ができていないまま、手を動かすことが少ないように、という姿勢。
・意欲的に取り組んだ。

・失敗、ケガがないように配慮した。
・班の人と協力して、結果を出すよう心掛けた。
・途中で失敗してからは、操作の意味を考えるようにした。班のメンバーや TA の人とコミュニケーションをしっかりとるように意識した。
・手に覚えさせて、技術・知識を身に付けようとした。
・自分で計画立てて、実験を進めていった。
・先を見据えて、取り組んでいた。
・班のメンバーと協力できたと思います。自分なりに計画的に行えたと思っています。
・あまり主体的には、取り組めていなかった。
・自分がやりたいことなので、納得するまでやった。

【食料資源学科】
・無理のないカリキュラムであると感じた。
・意欲的に取り組んだ。
・時間が短い、もっと長く時間を取ってほしい。
・あまり深く考察できなかった分野があった。
・意欲的ではなかったと思う。周りに合わせていた。
・単位が取得できる最低での学習しかしていない。
・講義と比べるとやや意欲的。
・あまり積極的ではなかった。
・周りとのコミュニケーションを意識して、全員が同じように参加及び学習できるように心がけた。
・真面目に取り組みました。
・色々な分野の実験ができて面白かった。
・積極的に取り組んでいた。
・興味深くまじめに取り組んだ。
・普通。
・学生実験については、決められた内容についてのみ行ったが、研究室では、指導教官の指導をもとに自ら考え、実験に関する必要な技術・知識のみならず、論理的思考やプレゼン能力を磨こうと思った。
・その時によって、意欲的ではあったと思う。
・実験に関しては、興味のある分野なので、多くの時間を割いた。
・考察について、なぜそうなるのかをしっかりと調べて書くようにした。
・実際にやることで、理解を深められるよう取り組んだ。
・班の仲間と協力しながら、自主的に自身の役割を探して、取り組んでいたと思います。
・楽しかった。
・楽しかった。
・変化を観察・理解しようとする姿勢。
・十分にやれた。
・先生方が、優しく教えてくださるので、とても心強かったです。

・実験手法の意味を考えながら取り組んだ。
・事前準備は入念にして、実習中は作業に集中できるよう心掛けた。終わった後のフィードバックも大事にした。
・レポートを頑張った。
・興味を持って、取り組んだ。
・主体的に取り組んだ。
・真面目に取り組んだ。
・何も思わなかった。
・手順通りに安全を意識した。
・実験内容がわかっている場合に限っては、行う実験において何をしているのかを事前に調べた。
・積極的な姿勢を貫いた。
・レポートを書くことができるように受けました。
・やや積極的な姿勢。
・ある程度は、意欲的に取り組めた。
・話す内容だけでは、実際に何をしたらいいのかわからなかったため、周りの人（特にＴＡ）に助けを求めた。
・加地をこなすことに必死だった。
・傍観せずに参加するようにした。
・手を動かす。
・グループ活動が苦手だったので、苦痛だった。
・特になし。
・予習や復習をしていた。

【国際園芸農学科】
・グループの人と協力して、わからない部分は確認しながら、取り組んでいました。
・グループの作業では協力し、作業を円滑に進めるようにした。
・難しかった。
・実験は受け身だったと思う。実習は体を動かしながら、学ぶことができるので、積極的に学べた。
・仲間と協力しながらできた。
・意欲的に取り組んだ。
・積極的に行動した。
・実習に関しては、一度も休まず、意欲的に参加した。
・とりあえず、取り組んでみるというスタンスでいた。
・実践的でおもしろかった。
・その学科に入ったからこそできる貴重な体験をすることで、学びを深めることができた。
・実際に経験できる機会ということで、前向きに取り組んだ。
・あまり意欲的に参加しなかった。
・班ごとの作業が多かったので、協力してもらって実験やレポート作成などを頑張れたと思っている。

・研究室に配属された時困らないように、意欲的に取り組んだ。
・自分から進んで行えた。
・特に実習（農場実習）は、今しか経験できないことだと思ったので、（後から自力で独学するのが難しいので）毎回毎回大切に全力で取り組んだ。大変楽しかったし、勉強になった。実際に体を動かして経験することの重要性を強く感じた。
・普段、生活では経験できないようなことを体験できた。
・単位を取れるように頑張った。
・自分に理解しがたい内容は、同じ学科の同じグループの人と声を掛け合ったり、やることを手分けして協力し合ったりして、解決するようにした。
・協力して、やるべきことをやった。
・個人的にとても勉強になり、楽しく参加することができた。
・不明な点は、質問するようにした。
・中学・高校の延長だと思った。待ち時間が多く感じ、暇だった。
・実験は意欲は平均程、実習は意欲を持って。
・積極的かつ主体的に。
・指導に対して、その通りに行動しました。
・あまり役には立たないと感じる。
・単位を落とさない程度勉強した。
・今の実験・実習についてはわからないが、当時のものはとても満足いくものだった。
・友達と協力してできた。
・ミスしないよう、慎重に取り組んでいた。
・実験は苦手だったが、その分説明をよく聞いたり、グループ内で話し合ったりして、一定の理解はできるように心がけた。農場実習も同様であった。
・可を取れたら十分。
・楽しみながら、受講できていた。
・積極的に作業に取り組んだ。
・積極的に参加。
・実験は面倒だった、実習は良かった。
・多くを学べるように積極的に動いた。

【地域環境工学科】
・学んだ知識を活用できるように取り組んだ。
・就職した後に活かせるような内容であった。
・意欲的に取り組んだ。
・意義と行程を理解し、何のために必要なのかを正しく理解できるように努めた。
・実験手順の把握とレポート作成に注力した。
・班員に任せてしまう場面も。
・器具の使い方や実験方法を確認しながら行った。
・実験の意味を念頭に置きつつ、意味を捉えながらやる。
・なるべく欠席しないように心がけた。

・班員と協力し、良い結果を出すように努力したり、支え合う。
・実践ができ、座学で学ぶよりも頭に入りました。
・欠席しない、協力して、実験・実習を行う。
・積極的に取り組むようにした。
・結果を実際に感じられるように取り組んだ。
・内容が濃く、貴重な体験ができた。
・次に生じることを先読みして行った。
・目的意識を持っていた。
・積極的に自分の役割を認識し、実行した。
・同様に、主体的に取り組んだ。
・実験はあまり得意ではなく、みんなの足手まといにならないか毎回不安だったが、できると思ったことは積極的に、また主の実験者をサポートしようと動いた。
・周囲の人と協力しながら、実験内容を理解できるように努めた。
・十分にあった。
・他人との協調性を育むと共に、和気藹々と内容の学習に努めた。
・ためになった。
・積極的に。

(3) 大学在学中のカリキュラム（教養教育も含む）の中で、もっとも印象に残った科目があれば、その科目名と理由を記入して下さい。

全回答数（1 回答中複数の科目について言及があった場合、科目数分をカウントした。）126 件中 103 件（82%）は、講義の内容や教授法のすばらしさが理由で印象に残っている科目、代えがたい体験を理由に印象に残った実験実習科目であった。学科単位で行われる実習が印象に残るケースが強いようで、生物学科では 24 件中 5 件が臨海実習あるいは生態学野外実習、食料資源学科では 34 件中 4 件が食品加工学実習、地域環境工学科では 16 件中 4 件が地域環境工学実験であった。改組に伴う事業のひとつであった海外研修入門が必修である国際園芸農学科では、36 件中 19 件とコメントの半数に相当した。一方、海外研修入門が選択となる他 4 学科では、海外研修入門を印象に残っている科目にあげたのは 1 件しかなかった。また、学科毎に印象に残る科目が違う中で、農場実習は多くの学科で共通して印象に残っていた：生物学科（1 名）、分子生命科学科（1 名）、食料資源学科（1 名）、国際園芸農学科（7 名）、地域環境工学科（1 名）。

特に印象にない、あるいは単位取得に苦労した科目は、全回答数 126 件中 23 件（18%）であった。

【生物学科】
・発生生物学。
・生態学野外実習：多くの自然に触れられて、よかった。
・なし。
・生物学専門実験：初めて研究者らしい(大学らしい）経験をした。
・動物行動学：いつも面白かったから。
・実験。

・菌学：先生の熱量がすごくて、とても面白い講義でした。資料もわかりやすく、とても引き込まれました。
・科目：水産増殖学、理由：学生に教えるつもりのない講義に愕然とした。
・生態学野外実験：とても楽しかったです。
・植物発生形態学：クーパー細胞生物学の内容を分かりやすく解説してくださり、理解もはかどり、感謝しています。　池田先生の講義：内容が明確でわかりやすかった。実際のビデオを見ることで、イメージしやすかった。　吉田先生の講義：スライドの文字数が過多で、まとまらないならプリントで配布してもよいと思う。
・卒業研究：実験をすることが好きだという自分の性格を知ることができたから。
・細胞生物学：ミクロの世界で起こっていることが、かなり複雑だが秩序立っていて、精巧な機械の仕組みを見ているようで面白かったから。
・生態学野外実験：初めて白神山地の遺産地域内に足を運ぶことができたから。
・農場実習、農業インターン：就職する分野を決めるきっかけになったから。
・水産増殖学
・芸術−将棋の世界−：大学の講義として、将棋をさせるとは思わなかった。
・分子進化学：進化が確率で起こるということが面白かった。
・特になし。
・学部の臨海実習：数日間生物学を肌で実感できたから。
・臨海実習：内容はハードで約一週間ぎっしり実験があったが、とても勉強になり、研究とはなんなのかを理解するきっかけとなった。
・生殖生物学：一番熱心に教えてくださったから。
・生殖生物学：他大学の先生からもその分野について学ぶことができたから。

【分子生命科学科】
・農場実習：気持ちの良い汗をかくことができたから。
・学生実験：それまでほとんど座学だったのに対し、自分で実際にやってみると違った視点が得られたから。
・生体物理化学Ⅰ：とても難しくて、他の科目よりたくさん勉強したため。
・数学の基礎：元々数学が好きなので、大学で勉強できたのは、有難かった。（せっかくの理系なので）数学を学ぶ機会が増えればいいなと思う。
・なし。
・生体物理化学Ⅰ
・冨田先生のスティールパン・グラスハープの授業：一番楽しかった。
・実験：畠山先生
・特になし。
・特になし。
・どの授業も真剣に取り組んでいたため、特別印象に残っている授業はない。
・特になし。
・学生実験。
・分子機能科学、天然物化学、酵素化学は、授業を聞いていて、それぞれ興味が湧いた。

・微生物機能利用学：最も興味深く、面白かったため。
・菌学：単純に好き。

【食料資源学科】
・植物病理学（田中和明先生）：先生の講義がとても練られていて、わかりやすかった。
・特になし。
・食品加工学実習：この学科でしかできない科目であったため。
・菌学
・食品物性学：唯一単位を落としたから。
・学生実験：様々なジャンルの研究が知れてよかったです。
・微生物バイオテクノロジー：面白かった。
・農場実習：普段できないような体験ができたため（羊の毛刈りなど）。
・学生実験：様々な分野に触れられたので。
・中島先生・食物毒性学：元々興味があったから。
・食品衛生学：二枚貝全てがノロウィルス感染の原因食品であると知ったときの衝撃が大きかった。
・昆虫学（生物学科の先生）：どうして進化していったのか知ることができて、すべての形態に意味があるから。
・食品製造学：実際に普段食べてるものについて、知らないことが多くて驚いた。
・食品加工実習：”食”に関わる実習が初めての経験だったため、とても印象的でした。初めて触れる測定装置の多く、楽しんで取り組めたからです。
・食の機能安全科学。
・特になし。
・作物育種学：一年次に履修した科目。講義は聴いていたが、内容が全く頭に入ってこなかった。テストの問題文を見て、「こんなこと習ってたんだ…」と初めて理解した。後にも先にも、このような講義を受けたことはないから。
・特になし。
・どれも楽しかったです。
・学生実験：学科の研究内容を全体的に知ることができたため。
・食品機能性成分分析学（岩井）：分析研究の大まかな流れを自分で考えることにより、卒業研究のイメージをつかむことができた。
・スノボ合宿：楽しかったので、印象に残りました。
・学生実験。
・なし。
・作物バイオテクノロジー：最新の技術でどのようなことができるのか学べたから。
・学生実験：丁寧な説明があって、楽しく実験できた。
・特になし。
・特に印象には残っていない。
・前多先生の「実験動物学」：生物学の延長線にある専門的な知識を得ることができた。
・食品物性学：正直、この講義は最悪だった。何を言ってるのかわからない、脱線が多い、話の

内容にまとまりがない。その割にテストが異常に難しい。単位を取得したのが、確か 4/40 人くらいだった。これは改善すべきだと感じる。
・キャリア形成：自分の将来を見つめるきっかっけになったから。
・食品加工学実習：パン作り。
・食品加工学実習：食品の加工における変化を実際に感じられたため。
・応用昆虫学：一番大変だった分、達成感があったから。

【国際園芸農学科】
・最も印象に残ったのは「海外研修」です。実際に海外に行き、直接目で見て、学ぶことができたから。
・特になし。
・海外研修：外国の農業経済を肌で感じることができたから。
・海外研修入門：海外の農業を実際に行って、目で見る機会がないので、とても刺激的だった。
・海外研修。
・海外研修：初めてアジアの国に行き、市場谷農園を見る、とてもいい機会となった。
・海外研修。
・科目：農場実習　理由：牛のお尻に腕を突っ込んだので。
・海外研修。
・海外研修入門：国際園芸農学科らしく、海外での農業の実態を学ぶことができた。
・農場実習：座学で学んだことを実際にやってみることができたから。
・生化学：他学科の先生だったと思うが、説明がとてもわかりやすく、講義内容も楽しかったため。
・特になし。
・特になし。
・農場実習です。（もう一つ挙げてもよいなら、海外研修も挙げたいところです。）座学で学んだことは、相当興味を持って学ばない限り、たいていは卒業後に忘れてしまうと思います。しかし、農場実習は座学で実習内容について学んだあと、実際に体を動かして体験するため、一つ一つが経験として記憶に残り、かつ、この先の人生でもう経験できないようなことを経験させていただきました。実習そのものの内容だけでなく、命についてや働くことについてや農家さんの苦労や農畜産物を作る楽しみなど色々なことが学べたように思います。農学部生なら、体験すべき実習だと思いました。
・海外研修入門：他ではできない経験ができた。楽しく、かつ学ぶことや感じたことが多かった。
・海外研修入門：海外に行き、現地の文化や雰囲気を体感できたことがとても印象に残った。
・農場実習：いろいろな農作業を経験できてよかった。
・国際有機資源論：2050 年問題を取り上げたり、GMO について考えたり、これからの農業について異なる分野の先生のオムニバスで受講のし甲斐があった。
・海外研修入門。
・海外研修です。
・青森の手工芸（こぎん刺し）
・農業実習：数少ない課外活動であるため。

・海外研修入門。
・農場実習：実際に体を使って、農業を学べたから。
・農生概論：大学に入ったばかりで全てが刺激的だったと記憶している。
・海外研修。
・海外研修入門：実際に海外の市場を見て、話を聞くことができ、深く印象に残った。
・三年後期の「農業政策論」が最も印象に残っている。それまでは地域のことに焦点を当てた講義内容が多かったように感じるが、農業政策は日本全体に通じる基本であった。三年生になって、やっと理解できるであろう難しい内容だったが、面白かった。
・食料経済学：先生が良かった。
・海外研修：初めての海外だったから。
・海外研修入門：海外で農業について考えることができる、貴重な機会だったため。
・海外研修：他国の市場について、現地で学ぶことで、自身の知見が深まった。
・国際食品マーケティング論：ためになった。
・農場実習：普通ではできないことをたくさんできて、学べたから。

【地域環境工学科】
・構造物設計法：魚道の設計のレポート作成が特に面白かった。
・地域環境工学実験：より専門的な内容だったため。
・特にない。
・水理学実験、構造力学Ⅱ、論語（教養科目）：当時、物理や儒教に興味があったため。
・農場実習：多くが農業土木の専門的な授業の中で、この授業は農業そのものを学ぶものとしてよかった。
・地域環境工学実験：覚えた知識を実践しながら、身に付けてくれたから。
・農地工学、測量学、山間地計画学：面白かったから。
・特になし。
・地域環境工学実習：農水省で二週間実習させていただき、自分の専門分野の面白さがわかった。
・海外研修入門：価値観やスケールの違いを肌で感じられた。
・地域環境工学実験：これまで座学で学んだ知識を応用して、実験を行うために、より集中して取り組んだ。
・水理学：単位を落として、二度受けたため。
・コンピュータ演習Ⅰ：大学入学後すぐの授業だったが、宿題のメール提出方法やメール本文例など大学生として生きていくのに、必要な知識を得られた。
・土壌物理学：一番面白かった。先生もとても教え方が良かった。
・技術者倫理学：外部からの講師を招いての授業なのだが、今後技術者として、生活していくための必要なものを学べた。
・特になし。

[学生への教育支援、施設・設備について]

設問 12. 本学部や本学では皆さんに助言したり、皆さんからの相談･苦情を受け付けたり、皆さんのニーズを把握するために、下記のような 10 のルートを用意しています在学中あなたは次の(1)～(3)の項目について主にどれを利用しましたか。(　　) 内に番号を記入して下さい。

(1) 学業

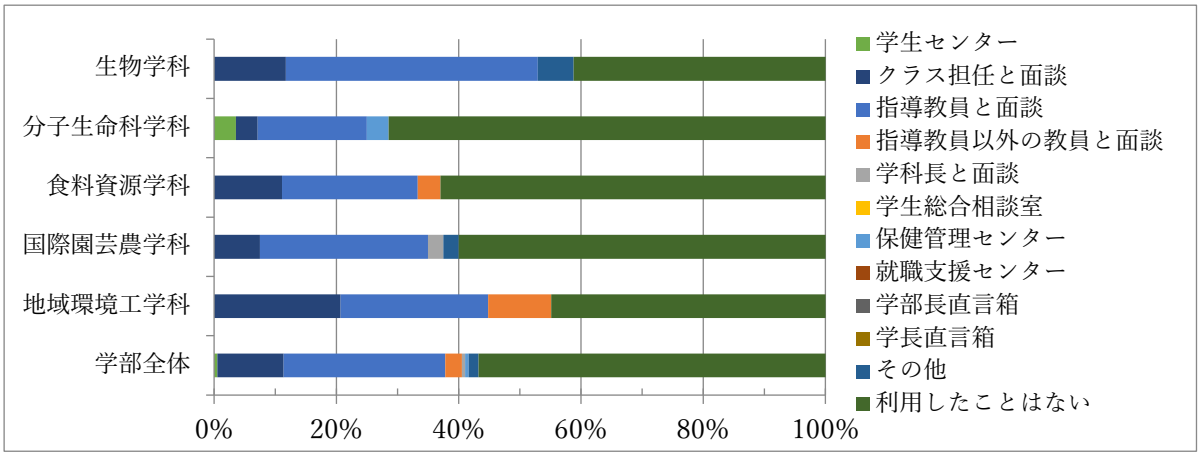


図 I－12(1). 学業に関する相談窓口

学業に関する相談の場合、学部全体では、「利用したことはない」(56%、昨年度 41%)、「指導教員と面談」(26%、昨年度 36%)、「クラス担任との面談」(11%、昨年度 12%) の順に高い傾向は例年通りであった。但し、「利用したことはない」の割合が 15%上昇し、「指導教員と面談」の割合は 10%低下していることは気になるところで、今後数年は留意しておく必要がある。学科毎で見ると、生物学科では「クラス担任と面談」と「指導教員と面談」の合計が 5 割を超えており、特に教員への相談率が高いことがうかがえた。続いて、地域環境工学科が高く、「クラス担任と面談」と「指導教員と面談」の他に「指導教員以外の教員と面談」の割合も高いという特徴があった。

(2) 学生生活

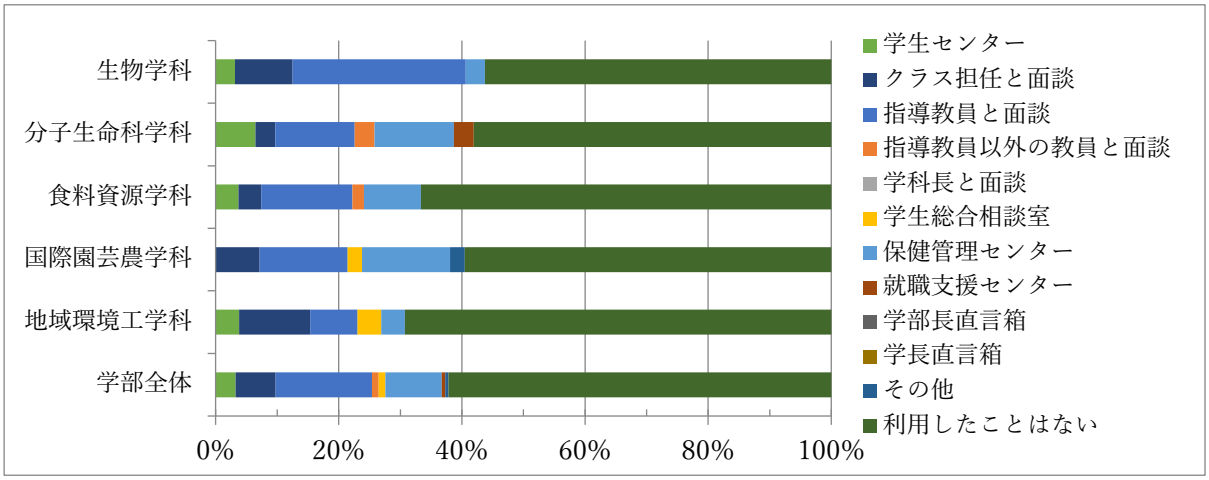


図 I－12(2). 学生生活に関する相談窓口

学生生活に関する相談の場合、学部全体では、「利用したことはない」(62%、昨年度 54%)、「指導教員と面談」(16%、昨年度 17%)「保健管理センター」(9%、昨年度 7%)、「クラス担任と面談」(6%、昨年度 7%)、の順に高かった。

(3) 進路

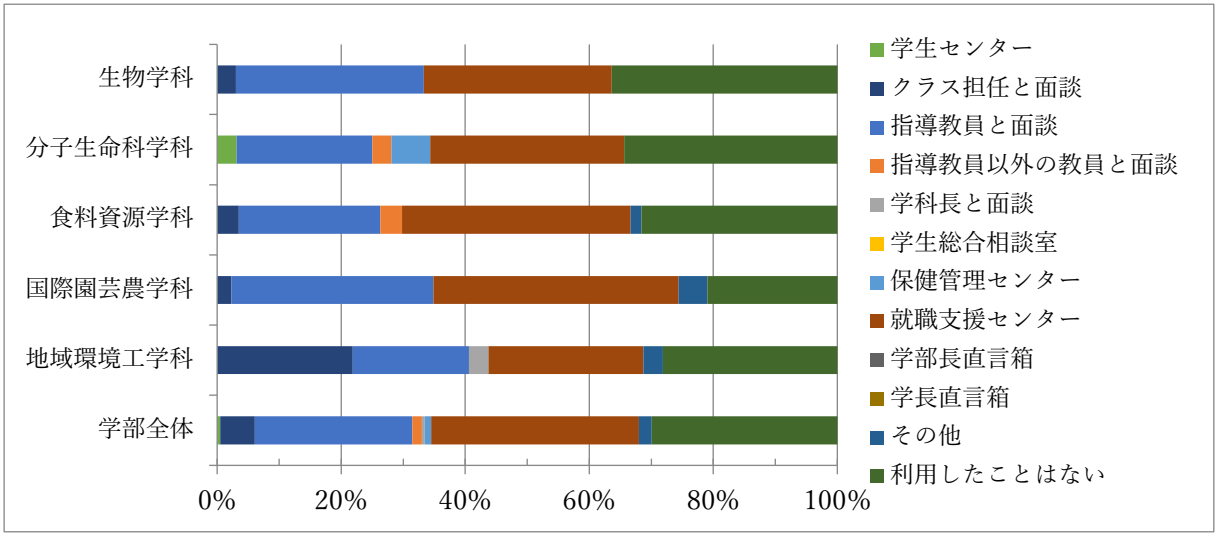


図 I－12(3). 進路に関する相談窓口

その他

【生物学科】
・ホームページ。

【食料資源学科】
・公務員講座

【国際園芸農学科】
・大学生協
・キャリア形成の発展授業。
・農学部教務担当（主に真壁さん、工藤さん）

【地域環境工学科】
・進路担当の先生との面談、森先生。

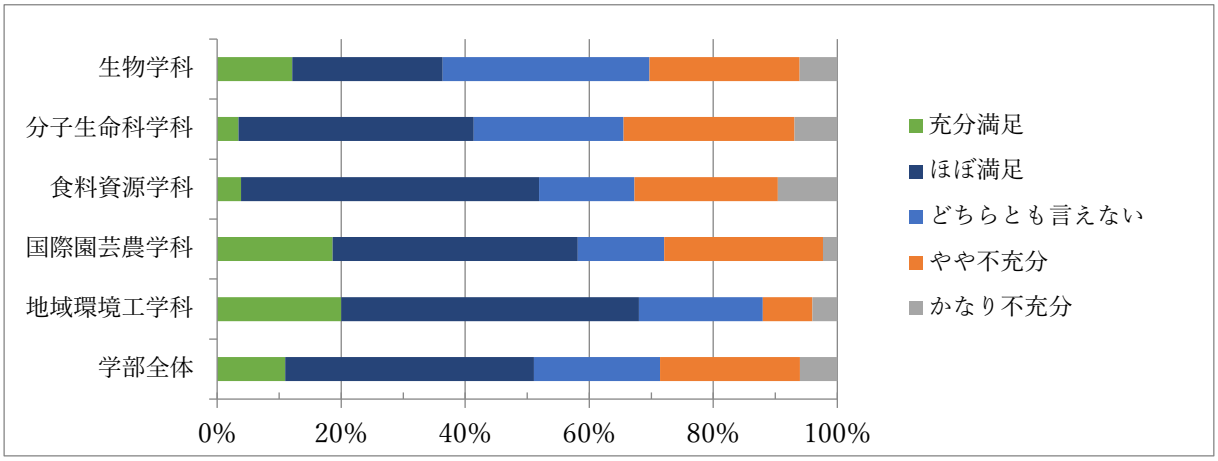
進路に関する相談の場合、学部全体では、「就職支援センター」(34%、平成 30 年度 32%)が最も高かった。次に多い「指導教員と面談」(25%、平成 30 年度 30%)は昨年と同様のレベルだった。「利用したことはない」(30%、平成 30 年度 32%) は例年多いが、平成 29 年の 36%から年々減少している。その他の項目に、「公務員講座」や「農生教務」という記述も見られた。

設問 13. 本学部の以下の施設について、どのように感じていますか。

(1) 下表の該当する欄に〇を書き込んで下さい。

評　価 施　設	1. 充分満足	2. ほぼ満足	3. どちらとも言えない	4. やや不充分	5. かなり不充分
1. 講義室					
2. 実験・実習室					
3. 情報処理演習室					
4. 蔵書室（４階）					
5. 学生自習室・学生控室（２階）					
6. 卒業研究を行った研究室					

1. 講義室

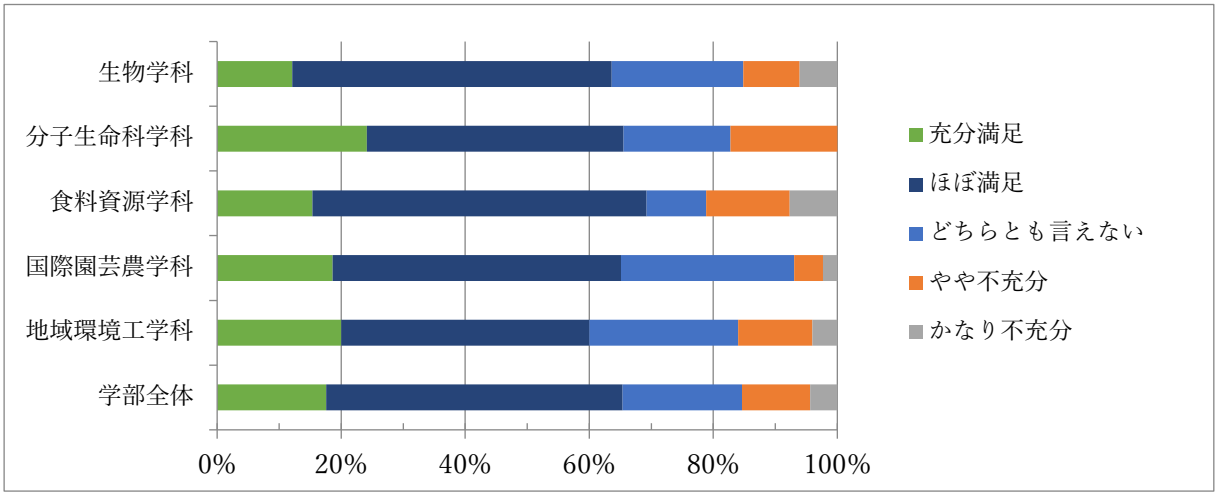


図Ｉ－ 13(1) － 1. 本学部の施設に対する満足度（講義室）

平成 28 年度から一部の講義室に冷房設備が導入されている。その影響が現れるか昨年度に続き注目された。その結果、学部全体では「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は 51%で、昨年度は一昨年度に比べて 5%上昇して 50%となったが、ほぼ横ばいの状態と言える。一方、「やや不充分」と「かなり不充分」の合計は 14%で、昨年度から 21%減少した。したがって、本年度は満足度が不満足度を 35%以上も上回る結果となった。

設問 13(2) を読むと、変わらず講義室における夏の暑さと冬の寒さを指摘する声が非常に多い。これは研究室の状況も含まれた結果であり、講義室に関してはかなり改善されていると考えて良いと思う。もちろん、いまだ導入されていない講義室もあり、今後さらに導入を進めていく必要がある。学科毎に見ると、生物学科と分子生命科学科で「充分満足」と「ほぼ満足」の合計が 4 割程度と他学科に比べて低かった。

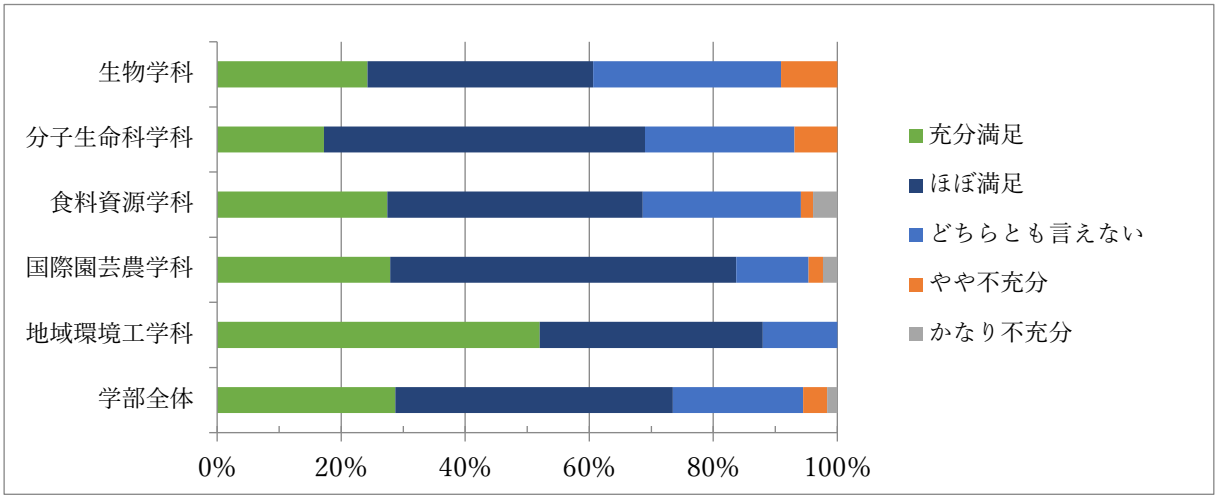
2. 実験・実習室



図Ⅰ－ 13(1) － 2. 本学部の施設に対する満足度（実験・実習室）

実験・実習室について、学部全体では「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は 65%であり、昨年度の 59%から 6%上昇した。一方、「やや不充分」と「かなり不充分」の合計は 15%であり、昨年度の 23%から 8%低下した。結果、昨年度と比べても満足度が不満足度を大きく上回ったと判断できる。学科別に見ても全ての学科で満足度が過半数を占めていた。

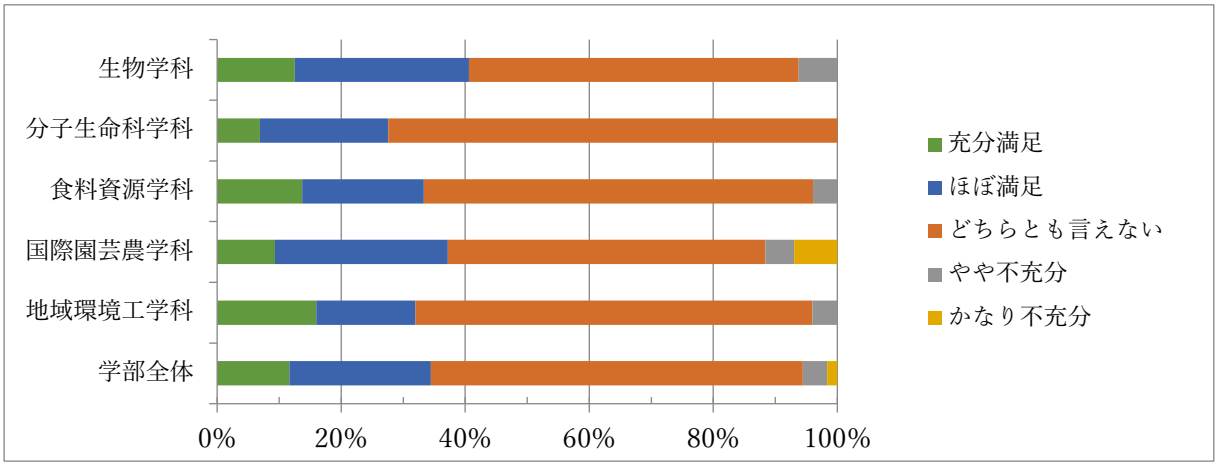
3. 情報処理演習室



図Ⅰ－ 13(1) － 3. 本学部の施設に対する満足度（情報処理演習室）

情報処理演習室について、学部全体では「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は 73%であり、「やや不充分」と「かなり不充分」の合計（6%）を大きく上回った。情報処理演習室は過去にも満足度が高く、平成 24 年度以降、「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は 70～79%で推移している。満足度には学科間でやや差があるように見られるが、学科間差に年次を超えた一定の傾向を必ずしも見いだすことはできない。利用頻度のかなり低い学科もあるため、得られた値が実際に高い満足度を反映しているものかは不明である。

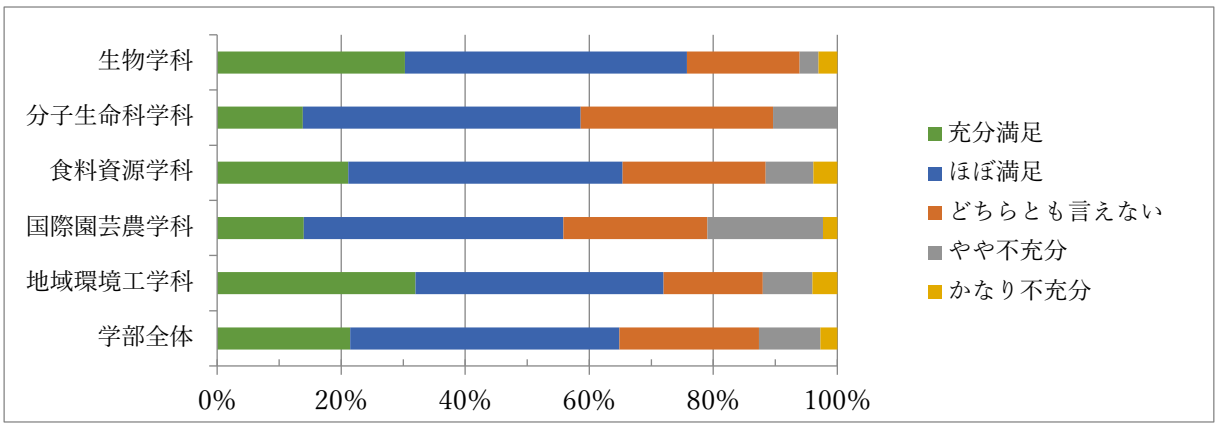
4. 蔵書室（４階）



図Ⅰ－ 13(1) － 4. 本学部の施設に対する満足度（蔵書室［4 階］）

平成 27 年度に、4 階に蔵書室を新設して図書閲覧室内の蔵書の大半を移設し、従来の図書閲覧室内の蔵書スペースに学生控室を設ける改修が実施された。そのため平成 28 年度からは、図書閲覧室の蔵書ではなく、新設された蔵書室の満足度を調査することとした。その結果、学部全体では「どちらとも言えない」が 60%で最も多かった。この割合は過去 3 年間の数値（平成 28 年度 56%、平成 29 年度 56%、平成 30 年度 55%、）とほぼ同じであり、また平成 26、27 年の図書閲覧室内の蔵書スペースにおける「どちらとも言えない」の割合（47～48%）を上回った。この結果は、昨年度と変わらず蔵書室の利用が少なく、学生が所蔵図書の現状を十分に把握していないことと大きな関係があると考えられる。一方、「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は 34%であり、昨年度 36%と比べて横ばい状態であった。平成 25 年度以降 27%→31%→34%→34%→34%→32%→36%と推移してきたことを考えると、依然として改善の余地がある。書誌や雑誌の閲覧がオンライン利用に移行する中で蔵書室の利用を拡大しようとするなら、授業科目の参考図書や学部学生向けの専門図書を計画的に更新・拡充し、学生に積極的に周知していくことが望ましい。13(2)で蔵書室に関する記述があったのは、「蔵書室は所在すら知らない」（地域環境工学科）という意見が 1 つ挙げられていただけであった。

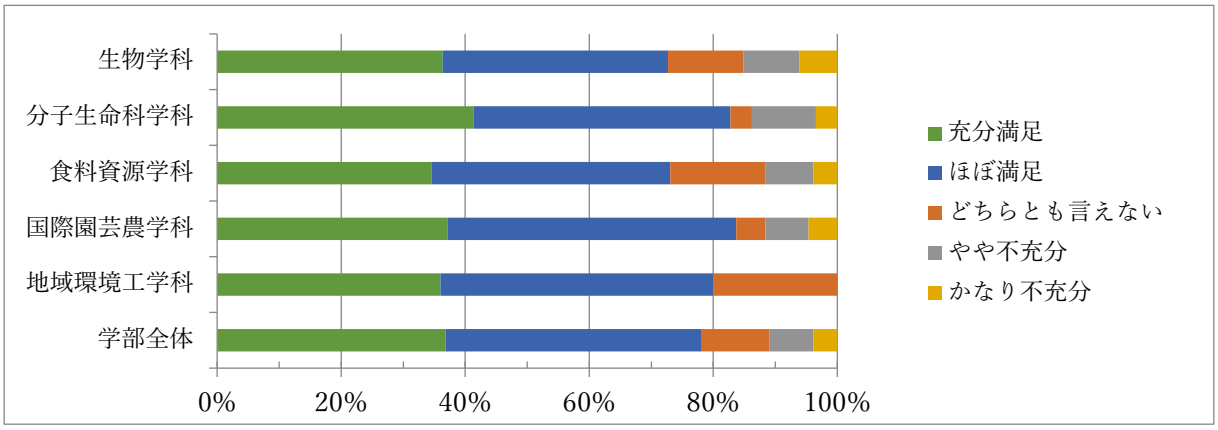
5. 学生自習室・学生控室（２階）



図Ⅰ－ 13(1) － 5. 本学部の施設に対する満足度（学生自習室、学生控室［2 階］）

平成 27 年度までは図書室の閲覧スペースと所蔵図書の満足度を別々に調査していたが、閲覧スペースの利用目的の主流が自習になってきたことと、所蔵スペースが学生控室に改修されたことを受け、平成 28 年度からは「学生自習室・学生控室」として、その満足度を一体的に調査することとしている。学部全体では「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は 65%であり、平成 30 年度 66%と比べて横ばい状態であった。但し、平成 26、27 年度の閲覧スペースおよび平成 29 年度の学生自習室・学生控室への満足度は、52～57%であること、また、今年度の満足度が不満足度である「やや不充分」と「かなり不充分」の合計（13%、平成 30 年度は 12%）を大きく上回っていることを考えると、「学生自習室・学生控室」の運用年数も積み重なり、学生の中で定着してきたと言える。

6. 卒業研究を行った研究室



図Ⅰ－ 13(1) － 6. 本学部の施設に対する満足度（卒業研究を行った研究室）

卒業研究を行った研究室について、「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は全ての学科で 7 割を超えており、学部全体では 78%である。また、平成 29 年度 70%、平成 30 年度 75%と年々上昇している。研究室に対する満足度が高い要因は必ずしも明らかではないが、環境（設備）というよりも、設問 14(1)卒業研究を行なったことに関する満足度が全ての学科で 8 割を超えているという事実とも無関係ではなく、熱心で誠意ある指導が学生の研究室での居心地をよくしているとも考察できる。実際、設問 13(2)では、「研究室が狭い」、「冷房設備を設置してほしい」、「学生控室がなく飲食が不自由」、「研究室の Wi-Fi 環境が悪い」等の要望や意見が多数記されており、教員は本項目の結果に甘んずることなく、研究室のスペース問題は仕方がないとしても、冷房環境や Wi-Fi 環境は可能な限り改善する努力をしても良いと思う。

(2) 各施設に対する要望がありましたら具体的に記述して下さい。

今年度は 94 件の要望や意見があったが、そのうち 53 件は冷暖房に関するものであった。経年的にみても、その割合は依然、増加しており、学生の切実な要望であることがうかがえる。他方、講義室への冷房設備の導入が着実に進められているので、設問 13.1「講義室」でコメントしたように改善している傾向にあると思われる。これからは研究室の冷房環境についても検討する必要があるのかもしれない。講義室の時計設置の要望が 4 件あった。他、建物内の Wi-Fi 環境の改善、トイレに関すること、廊下が暗いこと、研究室における学生の居室、講義室のイス等に対する要

望が挙げられていた。

【生物学科】
・コラボの研究室にエアコンを設置してほしい。
・学生控室のエアコンを早く修理してください。
・空調をもっとちゃんとしてほしい。
・冷暖房を完備してほしい。情報処理演習室、汚いイメージなので、デスクやキーボード、床をきれいにしてほしい。
・学生控室が狭いと思います。椅子や机の数の問題というよりは通路が狭く、一度座ると（他の人も利用していた場合）なかなか抜け出せませんでした。
・冷房の設置、喫煙室の設置。
・全ての講義室にエアコンを設置して、講義を十分に受けられる環境を整えてほしい。真夏の大きい講義室で人が多いと熱中症で倒れる人も出てくると思う。
・各研究室にエアコンがなく、快適に研究をできる環境にないため、エアコンを設置してほしい。
・学生にも講義室の空調などの説明をしてほしい。
・冷暖房が全体的に不十分。
・コラボの各部屋にクーラーをください。
・時計をつけてほしい。大教室だけでなく、よく使う教室にクーラーが欲しい。
・特になし。
・講義室の暖房・冷房を調整してほしい。
・特にありません。

【分子生命科学科】
・講義室は夏は暑かった。
・他教員の器具が置いてあるため、その所属の学生が来る。…のまではいいが、まるで「自分たちの部屋だ」と言わんばかりの使用態度のため、部屋を増やしてほしかった。
・なし。
・冷暖房の設備を充実してほしい。夏場など暑すぎて、試験に一切集中できないこともあった。
・なし。
・夏暑くて、冬寒い。
・全体的にスペースの確保。講義室について：冷暖・空調の整備・改修。
・特になし。
・もう少し清潔感を感じるような清掃をしてほしいです。
・二階学生実験室の水回りが汚すぎるので、掃除してほしい。
・教室が、夏は暑く、冬は寒い。
・二階学生自習室の、食事はともかく、飲むこともダメだったのは、少し不便に思った。
・自習室の暖房がなかなか修理されなかった。
・エアコンの設置。
・夏はエアコンがないと蒸し暑く、かなり辛い。

・なし。

【食料資源学科】
・空調設備を整えてほしかった。夏は暑すぎるし、冬は寒い。
・冷暖房をつけてほしい。昼の暖房を切るのをやめてほしい。
・夏場になると暑過ぎて、苦しくなる講義室・実験室があった。クーラーをつけてほしい。Wi-Fiがつながらない、つながりにくい。
・実験室の冷房が欲しかった。
・クーラーの設置。
・講義室が狭い。学生実験室が暑くて寒い。
・特にない。
・昼休みに暖房が切れて、大変寒いことがあった。
・特になし。
・学部棟全体が常に薄暗いので、もう少し明るくしてほしい。全講義室と学生実験室にエアコンをつけてほしい。出来れば大きい部屋から優先して設置してほしい。
・特になし。
・冷房が欲しいのと、午後五時に暖房が止まるが改善されたら、十分満足です。
・講義室、実験室が、夏死ぬほど暑い。
・特に大きい講義室の冷暖設備が整っていたら、より快適に講義を受けられるのではと感じていました。
・講義室の冷暖房の設置。
・学生控室をもう一個大きくしてほしいです。それかラウンジが欲しいです。
・特になし。
・農生大講義室は、夏冷房がないとしんどいです。
・時計を置いてほしいです。
・全ての研究室に、学生控室を割り振ってほしい。自分の机がなく、不便。
・喫煙者を隔離するためにも、喫煙所を作るべきだと思う。ない方がおかしい。
・空調設備が不十分過ぎる。
・冷房がないと夏は辛い。
・講義室のエアコンの温度調節機能が欲しい。
・時計が欲しい。
・冷暖房完備。学生控室をもう少しにおいのこもらないようにしてほしい。研究室を広くしてほしい。
・暖房が昼に消えないようにしてほしい。寒い。控室のうるさい声が自習室と控室をつなぐドアを開けるたび聞こえてきてうるさい。設計が悪い。
・基本的に空調に不備あり。
・冷房をつけてほしい。また設備（冷房）を整えるだけではなく、実際に使ってほしい。暑過ぎて、講義に集中できない。うちわであおぎながら講義を受けるのが、当たり前になっていたが、これは異常である。都内の学校は、100%冷房が入る。
・時計がない講義室が多いので、設置してほしい。

・講義室や実験・実習室、エアコンがついていない場所がより減ってほしい。
・夏の暑さ対策（特に四階の教室)、大型扇風機で階ごとに換気。・冬のトイレの水、手洗いする時に温水が出るようにしてほしい。

【国際園芸農学科】
・講義室の長いテーブルがもっと広いとよいです。
・学生自習室はエアコンが故障することが度々あった。卒業研究を行った研究室は、三年生から卒業研究に取り組めるように個人机を支給してほしい。
・農生の講義室が、他学部に比べ、古い。
・特になし。
・なし。
・なし。
・Wi-Fi の接続が悪い。時計がない(講義室)。
・夜も冷暖房が使えたら嬉しかったなと思った。
・自習室を広くしてほしい。エアコンの設置。
・講義室は特に夏、エアコン等の冷房設備がなかったり、ハチの巣の関係で窓が開けられなかったりする部屋については、熱中症の危険を感じました。そのため、特に夏場の空調設備がもう少し整っていると安心かと思います。
・扉に関して、外開きの扉を内開きにしてほしいです。
・講義室に時計を設置してほしい。
・冷暖房の充実。
・自習室の利用はほとんどないが、狭いと感じた。一教室くらい広いと使いたくなる。
・動かない椅子は苦手です。
・特になし。
・冷房設備の充実。
・充分勉強するには、差し支えない環境だった。
・なし。
・室温調整。
・室温調整の改善。
・なんか寒い。

【地域環境工学科】
・特にありません。
・エアコンない部屋は、厳しいと思います。
・廊下が暗い。
・特になし。
・蔵書室を知らなかった。二階控室、夏は暑く、冬は寒い。冷暖房整えてほしいです。
・特になし。
・暖房と冷房を各教室に配備してほしい。
・なし。

・四階に Wi-Fi をつけてください。

［卒業研究について］

設問 14. (1) 卒業研究を行ったことに満足していますか。

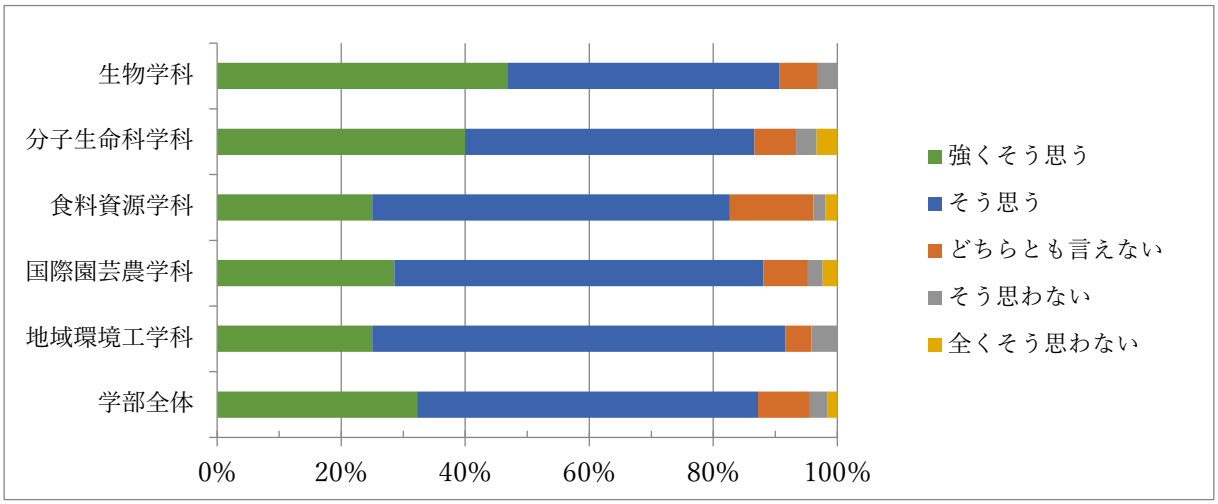


図 I－ 14. 卒業研究を行ったことに対する満足度

卒業研究を行ったことに対する満足度は、学部全体では「強くそう思う」と「そう思う」の合計が 87%であった。卒業研究を行ったことに対する満足度は、平成 26～30 年度で 84%→78%→85%→84%→90%と本年度の結果も含めてこの 6 年間高評価である。満足した理由(設問 14(2))を見ると、研究活動を通して自己の成長を実感したり、大きな達成感を得たりする学生が多いことがわかる。満足度は全ての学科で十分に高いが、「強くそう思う」割合は生物学科と分子生命科学科が他の学科より高くなっている。

一方で、回答した 180 件中 15 名が「どちらとも言えない」、5 名が「そう思わない」、3 名が「全くそう思わない」を選択した。その理由として、「実験がうまくいかず、確定データが出せなかった。」「まだやれる部分があった。」「自分のやる気の問題ではあるが、中途半端な結果に終わってしまったため。」などの時間的制約や研究成果に対する不満、「求められるレベルの高さについていけず挫折してしまった。学業や科学へのモチベーションを全て削られてしまい、科学を嫌いになりかけた。」「指導教員による「指導」がないから。(パワハラといってもいい)」「自分のやりたいと思う研究をやらせてくれない。指導教員から与えられる課題を研究することになるのなら、最初からその旨を伝えてほしい。私は目的がよくわからないまま、あべこべな研究をしたため、結局何がしたいのかわからないまま終わった。」など指導体制への不満があげられていた。これらの指摘の中には、教員と学生のコミュニケーション不足に起因する事例もあるように思われる。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない
5. 全くそう思わない

【生物学科】

1. 大変満足いく内容でまとめることができたため。

1. 研究を行うとはどういうことなのか、世の中はどのようにして発展してきたのか、その一部分ではあるが、その片鱗を学ぶことができた。
1. 共同研究でしか得られない経験を得ることができたと思うから。
1. 研究分野についての知識や人へわかりやすく伝えるための技術について、学ぶことができました。
1. とても充実していました。
1. 自身が触れてみたいと思った現象に対して、向き合い、取り組む機会が得られたため。
1. 自分の興味のある分野がわかった。自分自身について、多面的に知ることができた。
1. 必要な設備や道具・器具を使って、行えたため。
1. とても意義深い結果について研究を行えた。
1. 成功体験ができた。人として大きく成長できた気がする。
1. 自分がやりたかった研究をやらせてもらえたから。
2. 研究対象に自覚をもって向き合い、専門的な知識をたくわえるのは、充実していた。
2. PC の技術や思考力の向上につながったと感じるから。
2. 自分が生物学科の学生であることを強く実感することができた。しかし、望む結果を出し切ったわけではないので「2」。
2. 自分で目標や計画を立て、他人に発表できるような形に落としこむという一連の流れは、なかなか学べない経験であるため。
2. 自分の手でやり遂げたという経験が得られたから。
2. 自分の最も関心があった分野について、2 年間かけて、深く研究することができたため。
2. 充分なものができたとは思わないが、進路に少し関係する分野ができたから。
2. 得られた結果に疑問を持ち、そこに目的を設定し、方法を考えるプロセスを学べた。
2. 論理的思考がある程度身についた。
2. 調査・実験をして、相応の結果がでたから。
2. 満足しているが、まだできることが自分にあった気がする。
2. 研究だけでなく、その中で必要なスキルを習得することができた。（発表能力、文章を書く能力など）
2. 実験を行って、結果をまとめることよりも、プレゼンで人に伝えることの難しさを学んだから。
3. 希望の研究室でなかった。
3. 主体性を保って、研究に向かえなかったから。
4. 求められるレベルの高さについていけず挫折してしまった。学業や科学へのモチベーションを全て削られてしまい、科学を嫌いになりかけた。

【分子生命科学科】
1. プレゼンテーション力や行動力を養うことができたから。
1. 助言をいただきながらも自分の研究テーマに、自由に取り組めたため。
1. 充実感を得られたため。
1. 自分の興味ある研究をできたから。
1. 行いたいことができた。
1. 全体を通して、物事の考え方や情報処理能力等が身についてきたように感じるため。

1. 一つのことを追求していく体験は貴重だったから。
1. それによって、技術・知識を身に付けて卒業できるから。
1. 自分の興味のあることを深められた。
1. そのために大学に来たから。
2. 自立した実験に比重を置いていて、自分の力を身に付けるには、良い環境だった。
2. ゼミに配属されてからの様々な状況や事柄における努力や苦労の成果を卒業研究という形で区切ることができるから。
2. やりきることの大切を感じられた。
2. 結果を得られることができたから。
2. 自己の興味を探求できるプロジェクトだった。
2. 人生の中でよい経験になるなと思えたから。
2. 忍耐力がついた。継続力がついた。
2. 自身の行った研究を対外的に説明する必要があるので、より研究内容への理解を深めることができた。
2. 一つの目的に向かって、約一年半取り組めたのは良かったと思うし、指導教員の先生もとてもサポートしてくれたので良かった。もう少し何事も考えて、自分の意見をはっきりさせてから、結果の報告をしたりする習慣をしっかりつければよかったと少し後悔しているため。
2. 研究室でしかできないことを行い、学びを得られたため。
2. 自分の興味のある分野で計画的かつ自主的に進められて、良かったと思います。先生や先輩など学ぶことがたくさんあって、新しい経験として、研究以外の面でも役立てることがたくさん得られたと思うので！
2. まとめる力を養う、良い機会になった。
4. 得るものは多かったが、自分自身の取り組みに関しては後悔があった。

【食料資源学科】
1. ためになった。
1. 深く学ぶきっかけとなった。
1. 卒業研究を行うことで、実験を自ら組み立て考察し、次の実験を計画するという経験ができたことに加え、それ以前の問題として、人にわかりやすく、正確に説明することの重要さやプレゼンテーション能力の必要性に卒業する前に気付くことができた。
1. 自分で実験について深く考え、成功や失敗を繰り返せるのが良かった。
1. 初めてのことで不安や苦労もありましたが、実験を地道に続ける粘り強さ、根気強さの向上につながったと感じるからです。
1. 引継ぎがなかったため､0 から研究を始めたため苦労したが､その分達成感は大きかったため。
1. たくさん学べた。実際の実験方法も、研究の進め方の考え方も教えてもらえた。
1. 卒業研究を行わなければ、知ることのなかった知識が身についた。
1. 自分がやりたい分野について、研究を行うことができた。
1. とても勉強になった。
2. 卒業研究の作業を進める中で、自身でまとめ、考察することを経験できたから。
2. 自分の興味・関心のある分野で、思う存分研究を行うことができた。

2. やりたいことができたから。
2. 自分のできる範囲では、やり切ったと思う。
2. 生理だけでなく、発生・遺伝など、様々な分野に携わることができ、科学に対する知見や興味が一層強まったから。
2. 一回でも真面目に真摯に取り組むことができて、良かったです。
2. 大学に入らなければ、出来ないようなことばかりだったので、満足している。
2. 色々な体験ができ、今後の人生においても役立つことを学ぶことができた。
2. プレゼンテーションのスキルが向上したため。
2. 専門的知識が身についた。論理的に考える力が養われた。
2. 自分の興味のあることをさらに深く考えることができたため。
2. 学んできた分野に対して、より興味を持って、調査するきっかけとなったから。
2. もっとできたはずと少し悔いています。先生のおかげでここまでこれたので、これが自分の力でたどり着けるように、勉強していきたいです。
2. 学生実験より突き詰めて実験を行うことができたが、難易度の点から実験技術を身に付けることができなかったものもあり、少し不十分な研究になったように感じる。
2. 大学四年間の集大成といえるから。
2. 興味のある分野で、研究を行うことができたため。
2. 忍耐力を鍛えることができた。計画して進行することを学べた。
2. 自分の時間と能力に見合ったテーマで、取り組めたと思うため。
2. やりたい分野のことをやれたから。
2. 上の人に教わるという機会があったことに満足している。
2. 関心のあることについて、研究を行えたから。
2. 様々なことが学べた。
2. 未知の分野について研究して、最後の方までよくわからない状態が続いていたが、卒論発表を詰めている時にちょっとだけわかってきて、面白いと思ったから。
2. 考える力が身についた。
3. 実験がうまくいかず、確定データが出せなかった。
3. まだ卒論が終わっていないから。
3. まだやれる部分があった。
3. 忙しすぎる。
3. 就職先でこの分野の知識を使わない。
3. 先生はとても優しい方で、指導はとても良かった。ただ、研究内容が不満だった。この研究をして、世の中の役に立つとは、全く思えなかったため。
3. 体調が悪く、十分に向き合えなかったから。
4. 自分のやる気の問題ではあるが、中途半端な結果に終わってしまったため。
5. 指導教員による「指導」がないから。（パワハラといってもいい）

【国際園芸農学科】
1. 自分の興味持ったテーマを学べ、成し遂げた経験を得られたから。
1. 色々と良い経験ができた、スキルがこの先も使えそう。

1. 達成感があったし、自分の学びたいことが学べたから。
1. 専門分野の知識が身についたと思うので。
1. 先生が親身になって、やりたいことをやらせてくださったから。
1. 果樹学、特にりんごのことについての研究は、これからも青森で働いていく時に、必ず役立つ知識だから。
1. 自分のやりたい研究に取組むことができたため。
1. 1つの物事に責任を持って、取り組む重要さを学んだ。
1. 自分のやりたい研究を行えたから。
1. 学生生活の集大成として、しっかり取り組めた。自分が興味を持てるテーマと社会をすり合わせ、納得のいく結論が出た。協力していただいた方々にも納得してもらえるように精一杯考えつくし、執筆でき、悔いはなく、満足している。
1. この研究がしたくて、大学に来たから。
2. 大学生活で学んできたことを生かすことができ、最後に自分自身の研究ができたから。
2. 志望した研究室で取り組めたので。
2. 頑張った。
2. 一つのことをやり遂げる力がついたと思うから。
2. やりたいことができたから。
2. 研究というものを仕事とするほど好きなものではない。なので、こういった機会じゃないと一生取り組む経験はないと思うので、満足。
2. 専門的知識の理解が深くなるのに役立ち、満足した。
2. 四年間の総括として、卒業研究から学ぶことも多いため。
2. 達成感があるから。
2. 新たな知見を生み出すことの大変さを身をもって体験できたから。学部生の卒業研究を一つやり遂げるだけでも、こんなに大変だと感じるのだから、もっともっと高度な研究を情熱を絶やすことなく、日々続けていらっしゃる大学の先生方や院生などの研究者の方は、本当にすごい方々なのだと思った。大学での研究の一端に触れさせていただけたことは、貴重な経験だったと思う。
2. 自らでアウトプットする能力を身に付け、自分で考えながら行動する力を養うことができたから。
2. 今後につながる研究ができたと思う。
2. 研究を進める上で自主的に物事を考えたり、調べたりすることで、自身の主体性を高めることができたため。
2. 一年間、一つのテーマについて学ぶことで、様々な視点から勉強したと思う。
2. 卒業へのステップとしてと課題という認識で、頑張れるから。
2. 総合的な学問であるので。
2. 卒業に足る単位を得られたから。
2. 大変だったけれど、やりがいを感じていたから。
2. 何とか形にできたから。
2. 大学生活で培った知識等を活かすことができたため。
2. 一定の成果を残すことができたと思う。

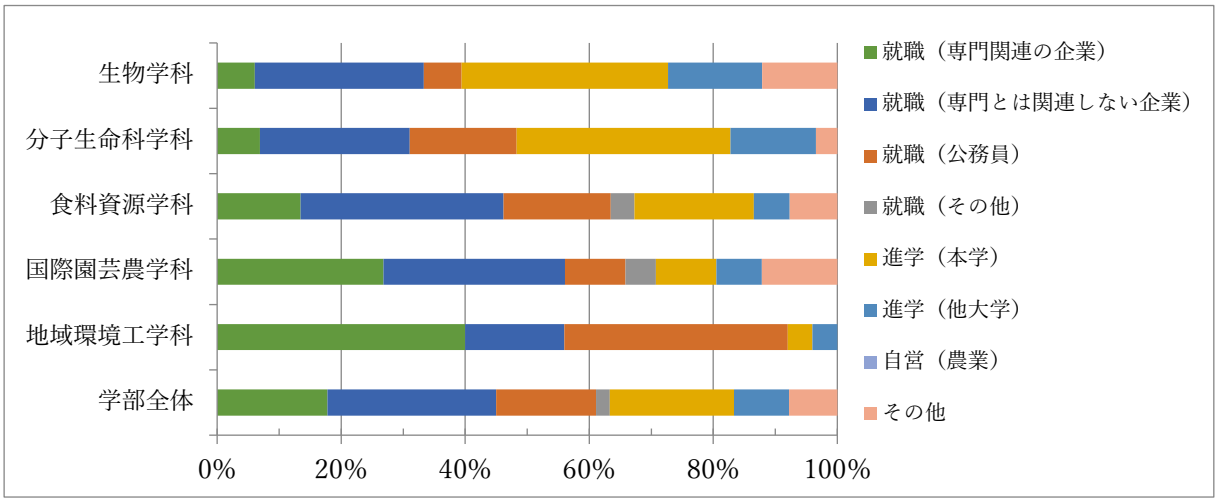
3. やりたい研究ができなかったから。
3. 質問の意図がよくわからない。
3. 結果が十分にえられなかった。
4. 辛かったため
5. 自分のやりたいと思う研究をやらせてくれない。指導教員から与えられる課題を研究することになるのなら、最初からその旨を伝えてほしい。私は目的がよくわからないまま、あべこべな研究をしたため、結局何がしたいのかわからないまま終わった。

【地域環境工学科】

1. 目的とその結果から、何が言えるのかについて、論述する力を身につけるよい経験となったため。
1. 本当にいろいろな人にお世話になりながら行った。自分の思い入れも相応にあるので、満足している。
1. 楽しかった。自分で考える力がついた。
1. 自ら探求し、答えを出す過程は、今後役に立つので、一年間頑張ってよかったです。
1. 学生としての務めを達成できたと感じたい。社会人に必要なものを学べた気がする。
1. 研究内容が濃く、やりがいを感じたため。
1. 一つ成し遂げた気になれる。
1. 色々と勉強になったから。
1. 大学生らしさを感じた。
1. 長期に渡って、一つの事柄について研究を行ったことは、自分にとって、達成感や自信につながったから。
2. 深く知識を学ぶことができ、社会に出る上での力を身に付けることが、卒業研究を通して経験することができたから。
2. 学生生活でしか経験できないことをさせてもらった。
2. 主体的に研究に取り組んだので、良い経験になったため。
2. スライド作成のコツ、習得できたから。
2. 自らで研究のための方法や調査依頼等を考える大変さを知り、教授とのやり取りで正しい進め方を学んでいけたと思うから。
2. 専門知識が広まり、発表の経験など得られたため。
2. 自分の望んだものではなかったが、研究内容がとても興味深かったため。
2. 基本的な知識を改めて理解できた。
2. うまく取り組めた。
2. 興味ある分野の理解を深めることができた。
2. 普段得られないような経験ができた。
2. 今後の社会人の生活にとって、必要となることを体感できたと感じる。
2. 自分の就職する分野の内容なので、知識を深めることができた。
2. 学べたことが多かった。
3. 結果が十分とは言えないから。
4. もう少しうまくできたのではないか。

［進路支援について］

設問 15. (1) あなたの卒業後の進路は次のどれですか。

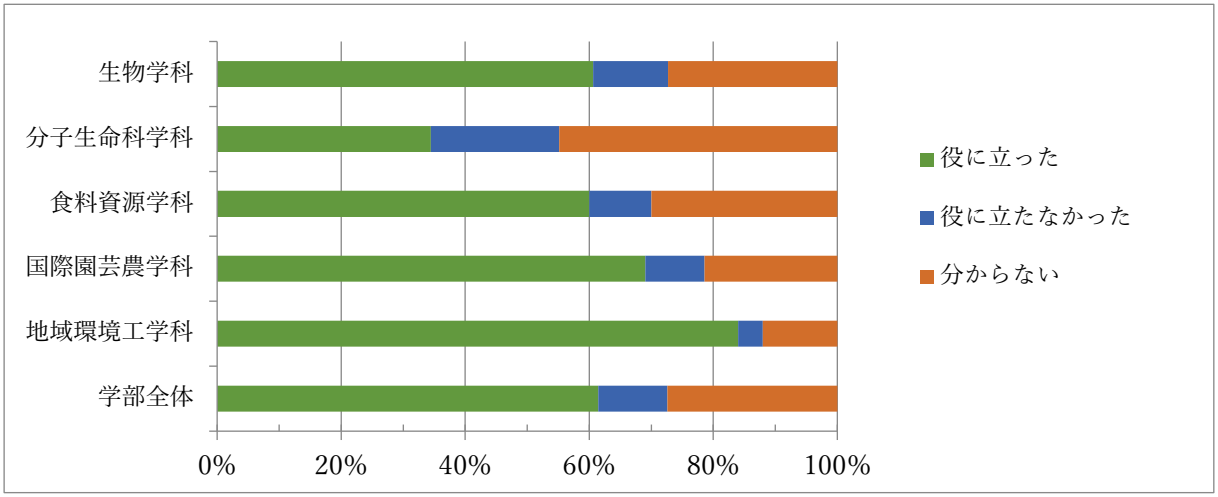


図Ｉ－ 15(1)．卒業後の進路

学部全体では就職した者の割合は 63%で平成 26～30 年度（61～73%）と変わらない傾向であった。進学（本学と他大学）した者の割合は 29%であり、平成 30 年度（26%）より 3%増加した。この値は、平成 26～27 年度（21～22%）よりは増加しているが、平成 25 年度（36%）より低い値である。「専門性を高めてさらに有利な就職を目指すことができる」を PR するなどして、進学者数を高める必要がある。ちなみに本年度の他大学への進学者は 16 名であった（平成 29 年度 10 名、平成 30 年度 6 名）。

学科単位でみると、就職した者の割合が最も高いのは地域環境工学科の 96%、次いで国際園芸農学科の 71%、食料資源学科の 67%であった。一方、進学（本学と他大学）した者の割合が高いのは生物学科と分子生命科学科が同率で 48%だった。ちなみに生物学科は平成 29 年度が 34%、平成 30 年度が 59%であった。また、分子生命科学科も平成 29 年度が 45%、平成 30 年度が 21%というように、進学率は年度によって大きく異なり傾向が読み取れないことがわかる。

(2) 本学部のカリキュラムで学んだことは、進路の決定にどのように影響しましたか。

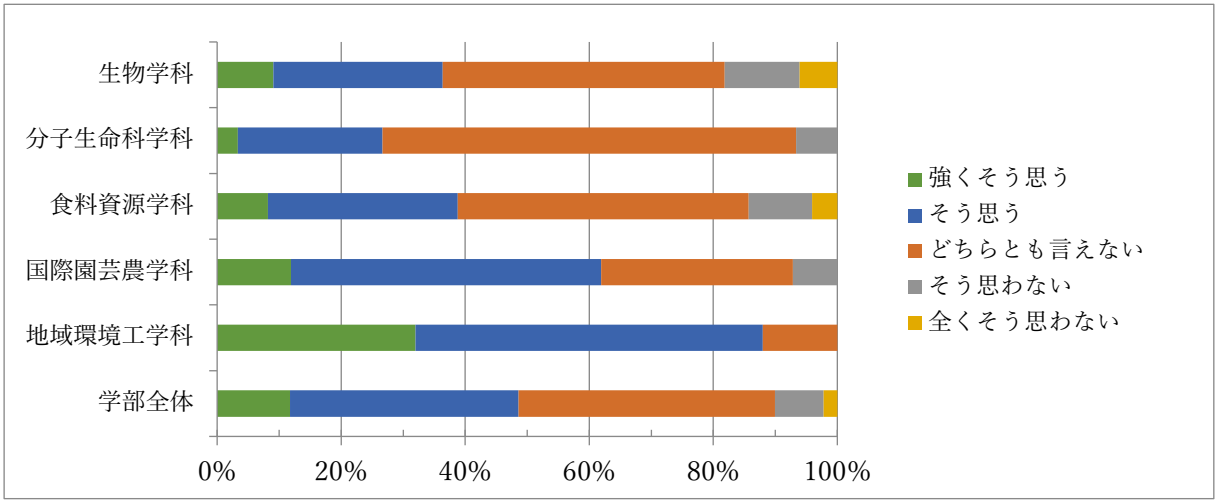


図Ｉ－ 15(2)．カリキュラムで学んだことはどのように進路に影響したか

カリキュラムで学んだことはどのように進路に影響したかについて、学部全体では「役に立った」は 61%、「役に立たなかった」は 11%であった。「役に立った」は平成 26～28 年度には 50～59%、平成 29 年度は 65%、平成 30 年度は 55%だった。

学科単位でみると、「役に立った」割合が最も高いのは地域環境工学科の 84%、次いで国際園芸農学科の 69%であった。このことは、両学科では専門に関連する企業に就職する者の割合が高いことと関係していると思われる。両学科に続くのが食料資源学科と生物学科の 60%だった。ちなみに生物学科は平成 30 年度 35%であった。分子生命科学科では「役に立った」割合が全学科中で最も低く、「役に立たなかった」の割合が全学科中で最も高かった。

(3) 本学および本学部の進路支援に対する取り組みは十分だったと思いますか。



図Ⅰ－ 15(3)．本学部の進路支援の取り組みは十分か

本学、本学部の進路支援の取り組みは十分だったかに対して、学部全体では「強くそう思う」と「そう思う」の合計は 49%、一方「そう思わない」と「全くそう思わない」の合計は 10%で、肯定的評価が否定的評価を大きく上回った。肯定的評価の割合は平成 25 年度から 28 年度にかけて 32%から 4 年連続で増加していたが（平成 28 年度は 49%）、平成 29 年度（43%）、平成 30 年度（44%）は減少に転じていた。本年度は平成 28 年度と同じレベルに回復した。一方、否定的評価の割合（10%）は、平成 30 年度（14%）より低下した。また設問 12(3)から、進路支援について指導教員との面談と就職支援センターを挙げる学生が多い。教員の個々の取り組みとともに同センターの取り組みが経年的に評価されていると思われる。但し、設問 17(1)「本学部の教育活動の中で最も早急に改善すべきと思われる点」では就職支援センターで農業系や食品系に詳しいスタッフが不在であることを述べている学生もいたことは気に留めておく必要がある。

学科単位で見ると、「強くそう思う」と「そう思う」の合計は、最も低い分子生命科学科では 27%であるのに対し、最も高い地域環境工学科では 88%に達しており、学科間で評価の差が著しい。また地域環境工学科では昨年度と同様に否定的評価がなかった。設問 12(3)より、地域環境工学科では進路についてクラス担任や指導教員に相談する割合が他学科より多い。地域環境工学科の高い評価には、就職を志向する学生の多さに対応して、教員のきめ細かな指導体制がうまく作用していることが反映していると思われる。

[本学部の教育のあり方について]

設問 16. (1) あなたが本学部を卒業するに当たり、大学卒業者に相応の知識や学力を身に付けたと感じていますか（大学卒業者に相応の知識・学力は自分のイメージしたもので結構です）。

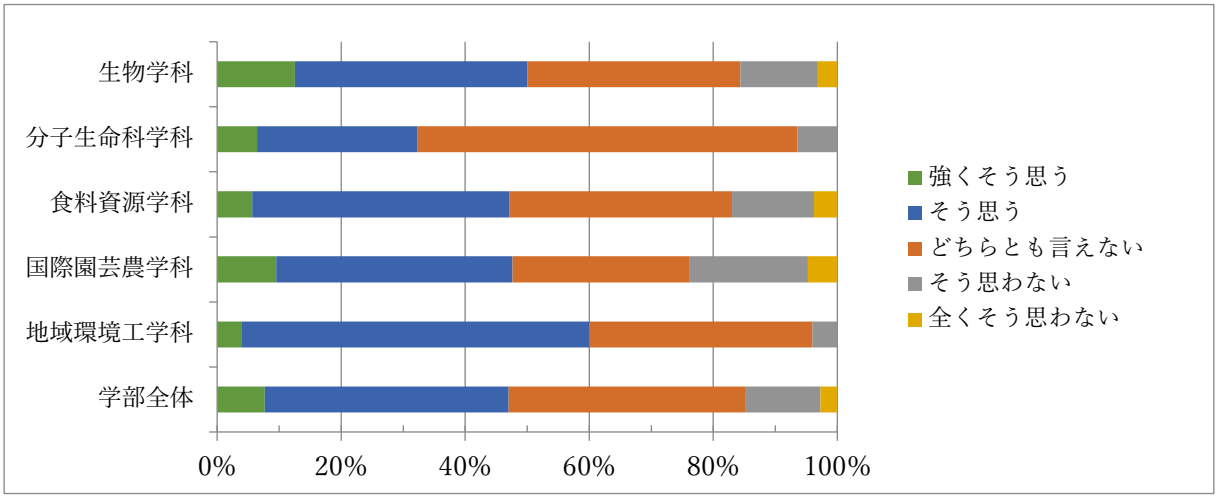


図 I－ 16. 大学卒業者としての知識や学力を身に付けたか

大学卒業者としての知識や学力を身に着けたかという設問に、平成 28 年度から「大学卒業者に相応の知識・学力は自分のイメージしたもので結構です」という但し書きを付け加えている。その影響かどうかは明らかでないが、平成 28 年度には「強くそう思う」と「そう思う」の割合が 52%まで増加し、平成 29 年度と平成 30 年度でさらに 56%まで増加していたが、本年度は 47%と大幅に減少した。「そう思わない」と「全くそう思わない」の合計（15%）は過去 5 年間と同程度であった。つまり、本年度「強くそう思う」と「そう思う」の割合が低下した原因は「どちらとも言えない」と回答した学生が多かったためと言える。中立的評価、否定的評価の理由を設問 16(2)から探ると、勉強不足に対する反省、学んだ知識を忘れてしまった反省、修得した知識が社会で役立たないことへの不安、一般常識が身についていない不安などが挙げられている。

学科毎で見ると、生物学科、食料資源学科、国際園芸農学科、地域環境工学科の 4 学科では大きな差はなかった。但し、平成 30 年度、地域環境工学科において「強くそう思う」と「そう思う」の割合が平成 29 年度と同様に非常に高く 81%に達していたにもかかわらず、本年度は 60%と 21%の低下が見られた。分子生命科学科では「強くそう思う」と「そう思う」の割合が約 30%と最も低かった。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない
5. 全くそう思わない

【生物学科】

1. 研究室の指導教員の質が高かったため。社会に出るための知識をも身につけさせていただいたから。
1. 他大院のための勉強、卒研内容を自ら決める状況で、たくさん本、論文を読んだから。
2. 理学的な考えや批判する姿勢等は、入学時より鋭くなったと思う。
2. 手を抜かずに、最後までやり切れたから。

2. 大学でしか学べないことを学べたと思うから。
2. それだけの勉学を積ませてもらえた。
2. 教養的な知識が乏しいため。
2. 特に自分が考えたプロセスを実行し、そこから新たな物を生み出す力がついたと思うから。
2. ものの見方が生物学からの視点になったから。
2. 研究室で先生や先輩から学ぶことが多く、自分も大きく成長できたと思うから。
2. 勉学や技術については、講義や研究室で丁寧に教えていただいたため。
2. まだ足りていないが、学部生としては満足できるレベルは達成できたと思っている。
3. 周りの生徒や他研究室の学生と比べると自らの知識はまだまだ足りないと思い知らされる。しかし、昔の自分よりは確実に学力が身についてると感じる。
3. 専門的なものは身についてきたが、一般常識は欠けている（大学に求めるものではないが)。
3. 後半は座学がほとんどなく、知識が偏っていたと感じるから。
3. 講義などを通して、教養から専門分野までの知識は増えたが、大学内の講義では、身につかないようなものも多くあると思っているため。
3. 身に付けた部分もあれば、できていない部分もあると思ったから。
3. 自分の取り組みが不十分だったこともあり、身についた知識とそうでない知識がある。
3. まだまだ考察に必要な知識が得られていない。
3. 専門分野に関する知識・学力は相応にあると思うが、一般社会で必要な教養は身についたかどうか、わからないため。
4. 学んだことをうまく口で表すことができないから。
4. 主体的に学ぶことの重要性に気付いた時が遅すぎた。今後、より積極的に学んでいきたい。
4. 本来購入した本をより読み込むべきであるとわかっているが、それをしなかったため、知識不足で理解できないことが多く感じられたため。
4. 学ぶというよりテストをクリアして、単位を取得しようということがほとんどだから。
5. 充分な研究活動を行えず、力をつけられたとは思えなかったから。

【分子生命科学科】
1. 一般的な人よりも非常に深い知識を得られた。
2. そうだと思ったから。
2. 四年間を自分の好きなように学習に使えたため。専門である生物学に関しては、より深く学ぶことができ、それ以外にも英語やPCスキル（プログラミングのようなものから、PCそのものに関しても）など、様々なことが勉強できた。
2. 幅広く知識を得られた。
2. 卒業研究を頑張れたから。
2. まだ成長途中と感じる部分も多くあるが、理系としての知識や考え方、応用力などが身に付けられてきているように感じる。
2. 公務員の勉強も含めて、たくさん勉強をしたから。経験もたくさん積んだから。
3. 未だにわからないことが多く、先輩や先生に頼ることが多いため。
3. 自分なりに努力や苦労はしたと思うが、世間の人から求められる知識が身についたかは分からないから。

3. 学んだことを全て覚えている自信がないため。
3. 「大学卒業者に相応の知識」というのは、進む場所によって、求められる質が異なるため。
3. 怠けていた。
3. 就職する業界が、大学の勉強とあまり関連がなく、わからないから。
3. 専門的な知識が必要な職業に就くことを考えた場合、自身には足りていないと思うから。
3. その場しのぎの勉強が多かったせいか、授業の内容は大半忘れている。
3. 本を読んだり調べれば、それなりに理解できるようになったと思うが、知識が相応に定着しているかは、少し不安があるため。
3. 周囲の人を見ているとまだまだ学べたことがあったんじゃないかと思うため。
3. 学んでいくうちに自分の力不足や勉強不足な面を実感しているので。
3. 実感がないため。
3. 学んだけど、身についている気がしない。社会対応という意味では勉強になった。
4. 履修したはいいが、定着・説明したかと問われると「NO」だと思うから。

【食料資源学科】
1. 講義や研究室でたくさんのことを学べた。
1. 多くの講義や実験を通じて、大学相応の知識が身についたと感じるため。
1. 授業の内容はある程度理解できたから。
1. 食料の流通構造に関しては、広く浅く知識がついた。ゼミなどにおいては、その事実の問題に対して、改善策を考える経験ができた。知識・学力はもちろんであるが、自分で情報を収集し、選別し、論理を組み立て、一つの正解がない問題を解決するための基礎的な力はついたと考えている。
1. 幅広く知識を広げられたと思う。
2. 大学でしか学べないことができた。
2. 専門外の人にも説明できたため。
2. 卒業研究を通じて、様々なことを学ぶことができた。
2. 二年間の研究で専門分野について、詳しくなれたので。
2. 多くの知識に触れ、自分で考えることができたと思うため。
2. この学部でなければ、知り得なかった知識を、様々な講義・実習・実験を通して、蓄えることができたと思うからです。
2. 専門分野の知識はある程度身についていると感じるから。ただ、それについて深く語り合えるほどの知識はない。
2. 専門の知識をある程度話せる。
2. 専門的なことをいつの間にか少しわかるようになっていたため。
2. 四年間で身に付けるべき知識が身についたと思う。
2. 専門知識を人並み以上は得たし、専門的考え方ができるようになったから。
2. 何となく。
2. 正直、知識はあまり身に付いていないのだが、人間関係について学び、人として成長できたと感じている。これを言うのは失礼であるが、農学部での学びより、学生生活としての学びのほうが、今後を考えると大切であると感じている。

2. 様々なことが学べた。
2. 幅広い分野の知識が身についた。
2. 研究室でのゼミ活動に力を尽くして、知識・学力を身に付ける努力を備えたと思う。
2. 社会人になるための知識や対応、取り組み方などを身に付けられたから。
2. 高校までの教育課程では、学ばない専門的な知識を身に付けることができたから。
2. 落単はほとんどなく、無事四年間で、必要単位を取れたから。
3. 一般的な教養が不十分だと感じる。
3. 偏った知識のみしか学ぶことができなかった。
3. もっと専門的知識を学んでおくべきだった。
3. どちらともいえないので。
3. 社会に出て、発揮できて、初めてその知識が役に立ったと言えるから。
3. 大学生に相応の専門的知識を身に付けることができたと思うが、幅広く知識を応用する方法を学び足りなかったように感じる。
3. 基準がわからない。
3. 基準がわからない。
3. 知識に偏りがあるとは感じているから。
3. 自分ではよくわからない。
3. 専攻分野については相応だったと思うが、違う分野はそうではない気がするから。
3. 理解が及ばないことが多くあった。
3. 体調不良のため。
3. まだ社会に出ていないから。
3. 社会に出て、必要な能力として「学ぶ姿勢」があると私は思います。わからないことは調べる、聞くなどして、そのままにしないことが大切だと。当たり前のことですが、大学でそれはある程度身についたと思います。
3. 偏りがあり、総合的な常識がない。
3. これまで受講してきた講義の内容を十分に身に付けることができなかったため。
3. 知識に偏りがあるため。
4. テストを乗り切るための短期記憶に頼ってしまった科目がある。落単が複数ある。
4. 知識や学力については、身についていないと思う。もっと真剣に勉強していればと後悔している。
4. 大学の講義で得た知識の大部分を忘れてしまっているから。
4. 主体的に思考・実行できるようになりつつある反面、自らの能力が分野が求めるレベルに追いついていないこと。また、自分の立場・立ち位置を超えた行動を考えなしに発してしまうことが多々あるから。
4. 理系の農学部を卒業するにあたって、身に付けるべき農学の知識も足りないと思うが、何よりも論理的な思考力や情報処理能力が身に付けられていないと思う。
4. 学ぶ機会を与えられたのに、何もモノにできていない気がしてならない。
4. 学習内容に興味を持てなかったため。
5. 特になし。
5. マナー講座や一般常識の授業を増やしてほしい。手紙やメールの書き方など。

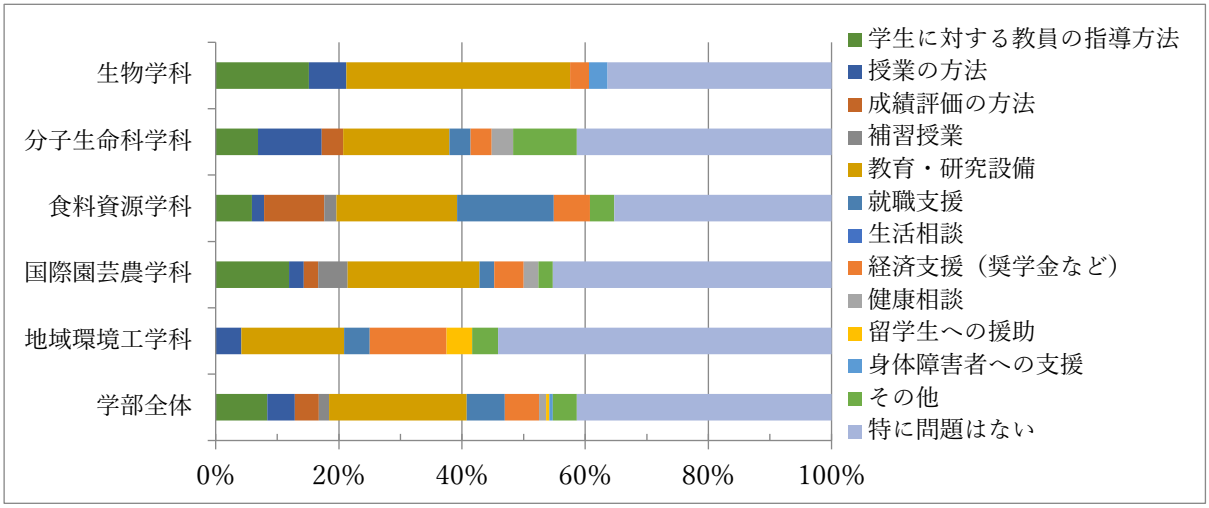
【国際園芸農学科】

1. 高校までと違い、専門的なことをよい環境の中で学べたから。
1. 指導教員の先生からたくさんご指導いただきました。
2. 農業の知識が以前よりもついたと思うから。
2. 専門知識が身についた。
2. それなりに農業に関する知識を得られたと思ったから。
2. エクセル使えるようになった。
2. 卒業研究や授業を通して、学びを深めることができたから。
2. 自分の専攻については、学んできてない人よりは詳しくなり、知識や学力があると感じているため。
2. 高校の授業では、学べない専門的なことについて深く知れたから。
2. 研究室活動を通して、身に付けられた力があると思ったため。
2. 社会で生きてく上で、知識・学力ともに大学を卒業する人間として、恥ずかしくないレベルだと思うから。
2. 大学入学前と比べると、専門知識や英語の能力が身についたように感じるため。
3. 勉強不足な面も感じているので。
3. 至らない点がたくさんあるから。
3. きちんと単位を取得できているため。ある程度身についているとは思うが、四年間すべてとなると忘れている内容もあるため。
3. 他の大卒者がどの程度知識や学力を身に付けているかわからないため、自分のイメージも持つことができない。
3. 授業を受けているだけでは、知識や学力は身についても、解決力や実行力、行動力の向上にはつながらないと考えるから。
3. 入学前にイメージしていた学力には及んでいないが、大学生活を通じての経験は貴重だと思う。
3. 覚えが悪いので、勉強した内容を忘れてしまうから。
3. どの程度かわからないが、平均程度の水準は達したと考えます。
4. 頑張りが足りなかった。
4. わかった気になってるだけで、基本的な知識から欠如していると感じたから。
4. 大学卒業者と話をしていても、わからないことが多々あるから。
4. 知識について：正直、講義で学んだことの一つ一つの知識の多くは忘れているから。知識は使わなければ、どんどん忘れていくものなのだと改めて感じた。しかし、それで問題ないということも分かった。大学では知識を覚えることより、必要な知識がどこにあるか、そしてその知識をどう使うかを知っておくことが大切だと教えていただいた。学力について：学ぶ意欲や課題の発見及び解決をする能力を学力とした時、そのような能力は、入学時に比べ成長したと感じないから。
4. もっと専門的な知識を身に付けてから、卒業したほうがいいと思う。
4. 卒業研究以外のことは、身についていないと感じたため。
5. バカだから。

【地域環境工学科】

1. 就職の面接で生かせたから。
2. 農業土木の分野に進むため。
2. 公務員試験を合格できたため。
2. 考え方という部分で、実験や卒業論文を行うにあたって、力が身についたと感じたため。また、研究室配属後の教員との関係など、社会に出る前の人間関係の面も意識されたため。
2. 専門的なものは身についたが、もっと語学とか身に付けたかった。
2. 専門技術の習得の他、社会での振る舞いや社会人との接し方を学べたと思うから。
2. もっと砂防を学びたかった。
2. 自分があまり優れていない(学力的に）が、他人にとっては、十分であったと感じている（環境や知識)。
2. 自分の中では、特にパソコンの知識が高校の頃と比べて、増えたと感じたから。
2. 理想的になれた。
2. 授業はしっかり受けよう。
2. 専門知識を勉強し、就職につなげることができたから。
2. 学生生活の中で、様々なものを身に付けることができたから。
3. 比較対象があまりないため。
3. もっと読書しておきたかった。
3. 身に付けられた部分と身に付けられなかった部分があったから。
3. 自分の得たであろう力に自信がない。
3. 研究内容が少し学科の教育と通じないところがあり、この学科の知識を研究期間に養えていないため。
3. 本来であれば大学院まで行き、より専門的な技術を習得するべきだと感じる。
3. 実際に働いてから、その知識が使えるかまだ分からないから。
4. テストは一夜漬けだったため、ほとんどの知識を忘れてしまったと思うから。

設問 17. (1) 本学部の教育活動の中で最も早急に改善すべきと思われる点を、次の項目の中から一つを選んで下さい。



図Ｉ－ 17. 本学部の教育活動の中で最も早急に改善すべき点

学部全体でみると、選択肢の中では「特に問題は無い」が 41%で最多であった。平成 26～30 年度も「特に問題はない」が最多で 33～41%を占めている。早急に改善すべき点として選択された上位 5 項目は、学部全体でみると「教育・研究設備」(22%%、平成 30 年度 16%)、「学生に対する教員の指導方法」(8%、平成 30 年度 12%)、「就職支援」(6%、平成 30 年度 10%)、「経済支援（奨学金など)」(6%、平成 30 年度 7%）であった。昨年度「成績評価の方法」が上位 5 項目に含まれていたが、それを除けば過去 5 年間をさかのぼっても、挙げられる上位 5 項目についてはそれほど変化がない。特に上位 2 項目はずっと変わらず挙げられている改善点である。

学科別に見ると、「成績評価の方法」は食料資源学科で 10%（5 人)、分子生命科学科 3%（1 人)、国際園芸農学科 2%（1 人）あった。具体的には、「テストの返却がないと成績がわかりづらい。」、「「期末試験のみ（出席回数も無関係)」だと、プレッシャーが大きいので、何かしらの追加（小テストや出欠など）が欲しい。」などがあった。

生物学科では「学生に対する教員の指導方法」の割合（15%）が他学科よりも高い。それに対して、分子生命科学科と食料資源学科では、「学生に対する教員の指導方法」の割合が低く、6～7%である。地域環境工学科ではゼロ回答であった。ちなみに分子生命科学科は平成 30 年度、「学生に対する教員の指導方法」の割合が 23%と最も高かったので、決定的な改善がなされたのかもしれない。記述欄では厳しい意見が見られるので、注意を要する。特に、研究室による教育の質の差、教員による学生のえこひいき、指導の放棄と受け止められるような発言や態度を指摘する声が目立つので、引き続き改善の努力が必要である。

平成 28 年度は「学生に対する教員の指導方法」や「授業方法」に対する要望や不満の中に、自分自身が指導教員のアカデミックハラスメントを受けたと訴えるものが 2 件、周囲にアカデミックハラスメントがあることを訴えるものが 2 件含まれていた。平成 30 年度のアンケート結果では、直接的に訴えているものが少なくとも 1 件あった。本年度のアンケート結果でも、直接的に訴えているセクシャルハラスメントの訴えが 1 件、アカデミックハラスメントの訴えが 1 件あった。「学生に対する教員の指導方法」に関して改善を求める表現は十分に強いものであり、本年度のアンケートでも挙げられた学生の訴えについては真摯に受け止めなければならないと思われる。また、出席の取り扱い、試験の形態や評価基準、成績開示の方法などへの要望が見られたが、一方で現在の教育カリキュラムに満足している学生も多いことにも留意する必要がある。

「教育・研究設備」に関する具体的な要望としては、冷暖房設備、研究費用や研究室の設備やスペース、研究期間の短さに対するものがあった。特に、体調の不調を訴えるほどに空調設備に対する要望が強まっていることには、了解していなければならない。

「経済支援（奨学金など)」については、経済的に厳しい状況にある訴えが数件あり、奨学金関連や授業料免除に関する要望が寄せられた。

「就職支援」に対しては、本学部における就職支援情報の少なさ・不十分さに対する要望が挙げられていた。

(2) 上記で選択した項目に関する要望を具体的に記入して下さい。

1. 学生に対する教員の指導方法　2. 授業の方法　3. 成績評価の方法　4. 補習授業
5. 教育・研究設備　6. 就職支援　7. 生活相談　8. 経済支援（奨学金など）
9. 健康相談　10. 留学生への援助　11. 身体障害者への支援　12. その他（　　）
13. 特に問題は無い

【生物学科】

1. 教員の指導は二極化していると感じられた。
1. 水産増殖学の授業で、学生に対する配慮が微塵も感じられなかった。
1. 一部の先生は、実験や授業で間違ったことを教えていた。
1. 研究室で求められる自主性・責任感、研究活動へのモチベーションなど様々なものが高く要求され、大学卒業者に求められるはるかに高いものであったと感じた。その割にサポートが非常に手薄で、充分な指導や研究活動を行えなかったと感じる。
2. このままでは大学の講義が単なる高校授業の延長という印象。結果、研究室配属の際に 1～2 年で何の力もついていない多くの学生が苦しみ、そのような学生を受け入れた教員も苦しむ結果になる。大学とはどんな学生を育て、どんな機関なのか、学生も教員も理解する必要がある。何となく今の環境で優秀な研究者が多く育つとは思えない。
2. 教員によって、差が激しい。
5. より良い研究室配属と実験期間の充実を量りたかった。
5. GRC の設備について、使えなくなったものは、廃棄するなどしたほうが良いと思う。
5. 一部の共用実験器が故障したままなので、修理もしくは新調すべきである（超遠心器等）
5. このままでは教員が減っていく一方ではないかと感じており、次年度以降の在籍教員の確保をするべき。また、ホームページの『教員一覧』にも現環境を反映させるべき。受験生の混乱を招く。
5. 全ての講義室にエアコンを設置して、講義を十分に受けられる環境を整えてほしい。真夏の大きい講義室で人が多いと熱中症で倒れる人も出てくると思う。
5. 教室の空調を全教室なんとかしてほしい。
5. プロジェクターとノート PC を接続する端子など、設備の最新化を要望したい。
5. パソコンの接続ケーブル等。
5. クーラーください。
5. こういう実験をしたいとなったとき、器具がない。
5. 老朽化がみられる他、冷暖房設備が整っているとは言いにくい。
11. 障害がなくてもトイレなどで狭く感じる部分があったので、動線を大きくとれるようにすれば良いと思う。
13. 教員の質に差がありすぎる。選考の段階でもっと熟考すべき？

【分子生命学科】

1. セクハラ。
2. 人によって大きく異なるので、良い人はいいけど、悪い人は変えたほうがいい。
2. 各教員の講義に対し、他の教員が意見等を出せる機会が今までなかったのであれば、作るべきだと思います。
3. 「期末試験のみ（出席回数も無関係）」だと、プレッシャーが大きいので、何かしらの追加（小テストや出欠など）が欲しい。
5. 冷暖房の設備を充実してほしい。夏場など暑すぎて、試験に一切集中できないこともあった。
5. PC のスペック（研究室のもの）を上げてほしい。節電とか言ってないで、エレベーターを十分に使わせてほしい。空調をよりパワーのあるものにしてほしい（全部屋で）

5. エアコンは完備すべきだと思う。
5. 教室にエアコンを…！！
6. キャリアセンターの対応が適当で、二度と利用したくないと感じた。
9. 悩んでる人、割と見かけたり、聞いたりするので。
12. （その他：学生生活に関する相談）ゼミに入ると研究のために生活のほとんどをゼミで過ごすことになるが、そこで人間関係等がうまくいかなくなるとゼミの世界が自分の生活の中心になっているので、孤独を感じやすい。気軽に相談できる場所が欲しい。
12. （その他：暖房）暖房が暑過ぎる。
12. （その他：教室の設備）教室の温度管理が外の学部と比較して行き届いていないので、できればエアコンなどの設備を導入してほしい。
13. なし。

【食料資源学科】
1. ただ板書を取るだけの講義があったり、専門英語などは教授ごとに勉強する量に差があり過ぎると感じた。同じテキストを使う、または15回の講義でのノルマ（進む量）を設定すべきである。
1. 最初の基礎ゼミでもう少し学科内について教えてもらいたかった。
1. 研究室選びが主食状況を左右するくらい重要になっているのが現状。フタを開けると大変な研究室がいくつかあります。
2. 板書中心の講義から、実習、自発的な行動を求めるものへの改革。
3. 全学部・学科で評価法を統一してほしい。
3. テストの返却がないと成績がわかりづらい。
3. 成績表を出すのが遅すぎる。
3. 知識ではなく、思考力を試すテストにしてほしい。
3. 成績表の配布が遅い。
4. 変な時期にやることが多く、行けないことが多々あった。
5. 狭い。
5. 夏場になると暑過ぎて、苦しくなる講義室・実験室があった。クーラーをつけてほしい。Wi-Fiがつながらない、つながりにくい。
5. 全てにおいて古く、寒い、暑いで集中できない。
5. 諸々の読めるジャーナルを増やしてほしい。
5. もっと多くのことを学びたいので、古い設備を新しいものにしてほしい。
5. 古いものを新しいものに置換していってほしい。
5. 研究室の実験室の設備が整っていない、不十分であると思う。
5. エアコンの温度調節機能が欲しい。
5. 暖房が昼に消えないようにしてほしい。控室と自習室を離すか、つなぐドアを閉鎖してほしい。
5. 特に夏暑過ぎて、授業どころではない。
6. あまり情報がない。
6. 卒業生の就職先を全員に確認してほしい（農生のみ）。
6. 分野別の就職先の紹介をしてほしかった。

6. 就職に関して、農業系や食品系に詳しい先生や相談にのってくれる人が一人でも欲しい。
8. 奨学金免除制度
12.（その他：事務室での学生対応）常に当たりが強い。学生に対し、八つ当たりをしている印象。
12.（その他：カリキュラム）学年・学期に合った授業数や科目を選択できるようにしてほしかった。例えば、三年前期から研究室に配属され、研究室での実験等が始まり、忙しくなるのに対して、三年生から受講できるようになる卒業所要単位も多く、とても大変だった。一方で二年生前期などは、教養科目も取り終わり、卒業所要単位の授業も少なく、時間が余ることが多かったため、もう少しバランスよく授業を取れるようにしてほしい。

【国際園芸農学科】
1. 大学は、小学校や中学校と違い、自分で学びたいことへの学びを深める場所だと思っていますが、先生方の手助けが必要なときもあります。それがあまり感じられない場面がありました。
1. 良いゼミは良いが、悪いゼミは指導教員の指導が悪いという話をよく聞くから。
1. 研究室であまりにも温度差を感じる。
1. 理不尽な暴言やハラスメントがあるため。
3. 出席で成績を決めるのではなく、純粋にテストの点数で評価してほしいです。
4. 時間・設備に不満。
5. 他学部に比べ、冷房などの設備が十分でないと思うから。
5. 三年生から卒業研究に取り組めるように、ゼミ室に個人机を準備してほしい。人数が多い研究室に関して、空き部屋の利用を許可してほしい。
5. 研究等に利用したい論文が読めないことが幾度かあったため、購読できる論文を増やしてもらいたいです。
5. 冷暖房。
5. 大学院に進む人が少ないのは、研究設備等が不十分なことも関係しているのかなと思った。
5. 室温調整。
6. イベントや就活講習会に関する広報が少ない。
8. 来年度から実施されるようですが、奨学金を借りている学生は、授業料免除申請ができると金銭面・精神的負担が減って、ありがたいです。
9. 精神的に、または周囲の環境が原因となって、就学が困難になり、卒業まで四年間以上の期間がかかることがあります。もう少し、悩みを聞くだけでもすれば、良くなるかもしれないので、改善をお願いします。
12. （その他：講義の方法(形式）や指導方法など、上記 1～11 の様々な項目に関わることだが）教員側も学生側も色々な性質の人がいて、その程度の強弱の差はあれど、誰しもが何らかの性質を持っているのだということを理解する機会を持つこと。そして、どんな関わり方や環境や講義や指導であれば、より多くの学生や職員にとって、学びやすい・働きやすい大学となるかを知り、考える機会があれば良いと思った。特定の人にとってのみ、学びやすい・働きやすい大学よりも、万人にとって学びやすく働きやすい大学（大学のユニバーサル化）を目指していけたら、色々な人の可能性が広がるのではないかと思う。
13. 特にないが、出欠を学生証でピッ式にした方がタイムロスを防げると思う。

【地域環境工学科】

2. テスト形式等。
5. 最新の実験を器具を揃えてほしい。最先端なものに触れる機会がない。
5. 他の学科に比べて、環境が悪い。教室にもよるが、もう少し使いやすい環境であると望ましい。
5. 教室の温度が上がると機械の不調を起こすことがあった。
5. Wi-Fi をつけてください。
6. 院進学者を増やすため。
8. 授業は科目ごとに料金があって、四年後半など授業がないのに、授業料を引かれるのが苦しいです。
8. 情報をメールなどで流してほしい。
12. 特にない。
13. 特にありません。

設問 18. (1) 総合的に判断して、本学部・学科の教育・研究に対する取組み・姿勢に満足していますか。

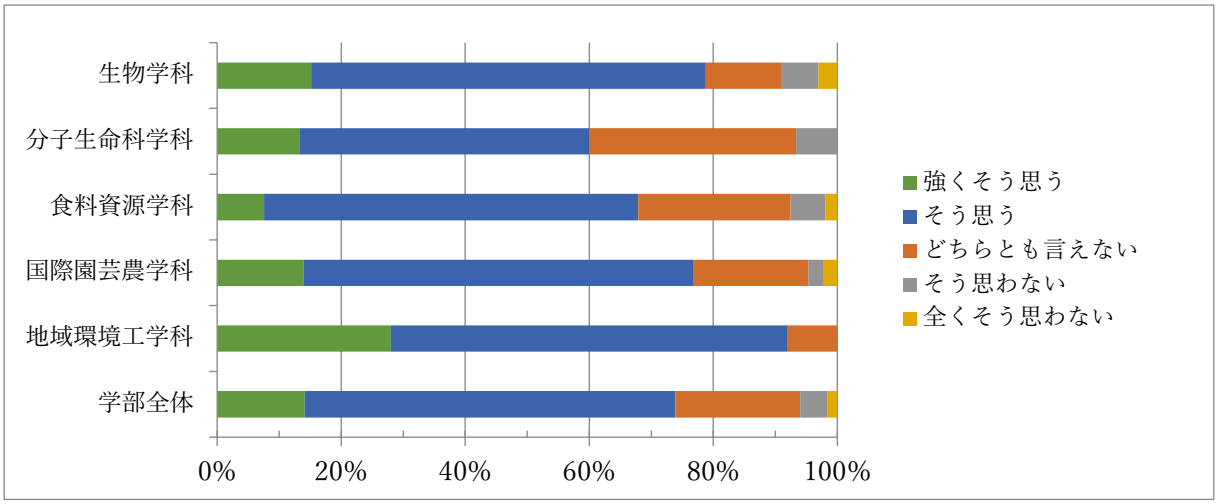


図 I－ 18. 本学部・学科の教育・研究に対する取組み・姿勢に満足か

本学部・学科の教育・研究に対する取組み・姿勢に満足していますかという設問に対して、学部全体では「強くそう思う」と「そう思う」の割合が74%であり、平成29年度（76%）、平成30年度（76%）とほぼ同じであった。「そう思わない」と「全くそう思わない」は6%で、こちらも平成29年度（5%）、平成30年度（6%）と低い状態の傾向が続いている。学科別にみると、肯定的評価の割合が最も高いのは平成30年度同様に地域環境工学科で（92%）、その他の学科では60%（分子生命科学科）～79%（生物学科）の範囲であった。地域環境工学科では「そう思わない」と「全くそう思わない」という否定的評価がなかった。教育・研究について、設問17であげられたような不満もありつつ、でも総合的には満足している、とする学生が多いと認められる。

(2) 上記のように回答した理由を記入して下さい。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない　5. 全くそう思わない

【生物学科】

1. 多くの教員が研究熱心で、学生間でも高め合えたから。
1. 本学に入る前にやりたいこと、学びたいことが実際できているから。
2. 実際に研究に学生が臨む時間が短いと思う。
2. ほとんどの学生がやりたい研究をできているから。
2. 困っている時に相談にのってもらい、なんとか卒業できそうだから。
2. 不満はないです。
2. 前向きな指導教員の下、研究させていただけているため。
2. 特に強い不満はこれ以上ないです。
2. やりたいことはできたから。
2. 学生に対して、新しい知識を授け、研究に対するアドバイスなど、学生が何かに取り組むことに対する門戸が広いと思うから。
2. 農学、生物学からその関連する分野まで、幅広く学べていると思う。
2. 問題がある学生に、すぐに対応できていたと思うから。
2. 際だって悪く見える部分が多少あるだけで、おおむね高いレベルが維持されていると思う。
2. 知識と好奇心を持つための機会は、十分多いと思う。
2. 色々な分野の知識を深められたから。
2. 自分のやりたい研究ができて、幸せだった。また、指導教員の先生が強くサポートしてくれて、とても良かった。
2. 4年間生活していて、特別困るような、不満はなかった。
2. 地方大学であることの利点を生かして、地域に関わる研究を行っているため。
3. 良いところもあるし、悪いところもあったから。
3. 授業などには非常に満足しているが、研究活動に対する不満が大きかった。
4. 学生も教員も講義が単なる作業になっている。学生の将来像と教員が学生に期待することの相違が多く、摩擦が生じやすい。
4. 教員の中には教壇に立つべきでないと思う方々がいる。また予算的にしょうがないのかもしれないが、研究に十分なスペースや器機が不足していると思う。

【分子生命科学科】

1. 大学レベルの知識を身に付けることができたため。
1. 妥当。
1. 多くのことを学べたと実感しているから。
2. 強いストレスを感じることなく研究できているため。
2. 自分の好きな研究ができたから。
2. 必要な科目も取りやすく、研究についても学生と先生の意思疎通がしやすい環境ができているように感じる。一方で授業によっては、取りたくても取れないものがあるなど、学ぶ機会の制限を感じるところが一部あった。

2. 大学に進学して、今までより専門的であり、日常生活でも活かせるような知識を得られたから。
2. 様々な分野の授業、研究室があり、自分自身が興味の持てる分野を選択して、深く学ぶことができた。
2. しっかりサポートもしてくれるし、足掛かりも作ってくれたと思うので、良かったと思ったため。
2. 専門知識がついたから。
2. この学校に来て良かった。
2. 大学生として必要なスキルを身につけるよう研究活動に力が入れられているため。
2. 特に不満がない。
2. 充実した大学生活だったから。
3. あまり分からない。
3. 設 18 を感じることが少ないため。
3. 良いと思うところと悪いなと思うところが同程度あるから。
3. 自分では、無事卒業できてよかったが、人によると思う。
3. 学生個人への対応の差、いわゆる『ひいき』が強いのがダメだと思う。
4. 研究室配属が三年後期からのため、ゼミが合わない場合、就活に切り替えるための時間が取れない。三年前期からの配属にしてほしい。一年、二年のうちから院に残って研究したいと考えていた学生が就活に切り替えるための時間が取れずに困る。自分に合わないなら早くわかったほうが良い。
3. 学生実験、短くなったことだけ、少し悲しいと思います。
4. 不十分だと感じる設備があるため。

【食料資源学科】
1. 自身で感じているだけでなく、他の学部と比べても、学生の自由と教育のバランスが非常に良いと感じる。
1. 食品のことを学びたくて大学に入ったので、学びたかったことをたくさん学べたと感じるから。
1. 大学入学前に比べ、自主的に考え、行動する力、課題に対してアプローチしていく解決能力が身についたと思ったからです。
2. それなりに満足している。
2. 勉強させてもらえる環境は、十分にあったと思う。
2. 自主的な受講になるが、たくさんの分野の授受の選択肢があったため。
2. 不満な点がなかった。
2. 取り組んでみたかった研究に携えたため、満足している。
2. 特に不満がないため。
2. 学びたいことをしっかり学ぶことができたから。
2. 学科に関わらず、幅広い講義を取ることができ、また自由に研究を進められる環境にあった。
2. 理由は特にない。
2. 実験や講義の週に対するコマ数の割合がちょうどよかった。
2. 多くの分野に触れることができたため。

2. 特に不満に思うことはないため。
2. 他の学科の研究室とも協力して研究を行っていたため。
2. 卒業研究において、当学科はしっかり取り組んでいると思う。（他学部や他学科の話を聞いたところ、そうではないところも多いため。）
2. 熱心な先生方が多く、ありがたかったです。
2. 他学科の研究成果をニュースなどでよく見る。本学科も地域密着の研究が多い。
2. もうこれ以上は辛いと思うくらいにはやってるから。
2. 学校生活で特に不満はなかったので。
2. 専門知識を学ぶにあたって、多種多様な講義があり、それを自由に受講できるから。
2. 何となく。
2. 色々学べるカリキュラムだったから。
2. 先生方が丁寧。
2. 研究に集中できる環境だったから。
3. 研究への取り組みは
3. 素晴らしいとも言えないし、とても悪いわけでもない。
3. 取り組みや姿勢について、これまで特別感じたことがないため。
3. 食品科学を大幅に取り入れた反面、食品に直接は関わりの少ない生産環境分野を専攻した学生の選択科目の履修が固定化されてしまうこと。
3. 特になし。
3. わからない。
3. 来年以降の自身の糧になれるよう頑張ります。
3. 特に何も思わない。
3. こんなものなのかなと思うため。
3. 授業や研究を行う上で、特に不自由を感じなかった。
3. 十分に経験したと言えないため。
4. 研究室間で実験等に対する力の入れ方の差が大きい。
4. 先生の中に、たかが弘前大学だと思っている方がいらっしゃるので、その思考をなくしてほしい。どのようにやれば、私たちが行動できるのかを考えてほしい。
4. やはり成績評価の方法が良くなかった。
5. 指導教員による教育・指導が自由過ぎ（就活に集中できない）

【国際園芸農学科】
1. 充実した学校生活を送れたから。
1. ゼミの環境がとても良かったから。
1. この学部・学科でなければできなかったことができて、入ってよかったと思えるから。
1. 多少なりとも入学時より成長していると感じたため。
1. 学科の改組後、国際的事項に学生がより多く触れられるよう様々な工夫をしていただいた。実習で実践的な体験もさせていただけたことをありがたく感じている。学部・学科の先生方も地域社会・国際社会への貢献を目指し、日々研究に尽力されていた。この学科に入学して正解だったと感じている。

2. 国際的な面、農学の面について、学ぶことができ、志望していたことを勉強できたから。
2. 弘前大学に来て良かったと思えたので。
2. 四年間講義を受けて、とても充実した内容であったから。
2. 不満がないから。
2. 英語教育に力を入れていたり、支援があった点が、非常に嬉しかった。
2. いろんな分野があり、専門性の高い勉強ができる。
2. 批判的な意見がないため。
2. 座学だけじゃなく実習もあり、より深く理解するのに役立ち、満足したから。
2. 入学当初に自分が想像していたよりも高度で実学的なことを身に付けることができたと感じたため。
2. 弘前でしかできないりんごや桜などの研究が行われているし、国際社会へ対応していくことも視野に入れている点からそう思った。
2. 教授の方々が専門的な知識を教え、それを学び、生かす学生という構図ができていると思うから。
2. 自ら課題を見つける、自ら知識を得る、自ら人の役に立つことが大切だという姿勢で、教育は行われていた。地域を代表する大学法人としての研究も盛んであったから。
2. ダラダラとせず、しっかりと講義や研究に打ち込むことができたから。
2. 多様な経験を積む機会が与えられていたと思う。
2. 専門的知識や実技などを一部でも獲得できたから
2. 幅広く学ぶことができたから。
2. 特にない
2. 特に不満がなく、この学科に入ることができて良かったと思っているから。
2. 満足して卒業できた。
2. しっかり卒業させていただけるから。
2. それらが反映されたカリキュラムであったという印象を受けたため。
2. 教授による。
3. ゼミでは、学生の「自主性」に重きを置いているようでしたが、自分のやりたいことを相談しても否定的であまり手を差し伸べてくれるような様子が見られませんでした。出来ること、出来ないことくらい前もって知りたかったですし、精神的に辛かったです。しかし、大学で研究を行う大変さ、厳しさを知ることができたので、良かったです。
3. 三年次以上になると、確認することはないから。
3. 設問８－（１）や設問１７－（１）のように気になる点もないわけではないので、（良い面もあれば、良くない面もあるので）総合的に判断するとどちらとも言えないになる。
3. 勉強したものが活かせる就職先が限られる。
3. 特に意識した時はない
3. 教員による
4. あまりちゃんとやってなかったから。

【地域環境工学科】

1. 知識の修得の他、授業を通じたプレゼンや発表会など、社会に出ても十分活用できることを

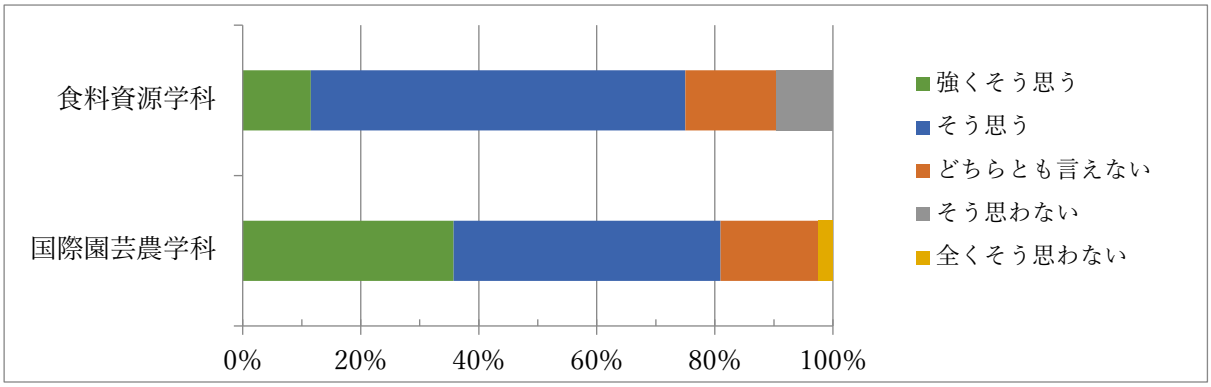
しっかり学べたから。

1. 楽しかった。
1. 専門分野を学ぶ環境は整っており、何より先生たちが熱心に指導してくださったと思うので、満足しています。
1. 不満なことがなかったため。
1. 資格取得のカリキュラム等がしっかりしているので、とても良いと思った。
1. 就職に直結する専門分野の勉強がたくさんでき、また就職担当の先生にもたくさんアドバイスをもらうことができ、就職につながったから。
1. 将来のためになったから。
2. 学生に対しての授業・実習・実験が充実しているから。
2. 熱心に指導してくれたため。
2. 教員で適当な人がいなかったから。
2. 温かい人が多かった。
2. 将来この学科の専門的な会社に入りたいならば、良いと思う。
2. 不満に思う点がないから。
2. もう少し、研究費を先生方に出してあげるべきだと感じる。
2. 学科の先生が多く、授業も充実していると感じているため。
2. 農業土木の従事者を増やすためにも必要だと感じる。
2. 結果として、十分に自分は学ぶことができたと思うから。
2. 農業土木を専門的に学べるコースと他に知識を習得できるコースと選択でき、学生の自由度は高いと感じる。
3. 理由はない。
3. 特に支援をされたわけでもない。実験室の環境が悪い。

設問 19. 食料資源学科と国際園芸農学科の学生のみお答えください。

農学生命科学部では、「食」と「国際化」機能を強化するため、既存の 2 学科（生物資源学科→食料資源学科、園芸農学科→国際園芸農学科）を改組し、皆さんが最初の卒業生となります。

(1) 皆さんの受けたカリキュラムは「食」（主に食料資源学科の皆さん）または「国際化」（主に国際園芸農学科の皆さん）の知識を身につける上で役立ったと感じていますか。



図Ⅰ－19. カリキュラムは「食」または「国際化」の知識を身につける上で役立ったか

改組後、食料資源学科と国際園芸農学科の初の卒業生となる。この設問は食料資源学科と国際園芸農学科の学生だけに改組に伴う学科の旗印（食料資源学科「食」、国際園芸農学科「国際化」）が果たしてそのカリキュラムに反映されていたかを問うたもので、学生の意見を分析することで、今後のカリキュラムの検討材料となるはずである。

食料資源学科では、「強くそう思う」と「そう思う」と答えた学生の割合が75%であった。一方、「そう思わない」と答えた学生は10%であった（「全くそう思わない」と答えた学生はいなかった）。ほとんどの学生は「食」に関するカリキュラムに満足しており、「「食」といっても多岐にわたる研究分野があることを改めて理解できました。これまでのカリキュラムを通して、身近であり、今後生きてく上で役立つような情報・知識を吸収できたと強く感じるからです。」や「「食」に関わる分野を幅広く学ぶことができたため。生産・バイオ・食品科学の全分野を学ぶことができて、結果的に満足している。」などと肯定的意見が多くあった。少数意見ではあったが、「食料資源という名前の通り、食品系の授業を受けたが、盛り過ぎだと思いました。やはり、食品とそれ以外の分野を分けるべきではないかと思いました。」や「授業の内容がかぶっている。」などと講義内容の重複について指摘するものがあった。

国際園芸農学科では、「強くそう思う」と「そう思う」と答えた学生の割合が81%と非常に高かった。特に「強くそう思う」答えた学生だけでも36%になっていた。一方、「そう思わない」と答えた学生はおらず、否定的意見としては「全くそう思わない」と答えた学生が1名いたのみであった。具体的な意見としては、「英語の授業が多かったり、講義内容も国際的なものが多く、海外にも興味を持つきっかけになった。」や「実際に海外の現地に赴けたことで、視野や興味が広がった。日本の農産物が海外の市場でどのように売られているのか、海外との志向の違い、マーケティング法などの知識を身に付けられたから。」などと英語講義の充実さや必修科目である海外研修入門が高く評価されていた。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない　5. 全くそう思わない

【食料資源学科】

1. 幅広い食品分野を講義で学ぶことができた。
1. 「食」といっても多岐にわたる研究分野があることを改めて理解できました。これまでのカリキュラムを通して、身近であり、今後生きてく上で役立つような情報・知識を吸収できたと強く感じるからです。
1. 食について、幅広く学べて、食についてさらに興味が増しました。
1. 海外研修入門。
1. 食品の授業の種類が多かったため。
2. 講義が履修課程に含まれることで、学ぶ機会を提供してもらえたから。
2. 食品会社の面接で、大学での知識を話せた。
2. 生活に活かすことができる知識を得ることができた。
2. 食に特化した講義が多く、内容の重複が発生もしたが、復習になり良かった。
2. 食品分野について、詳しく学べたため。
2. 食に関する必須科目を履修したから。

2. 様々なジャンルを知ることができた良かった。
2. ある程度、就職先でも活かせることを学べたと思ったから。
2. 外部講師の方などを招いて、いろいろなことを学ぶことができたから。
2. 食品に関する講義が多かったため。
2. 「食」について学ぶ機会があって、調べたいと思えることがあって、自分で調べてみることをしたのだから、役立ったと思っている。
2. 食品に関する授業が、講義に対して占める割合が高く、より食に専門的になることができたため。
2. 今まで知らなかったことを多く学ぶことができたため。
2. 食の講義が多い。
2. 「食」に関わる分野を幅広く学ぶことができたため。生産・バイオ・食品科学の全分野を学ぶことができて、結果的に満足している。
2. 栄養成分について、思っていた以上に詳しくなれた。
2. 私自身が増えた「食」に関する研究室の一員であったため、だれよりも影響が強いと考えています。
2. 新しく開講された食品に関する講義を受けることができたため。
2. 「食」に関するあらゆる分野での講義が組まれているため。自分がどの分野により興味・関心を抱くか、考えることができたと感じる。
2. 自分は食品科学コースの授業も受けていたため、食品コースでない人は、そうでもないような気がする。
2. 食品系の就職に役立った。
2. 専門的食の知識を得るための講義を多く受講できたから。
2. 食に関する授業がしつこいくらいあったから。
2. 食品加工の分野の講義が少ないように感じた。
2. 食品に関する授業は、今後も役に立っていくと思うから。
3. 食料資源学科：食を学ぶ学科なのか、そうではないのか、分野が混合しすぎて、よくわからなかった。
3. 特になし。
3. 日常生活では、役に立たない。
3. コースによると思うから。
3. 地域との連携は非常にされていろと思うが、国際化というとあまり実感できなかった。
3. 講義を受けていた当時は、知識はあったが、今となっては、忘れてしまったため。
3. 15A なので。
4. あまり身近ではなかった。
4. 食料資源という名前の通り、食品系の授業を受けたが、盛り過ぎだと思いました。やはり、食品とそれ以外の分野を分けるべきではないかと思いました。
4. 授業の内容がかぶっている。
4. 食品科学コースの先生の科目はあまり取っていないため。

【国際園芸農学科】

1. 英語の講義、海外研修があるから。
1. 英語の授業が多かったり、講義内容も国際的なものが多く、海外にも興味を持つきっかけになった。
1. 海外研究はとても役に立ったため。
1. 実際に海外の現地に赴けたことで、視野や興味が広がった。日本の農産物が海外の市場でどのように売られているのか、海外との志向の違い、マーケティング法などの知識を身に付けられたから。
1. 諸外国については、ニュース等で得た浅い知識しかなかったが、実際に異国を訪れたり、国際関係の講義を受けることで、考え方やモノの見方が変わったため、良かった。
1. 世界の農業について知れて、興味がわいたから。
1. 英語の講義を多く受けられたから。
1. 授業でも海外の食料生産やその動向、実際に海外研修にも行くことができたので、有意義だった。
1. 海外研修入門などを通じて、世界に目を向けるようになった。もっと外国の農業について学びたいと思うようになった。
1. 英語に触れる時間が増えたことや海外研修を通して、多くのことを学べたから。
1. 実際に見なければ分からない光景を見ることができたから
1. 国内外の食や農業についてたくさん学び、実際に海外の市場などを見ることで多くの知識が身についたから。
1. 座学による知識をつける段階から国外のことを意識できる内容だった。海外研修でフランスに行ったことも、卒業研究につながっている。4 年間で国内の地域から国外のことを学んだことで、社会で起きていることに対して総合的に判断できるようになるくらいの知識はついたと感じる。これは学科のカリキュラムのおかげだと考えている。
1. 国際指向の先生が多かった。
1. 日本だけでなく、海外に興味を持つことができた。海外の政策なども学べ、日本の欠点なども知ることができた。
2. 海外研修やその他の授業で、様々な国の状況と日本を比較して学ぶことができたから。
2. 海外文化に触れることができたため。
2. そのような講義があるため。
2. 農業経済、海外研修があり、海外の現状知れた。
2. 海外研修で国外の農業に触れる機会も得られたことは、学びを深める上でとても大切なことだと思います。
2. 海外研修を通じ、海外の知識を身に付けることができたと思う。
2. 海外へ短期間でも行くことで勉強になることは多かったが、授業に関しては授業名に「国際」がついてるだけで、内容はあまり変わらないのではないかと感じた。
2. 国際的な授業では学べたから。
2. 海外での研修によって、他国の農業や食文化を自分の目で見て感じることができ、研究室でも留学生や他国の大学院生と一緒に勉強する機会が多かったから。
2. 海外へ視野を広げて、農業について考えられた。
2. 実際に現地で学ぶことができたから。

2. 海外研修が必修であることが大きい。
2. 海外研修やIntegratedA、B、Cが必修としてカリキュラムに組み込まれていたため。
2. 海外研修に参加できてよかったと思う。
2. そういう講義が多かったため
3. 国内だけではなく、国外の農業についても目を向けるきっかけにはなりました。
3. 全てのカリキュラムについて国際化を意識してる訳ではないと思うということと、（かといってすべてのカリキュラムで国際化を意識する必要もないと思う）四年間終わってみて、国際化の知識が身についたかと言われれば、私自身は身についてるとあまり感じないから（但し、海外についての興味は入学前より高まった。私としてはそれだけでも、この学科に入った意義は大きいと感じている。）
3. 「国際」のついた講義が多かったが、知識を身に付けられるほど、影響はなかった。
3. 国際的な学力があまり身に付いていないから。
3. 国際化を意識するならば中国語の学習は必須だと感じるが、英語のみに力点がおかれていると感じる。
3. カリキュラムを受けていないため
5. 役に立つようなことがなかったから。

Ⅱ．研究科修了時学生対象教育評価アンケート

１．アンケート調査内容

調査目的：農学生命科学研究科の教育内容ならびに方法の改善に役立てるため、２年間、本研究科で教育を受け今まさに修了しようとしている学生を対象に、研究科における教育について総合的な評価を得ることを目的とした。

調査方法：教員をとおして研究室所属の研究科学生にアンケート用紙を配布し、無記名方式で行った。回収は各コースの修士論文発表会後に行った。

調査対象：令和 2 年 3 月研究科修了予定者 43 名

調査期間：令和 2 年 2 月 21 日～3 月 8 日

有効回答者数：38 名（回答率 88%）

調査項目：設問は以下のとおりである。(ただし、下記の[　]の項目名は、回答結果の分析にあたってグループ化のために設けたものである。)

[研究科・コースの教育目標等の認識]

設問 1. あなたの所属コースをお答えください。

設問 2. 本研究科の教育目的および教育目標を知っていますか。

設問 3. あなたが所属するコースの概要は添付資料の通りですが、概要および入学者受入れ方針（アドミッションポリシー）を知っていますか。

(1) 概要について　　(2) 入学者受け入れ方針について

設問 4.

(1) あなたが所属するコースの概要は添付資料の通りですが、コースのカリキュラムはその目標に合致していると思いますか。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

[コースの教育について]

設問 5. シラバスは受講する科目の選択あるいは授業の全体的な構成の把握に役立ちましたか。

設問 6.

(1) あなたが所属するコースで受けた教育（講義・演習など）について満足していますか（修士研究については設問 15 で別に聞きます)。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 7. 本研究科では年度初めに指導教員がガイダンスを行っていますが、その内容は適切であったと思いますか。

[教員の指導について]

設問 8.

(1) 所属するコースの教員の学生への指導や対応に満足していますか。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 9. 大学院で履修した科目の成績評価についてお尋ねします。

(1) 成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはありますか。

(2) 疑問や異議があったとき、あなたは実際にどこに相談し、その対応に満足しましたか。

具体的に記入して下さい。

［学生の主体的学習について］

設問 10.

(1) 講義の受講に当たり、 受講期間中にあなたは講義室での受講時間の何倍程度の時間を、講義室外での学習（予習や復習など）に当てましたか。大学設置基準にでは、 2 単位の科目の場合、 90 時間の学習が必要になりますが、 講義室では 30 時間（90 分を 2 時間として扱い×15 回＝30 時間）の学習時間しかありません。そこで、 講義室外での学習が必要になります（講義室での 2 倍の時間）。学習時間にはインターネットを利用した情報収集、 講義でのプレゼン準備やレポートの作成、 研究室内でのプレゼン準備などに要した時間も含めても構いません。ある 1 科目を想定して回答しても構いません。

(2) 学術特別研究（学術研究プログラム）、 実践特別研究（実践研究プログラム）あるいは課題研究（社会人入学者）に要した時間は 1 日平均どの程度ですか。実験に要した時間に加え、 研究に必要な文献調査や文献講読に要した時間も含めて計算して下さい。

設問 11. 大学院教育では、学生自身の主体的、意欲的な学習が要求されます。

(1) あなたは講義についてどのような姿勢で取り組みましたか。

(2) 大学院在学中のカリキュラムで、もっとも印象に残った科目があれば、その科目名と理由を記入して下さい。

［学生への教育支援、施設・設備について］

設問 12.

(1) 本研究科や本学では皆さんに助言したり、 皆さんからの相談・苦情を受け付けたり、皆さんのニーズを把握するために、 以下のようなルートを用意しています。在学中あなたは次の(1)～(3)の項目について主にどれを利用しましたか。（ ）内に番号を記入して下さい。

(1) 学業（　　） (2) 学生生活（　　） (3) 進路（　　）

1. 学生センター　2. 指導教員と面談　3. 指導教員以外の教員と面談
4. 学科長と面談　5. 学生総合相談室　6. 保健管理センター
8. 就職支援センター　9. 学部長直言箱　10. 学長直言箱
11. その他　12. 利用したことはない

(2) それぞれの対応に関して改善すべき点があれば以下に簡潔に記入して下さい。

設問 13. 本学部の以下の施設について、どのように感じていますか。

(1) 下表の該当する欄に○を書き込んで下さい。

評価 ＼ 施設	1. 充分満足	2. ほぼ満足	3. どちらとも言えない	4. やや不充分	5. かなり不充分
1. 講義室					
2. 実験・実習室					
3. 情報処理演習室					
4. 蔵書室（4 階）					
5. 学生自習室、学生控室（2 階）					

6. 修士研究を行った研究室					

(2) 各施設に対する要望がありましたら具体的に記述して下さい。

［修士研究について］

設問 14.

(1) 修士研究について満足していますか。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 15.

(1) 研究科修了後のあなたの進路は次のうちのどれですか。

(2) 本研究科のカリキュラムで学んだことは、進路の決定にどのように影響しましたか。

(3) 本学および本研究科の進路支援に対する取り組みは十分だったと思いますか。

［本研究科の教育のあり方について］

設問 16.

(1) あなたが本研究科を修了するに当たり、大学院修了者に相応の知識および学力を身に付けたと感じていますか。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 17.

(1) 本研究科の教育活動の中で最も早急に改善すべきと思われる点を、次の項目の中から一つを選んで下さい。

(2) 上記で選択した項目に関する要望を具体的に記入して下さい。

設問 18. 本研究科で学生が期待する教育を受けるとともに充実した学生生活を送るために、希望する点や、大学または学部が改善すべき点があれば具体的に記入して下さい。

設問 19.

(1) 総合的に判断して本研究科・コースの教育・研究に対する取組み・姿勢に満足していますか。

(2) 上記のように回答した理由を記入して下さい。

２．調査結果

設問 1．あなたの所属コースをお答え下さい。

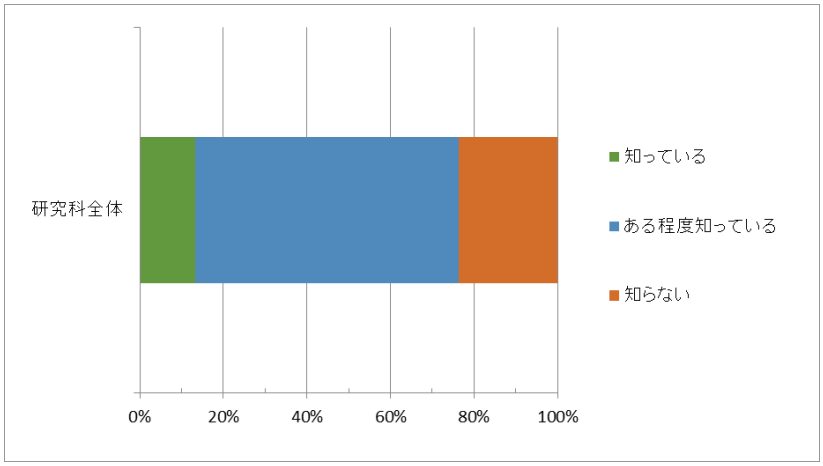
表Ⅱ－ 1．コース別アンケート回答率

コース	対象者人数（人）	回答者数（人）	回答率（%）
生物学コース	7	6	86
分子生命科学コース	15	12	80
生物資源学コース	12	11	92
園芸農学コース	7	7	100
地域環境工学コース	2	2	100
合　計	43	38	88

研究科全体の回答率は 88%で、平成 30 年度(73%)より上昇した。上昇の理由として、修士研究発表会前の 1 月末からアンケートを実施し、修士研究発表会の際にコース長が回収したことが考えられる。回答者数が少ないため、以降の集計は研究科全体で行った。

[研究科・コースの教育目標等の認識について]

設問 2．本研究科の教育目的および教育目標を知っていますか。



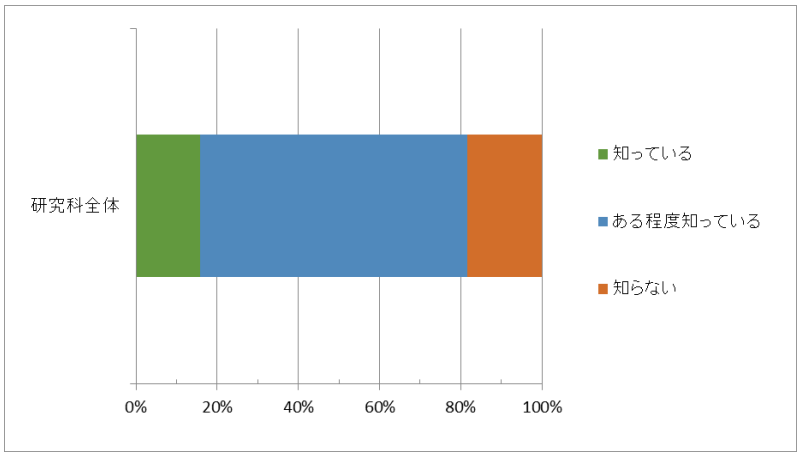
図Ⅱ－ 2．本研究科の教育目的等の認識

「知っている」および「ある程度知っている」が、平成 29 年度(79%)および平成 30 年度(75%)であったのに続き、本年度は 76%であった。

引き続き、教育目的および教育目標の周知を図る努力を継続する必要がある。

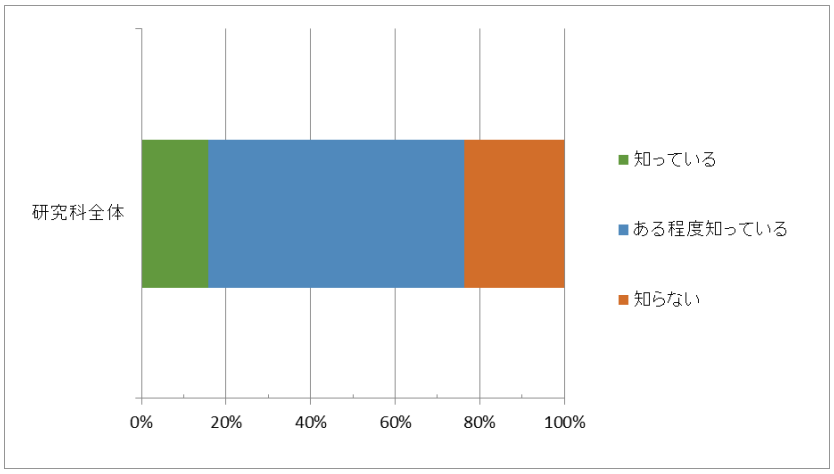
設問 3. あなたが所属するコースの概要は添付資料の通りですが、コースの概要および入学者受け入れ方針（アドミッションポリシー）を知っていますか。

(1) 概要について



図Ⅱ－ 3(1). 所属コースの概要の認識

(2) 入学者受け入れ方針について

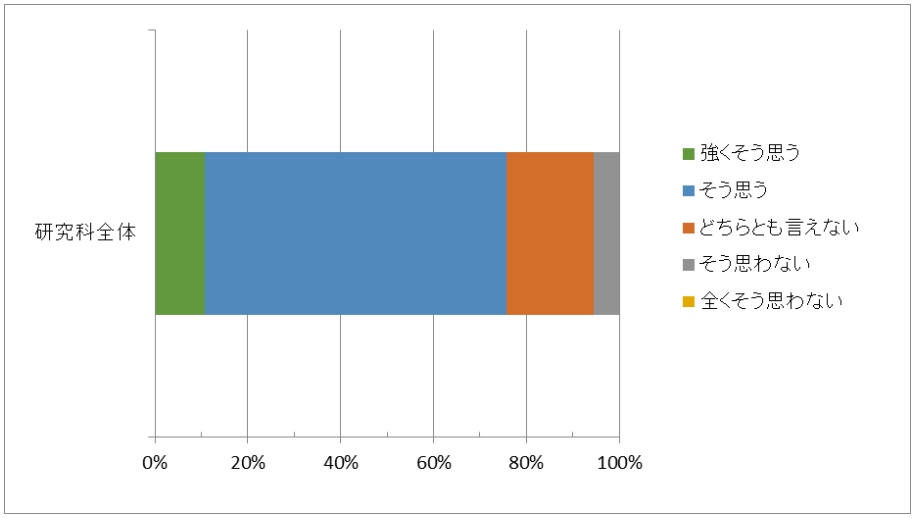


図Ⅱ－ 3(2). コースの入学者受け入れ方針の認識

概要については、「知っている」および「ある程度知っている」が 86%で、平成 29 年度は 84%、平成 30 年度は 69%であった。また、入学者受け入れ方針については 76%となり、平成 29 年度は 79%、平成 30 年度は 58%であった。どちらも低下した平成 30 年度から改善した。

引き続き、大学院入試説明会等において、丁寧に説明し、周知に努める必要がある。

設問 4. (1) あなたが所属するコースの概要は添付資料の通りですが、コースのカリキュラムはその目標に合致していると思いますか。



図Ⅱ－ 4. コースの概要とカリキュラムの合致度

「目標に合致しているか」の問いに対し、「強くそう思う」および「そう思う」は 76%で、平成 29 年度(39%)、平成 30 年度(61%)から改善した。引き続き、大学院入試説明会等における説明を継続することが必要である。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない
5. 全くそう思わない

【生物学コース】

2. 基礎研究に関する授業がいくつかあるから。
2. 実習が多くなり、学部よりも実践的な研究ができるため。また、他コースの講義内容も、より高度で専門的になるから。
3. 所属研究室によると思われるため。
4. 副コース科目を履修する必要性を感じませんでした。どちらかと言えば、自分が所属しているコースの科目を履修したいし、自分の研究に時間を割きたかった。このカリキュラムでは、自分のコースの目標を達成するのに、苦労してしまうと感じた。

【分子生命科学コース】

2. 先生方が、方向性を間違わないように指導してくれているから。
2. 授業、研究活動を通し、コースカリキュラムの目標に近づいていると実感するから。
2. 学会発表等を通して、専門知識が身についた。
2. 講義と研究を通して、専門的な知識及び技術に触れる機会が多くあるから。
3. 教育はなされているが、実際にＤまで進学している人が少ない。
3. プレゼン演習Ｉは必要ない。
3. 進学や研究者に向けてのカリキュラムの不足。
4. 国際的視野を感じる点が一切ない。

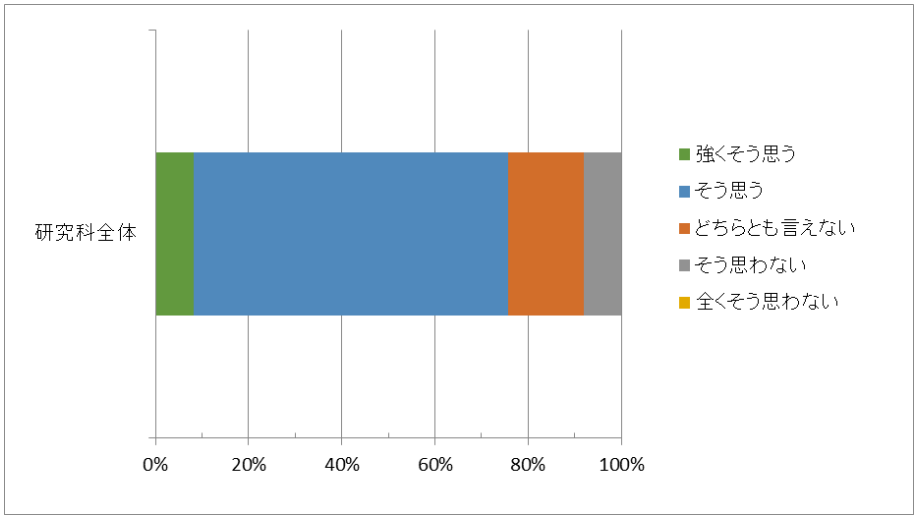
【生物資源学コース】
2. 食品、土壌、育種、微生物など様々な分野の専門家の講義を受けられるから。
2. 大きく、目標がカリキュラムから外れているとは感じなかったから。
2. 納得しているので。
2. 幅広い分野への育成ができる環境が整っていると感じたため。
2. 多くの研究室、講義では、そのような人材を生むような内容であるから。
2. 自分が研究している分野以外の科目も受けることができ、幅広く知識を得ることができたため。
2. コースの概要に則して、カリキュラムが作成されていると感じたため。
2. 講義等の内容が、コースの目標と合致したものが多かったと感じたため。
2. 様々な分野について、勉強できたと思うため。
3. 研究室ごとに行われている研究内容が目標と合致しているものもあれば、合致していないものあると思ったから。

【園芸農学コース】
1. 農業に対して、あらゆる角度からの情報を知ることができるから。
2. 幅広く学べるように選択できる科目もあるが、全員がそれを利用しているとは限らないため。
2. 目標に沿ったカリキュラムになっていると思う。
3. 私は園芸農学コースですが、農業経済系の講義を取らなくても修了できたため。
3. 普段からその目標を意識することがないから。

【地域環境工学コース】
1. 自分の専攻分野以外の授業が必修として組まれているため。

［コースの教育について］

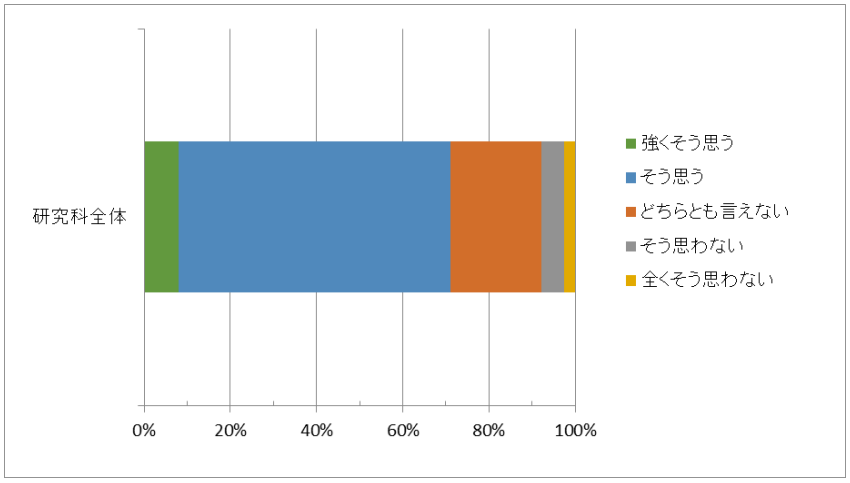
設問 5. シラバスは受講する科目の選択あるいは授業の全体的な構成の把握に役立ちましたか。



図Ⅱ－ 5. シラバスは役立ったか

「強くそう思う」と「そう思う」の合計は 76%であった。平成 29 年度は 63%、平成 30 年度は 86%であった。引き続きシラバスの内容と講義の内容の乖離を是正する努力を継続することが必要である。

設問 6. (1) あなたが所属するコースで受けた教育（講義・演習など）について満足していますか（修士研究については設問 15 で別に聞きます）。



図Ⅱ-6. 所属コースで受けた教育に満足しているか

「強くそう思う」および「そう思う」の合計は 71%で、平成 29 年度(61%)、平成 30 年度(66%)と比較してやや増加した。「そう思わない」「全くそう思わない」は 8%と、平成 30 年度(14%)から改善がみられ、平成 29 年度(6%)と同程度であった。引き続き、少数意見も取り入れた教育の改善が必要である。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない
5. 全くそう思わない

【生物学コース】

1. プレゼンテーション演習は社会に出ても役に立つと思った。満足している。
2. 講義の内容が細分化されており、学びたい内容を基準に選ぶことができた。
2. 専門講義は、より高度で実践的でよかったが、プレゼンテーション演習Ⅰなどの集中講義は少し課題が多いと感じたから。
3. プレゼンテーション演習Ⅰは、自分の所属コースの講義・演習として合うものではないと感じた。学会で生かせるような話を講師の方がしていたが、全くそうは思わなかった。自分の所属コースのコース科目は満足している。
3. 必修分野が全体的に満足度が低い。

【分子生命科学コース】

1. 学部時代の講義・演習より、自主的に調べ、発表し、議論する機会が多かったから。
2. 深い部分まで、丁寧に教えてくれる先生が多い。

2. 学部の授業で学ぶことができなかった、専門的な知見が得られたと感じたから。
2. おもしろい内容が多かったから。
3. 受けたい講義が選択科目にも入っていなかったため。
4. 研究と座学が直接結び付きにくい。本来座学で学んだことを研究の基礎とすべきなのだが、なかなか難しい。研究室への配属を少なくともあと一年早くし、研究と座学を結び付けやすい体制を作るべきだと感じる。（研究をしながら講義を受けると、知識の身につき具合が違うと実際に感じた）
5. 研究者を育成するようなプログラムでない。より実践的な訓練（申請書の書き方 etc）とならなかった。学部の延長。

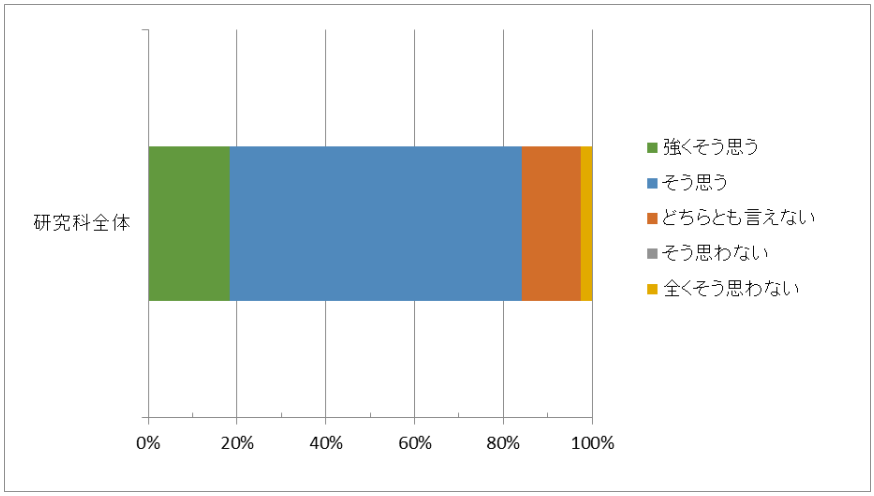
【生物資源学コース】
2. 多岐にわたる内容を学ぶことができたから。
2. 設問 4. と同様に、一つに限られた分野だけについて詳しく学ぶわけではなく、食品、土壌、育種、微生物など、いろいろな分野について、学べるからです。
2. 発表するなどの場を多く与えられたので。
2. 学びたい専門分野の講義がもっとあればなおよかったです。
2. 分野においても広い範囲のことを学ぶことができたから。
2. 学部の時よりも、より詳細に学ぶことができたため。
2. それぞれの専門分野について、わかりやすい講義を行っていただいたと思っているため。
3. 一部、学部生も受けることが可能な授業において、内容が学部生向けに合わせたものになっていて、修士課程の授業らしくないときがあったため。
3. 卒業するために必要な単位数が多く、思うように研究に時間が使えないことがあったため。

【園芸農学コース】
2. 学部ではできないような内容まで触れることができたため。
2. 学部の講義より少人数なため、興味に合わせた講義をしてくれる方が多かったからです。
2. 自身の研究分野以外も受講することができ、興味深かったため。
2. 専門知識をより深めることができたため。
2. 他の学部でしか学べないことも学ぶことができたため。
4. 研究やコース概要に合わない講義が必修科目となっているため。

【地域環境工学コース】
1. 学部の授業ではわからなかったが、各先生方がそれぞれどのような研究をしているか知ることができたため。
3. プレゼンテーション演習Ｉはいらないと思うので。

肯定的な意見では、「研究を行う上で役に立った」「幅広く学ぶことができた」「自主的に学び発表する場があった」等の理由が挙げられており、一定の教育効果があったと考えられるが、他方では「授業目的が分からない」「授業の時期に偏りがある」等の不満が散見された。講義内容や開講時期等の検討が求められる。

設問 7. 本研究科では年度初めに指導教員がガイダンスを行っていますが、その内容は適切であったと思いますか。

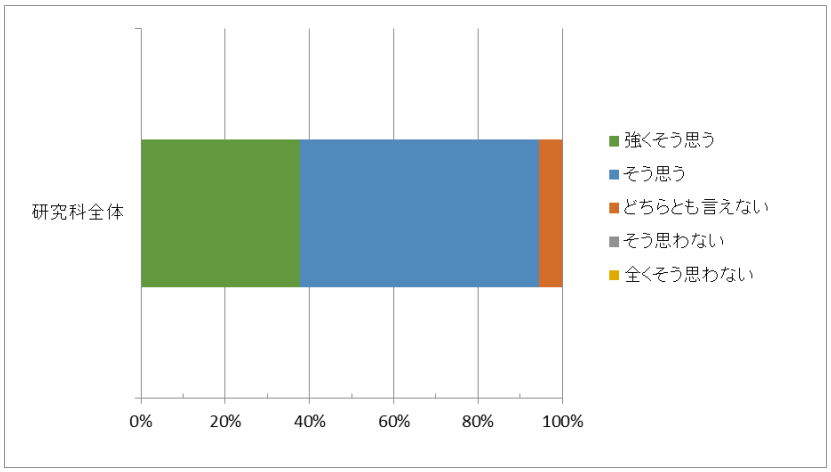


図Ⅱ－ 7. ガイダンス内容は適切だったか

「強くそう思う」と「そう思う」の合計は 84%で、平成 29 年度(70%)、平成 30 年度(58%)から改善が見られた。一方、「そう思わない」「全くそう思わない」が 3%となり、平成 29 年度(0%)、平成 30 年度(0%)から微増した。今後も引き続き改善の努力を続ける必要がある。

[教員の指導について]

設問 8. (1) 所属するコースの教員の学生への指導や対応に満足していますか。



図Ⅱ－ 8. 教員の指導や対応に満足か

「強くそう思う」および「そう思う」の合計は 95%で、平成 29 年度(85%)、平成 30 年度(83%)と比較して改善した。「そう思わない」「全くそう思わない」は 0%で、平成 29 年度(5%)、平成 30 年度(6%)から減少した。引き続き、大学院生への指導や対応の改善に努めることが重要である

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない
5. 全くそう思わない

【生物学コース】

1. 例えば、あることについて疑問があったときに、丁寧に対応してくれた。それは自分の担当教員だけではなく、所属コースの教員のほとんどがそうで、非常に嬉しかった。
1. 親身になって相談いただき、採集や実験などもかなり協力していただいたからです。
1. 適度に討論しているので、大きく方針がずれたまま数カ月経つことはなかった。
2. 指導のための積極的なコンタクトがある。

【分子生命科学コース】

1. 所属する研究室の指導教員が、的確でわかりやすい指示・アドバイスをくれるから。
1. 熱心に指導してもらったため。
1. 指導教員の指導が素晴らしかったから。
1. 学生と教員の間でのコミュニケーションが図りやすかったから。
2. 学生のことを気にかけてくれる先生方がいる。
2. 良い先生方が多いと感じる。
2. 自立性を重んじながらも、わからないことなどがあった時は、助言してくれた。
2. 多くの協力を得られたため。
2. 私含めて、細かく様子を見てくれているから。
3. 教育にリソースを割いていない。実験データのみを求められるため。

【生物資源学コース】

1. 研究についてはもちろんですが、学生のうちに身に付けるべき考え方やスキル、社会人として必要な考え方も教えていただいたからです。
1. 頭が上がらないほど。
1. 研究だけではなく、人間として成長できることを多々学んだから。
2. 質問すれば、きちんと回答してもらえたため。
2. 自分の進捗に合わせて、何度も相談・指導を与えてくれたので。
2. 熱心にご指導していただいたから。
2. 高圧的でなく、丁寧に対応してくれたため。
2. 講義や研究でわからないことがあった際に、必ずフォローしてくださったため。

【園芸農学コース】

1. 研究以外のことでも相談にのってもらうことができたため。
1. 指導やサポートを熱心に行っていたため。
2. 学生のことも考えた計画などを立てていただけるため。
2. フレンドリーな人が多いから。
2. 教授が親切。

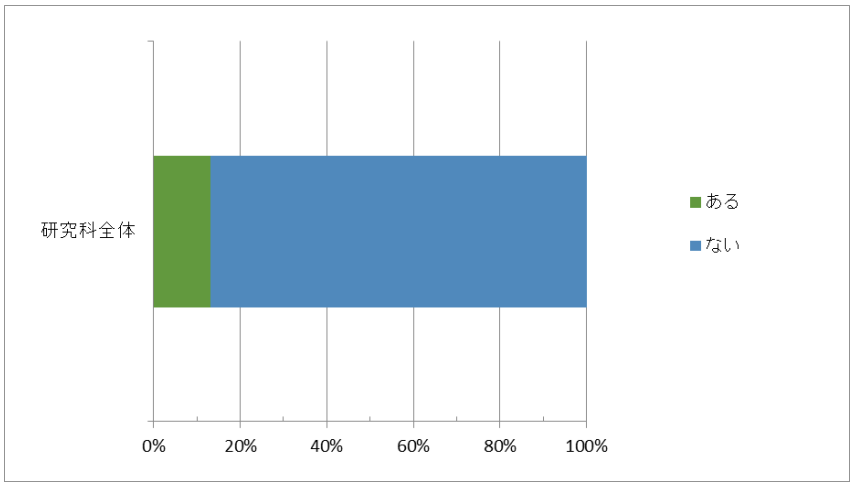
【地域環境工学コース】

1. 少人数での授業が多かったため、質問もしやすく、丁寧に対応してもらえたから。
3. 教員の機嫌に振り回される時があったため。

概ね「丁寧な指導を受けることができた」という回答であったが、継続的な改善努力が重要である。

設問 9. 大学院で履修した科目の成績評価についてお尋ねします。

(1) 成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはありますか。



図Ⅱ－ 9. 成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはあるか

「成績評価の結果に疑問や異議を持ったことがある」が 13%で、平成 30 年度(8%)から微増、平成 29 年度(15%)と同程度であった。重要な項目であるためさらなる改善が望まれる。

(2) 疑問や異議があったとき、あなたは実際にどこに相談し、その対応に満足しましたか。

【生物学コース】

1. 相談はしなかった。

【分子生命科学コース】

2. 疑問や異議があったことがないので、わからない。

【生物資源学コース】

1. まず、相談していいものなのか、知らなかった。

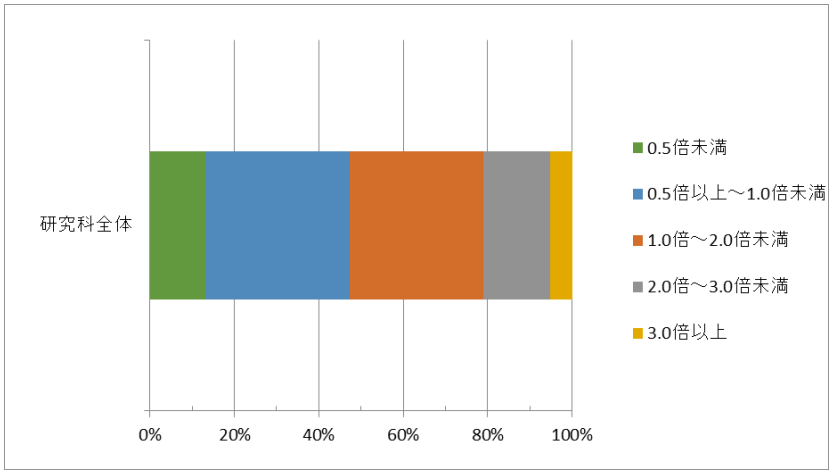
【園芸農学コース】

1. 特に相談などはしていない。
1. 何もしていない。
2. 友人らに相談して、常に解決していたため、事務などに相談することがなかった。

疑問や異議があったときに実際に相談等の行動をした大学院生は少なかったが、相談窓口の周知や相談等がしやすい環境を整備することが望ましいと思われる。

[学生の主体的学習について]

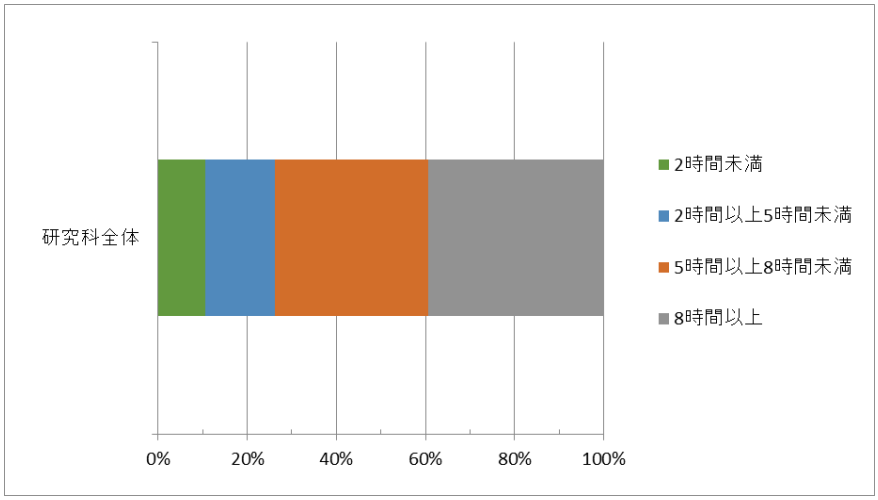
設問 10.（1）講義の受講に当たり、受講期間中にあなたは講義室での受講時間の何倍程度の時間を、講義室外での学習（予習や復習など）に当てましたか。大学設置基準では、2 単位の科目の場合、90 時間の学習が必要になりますが、講義室では 30 時間（90 分を 2 時間として扱い×15 回＝30 時間）の学習時間しかありません。そこで、講義室外での学習が必要になります（講義室での 2 倍の時間）。学習時間には<u>インターネットを利用した情報収集、講義でのプレゼン準備やレポートの作成、研究室内でのプレゼン準備などに要した時間も含めて</u>も構いません。ある 1 科目を想定して回答しても構いません。



図Ⅱ－ 10(1)．1 日平均どの程度の時間を予習や復習に充てたか

講義時間の 2 倍以上の時間を予習や復習に充てたという回答は 21%で、 平成 29 年度(25%)、平成 30 年度(25%)と同程度であり、大学設置基準を満たしていない大学院生が多い。カリキュラムの見直しを含めた改善が必要と考えられる。

(2) 学術特別研究（学術研究プログラム）、実践特別研究（実践研究プログラム）あるいは課題研究（社会人入学者）に要した時間は 1 日平均どの程度ですか。実験に要した時間に加え、研究に必要な文献調査や文献講読に要した時間も含めて計算して下さい。



図Ⅱ－ 10(2)．1 日平均どの程度の時間を研究に充てたか

5 時間以上もしくは 8 時間以上と回答した大学院生が 73%で、 平成 29 年度(60%)、平成 30 年

度(67%)から改善が見られた。引き続き、学生が研究に対するモチベーションを維持できるよう指導を工夫していく必要がある。

設問 11. 大学院教育では、学生自身の主体的、意欲的な学習が要求されます。
(1) あなたは講義についてどのような姿勢で取り組みましたか。

【生物学コース】
・自分の研究テーマに何らかの形で生かすことができるように一生懸命取り組んだ。各科目の全体像と細かい部分、共に理解できるように努めた。
・修士研究に還元する姿勢。
・講義そのものは面白いが、履修が必要な授業が多すぎて、研究活動の邪魔だった。
・渡された資料などは、事前に軽く目を通してから、授業に臨んだ。
・自分の研究分野以外についても、積極的に取り組んだ。

【分子生命科学コース】
・基本的には、出された課題をこなすことしか、していなかった。
・できるだけ自分の研究に活かせる内容はないかということを考えながら、受講した。
・学びとる姿勢。
・普通。
・講義で学んだことが、自らの研究テーマに少しでも役立てられたらという思いで、積極的に取り組んだ。
・知識を蓄え、自分の分野との共通点を見出す。
・力を身に付けられるよう、積極的に学んだ。
・基本的な予習と復習をした程度。
・しっかりと知識を取り込む。
・講義を通して生じた疑問は必ず解決するよう心がけた。

【生物資源学コース】
・先生や受講生の考え方を学ぼうという姿勢で取り組みました。
・疑問点や発表者に対しての質問を積極的に行った。
・学部の時より、意欲的な状態を維持したまま臨めた。
・学部在籍時と同様。
・専門的な知識を身に付けたいという思いで、取り組んだ。
・学部とは違い、自分の力でプレゼンを作ったり、勉強することが多かったため、講義以外の時間を費やして、進んで努力した。
・発表中心の講義が多かったため、発表が上達するよう意識して取り組んだ。
・大学院生として研究を行う上で、自分に欠けた知識を補っていくために、真剣に取り組んだ。
・ノートの取り方や資料の整理には気を遣いました。
・学んだことが自分の力になるように、また、自分の研究の助けになるように取り組んだ。

【園芸農学コース】
・主体的：客観的＝6：4
・積極的に参加するよう心掛けました。
・自分の研究に利用できないか。
・より専門的であったため、集中して講義に取り組んだ。講義で不明な点は、自身で調べるようにした。
・学部生時代とは異なり、主体的に取り組むよう心がけた。
・与えられた課題の中で、疑問に思ったことは当日の講義で質問できるようにしていた。

【地域環境工学コース】
・全てを吸収できるように臨んだつもりです。
・意欲的。

多くの大学院生が主体的および意欲的な姿勢で取り組んだと回答しており、教員の提示した要求に応えていると思われる。

⑵ 大学院在学中のカリキュラムで、もっとも印象に残った科目があれば、その科目名と理由を記入して下さい。

【生物学コース】
・節足動物研究法・生殖生物学実習・野生動物調査法：自分にとっては、実際に野外に出て、何かを学ぶことは楽しくて、そのような形で生物学を学べるのは、大学・大学院ならではだなと思った。
・プレゼンテーション演習：プレゼンテーションに対する新たな知見を得られた。
・森林保全生態学実習
・山地流域保全学：普段あまり知ることのない地すべりという現象を詳しく知ることができた。
・臨海実習：泊りがけで集中して取り組むことができ、大学院ならではの講義だったからです。
・プレゼンテーション演習Ⅰ：あまり身にならない内容だった。

【分子生命科学コース】
・プレゼンテーション演習Ⅱ：英語かつ人前で発表することの大変さを学び、日本語のみのプレゼンの楽さを学んだ。
・坂元先生の生化学特論：実際に自分の行っている研究に還元できる内容が多くあり、とてもためになった。
・プレゼン演習Ⅱ：英語での口頭発表の簡素なやり方を学んだ。
・プレゼン演習Ⅱ：ニコラス先生のネイティブな英語を聞くことができ、楽しかった。
・植物分類学：野外採集をして探究活動を行うことが、自分にとって新鮮な経験だったから。

【生物資源学コース】
・プレゼンテーション演習Ⅰ：苦しかったから。

・研究方法論は印象に残りました。各専門家である先生たちの研究概要やこれまでの人生・考え方について聞ける、貴重な概念だったからです。
・プレゼンテーション演習Ⅰ：長い時間、連続拘束される割に、理科学系向けの内容ではなく、あまり重要性が感じられなかった。対象とする学生を間違えてる気がする。
・プレゼンテーション演習Ⅰ（集中講義、夏季休み中に実施）：他の科目と比べ、異色だったため。
プレゼンテーション演習Ⅰ：就活への応用ができて、ためになったと感じたため。

【園芸農学コース】
・植物分類学：実際に植物に触れて学べたため。
・プレゼンテーション演習Ⅱ：講義を通じて、他学科の人とコミュニケーションを取れて、楽しかったです。
・植物分類学：座学で知識を学ぶだけでなく、実際に自身で採集した植物の分類や標本を作ったことがとても印象的だった。
・作物栽培学。
・プレゼンテーション演習Ⅱ：英語で楽しくプレゼンの練習ができた。

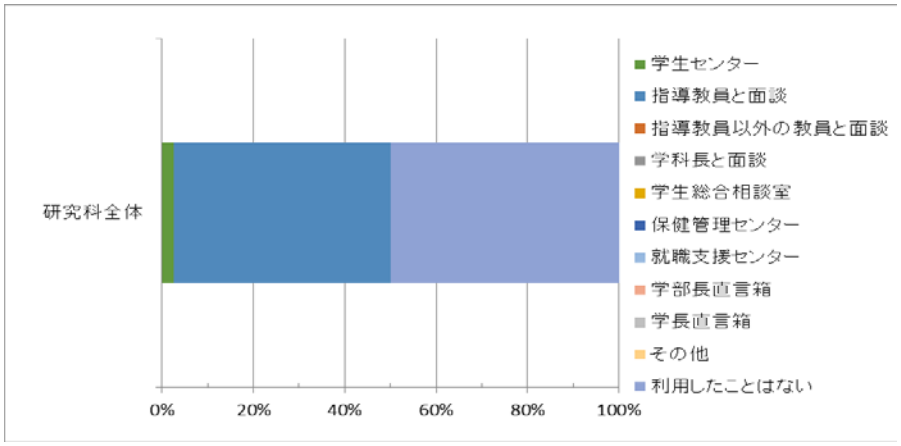
【地域環境工学コース】
・国際食料経済学A
・「白神の自然」：接することのほとんどなかった白神山地に実際に行って、学ぶことができた。

プレゼンテーション演習Ⅰおよびプレゼンテーション演習Ⅱについて否定的な意見と肯定的な意見の両方があった。過去には、平成26年度から平成28年度、平成30年度は内容に対する不満が多かったが、平成29年度は肯定的な意見が多かった。学生の状況や考え方によって受け止め方が様々である。今後も検討が必要である

[学生への教育支援、 施設・設備について]

設問 12. (1) 本研究科や本学では皆さんに助言したり、皆さんからの相談・苦情を受け付けたり、皆さんのニーズを把握するために、以下のようなルートを用意しています。在学中あなたは次の(1)～(3)の項目について主にどれを利用しましたか。( )内に番号を記入して下さい。

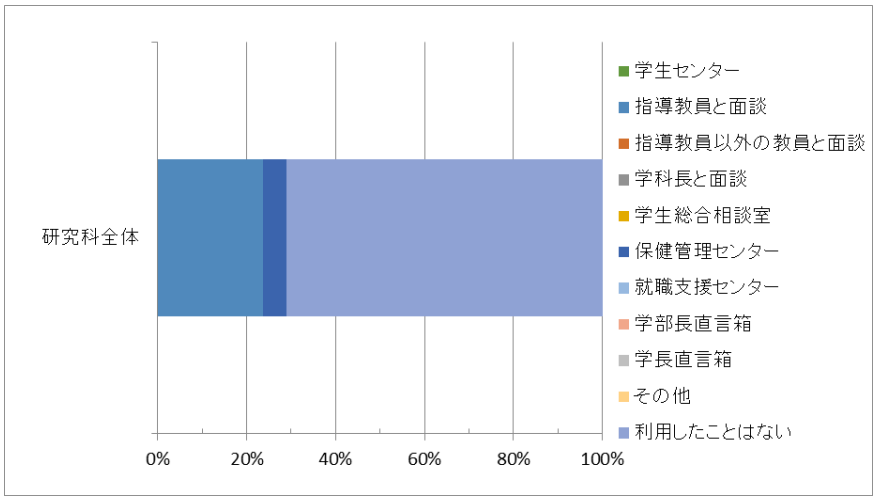
(1) 学業



図Ⅱ- 12(1). 学業に関する相談窓口

50%の学生が「利用したことがない」と回答し、平成 29 年度(18%)、平成 30 年度(25%)と比較して増加した。相談した学生の多くは「指導教員と面談」(全体の 48%)であった. 教員と大学院生の間の垣根を低くする努力を継続することが必要と思われる。

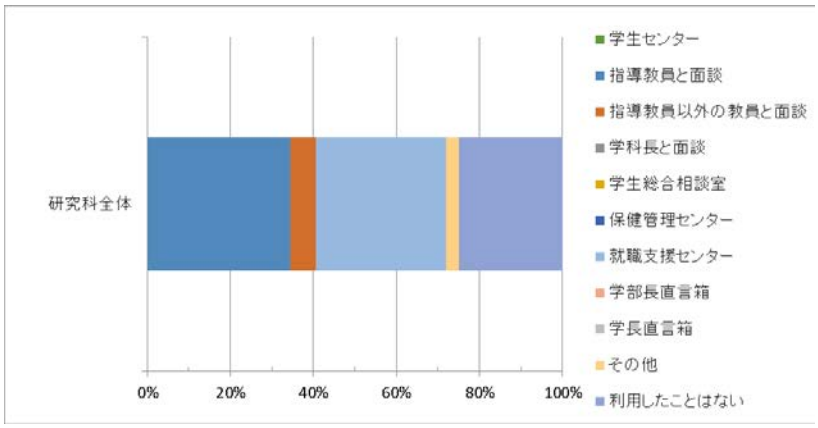
(2) 学生生活



図Ⅱ- 12(2). 学生生活に関する相談窓口

大学院生の 71%が「利用したことがない」と回答しており、平成 30 年度の 48%から大きく増加している。学生生活に関する相談ができる窓口が複数用意されていることを周知する努力が必要と思われる。

(3) 進路



図Ⅱ－ 12(3)．進路に関する相談窓口

就職支援センターの利用は 32%であり、平成 29 年度(44%)と比較すると減少、平成 30 年度(31%)と同程度であった。「利用したことがない」との回答は 32%で、平成 29 年度(16%)、平成 30 年度(25%)から増加していた。就職支援センターを周知する努力が必要と思われる。

(2) それぞれの対応に関して改善すべき点があれば以下に簡潔に記入して下さい。

【生物学コース】
・自分の指導教員には、学業から進路の面まで様々なことで相談していただき、感謝しています。自分の所属しているコース・分野に関連した就職情報が就職支援センターで得られないような気がして、利用しなかった。周囲の人に聞いても、自分で就活の情報を探したと言っていた。

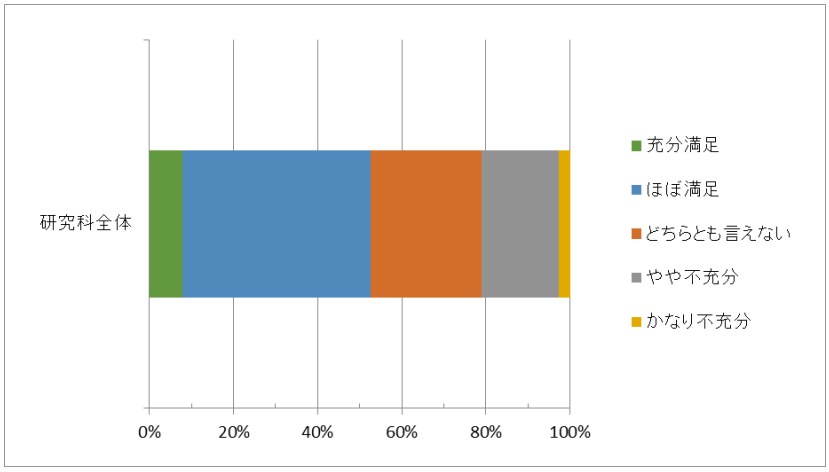
【園芸農学コース】
これら、1～9 のルートがあることを初めに知らせていただきたいです。

回答数は少ないが、多様な相談窓口の存在を知らせるなどの改善をすべきである。

設問 13. 本学部の以下の施設について、どのように感じていますか。
(1) 下表の該当する欄に〇を書き込んで下さい。

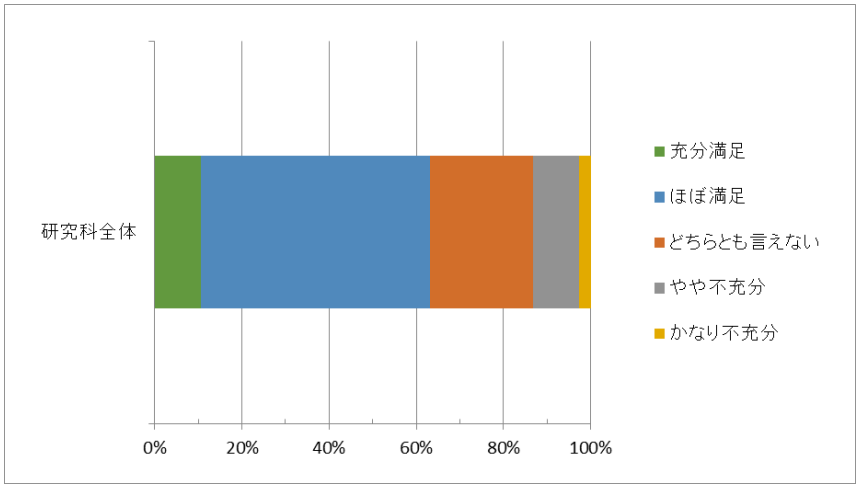
評　価 施　設	1. 充分満足	2. ほぼ満足	3. どちらとも言えない	4. やや不充分	5. かなり不充分
1. 講義室					
2. 実験・実習室					
3. 情報処理演習室					
4. 蔵書室（4 階）					
5. 学生自習室、学生控室（2 階）					
6. 修士研究を行った研究室					

1. 講義室

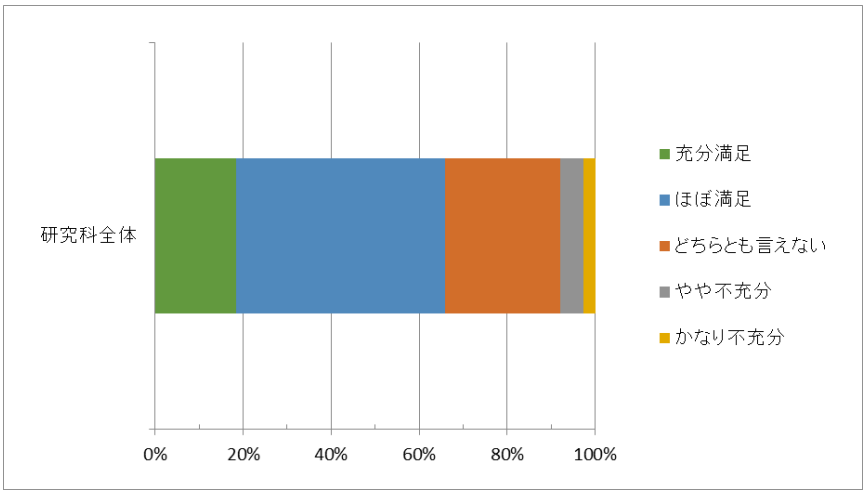


図Ⅱ－ 13(1) － 1. 本学部の施設に対する満足度（講義室）

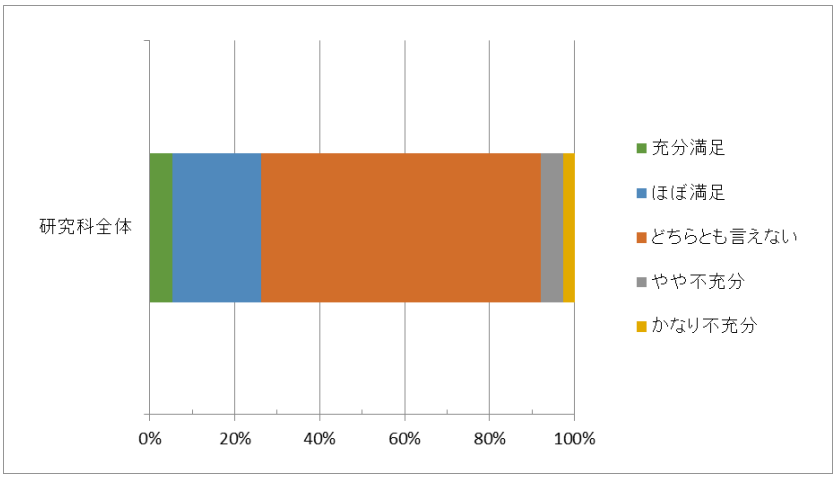
2. 実験・実習室



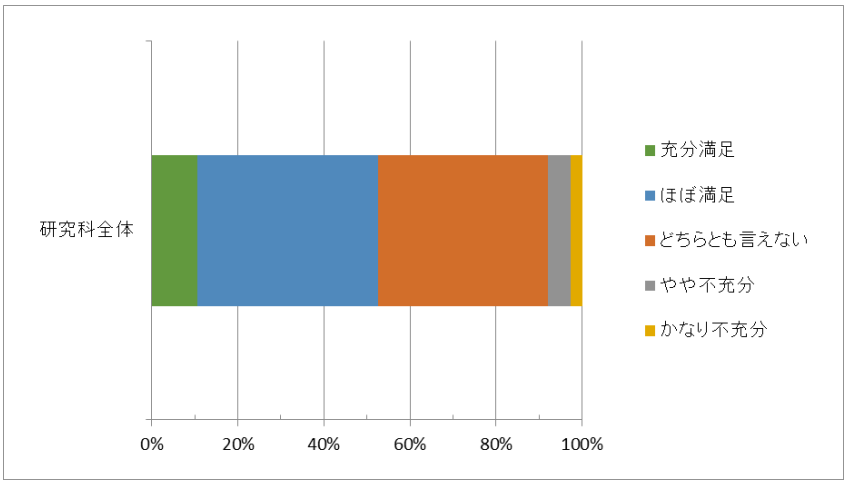
図Ⅱ－ 13(1) － 2. 本学部の施設に対する満足度（実験・実習室）



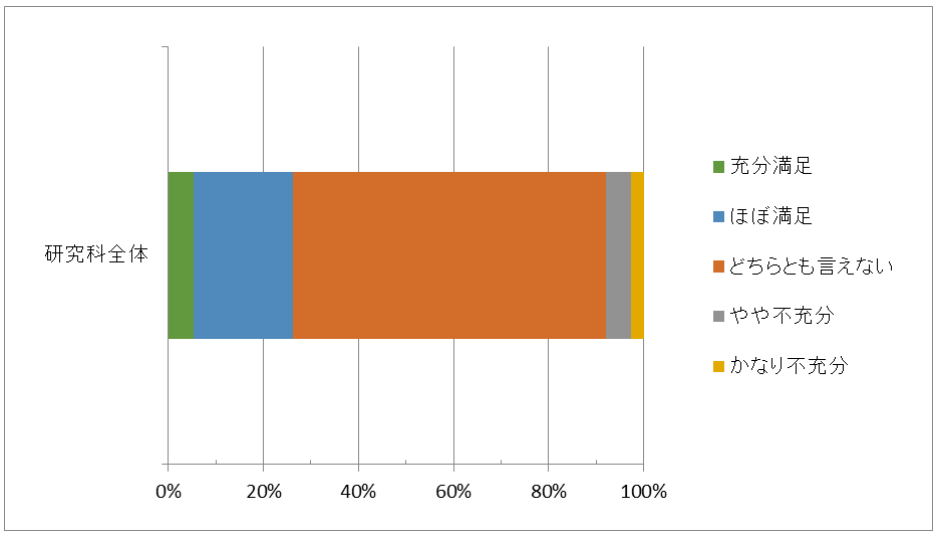
図Ⅱ－ 13(1) － 3. 本学部の施設に対する満足度（情報処理演習室）



図Ⅱ－ 13(1) － 4. 本学部の施設に対する満足度（蔵書室［4 階］）



図Ⅱ－ 13(1) － 5. 本学部の施設に対する満足度（学生自習室、学生控室［2 階］）



図Ⅱ－ 13(1) － 6. 本学部の施設に対する満足度（修士研究を行った研究室）

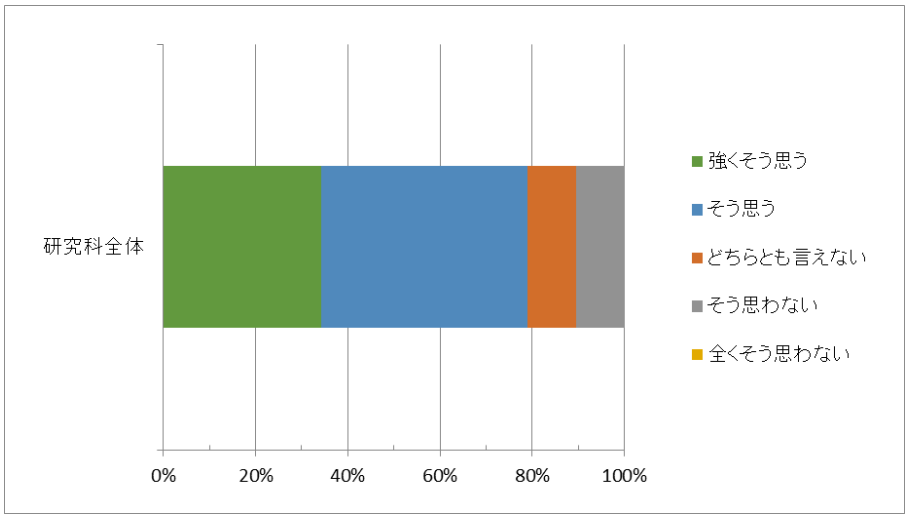
本学部の施設について、１．講義室、２．実験・実習室、３.情報処理演習室、４.蔵書室、５.学生自習室・学生控室（２階)、６.修士研究を行った研究室の６箇所を対象に満足度を聞いた。6.修士研究を行なった研究室の満足度が26%にとどまり、平成27年度(77%)、平成28年度(30%)、平成29年度(26%)、平成30年度(23%)と低迷している。

(2) 各施設に対する要望がありましたら具体的に記述して下さい。

例年と同様に講義室や研究室の冷暖房管理に関する要望が複数あった。これらを受けて、数年前よりいくつかの講義室に冷房設備を設置するなど改善を図っている。様々な制限のもとでこれらの要望に即座に答えることは容易ではないが、学生への理解を求めるとともに、継続して改善していく必要がある。

・廊下や階段を含めた講義室を新しくしてほしい。特に講義室の固定型の机が狭いので、広くしてほしいです。
特にありません。
・蔵書室がどこにあるのかわからない。
・冷房が欲しい。
・コラボ三階の講義室が狭いので、他の場所で講義を優先的にしてほしい。
・クーラーを設置してほしいです。
・各教室の暖房設備の強化。
・農生棟のエアコン(空調）。
・水利実験室等の外にある実験室に「Wi-Fi」を入れてほしいです。
・研究室によって、学生部屋の有無があるので、できれば研究室一つに対して、学生部屋一部屋が与えられるような環境があればよいと思います。
・研究室（ゼミ室）、エアコンを早い時期から使えるようにしてほしい。
・実験室と学生部屋を分けてほしい。
・講義を行う場所だけでいいので、ちゃんとしたエアコンをつけてほしい。また、エアコンがついてる場所で講義を行ってほしい。夏は暑く、冬は寒いため、集中できない。
・立地の都合上、四階の大講義室は夏場西日が強く、暑くて講義に集中できなかったため、冷房が必要だと思う。
・昼に暖房を止めないでほしい。
・冷房がついていない講義室は、夏辛い時がある。
・実験スペースを拡張してほしい。
・修士研究を行った研究室居ついて。学生の人数が以前よりだいぶ多くなり、スペースが不十分だと感じるようになりました。
・研究室と学生控室が同じで、スペースが少なかった。
・蒸留装置をコラボにも置いてほしい。
・エアコンを新しくする。
・時計をつけてほしい（講義室)。

設問 14. (1) 修士研究について満足していますか。



図Ⅱ－ 14(1)．修士研究に対する満足度

研究科全体で「強くそう思う」と「そう思う」を合わせた肯定的評価は 79%であり、半数以上が修士研究に満足しているとの結果であったものの平成 30 年度の 81%からは微減した。また、「そう思わない」という否定的評価が 10%であり、前年度に比べて 2 ポイント増加した。平成 25 年度から平成 28 年度までの傾向として肯定的評価の減少（平成 25 年度から順に 82%→76%→65%→63%）が続いていたが、平成 29 年度および平成 30 年度については改善が見られた．否定的意見に関しては、期待していた結果が得られなかったこと、計画通り進められなかったことなどが挙げられた．引き続き、問題点の究明と改善の努力を続ける必要がある。

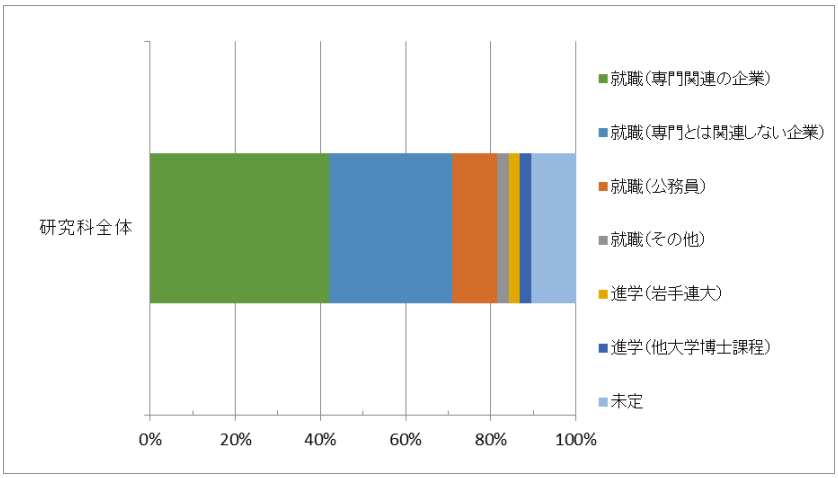
(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 学部からの引継ぎ研究を続けた。内容がより専門的になり、大変な部分もあったが、とてもやりがいがある研究テーマだったと感じている。
1. 自分で解決できないことがあれば、指導教員に聞いて解決できるといったようなことができる環境だったと思った。
1. 素晴らしい先生のご指導により、良い結果を出せた。
1. 学部の研究より内容が充実しており、有意義であった。
1. 学部以上の内容を深く知ることができ、学会等の外部で自分の研究を発表する機会があるから。
1. 研究内容をより理解して取り組むことができるように、他大学の専門的な分野の先生との交流機会があったから。
1. なんとか走りきれたから。
1. Interesting and useful research of daily good.
1. 指導教員のわかりやすく的確な指導のおかげで、納得のいく修士論文を書き上げることができたから。
1. 研究から身に付けた実験技術や考え方は、社会人になっても応用できると思ったため。
1. 終始適切な指導をもらえたことや、自分の考えを相談し、有意義なディスカッションを行えた事が良かったため。
2. 主体的に活動できたため。

2. 自分のやりたい研究をやらせてもらえたからです。
2. 学部からの引継ぎ研究を続けた。内容がより専門的になり、大変な部分もあったが、とてもやりがいがある研究テーマだったと感じている。
2. 学部時代よりも幅広い研究ができたため、満足している。
2. 一つの研究に三年携わることで、研究成果が目に見える形で表れたため。
2. 興味のある事柄について、理解を深められたので、楽しかった。
2. 卒業研究をより深めることができたことが、やり切れていないと感じる部分があるからです。
2. 今のところ、やり切ってると思っているから。
2. 研究についての知見をある程度深めることができたから。
2. うまくいかなかったことの方が多いが、それも含め、試行錯誤しながら研究を進められたから。
2. いろんな面で成長できた。
2. やり残したこと、もっとやりたかったことは大いにあるが、好きなだけ研究をさせてもらった指導教員の先生には感謝しています。
2. プレゼン能力が上がったと思うため（学会発表やゼミの発表により）。
2. 最終的な到達点へ向かいきれなかった。
2. 研究に打ち込む環境が用意されていたから。
2. 相談しやすい環境で、研究に安心して取り組めた。
3. 時間が足りなく、より深い結果を出せなかったこと。
3. 時間かかる実験が多い中、講義との都合合わせに難儀したため。
3. 自身の持つ、優柔不断さが悪い方向に働いたから。
3. 失敗が多く、思うように実験が進まなかった。
4. あまり研究を進めることができなかった。
4. 予定通り、進行しなかったから。
4. 自分の力量不足のため。
4. 結果を出せなかったから。

設問 15. (1) 研究科修了後のあなたの進路は次のうちのどれですか。

1. 就職（専門関連の企業）　2. 就職（専門とは関連しない企業）　3. 就職（公務員）
4. 就職（その他）　5. 進学（岩手連大）　6. 進学（他大学博士課程）　7. 未定

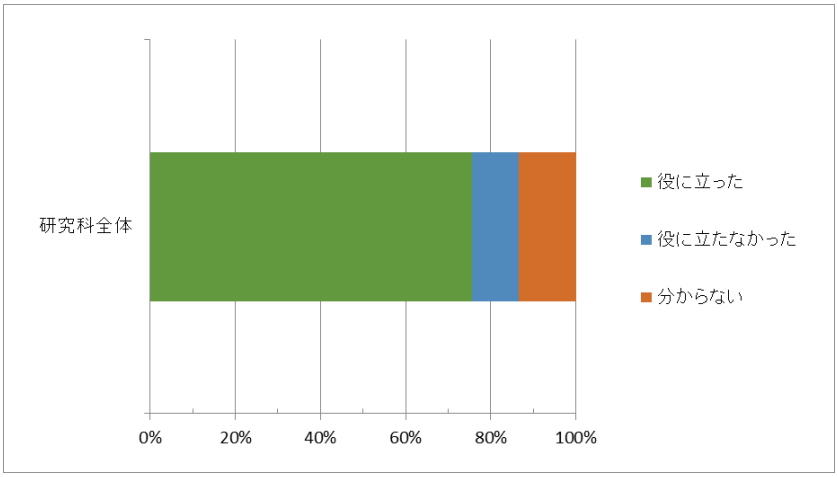


図Ⅱ－ 15(1)．研究科修了後の進路

研究科全体では「専門関連の企業」への就職が 36%であり、昨年度(36%)から増加したと。「専門とは関連しない企業」への就職は 29%と昨年度の 36%から減少した。一方、「公務員」は 10%と昨年度より 9 ポイント減少した。一方、博士課程進学者は 5%であり、昨年度の 6%と同程度であった。

(2) 本研究科のカリキュラムで学んだことは、進路の決定にどのように影響しましたか。

1. 役に立った　　2. 役に立たなかった　　3. 分からない

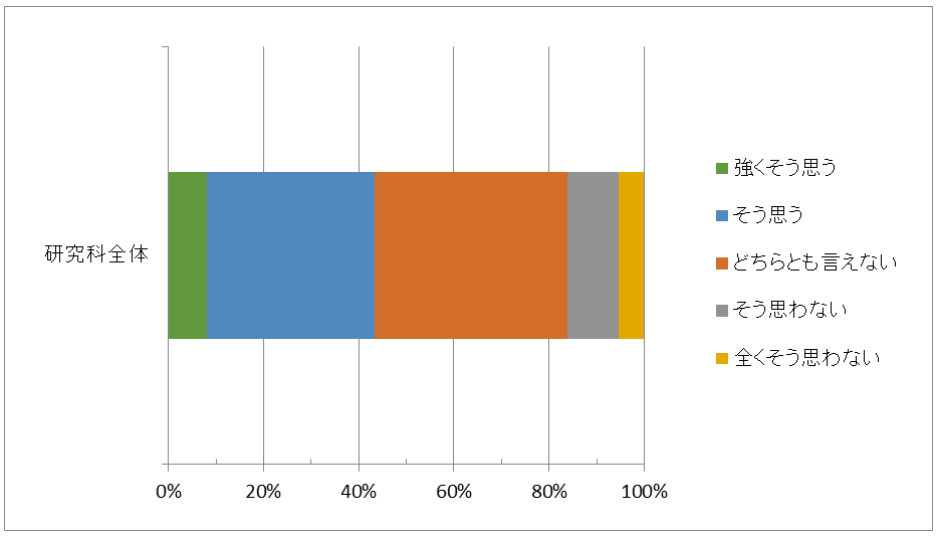


図Ⅱ－ 15(2)．研究科で学んだことはどのように進路に影響したか

研究科全体では「役に立った」が 74%で昨年度(61%)に比べて増加した。「役に立たなかった」は 11%で昨年度（8%）から増加した。

(3) 本学および本研究科の進路支援に対する取り組みは十分だったと思いますか。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない　5. 全くそう思わない

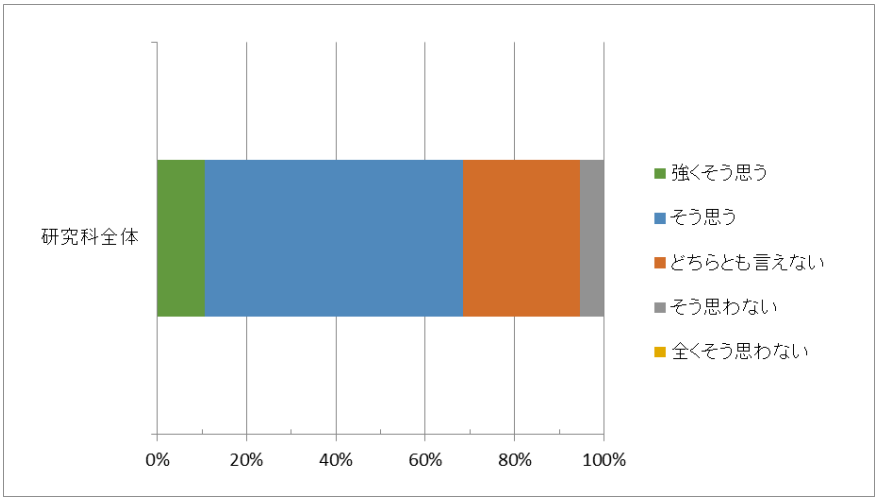


図Ⅱ－ 15(3)．進路支援の取り組みは十分か

研究科全体では、肯定的評価が 42%で昨年度(56%)から低下した。否定的評価も 16%で昨年度 19%と同程度であった。支援の方法等について見直す必要があると考えられる。

設問 16. (1) あなたが本研究科を修了するに当たり、大学院修了者に相応の知識および学力を身に付けたと感じていますか。

1. 強くそう思う 2. そう思う 3. どちらとも言えない 4. そう思わない 5. 全くそう思わない



図Ⅱ- 16(1). 大学院修了者に相応の知識および学力を身に付けたか

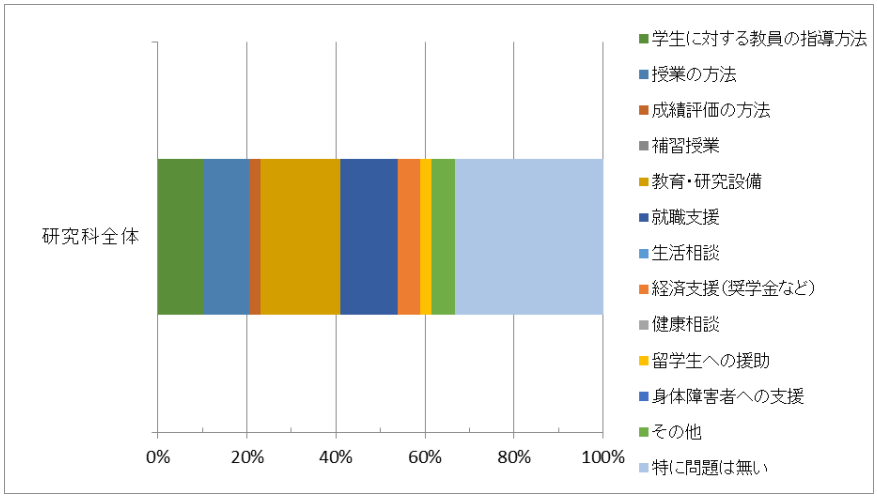
過去 3 年で見ると、研究科全体では、「強くそう思う・そう思う」(42%→64%→68%)、「どちらとも言えない」(42%→25%→26%)、「全くそう思わない・そう思わない」(16%→11%→5%)であった。本年度は、修士課程を通して相応の知識・学習を習得したとする意見は増加し、習得していないとする意見が減少した。今後も継続してその傾向を把握し、習得度の低下が客観的にも認識されるようであればその理由とともに分析し改善する必要がある。

(2) 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 授業で広く学ぶことができたから。
1. 地方大学ではあるが、就活の時にも、他大学（特に帝大）の人たちに負けないという自負のもとに行うことができた。実際に他大学でも適当な研究生活しかしていない人はたくさんいると感じ、いわゆる学歴フィルターに属さずに就活することができた。
2. 大学卒業時よりも深く自分の研究テーマについて、学ぶことができた。
2. 学部四年生から計三年間、研究・実験を通じて、知識と技術を学べたからです。
2. 学会発表できた。
2. 専門的な知識や技術を身に付けることができたため。
2. ほぼそう思うが、自分の勉強不足で苦労したことが幾度かあったかなと感じている。
2. 少なくとも入学前と比べても明らかに知識を身に付けている。
2. 学会などを通して、思考力を身に付けられたと感じたから。
2. 論理的、計画的に考える力が身についた。
2. 専門的な内容を自主的に深く追求することができたため。

2. 学会等で外部の人々と意見が互いに交換できたため。
2. 実験を頑張ったから。
2. 以前よりも研究室内の文献発表等で質問された時に、的確に返答できるようになったと感じたから。
2. 専門知識が身についたため。
2. 多くの知識を得た。
2. 研究活動を完遂したから。
2. カリキュラムに加え、修士研究を行ったことで身についた。
3. 日本のスケールで考えれば、相応なものかもしれません。世界のスケールで考えたら、どうなのか。
3. もう少し自主的に勉強すればよかったと思う。
3. 大学院に入学する前に比べれば、身に付けたと感じるが、同じ学年の大学院生と比べるとそうは言えないから。
3. 自分で判断しにくいため。
3. 調べたり、知識をつければつけるほど、次が来るため。
3. 弘前大学大学院生以外の院生の方々と比較したときに、修了者に相応の知識や学力が身についたと自信を持って言えないため。まだわからないので、将来自分が修了者にふさわしいのかどうかわかると思います。
3. 他の人と比べたこともなく、相応の知識のラインもよくわからないため。
3. 他社の能力を詳しく知らないから。
3. 知識の習得に関して、もっと努力する余地があったと考えているから。
3. 自分の研究に関する知識はある程度身に付けたが、そうでない分野は不足していると感じるため。
4. 学部の延長、実験のみの生活だから。
4. 研究が進むごとに感じるから。

設問 17. （1）本研究科の教育活動の中で最も早急に改善すべきと思われる点を、次の項目の中から一つを選んで下さい。



図Ⅱ－ 17(1)．本研究科の教育活動の中で最も早急に改善すべき点

「学生に対する教員の指導方法」が平成 29 年度の 24%から、平成 30 年度に 9%に減少したが、令和元年度 11%にやや増加した。一方、「教育研究設備」は例年と同じ 18%で「問題あり」の中で最も高かった。また、「就職支援」も、平成 30 年度 15%に引き続き 13%と比較的高かった。「その他」として、「授業数」、 「学生全員が、より早い段階でキャリアについて考える場面が設けられるとよいと思う。」という意見があった。

(2) 上記で選択した項目に関する要望を具体的に記入して下さい。

1. 学生に対する教員の指導方法　2. 授業の方法　3. 成績評価の方法　4. 補習授業
5. 教育・研究設備　6. 就職支援　7. 生活相談　8. 経済支援（奨学金など）
9. 健康相談 10. 留学生への援助　11. 身体障害者への支援
12. その他（　　）　13. 特に問題は無い

1. 就職活動を否定するような先生がいる（学生は実験がメインだ、と言い張る）。人格否定するような物言いをする先生がいる。
1. 教員の機嫌で生徒を振回すのはやめるべき。
1. 研究教育に時間を割いてほしい。
2. 必修科目の講義内容。
2. プレゼンテーション演習は他学科（特に文系）では役に立つとは思うが、理系学部では必須にする必要性を感じなかった。実際、プレゼンテーション演習の知識は学会発表等の機会で一切生かされていない（生かしようがない）。
2. 学びたい専門科目の講義を増やしていただきたいです。
2. プレゼン演習Ⅰ（必修）の日時が決定するのが遅かった。
3. 各研究室での成績評価基準の統一。
5. 実験室での作業が多い中、冷暖房が調整できる装置が設置されていないため、実験に支障が出ている。
5. 水利実験室等の外にある実験室に「Wi-Fi」を入れてほしい。
5. ネズミやらスズメバチ、アブが多いから。
5. 様々な器具の増設。
5. 実験スペースをもっと増やしてほしい。
5. エアコンの設備を整える。
6. 大学院生向けの進路計画の立て方などの実施。
6. 就職支援に関するイベントがあっても、自分の専門分野に関わる就職情報を得ることができないといったようなことがあったし、周りの人もそうだと言っていた。自分は学んだことをほぼ生かさない就職先から内定をもらったが、就職活動は苦労した。
8. 給付型奨学金の要項を増やしてほしい。
8. 農生は TA の時間が限られ過ぎている。他学部はたくさん TA をしているのが不公平だと強く感じている（修士の二年間は研究に集中するうえでも、学内でアルバイトができるということが重要だと感じる）。そして、TA の申請についても、もっと厳しくするべきだと感じている。全く学校に来ていないのにも関わらず、TA の申請だけ行って、何もしていないのに、お金をもらっている人がいると、真面目に実験をし、後輩への指導も無償で行うことに虚しさを感じる。今のシステムはおかしすぎる。

10. 留学生が研究生活を送る上で、英語での講義や掲示があれば、より過ごしやすいのではないかと思います。
12. 冷房が欲しい。
12. 授業数が多い。
13. 講義室によって、冷暖房の差があるため。どこでも快適に過ごせるようにしてほしい。

授業、研究設備、就職支援など様々な要望があった。可能なことから改善に着手しつつあるが、さらに対応を充実させ早急に行うことが望ましい。

設問 18. 本研究科で学生が期待する教育を受けるとともに充実した学生生活を送るために、希望する点や、大学または学部が改善すべき点があれば具体的に記入して下さい。

・研究にかける時間などを具体的に決めてもいいのではないかと思います。就職活動では「学生らしいことを楽しんで」、「遊んだほうがいい」などと言われますが、実際にそうできる大学院生は少ないと思います。指導教員や学生自身に任せるだけでなく、基準があればと思います。
・特にありません。
・研究室が狭い。人数に応じて、部屋貸し出してほしい。
・Wi-Fi 設備が悪い。実験室の机を割り当てられているが、Wi-Fi がこないことがある。
・海外の論文がほとんどアクセスできず、読むことができない。多くの論文を読むことで新しい知見を得られるため、大学での論文購読を積極的に行ってほしい。
・副コース科目をなくす、または減らす必要があると思う。そうでないと自分の所属コースの勉強・研究が進みにくい。
・各研究室の状況の共有。
・コラボレーションセンター一階(今は農生一階) の昼の弁当を売っている時間をもう少し延ばせないか。
・何かと就職しろと前面に押し出して、アピールしてくるが、もう少し進学への選択もあってもいいのでは？と思った。
・喫煙所の設置（各階に）設置すれば、喫煙者は外に出なくて済むし、非喫煙者は煙を吸わなくて済むから。
・学生の PC、プロジェクター等、教育設備に対する知識を研究室間でやった方がいい。
・大学院において取得する単位数をもう少し減らしていただけたら助かります。
・農学生命科学研究科の施設等を教育・人文学部と同じくらい立派にしてほしい。なぜ、本研究科だけ薄暗くて、講義室の椅子や机が古くさいのかと感じてしまう。
・食堂かコンビニが農生からは遠いため、何かしら軽食が買えるようなもの（自販機など）があればよかった。
・教員への指導。
・少し回答がズレるかもしれないが、留学生の受け入れに関して、もう少し考えた方がいいと思う。誰でも留学できるようにしてしまうと、受け入れた研究室での負担が大きすぎる。日本語も英語もまったく話せない人に実験を教える日本人のことも考えるべき。しかもそのような留学生が研究室に何人もいると大変。やる気がある留学生なら、こちらも頑張るが、だらしのない、約束を守れない人だと、こちらが苦しい思いをする。そして、TA の申請についても、もっと厳

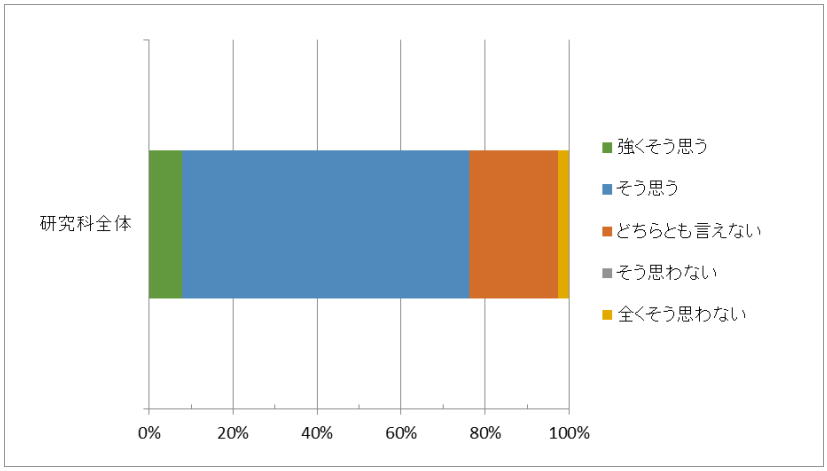
しくするべきだと感じている。全く学校に来ていないのにも関わらず、TA の申請だけ行って、何もしていないのに、お金をもらっている人がいると、真面目に実験をし、後輩への指導も無償で行うことに虚しさを感じる。今のシステムはおかしすぎる。

・教務・総務に行った時の対応が良くないと思った。特に「今担当の人がいないので」と言われてしまうことが数多くあるので、もっと多くの人がしっかり対応できるようにしてほしい。

継続して要望や批判に耳を傾け、改善を図っていく必要がある。

設問 19. (1) 総合的に判断して本研究科・コースの教育・研究に対する取組み・姿勢に満足していますか。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない　5. 全くそう思わない



図Ⅱ－ 19. 本研究科・コースの教育・研究に対する取組み・姿勢に満足か

(2) 上記のように回答した理由を記入してください。

1. 毎日が楽しくて、充実していると感じるから。
1. 優秀な先生方にご指導いただけた。・教務・総務の方々にいつも丁寧にご対応してくださった。
2. やりたいことができたから。
2. 研究に充てる時間が充分にあり、特に不満点はなかったからです。
2. 自分が行いたい研究ができているため。
2. 各学生が自分の研究に取り組む環境があった。
2. 基本的に不自由なく教育が受けられていると感じるから。
2. 自分の専門分野に特化しただけのカリキュラムではなく、農学生命科学専攻として、様々な分野に触れることができたからです。
2. 一部の授業以外に対して不安はなく、概ね満足した。
2. 二年間、問題なく過ごせたので。
2. 研究に没頭できたから。
2. 講義、研究を通して、大学院でつけるべきスキルをつけられるカリキュラムになってると考えたから。

2. 講義室は別として、研究室等はとても使いやすく、研究を進めていく中で、特に不満は感じなかった。本研究科の研究に重きを置いてる点はとても良いと感じた。また、研究が進められやすかったと思う。
2. 設備等に少し不満はあったものの、今までご指導してくださった先生方がとても熱心で何度も助けていただいた経験もあり、また、自分自身の研究も納得いくところまで行えたため。
2. 色々思うところはあるが、この学科、研究室で学べたことは、とても大きな財産になったと感じている。
2. 自身の修士研究については、とても満足しているから。
2. 努力次第で高い専門性を身に付けられる環境になっていると思うから。
2. 総合的に成長できたため。
2. 育種に関する研究・講義に関わることができたと思うから。
2. 研究に取り組みやすかった。大学院一年前期の授業（必修）が多かった。
3. 自分の所属コースの先生方には、様々な面でお世話になり、大変嬉しかったが、学びにくい環境、就活を思うように行えない環境もあった。また、自分の所属コースでない先生方にも講義でお世話になり、嬉しかったです。
3. 経営経済流通領域においての専門技術や知識について、学ぶ機会が少なかったと思うため。
3. 学べば学ぶほど、自分でもまだ足りない部分が多いと思っているため。
3. 気にもしていないので、よくわからない。
3. いい人と悪い人がいる。
5. 研究を行える（自立して研究する）学生が育っているとは思えないから。

Ⅲ.　教員対象教育評価アンケート

１．　アンケート調査内容

調査目的：農学生命科学部の教育内容ならびに方法の改善に役立てるため学部教育に関する教員の意識について調査することを目的とした。

調査方法：アンケート用紙を各教員に配布して調査を行った。学生に対するアンケートの設問と共通項目を設けた。

調査対象：令和 2 年 2 月の時点で学部・遺伝子実験施設、生物共生教育研究センター、白神自然環境研究センターに所属する教員とした。

調査期間：令和 2 年 1 月 23 日～2 月 21 日

調査対象教員数：81 名　有効回答者数：74 名　（回答率 91%）

調査項目：設問は以下の通りである。

設問 1. あなたの所属学科およびコースをお答えください。

設問 2. 本学部および本研究科の理念、教育目的および教育目標を知っていますか。

設問 3. あなたが所属する学科・コースの教育目的を知っていますか。

設問 4. 本学部の入学者受け入れ方針（アドミッションポリシー）を知っていますか。

設問 5. あなたが所属する学科・コースの教育目的は学部ホームページにあるとおりですが、学科（教養教育科目および専門教育科目）およびコースのカリキュラムはその目標によく合致すると感じていますか。

設問 6. あなたはシラバス作成時に、学科・コースの教育目的や教育目標に従った講義内容にしようとしていますか。

設問 7.

(1) 授業内容がシラバス記載の内容と異なることをどのようにお考えですか。

1. シラバスと授業内容が異なることは極力避けるべきである
2. より良い授業内容を提供するためには、ある程度異なっても構わない
3. 担当科目の性格から、異なることは避けられない
4. その他（　　）

(2) 何らかの理由で授業内容がシラバス記載の内容と異なった場合、あなたは受講生に対する説明の必要性についてどのようにお考えですか。

1. 異なる理由を受講生に説明する必要がある
2. 受講生に説明する必要はない
3. その他（　　）

(3) 上記の設問で「2.」と回答した理由を教えて下さい。

設問 8. 本学では「授業方法改善のための学生による授業評価に関するアンケート調査」が平成 15 年度後期から実施されています。その結果についてお尋ねします。

(1) 学生による授業評価の妥当性についてどのようにお考えですか。

1. かなり妥当な授業評価である　2. ほぼ妥当な授業評価である
3. どちらとも言えない　4. やや妥当でない授業評価である
5. まったく妥当でない授業評価である

設問 9. 本学では教育改善のための各種の研修活動（ＦＤ活動）が行われています。ここで言う「ＦＤ活動」とは、学部・研究科・学科・コース等で実施されている教育改善に関わる各種研修活動全般を意味します。

(1) この１年間でどのようなＦＤ活動に参加されましたか。参加された回数をお答え下さい（参加されなかった場合は０を記入して下さい)。

(2) 参加された活動は、教育改善に役立ちましたか。

設問 10. 担当科目において学生の授業時間外の学習を促すためにどのような工夫をしていますか。

設問 11.

(1) 本学部の以下の施設と設備についてどのように感じていますか。該当する欄に○を書き込んで下さい。

(2) 上記で「4. やや不充分」と「5. かなり不充分」を選択した場合、その理由を次の欄に具体的に書いて下さい。

設問 12.

(1) 卒業研究は必要であると思いますか。

(2) 上記のように回答した理由を下欄に分りやすく記入して下さい。

設問 13.

(1) あなたの学科の大多数の卒業生は、本学部での教育により大学卒業生に相応の知識と学力を身に付けたと思いますか。

(2) 上記で「4. そう思わない」と「5. 全くそう思わない」を選択した場合、その理由は何ですか。以下の中から選んで下さい。

設問 14.

(1) あなたの専攻の大多数の修了生は、本研究科での教育により大学院修了程度の専 門知識を身に付けたと思いますか。

(2) 上記で「4. そう思わない」と「5. 全くそう思わない」を選択した場合、その理由は何ですか。以下の中から選んで下さい。

２．調査結果

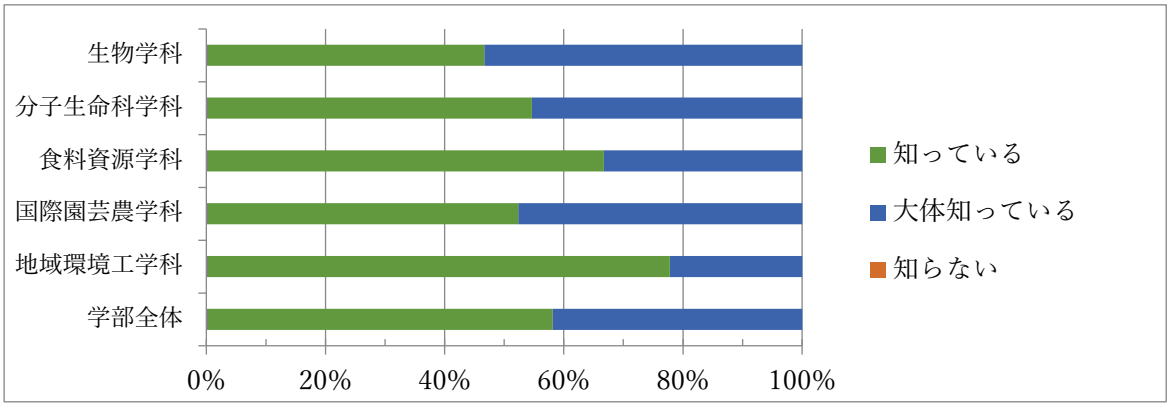
設問 1．あなたの所属学科およびコースをお答えください。

表Ⅲ－ 1．回答率

学科	教員数	回答数	回答率	R 元回答率
生物学科（白神含む）	17	15	88%	82%
分子生命科学科	13	11	85%	77%
食料資源学科	20	18	90%	67%
国際園芸農学科（農場含む）	21	21	100%	71%
地域環境工学科	10	9	90%	91%
学部全体	81	74	91%	76%

3 か年（平成 29～令和元年度）の学部全体の回答率を見ると、79%→76%→91%と推移した。学科毎に見ると、「生物学科」(79%→82%→88%)、「分子生命科学科」(85%→77%→85%)、「食料資源学科」87%→67%→90%)、「国際園芸農学科」(64%→71%→100%)、「地域環境工学科」(91%→91%→90%）と推移している。なお、「白神自然環境研究センター（白神)」は「生物学科」に、「生物共生教育研究センター（農場）」は「園芸農学科」に含めて集計している。本年度においては、全学科の回答率が高い水準で見られた。国際園芸農学科は 100%であった。

設問 2．本学部および本研究科の理念、教育目的および教育目標を知っていますか。

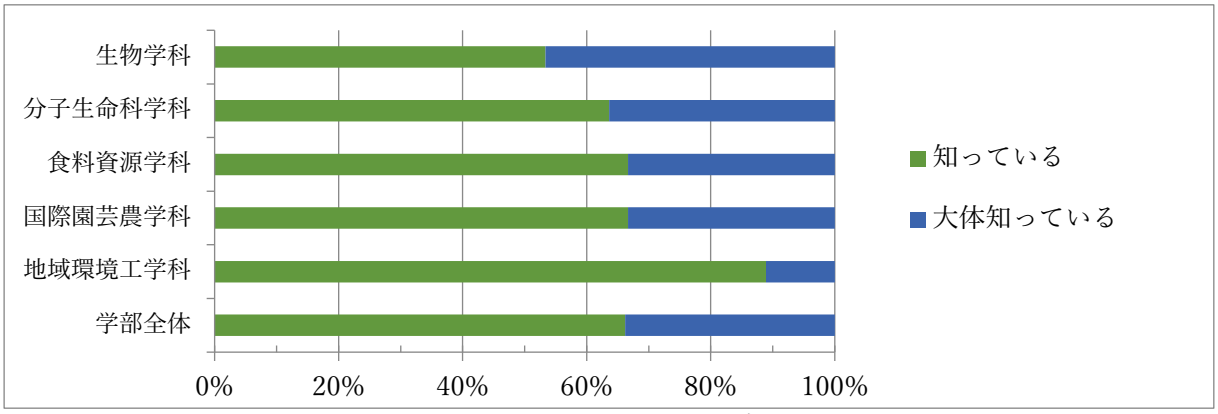


図Ⅲ－ 2.　学部・研究科の理念・教育目的・教育目標の認識

学部・研究科の理念・教育目的・教育目標の認知について、3 か年の推移を学部全体で見ると、「知っている」(51%→57%→58%)、「大体知っている」(49%→41%→42%）と推移している。「知らない」は昨年度の 2%から 0%になった。本年度は「知らない」と回答した人が 0%であることから、回答した教員の大多数が、学部と研究科の理念・教育目的・教育目標を概ね認知している。

3 か年の推移を学科別に見ると、「知っている」は「生物学科」(64%→57%→47%)、「分子生命科学科」(45%→50%→55%)、「食料資源学科」(62%→33%→67%)、国際園芸農学科」(36%→58%→52%)「地域環境工学科」(50%→90%→78%）となった。

設問 3. あなたが所属する学科・コースの教育目的を知っていますか。

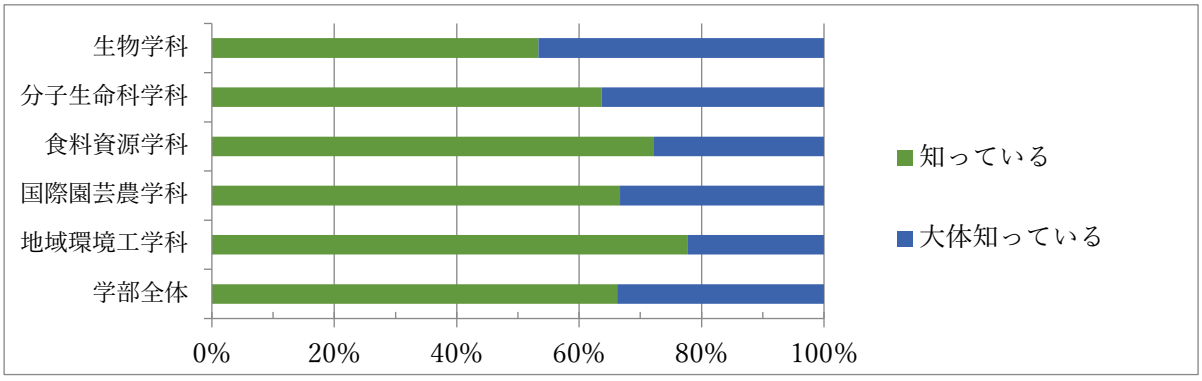


図Ⅲ- 3.　所属学科・コースの教育目標の認識

所属学科・コースの教育目標の認知について、3 か年の推移を学部全体で見ると、「知っている」（59%→54%→66%）、 「大体知っている」（41%→45%→34%）、「知らない（0%→1%→0%）と推移しており、 全教員が概ね認知している。

学科別に「知っている」の 3 か年の推移を見ると、「生物学科」（73%→57%→53%）、「分子生命科学科」（45%→40%→64%）、「食料資源学科」（69%→33%→67%）、「国際園芸農学科」（36%→53%→67%）、「地域環境工学科」（80%→90%→89%）と推移している。特に「地域環境工学科」に「知っている」の割合が高く、「生物学科」の「知っている」の割合が低下傾向である。

設問 4. 本学部の入学者受け入れ方針（アドミッションポリシー）を知っていますか。

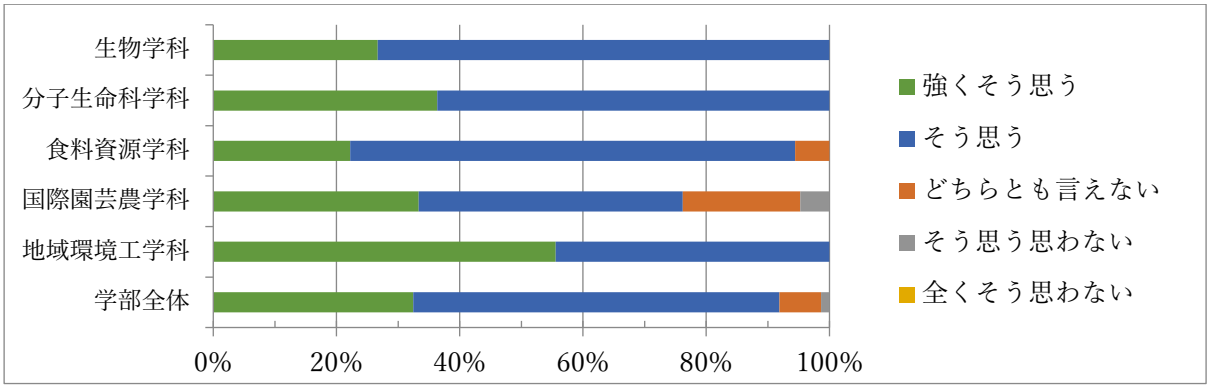


図Ⅲ- 4.　入学者受け入れ方針の認識

アドミッションポリシーの認知について、 3 か年の変化を学部全体で見ると、「知っている」（56%→62%→66%）、「大体知っている」（44%→37%→34%）、「知らない」（0%→1%→0%）と推移している。このように、 教員全員がアドミッションポリシーを概ね認知している。

「知っている」の比率を学科別に 3 カ年で見ると、「生物学科」（72%→57%→53%）、「分子生命科学科」（45%→60%→64%）、「食料資源学科」（78%→50%→72%）、「国際園芸農学科」（34%→63%→67%）、「地域環境工学科」（55%→80%→78%）となっている。

設問 5. あなたが所属する学科・コースの教育目的は学部ホームページにあるとおりですが、学科（教養教育科目および専門教育科目）およびコースのカリキュラムはその目標によく合致すると感じていますか。

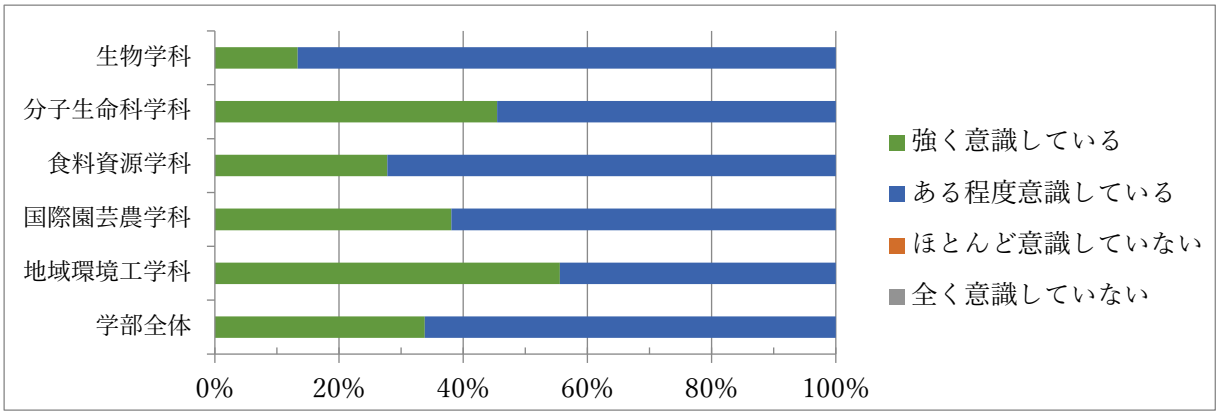


図Ⅲ- 5.　所属学科・コースの教育目標とカリキュラムとの合致

学部全体では肯定的評価（「強くそう思う」と「そう思う」）を 3 か年で見ると、83%→81%→92%であり、 ほとんどの教員が概ね合致すると考えている。

学科別の「肯定的評価」を 3 か年で見ると、「生物学科」が（73%→86%→100%）、「分子生命科学科」（82%→89%→100%）、「食料資源学科」（92%→75%→94%）、「国際園芸農学科」（79%→68%→62%）、「地域環境工学科」（90%→100%→100%）となっている。

設問 6. あなたはシラバス作成時に、学科・コースの教育目的や教育目標に従った講義内容にしようとしていますか。

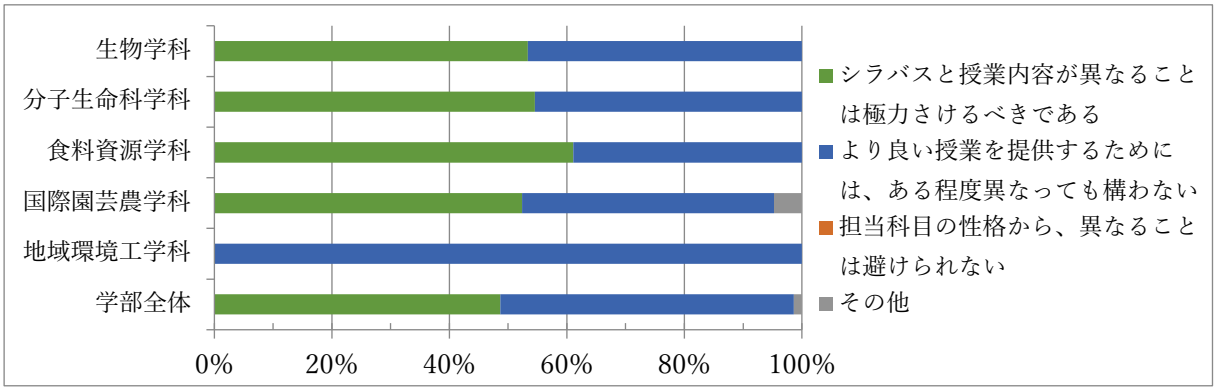


図Ⅲ- 6.　教育目的・目標に従ったシラバスの作成

3 か年で見ると、学部全体で「強く意識している」（25%→34%→34%）、「ある程度意識している」（69%→66%→66%）と推移した。全ての教員が「強く」あるいは「ある程度」意識しており、全体として「教育目的・目標に従ったシラバスの作成」が意識されている。

学科別に「強く意識している」と「ある程度意識している」の合計割合を 3 か年で見ても、「生物学科」が 91%→100%→100%、「分子生命科学科」91%→100%→100%、「食料資源学科」100%→100%→100%、「国際園芸農学科」が 93%→100%→100%、「地域環境工学科」が 100%→100%→100%であり各学科で教育目的・目標に従ったシラバス作成が意識されている。

設問 7. (1) 授業内容がシラバス記載の内容と異なることをどのようにお考えですか。



図Ⅲ- 7(1). シラバスと実際の授業内容の不一致に対する見解

3か年で見ると、学部全体で、「極力さける」(51%→44%→49%)、「ある程度異なってもかまわない」(49%→56%→51%)、「異なることは避けられない」(0%→0%→0%) と推移している。このように教員の意見は、「極力さける」と「ある程度異なっても構わない」にほぼ分かれている。

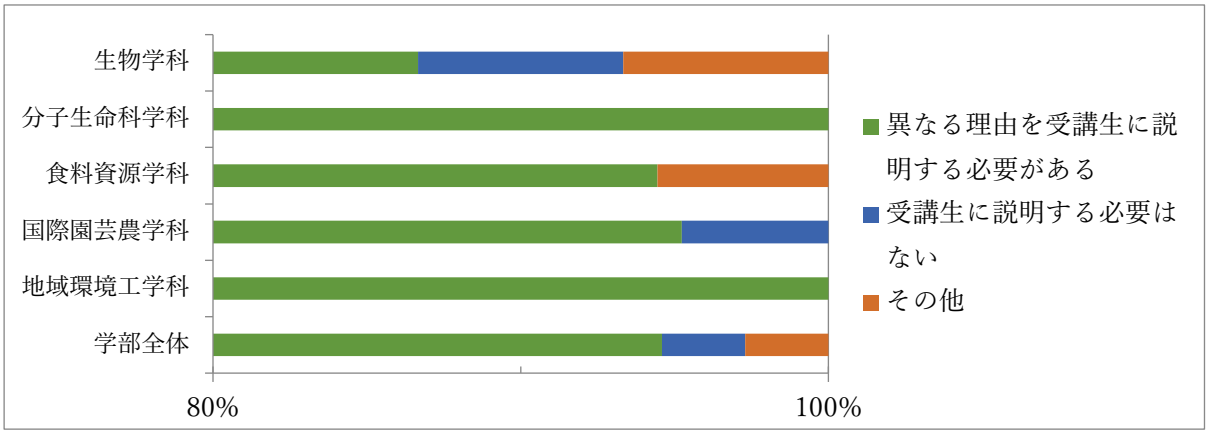
学科別の3か年の推移は以下の通りである。「生物学科」では「極力さける」64%→29%→53%、「ある程度異なってもかまわない」36%→71%→47%、「分子生命科学科」では「極力さける」45%→60%→55%、「ある程度異なってもかまわない」55%→40%→45%、「食料資源学科」では「極力さける」54%→67%→61%、「ある程度異なっても構わない」46%→33%→39%、「国際園芸農学科」では「極力さける」71%→44%→52%、「ある程度異なっても構わない」29%→56%→43%、「地域環境工学科」では「極力さける」10%→20%→0%、「ある程度異なっても構わない」90%→80%→100%となった。

「国際園芸農学科」で「その他」の回答が1名いた。

「その他」の「自由記述欄」には、以下の記述があった。

・何らかの説明が履習者にあるべきと考えます。理由は様々事情もあるのではと思います。

(2) 何らかの理由で授業内容がシラバス記載の内容と異なった場合、あなたは受講生に対する説明の必要性についてどのようにお考えですか。



図Ⅲ- 7(2). シラバスと授業内容が異なる場合の受講生への説明

3か年で見ると「異なる理由を受講生に説明する必要がある」が92%→95%→95%と大勢を占めている。しかし、「説明する必要はない」との意見も3%→3%→3%ある。

「その他」の「自由記述欄」には、以下の記述があった。

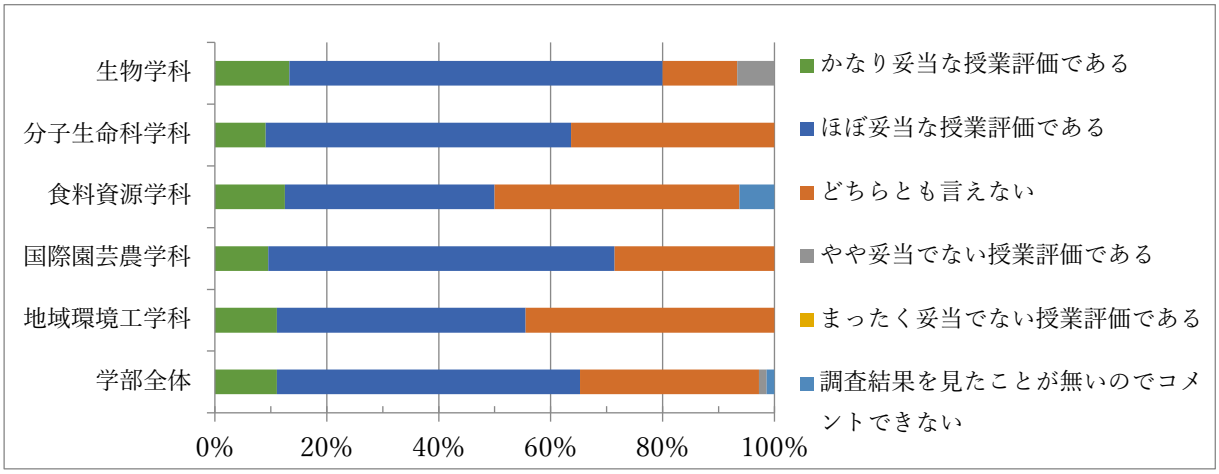
【食料資源学科】
・ケースバイケースで

(3) 上記の質問で２．と回答した理由を教えて下さい。

回答なし

設問 8. 本学では「授業方法改善のための学生による授業評価に関するアンケート調査」が平成15 年度後期から実施されています。その結果についてお尋ねします。

(1) 学生による授業評価の妥当性についてどのようにお考えですか。

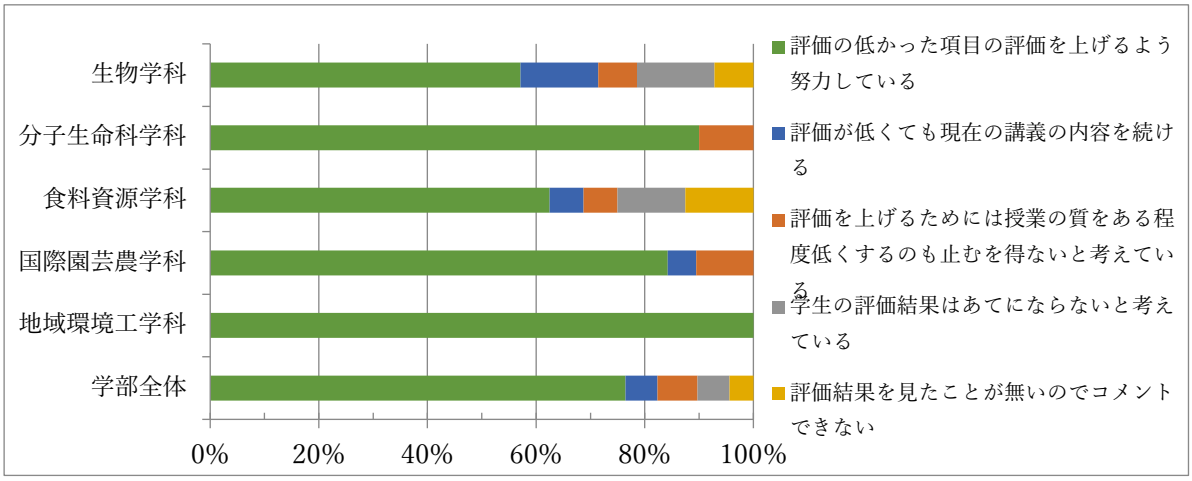


図Ⅲ- 8(1). 学生による授業評価アンケートの妥当性

3 か年で見ると学部全体では、「かなり妥当」と「ほぼ妥当」の合計は 56%→60%→65%と推移した。「やや妥当でない」と「まったく妥当でない」の合計は、0%→3%→1%と推移した。6 割近い教員は学生による授業評価を概ね妥当だと肯定的に受け止めているが、 32%の教員は「どちらとも言えない」と懐疑的である。「調査結果を見たことが無いのでコメントできない」が 1%みられる。

「かなり妥当」と「ほぼ妥当」の合計の 3 か年の変化を学科別に見ると、「生物学科」(64%→86%→80%)、「分子生命科学科」(27%→40%→64%)、「食料資源学科」(31%→67%→50%)、「国際園芸農学科」(64%→53%→71%)、「地域環境工学科」(60%→50%→56%) となっている。本年度の「学生による授業評価」への信頼感の度合いは、全ての学科で 5 割以上だった。

(2) 授業評価の結果を改善に利用していますか。



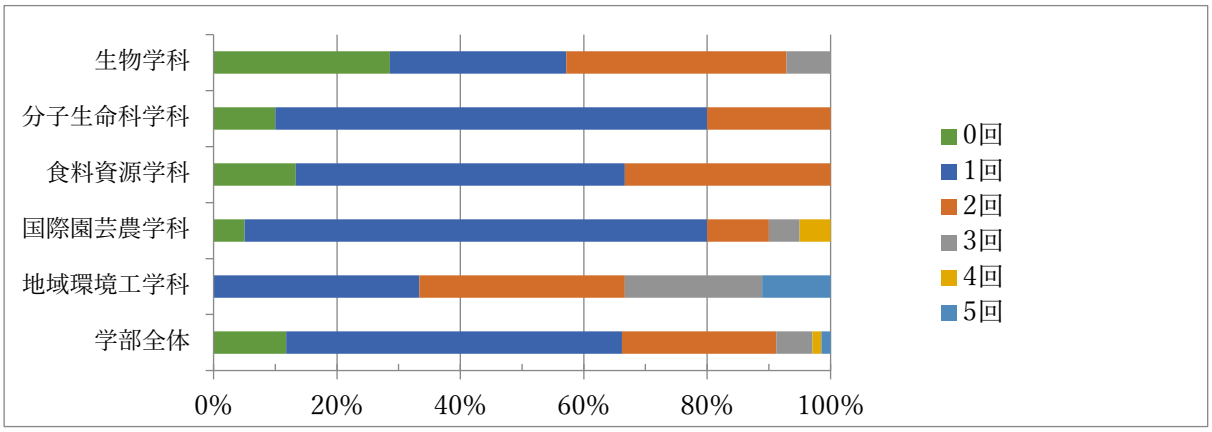
図Ⅲ- 8(2). 学生による授業評価結果の授業改善への利用

3か年で見ると、学部全体では「評価の低かった項目の評価を上げるよう努力している」(86%→81%→76%)、「評価が低くても現在の講義の内容を続ける」(3%→5%→6%)、「評価を上げるためには授業の質をある程度低くするのもやむを得ない」(7%→5%→7%)、「学生の評価結果はあてにならない」(0%→3%→4%)、「評価結果を見たことがないのでコメントできない」(2%→6%→4%) となった。約8割の教員が授業評価結果を授業の改善に利用しているが、漸減傾向が見られる。また、問8(1)と同様に「調査結果を見たことが無いのでコメントできない」が4%みられ講義担当前の新任教員の回答と思われる。

設問 9. 本学では教育改善のための各種の研修活動（ＦＤ活動）が行われています。ここで言う「ＦＤ活動」とは、学部・研究科・学科・コース等で実施されている教育改善に関わる各種研修活動全般を意味します。

(1) この１年間でどのようなＦＤ活動に参加されましたか。参加された回数をお答え下さい。（参加されなかった場合は０を記入して下さい)。

1. 学部主催のＦＤ活動



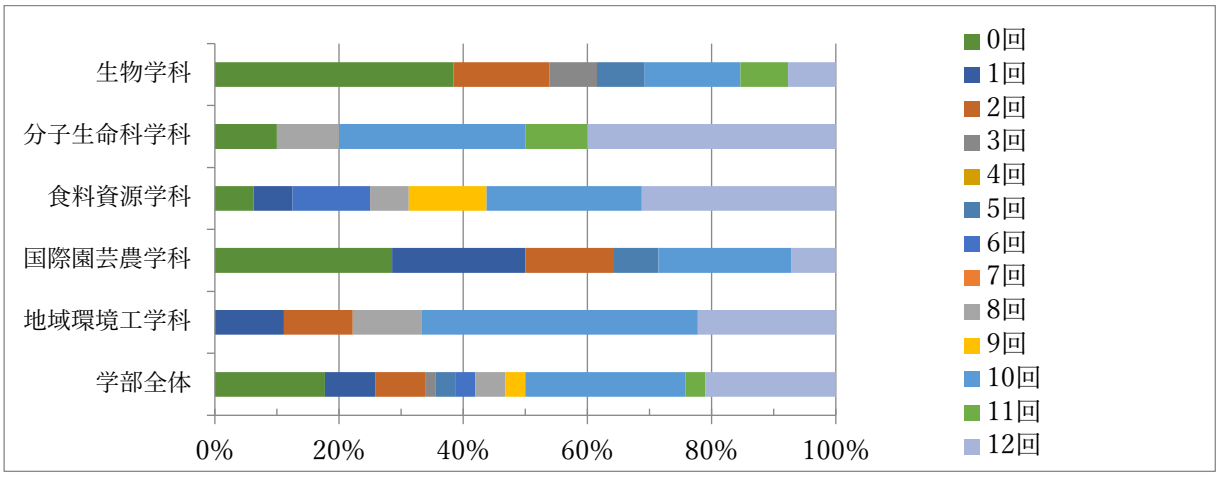
図Ⅲ- 9(1) - 1. 学部主催のＦＤ活動への参加回数

学部主催のＦＤ活動への参加回数毎の集計を3か年で見ると、学部全体で0回（17%→15%→12%)、1回（34%→41%→54%)、2 回（36%→25%→25%)、3 回（11%→25%→6%）であっ

た。1 回以上、ＦＤ活動に参加した教員は 85%を占めている（昨年度 85%）。

学部全体の延べ参加回数を 3 か年で見ると 78 回→92 回→92 回と推移した。１教員当たりの参加回数を 3 か年で見ると、学部全体では 1.5 回→1.6 回→1.4 回と推移した。

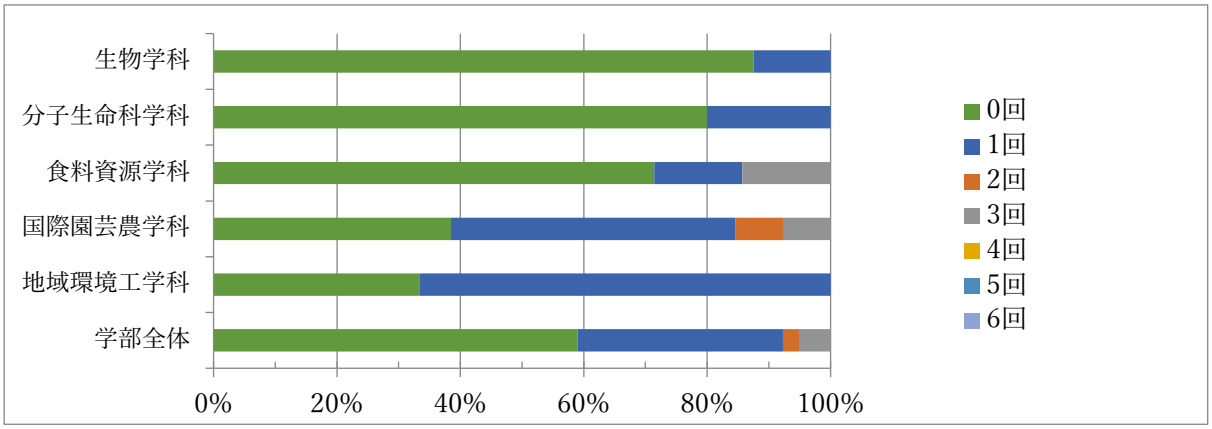
2. 学科主催のＦＤ活動



図Ⅲ- 9(1) - 2. 学科主催のＦＤ活動への参加回数

学科主催のＦＤ活動への参加回数は、多い教員で 12 回で各学科で 1 名以上いる。学科別の 1 教員当たりの参加回数を 3 か年で見ると、「生物学科」(3.7 回→4.4 回→4.2 回)、「分子生命科学科」（10.2 回→8.1 回→9.7 回)、「食料資源学科」（1.8 回→6.8 回→8.7 回)、「国際園芸農学科」(0.2 回→0.9 回→3.9 回)、「地域環境工学科」(1.2 回→8.3 回→8.3 回)、となっている。「生物学科」、「分子生命科学科」が継続して多く、「国際園芸農学科」が少ない。「食料資源学科」、「地域環境工学科」が昨年から大きく増加した。回数の違いは、学科によってＦＤの位置付けに違いがあるためと考えられる。

3. その他の活動

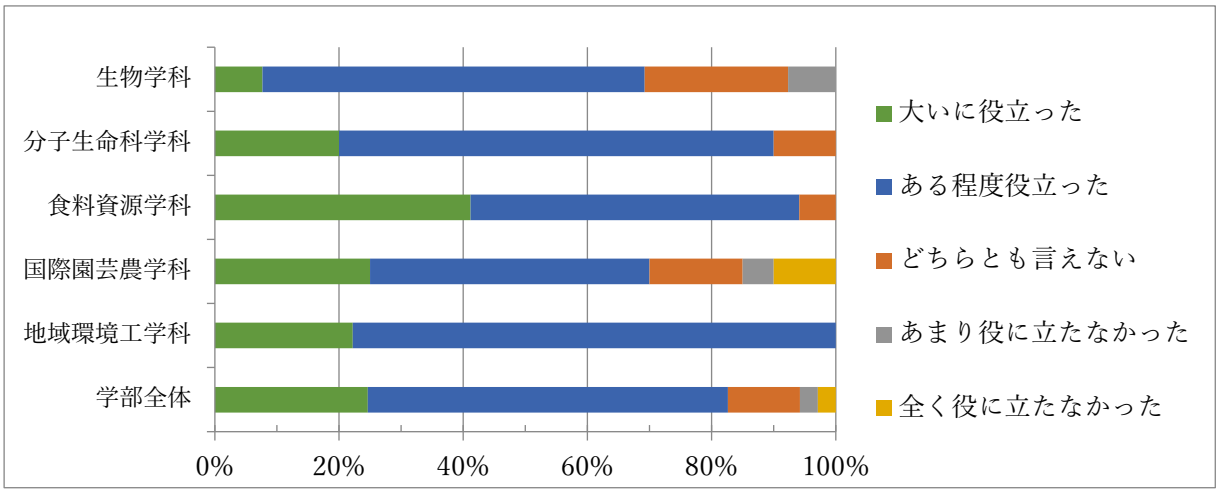


図Ⅲ- 9(1) - 3. その他の活動への参加回数

その他のＦＤ活動とは、大学全体のＦＤ活動や学外でのＦＤ活動である。参加回数毎に 3 か年で見ると、学部全体では 0 回（56%→67%→59%)、1 回（23%→14%→33%)、2 回（19%→11%→%)、3 回(4%→6%→3%)、4 回(0%→0%→0%)、5 回（0%→3%→0%）となっている。

学科別の回答者１人当りの平均参加回数を３か年で見ると、「生物学科」(1 回→1.2 回→0.1 回)、「分子生命科学科」(1 回→0 回→0.2 回)、「食料資源学科」(0.2 回→0.7 回→0.6 回)、「国際園芸農学科」(0.9 回→0.5 回→0.8 回)、「地域環境工学科」(1 回→0.8 回→0.7 回)と推移している。約 6 割の教員が、学部や学科主宰以外のＦＤ活動へは参加していない状況が認められる。

(2) 参加された活動は、教育改善に役立ちましたか。

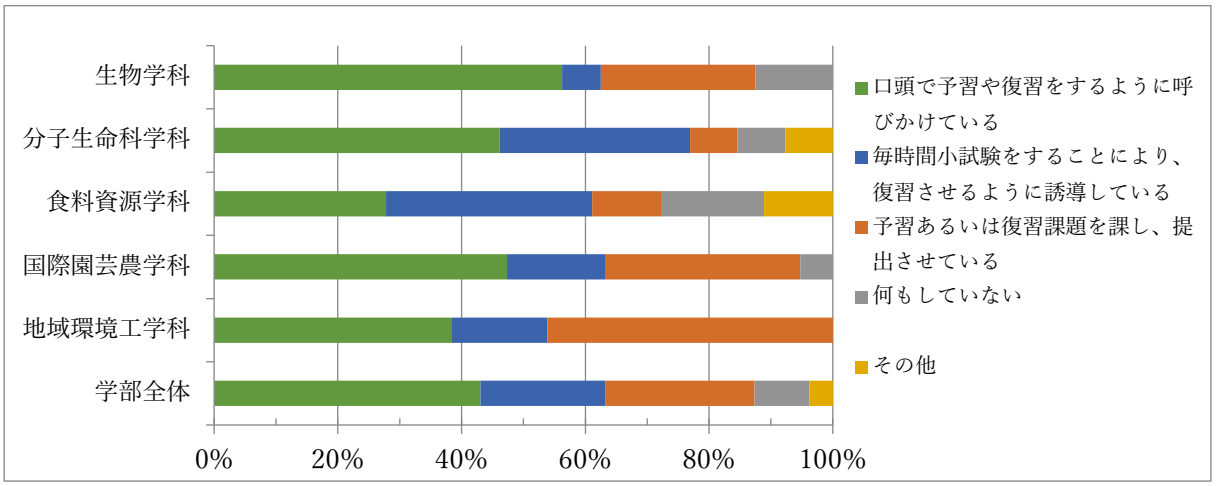


図Ⅲ- 9(2). 参加したＦＤ活動の教育改善効果

学部全体では 3 か年で見ると、肯定的評価(「大いに役立った」25%、「ある程度役立った」58%)が 76%→74%→83%であった。8 割の教員がＦＤ活動の教育改善効果を認めているが、「どちらとも言えない」(12%) や「あまり役に立たなかった」(3%) という評価もあった。

学科別に 3 か年で見ると、肯定的評価は「生物学科」(67%→71%→69%)、「分子生命科学科」(73%→80%→90%)、「食料資源学科」(90%→75%→94%)、「国際園芸農学科」(58%→56%→70%)、「地域環境工学科」(100%→100%→100%) であった。

設問 10. 担当科目において学生の授業時間外の学習を促すためにどのような工夫をしていますか。



図Ⅲ- 10. 学生に対する時間外学習の促進方法

3か年の推移を見ると、学部全体では、「口頭での予習・復習の呼びかけ」(45%→42%→43%)、「予習・復習課題を課す」(22%→33%→20%)、「小試験で復習を誘導する」(20%→14%→24%)、「何もしていない」(7%→10%→9%)、その他（6%→0%→4%）であった。約9割近い教員が時間外学習を促している。

「その他」の「自由記述欄」には、以下の記述があった。

【食料資源学科】

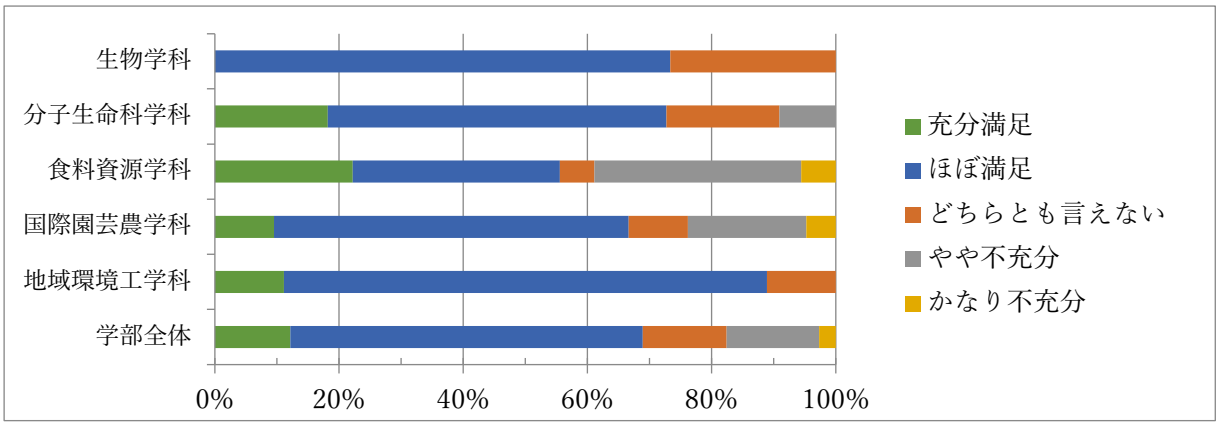
・毎回ではないが小テストの実施、資料に空欄を作り、授業中にその部分を答えさせる。発表の課題を課す。

・授業に関する課題（レポート）を毎回扱えている。

・宿題を出す。答え合わせをするが、提出はなし。

設問 11. (1) 本学部の以下の施設と設備についてどのように感じていますか。該当する欄に○を書き込んで下さい。

1. 講義室

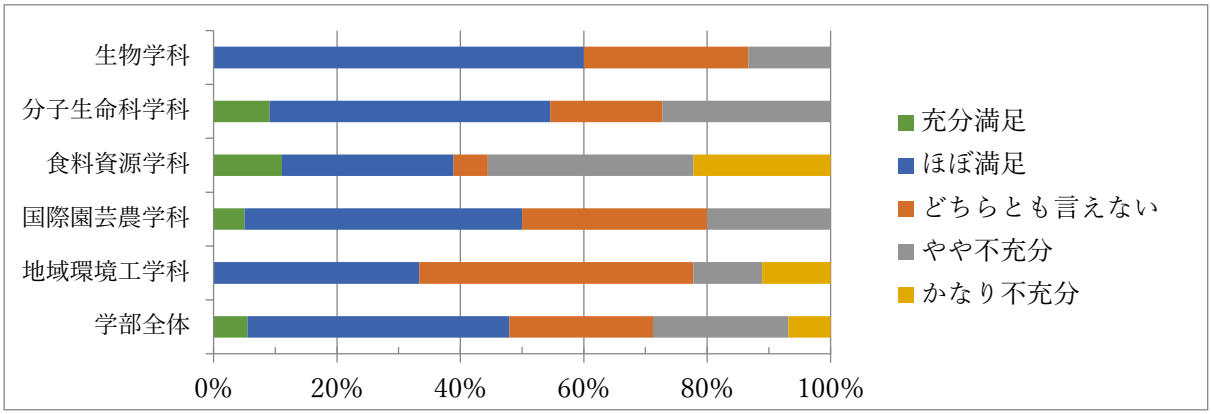


図Ⅲ- 11(1) - 1. 本学部の施設に対する満足度（講義室）

講義室について3か年で見ると、学部全体では「充分満足・ほぼ満足」(71%→66%→69%)、「どちらとも言えない」(14%→14%→14%)、「やや不充分」(7%→15%→15%)、「かなり不充分」(3%→5%→7%) であった。「充分満足・ほぼ満足」の減少傾向は、昨今の夏の暑さの影響もあると思われる。順次、エアコンの整備が進んでいるが、今後の動向を注視する必要がある。

「充分満足」・「ほぼ満足」を学科別に見ると「生物学科」(64%→57%→73%)、「分子生命科学科」(91%→80%→73%)、「食料資源学科」(69%→67%→56%)、「国際園芸農学科」(50%→58%→67%)、「地域環境工学科」(90%→80%→89%)となった。

2. 実験・実習室

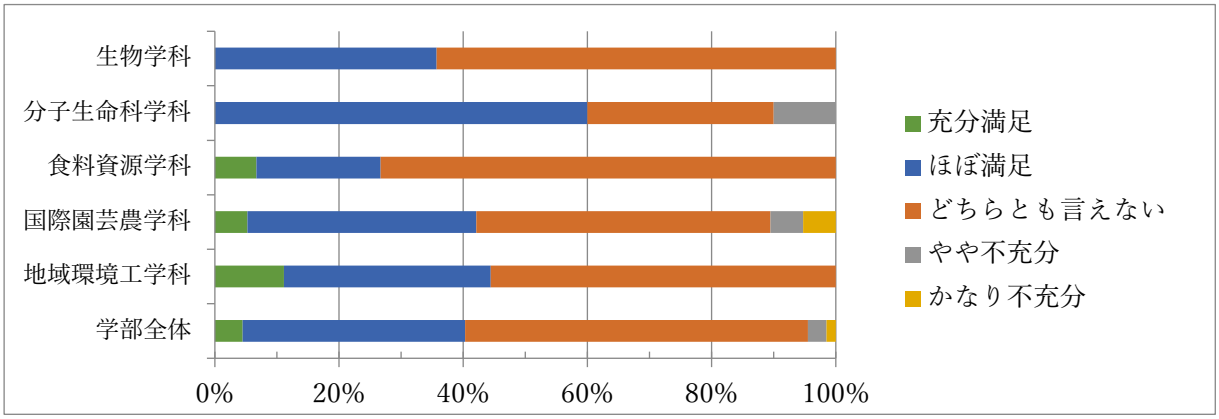


図Ⅲ- 11(1) - 2. 本学部の施設に対する満足度（実験・実習室）

実験・実習室について 3 か年で見ると、学部全体では「充分満足・ほぼ満足」(54%→54%→48%)、「どちらとも言えない」(24%→25%→23%)、「かなり不充分・やや不充分」(22%→21%→29%) と推移している。このように、半数近い教員 (52%) が「満足」していない。

学科別に「充分満足」・「ほぼ満足」を見ると「生物学科」(55%→54%→60%)、「分子生命科学科」(55%→60%→55%)、「食料資源学科」(54%→58%→39%)、「国際園芸農学科」(43%→47%→50%)、「地域環境工学科」(70%→56%→33%) であった。「かなり不充分・やや不充分」は、「生物学科」(18%→23%→13%)、「分子生命科学科」(36%→10%→27%)、「食料資源学科」(31%→42%→56%)、「国際園芸農学科」(14%→11%→20%)、「地域環境工学科」(10%→22%→22%) と推移した。「食料資源学科」に不充分と考える教員が 5 割合以上と高い。

3. 情報処理演習室



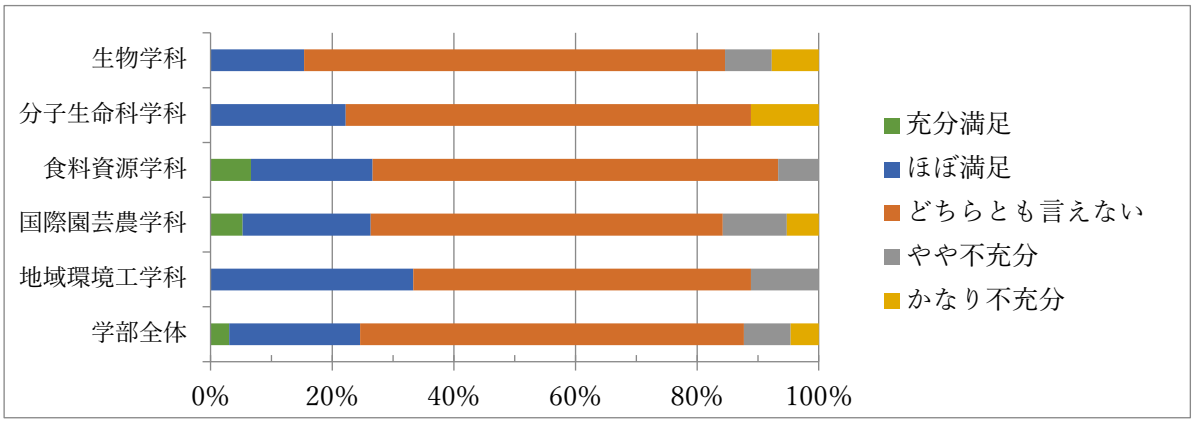
図Ⅲ- 11(1) - 3. 本学部の施設に対する満足度（情報処理演習室）

情報処理演習室について 3 か年で見ると、学部全体では「充分満足・ほぼ満足」(55%→38%→40%)、「どちらとも言えない」(45%→56%→55%)、「かなり不充分・やや不充分」(0%→7%→4%) と推移した。肯定的評価が減少傾向を示し、「どちらとも言えない」が過半数となった。この結果は、講義等での利用頻度によるものと考えられる。

学科別に「充分満足・ほぼ満足」を見ると「生物学科」(82%→33%→36%)、「分子生命科学科」(45%→60%→60%)、「食料資源学科」(30%→0%→27%)、「国際園芸農学科」(38%→37%→42%)、「地域環境工学科」(80%→60%→44%) と各学科とも概ね低下傾向にある。「かなり不十分・や

や不十分」は、「生物学科」（0%→8%→0%）、「分子生命科学科」（0%→10%→10%）、「食料資源学科」（0%→0%→0%）、「国際園芸農学科」（0%→11%→11%）、「地域環境工学科」（10%→0%→0%）であった。各学科とも「どちらとも言えない」が多くなっており、演習室のあり方について検討する必要がある。

4. 蔵書室（4 階）

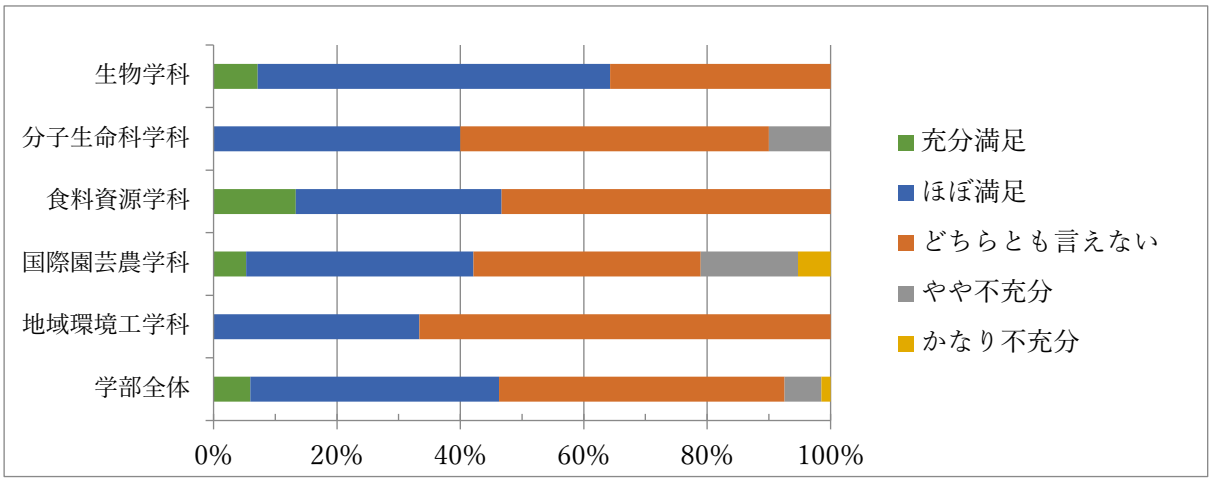


図Ⅲ- 11(1) - 4. 本学部の施設に対する満足度（蔵書室［4 階］）

4 階の蔵書室は、平成 28 年 3 月に 2 階の図書閲覧室の書物が移されて新設された。過去 3 か年で見ると、学部全体では「充分満足・ほぼ満足」が 25%→20%→25%、「どちらとも言えない」が 58%→64%→63%、「やや不充分」が 8%→8%→8%、「かなり不充分」が 9%→7%→5%と推移している。「やや不充分」、「かなり不充分」は 13%程度であるが、6 割以上の教員が「どちらとも言えない」と答えている。認知度が低く、あまり有効に活用されていない状況が考えられる。

学科別に「充分満足」と「ほぼ満足」の合計を見ると「生物学科」が 30%→8%→15%、「分子生命科学科」が 20%→30%→22%、「食料資源学科」が 30%→0%→27%、「国際園芸農学科」が 15%→28%→26%、「地域環境工学科」が 30%→33%→33%と推移している。

5. 学生自習室・学生控室（2 階）



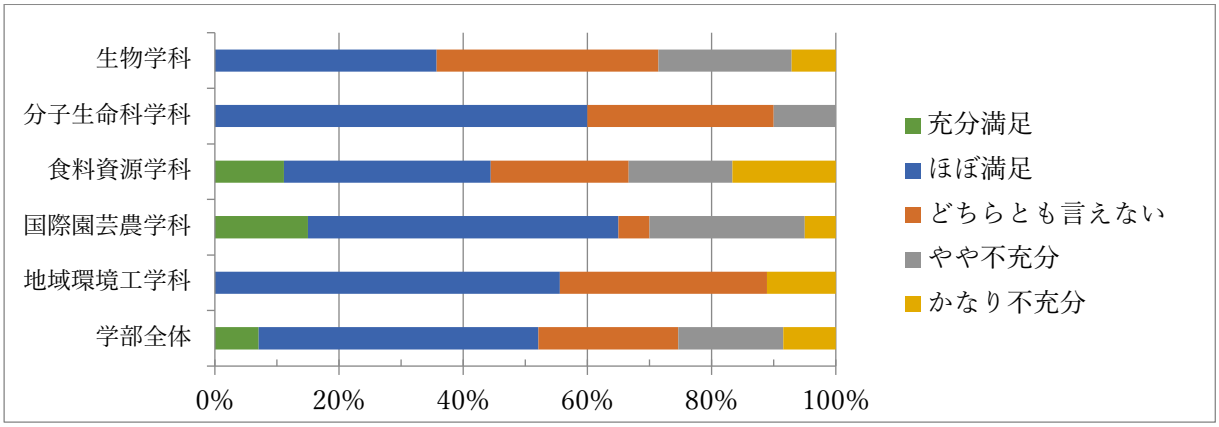
図Ⅲ- 11(1) - 5. 本学部の施設に対する満足度（学生実習室・学生控室［2 階］）

2 階の学生自習室・学生控室（2 階）は平成 28 年 3 月より新設された。過去 3 か年で見ると、学

部全体では「充分満足・ほぼ満足」が 51%→52%→46%、「どちらとも言えない」が 38%→42%→46%、「やや不充分」が 7%→5%→6%、「かなり不充分」が 4%→2%→1%と推移している。このように、約 5 割の教員が概ね満足している。

学科別に「充分満足」と「ほぼ満足」の合計を見ると、「生物学科」が 40%→62%→64%、「分子生命科学科」が 36%→60%→40%、「食料資源学科」が 73%→50%→47%、「国際園芸農学科」が 46%→37%→42%、「地域環境工学科」が 60%→63%→33%と推移している。「かなり不充分」と「やや不充分」の合計は、「生物学科」が 20%→0%→0%、 「分子生命科学科」が 9%→10%→10%、「食料資源学科」が 0%→10%→0%、「国際園芸農学科」が 15%→0%→21%、「地域環境工学科」が 10%→25%→0%と推移している。各学科で「どちらとも言えない」の割合が約 4 割である。

6. 研究室



図Ⅲ- 11(1) - 6. 本学部の施設に対する満足度（研究室）

研究室について 3 か年で見ると、学部全体では「充分満足・ほぼ満足」(51%→51%→52%)、「どちらとも言えない」(20%→28%→23%)、「かなり不充分・やや不充分」(29%→22%→25%)と推移した。満足している教員が 5 割を維持しているが、不充分と感じている教員も 2 割程度いる状況である。

学科別に「充分満足・ほぼ満足」を見ると、「生物学科」(45%→21%→36%)、「分子生命科学科」36%→70%→60%)、「食料資源学科」(62%→50%→44%)、「国際園芸農学科」(64%→58%→65%)「地域環境工学科」(40%→60%→56%) である。「かなり不充分・やや不充分」は、「生物学科」(45%→57%→29%)、「分子生命科学科」(55%→10%→10%)、「食料資源学科」(23%→25%→33%)、「国際園芸農学科」(14%→5%→30%)、「地域環境工学科」(10%→10%→11%)と推移した。

(2) 上記で「4. やや不充分」と「5. かなり不充分」を選択した場合、その理由を次の欄に具体的に書いて下さい。

【生物学科】

・スペースが狭い、ない、暗い。

・教員（私）の個室ではないので、電話や試験など秘匿性の高い内容のやり取り、処理を非常にしづらい。

・天秤、pHメーター等基本的な器具が不足しており、十分な学生実験が実施できない場面が多い。
・見たい本がない。

【分子生命科学科】
・蔵書室には入ったことがありません。
・スクリーンを下すと板書ができない。
・学生実験室が暑い。オープンキャンパスの時に暑いと受験者数に影響する。
・器具、機器が人数分なくて 2～3 人で共有せざるを得ない。
・学生が十分に実験するためには、スペースが足りない。
・十分なスペースを用意できてるか疑問です。机の配置や大きさを見直すことで、改善も期待できるのではないでしょうか？
・利用する本がない。

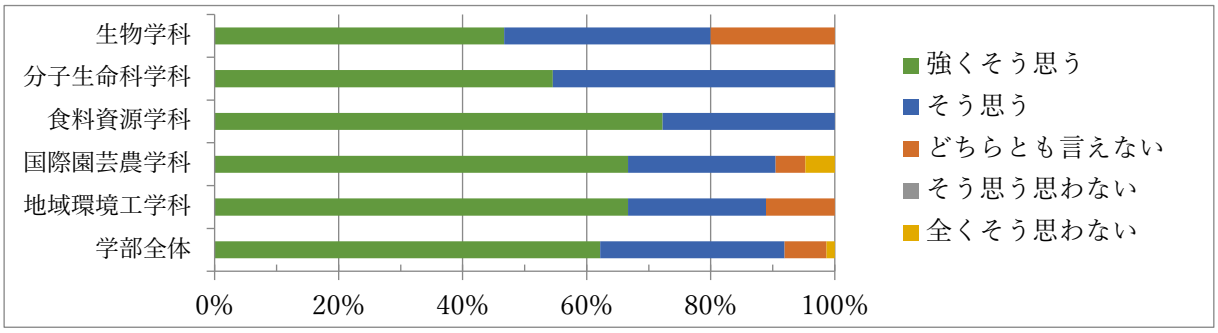
【食料資源科学科】
・学生の利用できる資源（スペース、機器など）が不充分（9 名）。研究室に実験机が一台しかないので、毎班の人数が多くなってしまい、教育効果が弱くなる恐れがあった。
・433 講義室で約 60～65 名に対し講義を行っている。三人掛け固定式に並んで三人座らないと収容できず、七月の暑い時期には学生にとって不快な講義室だと考えられる。
・講義室の黒板が汚い。黒板消しで消すと汚くなる。講義室の黒板を白板にしてほしい。
・共通の学生控室を作るべき。
・夏に窓を開けて実習を行うことはやめた方が良いと思います。実習室にクーラーは必須ではないでしょうか（3 名）。講義室についてはプロジェクターが見にくいと思います。光量を下げるなど対応が必要です。
・物品の収納スペースがない。
・少人数用の講義室がない。

【国際園芸農学科】
・自身の研究室が最上階にあり、夏季に高温になるが、部屋が広いため、窓枠に設置するエアコンでは効果がなく、大型エアコンを取り付けるような予算措置がされていない。
・視聴覚機器の更新が必要と考える。
・講義室に備え付けのパソコンが欲しい。
・エアコンがないため、夏に困る。
・学生の利用できる資源（スペース、機器など）が不充分（5 名）。

【地域環境科学科】
・老朽化。
・狭い、古い。

設問 12. (1) 卒業研究は必要であると思いますか。

1. 強くそう思う　2. そう思う　3. どちらとも言えない　4. そう思わない　5. 全くそう思わない



図Ⅲ- 12(1). 卒業研究は必要か

3か年で見ると、学部全体で、「強くそう思う・そう思う」(90%→92%→92%)、「どちらとも言えない」(8%→5%→7%)、「そう思わない・全くそう思わない」(2%→3%→1%) となった。卒業研究は必要と考える教員の割合は9割を超えている。

学科別に見ると、「強くそう思う・そう思う」は、「生物学科」(82%→93%→80%)、「分子生命科学科」(100%→90%→100%)、「食料資源学科」(85%→100%→100%)、「国際園芸農学科」(86%→84%→90%)、「地域環境工学科」(100%→100%→89%) と推移した。

(2) 上記のように回答した理由を下欄に分りやすく記入して下さい。

【生物学科】

・まれに卒業研究を自力で遂行するのが、非常に困難な学生がいるから。
・教育効果が高い。
・長く必要と思ってきたが「できるだけ楽に卒業したい」と心から思っている学生には、課題実習などで卒研の代替をするのでもよいのではないかと考えるようになった。
・学生個々に異なる指導方針があってもよい。就職活動等で研究とのバランスが取れない学生には、別の方法で単位を出すこともあり。
・大学教育に必須な科目であると考えるから。
・教員の負担が大きすぎ。研究にマイナスの影響。選択も考えるべき。四年生の就活時期がダブり時間が十分に取れず以前ほど教育効果が高くない。また、学生も卒論への意欲が低くなっている。
・研究者として教育できる方法はたくさんあるが、一番得意な方法は研究であると思う。また、様々な面に経験を応用できると思うので。
・やって初めて自身の力を発揮できたり、能力に気が付く場合があるから。
・自らのテーマで研究活動をして初めて、問題解決能力が身につくと思うから。
・自ら考え、自ら計画し、自ら行動し、自ら修正し、何か一つのゴールにたどり着くという経験は非常に重要であり社会に出ても生かされるから。

【分子生命科学科】

・人間として成長する良い機会である。

・それまで座学で得た知識を実践する場となり、究極のアクティブラーニングである（2 名）。論理的思考に基づき、物事を具体的に進め、問題解決を図り、新たな物を創造すること（4 名）、それらについて自分の言葉で他者に伝えることを学ぶとともに研究室という社会で、人とのコミュニケーションについて学ぶ場ともなる。
・研究のモチベーションになる。一通りの研究をまとめるトレーニングになる（2 名）。
・専門的な技術や考え方を身に付ける大切な機会となっている。一方で、どうしても大学に来れないような学生に対する配慮も必要なので強要もできないかもしれない。

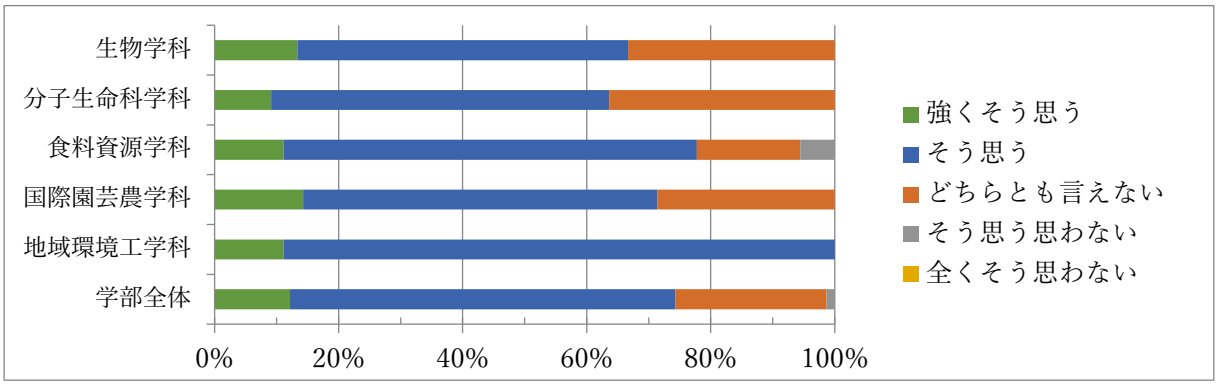
【食料資源学科】
・問題解決能力、プレゼンテーション能力、自ら考える力など、社会で求められている力は卒業研究での研究を例題としてのみ養われると思う。
・教育効果が最も高いから（3 名）。
・卒業研究があるから大学である。なければ大学ではない。ただし、学生が増えた場合は、全員が卒業研究を行うのは難しいかもしれない。
・自主性・独自性を養う良い機会である。独創的な取組みを行う機会でもある。
・他大学と比較して三年生までの実験（学生実験）時間が圧倒的に少ないので、卒業研究を本気でやらないと農学生命科学部に入った意義もわからなくなるのでは。科学的な思考力を養わずに卒業してしまう学生が多くなると思います。
・研究を通じて計画性・実行力・思考力・他者との論じる能力を養えるため。
・卒業研究の代わりに講義をすると三年間で必要単位が揃ってしまい、学位が出せなくなるのではないでしょうか？
・専門性を高めるため。

【国際園芸農学科】
・学生が主体的に学習する機会であり、その後の進路での効果も高いと考えるから（2 名）。
・知識や、ある事への取り組み方を考え、勉強し、まとめる力をつけることができると思うから（4 名）。
・学生が成長するのを実感する。教員一人で十人以上担当し、卒業研究が必須でない私立大学との差別化のため。
・費用や効果を考えれば、すべての学生がやる必要はない。
・理系だと卒論がないと知力が身につかないから。また、強制することで研究が進むから。
・学生の主体的な取組が必要なので問題解決能力などの養成に必要。

【地域環境工学科】
・配属される研究室によって専門分野が異なるものの、専門教育の総仕上げになり正解が一つとは限らない問題と向き合って結論を導くので、理解を深めたい学生にとっては重要な機会である。しかし、不本意ながら研究室配属された学生へのフォローが、学生目線で不十分であれば卒業研究を行う意義は大きいとは言えず、学生・教員双方でデメリットのみが生じる。ミスマッチを少しでも回避するシステムを整備した上で、卒業研究がなされるべきと考えるので、卒業研究の必要性は「どちらとも言えない」と判断している。

・卒研は大学本来の自主性や科学的な考え方を教育する、良い機会だと思うので（3 名）。・卒論を書くことで、説明能力や文章力など社会に必要な力を伸ばせる（2 名）。
・学んだ知識を総合的に組み立てる能力が養える。
・総合的な力を養うことができるので（2 名）。
・社会勉強

設問 13. (1) あなたの学科の大多数の卒業生は、本学部での教育により大学卒業生に相応の知識と学力を身に付けたと思いますか。



図Ⅲ- 13(1). 学部卒業生に相応の知識と学力を身に付けたか

3 か年で見ると学部全体で、「強くそう思う・そう思う」(72%→75%→74%)、「どちらとも言えない」(21%→21%→24%)、「全くそう思わない・そう思わない」(7%→3%→1%) であった。7 割の教員が、「卒業生は知識と学力を身に付けた」と考えている。

学科別に 3 か年で「強くそう思う・そう思う」を見ると、「生物学科」(55%→77%→67%)、「分子生命科学科」(64%→80%→64%)、「食料資源学科」(83%→82%→78%)、「国際園芸農学科」(69%→58%→71%)、「地域環境工学科」(100%→90%→100%)、と推移している。このように、学部生の知識と学力が身についたと感じる度合いは、各学科で 6 割以上で「地域環境工学科」が 100%と高い。「全くそうは思わない・そう思わない」は、各学科とも大きく減少し、「生物学科」(18%→0%→0%)、「分子生命科学科」(9%→0%→0%)、「食料資源学科」(11%→2%→6%)、「国際園芸農学科」8%→2%→0%)、「地域環境工学科」(0%→0%→0%) と推移した。

(2) 上記で「4. そう思わない」と「5. 全くそう思わない」を選択した場合、その理由は何ですか。以下の中から選んで下さい。

1. 学生に意欲がない　2. 学生の基礎学力不足　3. 講義内容が高度過ぎた
4. 教員に問題　5. その他（　　）

表Ⅲ- 13(2). 身についていない理由（学部）

理　由	回答数（学科）
学生に意欲がない	0
学生の基礎学力不足	0
講義内容が高度過ぎた	0

教員に問題	0
その他	1（食料１）

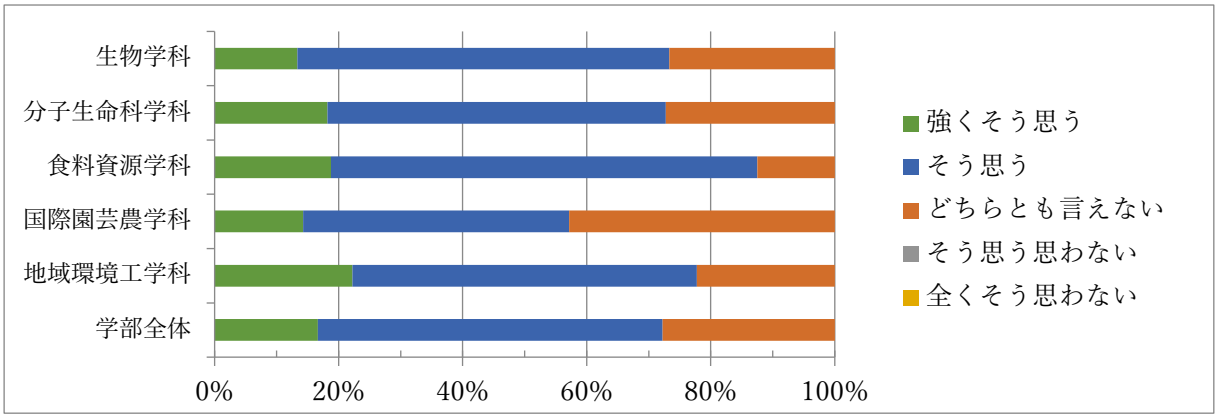
3 か年で見ると、「学生の基礎学力不足」（3 人→0 人→0 人）、「学生の意欲がない」（2 人→2 人→0 人）、「教員に問題」（1 人→1 人→0 人）、「講義内容が高度過ぎた」（1 人→0 人→0 人）と推移した。

「その他」の「自由記述欄」には、以下の記述があった。

【食料資源学科】

・実験時間不足により、科学的思考力が身についてない学生が多いと思うので。

設問 14. (1) あなたの専攻の大多数の修了生は、本研究科での教育により大学院修了程度の専門知識を身に付けたと思いますか。



図Ⅲ- 14(1). 大学院修了生は相応の専門知識を身に付けたか

3 か年で見ると研究科全体で「強くそう思う・そう思う」（74%→75%→72%）、「どちらとも言えない」（26%→24%→28%）、「全くそう思わない・そう思わない」（0%→2%→0%）であった。

コース別に 3 か年で見ると、「強くそう思う・そう思う」は、「生物学コース」（91%→85%→73%）、「分子生命科学コース」（91%→80%→73%）、「生物資源学コース」（83%→82%→88%）、「園芸農学コース」（43%→68%→57%）、「地域環境工学コース」（90%→60%→78%）と推移した。「全くそう思わない・そう思わない」は本年度、各コースで 0%であった。

(2) 上記で「4. そう思わない」と「5. 全くそう思わない」を選択した場合、その理由は何ですか. 以下の中から選んで下さい。

1. 学生に意欲がない 2. 学生の基礎学力不足 3. 講義内容が高度過ぎた
4. 教員に問題 5. その他（ ）

表Ⅲ- 14(2). 身についていない理由（研究科）

理　由	回答数（コース）
学生に意欲がない	0
学生の基礎学力不足	0
講義内容が高度過ぎた	0

教員に問題	0
その他	0

本年度は、「4. そう思わない」と「5. 全くそう思わない」を選択した教員がいなかった。

Ⅳ．教員対象授業アンケート（学部授業および研究科授業）

１．アンケート調査内容

調査目的：農学生命科学部および研究科の教育内容ならびに方法の改善に役立てるため、学部および研究科の授業に関する教員の意識について調査することを目的にアンケート調査を実施した。

調査方法：各教員にアンケート用紙を配布することで調査を行った。各教員が担当している授業のうち最も重要と考えられる学部専門教育科目、研究科講義科目それぞれ１科目の合計２科目について回答してもらった。

調査対象：令和 2 年 2 月に学部、研究科および生物共生教育研究センター、白神自然環境研究センターに所属する教員とした。

調査期間：令和 2 年 1 月 23 日～2 月 21 日

教員数：　81 名　有効回答者数（学部対象アンケート）：68 名　（回答率 84%）
　　有効回答者数（研究科対象アンケート）：63 名　（回答率 78%）

調査項目：設問は以下の通りである。

［学部授業に関する調査』

設問 1．あなたが所属する学科を選択して下さい[注 1)]。

1．生物学科　2．分子生命科学科　3．食料資源学科　4．国際園芸農学科
5．地域環境工学科

[注 1)] 白神自然環境研究センターの先生は 1 を、生物共生教育研究センターの先生は 4 をお選び下さい。

設問 2．授業の予定回数と実施回数について記入して下さい。

(1) 予定回数（２単位 15 回とし、集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は 90 分間を 1 回に換算して下さい。オムニバス形式の科目を除きます）
（　　）回

(2) 実施回数（集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は 90 分間を 1 回に換算して下さい。オムニバス形式の科目を除きます）
（　　）回

(3) 今年度、担当されていない方は、その旨を記載下さい。その場合は、以下の設問 3～7 の回答は不要です。設問 8～10 についてはご回答下さい。（　　）

設問 3．休講した場合の代償措置はどのようにしましたか。

1．休講回数分を補講した　2．一部補講した　3．他の措置（　　）
4．何もしなかった　5．休講していない

設問 4．(1) シラバス記載の内容と実際の授業内容との一致の程度について答えて下さい。

1．シラバスに記載した内容に一致させて講義を行った
2．シラバスに記載した内容を意識し、できるだけ沿うように講義した
3．シラバスに記載した内容にはとらわれないで講義した

(2) 上記で、「3.」と回答した方はその理由を下欄に具体的に記入して下さい。

設問 5. (1) 本年度のシラバスの記載内容は昨年度と同一でしたか。

1. 昨年度と同一であった　2. 一部変更した　3. 大幅に変更した

(2) 上記で、「2. 」または「3. 」と回答した方はシラバスを変更した理由を教えて下さい。

(3) 上記の場合で、シラバスの変更は教育効果にどのような影響を与えたとお考えですか。

1. 教育効果が向上した 2. 教育効果は変わらなかった　3. 教育効果は低下した

4. 分からない

(4) 上記の設問(3)で「１」と回答した方は、その具体的な事例を教えて下さい。

設問 6. 学部の担当講義はどのような考え方で展開しましたか。

1. 大多数の学生のレベルを意識して展開した
2. より専門性を重視して展開した
3. その他（　　）

設問 7. 学生の授業の理解度を上げるために工夫している点があったら教えて下さい（複数回答可）。

1. 視聴覚教材（ビデオや DVD 教材など）の利用
2. 画像データ（OHP、スライドプロジェクター、プレゼンテーションソフトなど）の提示
3. 授業の合間に質疑や討論の時間を設けた
4. 小グループによる課題学習の発表や討論の場を設けた
5. 宿題（レポートを含む）を課した
6. その他（　　）

設問 8. 成績評価に対して疑義を持つ学生がいますが、そのような場合への対応として、どのような取り組みを行なっていますか。下欄に具体的に記入して下さい。

設問 9. 教育改善に関わる問題をもっと掘り下げるために、このアンケートに追加した方がよいとお考えの項目がありましたらご記入下さい。

設問 10. このアンケート調査の実施や内容について他にご意見がありましたらご記入下さい。

［研究科授業に関する調査］

設問 1. あなたが所属するコースを選択して下さい。

1. 生物学コース　2. 分子生命科学コース　3. 生物資源学コース　4. 園芸農学コース
5. 地域環境工学コース

設問 2. 授業の予定回数と実施回数を選択して下さい。

① 予定回数（１単位８回とし、集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は 90 分間を 1 回に換算して下さい。オムニバス形式の科目は除きます。）

1. 8 回　2. 7 回　3. 6 回　4. 5 回以下　5. 担当していない

② 実施回数（集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は 90 分間を 1 回に換算して下さい。オムニバス形式の科目は除きます。）

1. 8 回　2. 7 回　3. 6 回　4. 5 回以下　5. 担当していない

＊今年度、担当されていない方は、以下の設問 3〜7 の回答は不要です。設問 8〜10 についてはご回答下さい。

設問 3. 休講した場合の代償措置はどのようにしましたか。

1. 休講回数分を補講した　2. 一部補講した　3. 他の措置（　　）

4. 何もしなかった　5. 休講していない

設問 4.

① シラバス記載の内容と実際の授業内容との一致の程度について答えて下さい。

1. シラバスに記載した内容に一致させて講義を行った

2. シラバスに記載した内容を意識し、できるだけ沿うように講義した

3. シラバスに記載した内容にはとらわれないで講義した

② 上記で、「3. 」と回答した方はその理由を下欄に具体的に記入して下さい。

設問 5.

(1)本年度のシラバスの記載内容は昨年度と同一でしたか。

1. 昨年度と同一であった　2. 一部変更した　3. 大幅に変更した

(2)上記で、「2. 」または「3. 」と回答した方はシラバスを変更した理由を教えて下さい。

(3) 上記の場合で、シラバスの変更は教育効果にどのような影響を与えたとお考えですか。

1. 教育効果が向上した　2. 教育効果は変わらなかった　3. 教育効果は低下した

4. 分からない

(4) 上記の設問(3)で「１」と回答した方は、その具体的な事例を教えて下さい。

設問 6. 大学院の担当講義はどのような考え方で展開しましたか。

1. 大多数の学生のレベルを意識して展開した

2. より専門性を重視して展開した

3. その他（　　）

設問 7. 学生の授業の理解度を上げるために工夫している点があったら教えて下さい（複数回答可）。

1. 視聴覚教材（ビデオや DVD 教材など）の利用

2. 画像データ（OHP、スライドプロジェクター、プレゼンテーションソフトなど）の提示

3. 授業の合間に質疑や討論の時間を設けた

4. 小グループによる課題学習の発表や討論の場を設けた

5. 宿題（レポートを含む）を課した

6. 実習形式の授業を行った

7. その他（　　）

設問 8. 成績評価に対して疑義を持つ学生がいますが、そのような場合への対応として、どのような取り組みを行なっていますか。下欄に具体的に記入して下さい。

設問 9. 教育改善に関わる問題をもっと掘り下げるために、このアンケートに追加した方がよいとお考えの項目がありましたらご記入下さい。

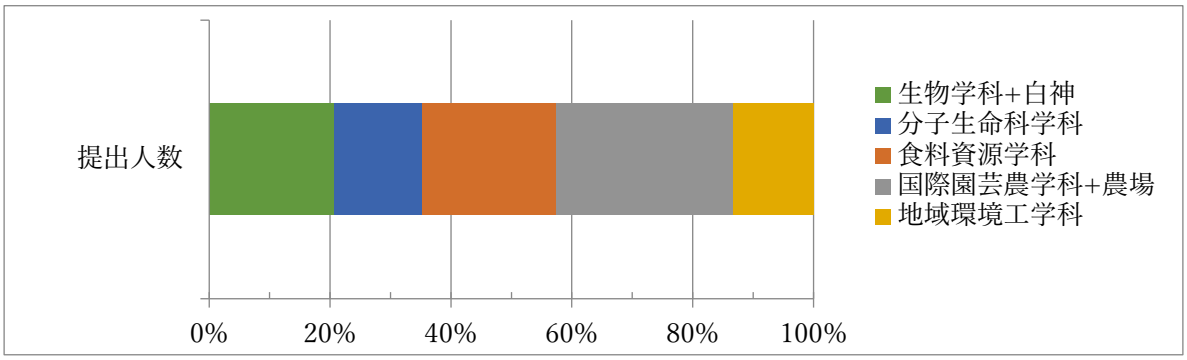
設問 10. このアンケート調査の実施や内容についてご意見がありましたらご記入下さい。

２．学部授業に関する調査結果

設問 1.　あなたが所属する学科を選択して下さい

表Ⅳ－２－１．回答率

	教員数（人）	回答数（人）	回答率（%）
生物学科（白神含む）	17	14	82
分子生命科学科	13	10	77
食料資源学科	20	15	75
国際園芸農学科（農場含む）	21	20	95
地域環境工学科	10	9	90
学部全体	81	68	84

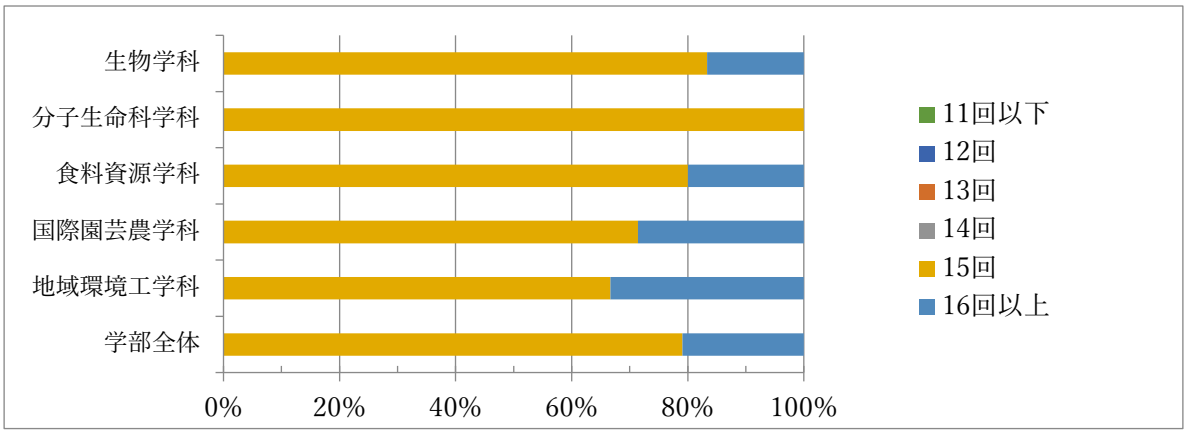


図Ⅳ－２－１．学科別回答割合

学部全体の回答率は 84%で過去 2 年(平成 29 年度:78%，平成 30 年度:76%）と比して上昇した。学科別では分子生命科学科と食料資源学科が 70%代と比較的低い傾向にある。一方，国際園芸農学科と地域環境工学科は 90%代と比較的高い値であった。

設問 2. 授業の予定回数と実施回数について記入して下さい。

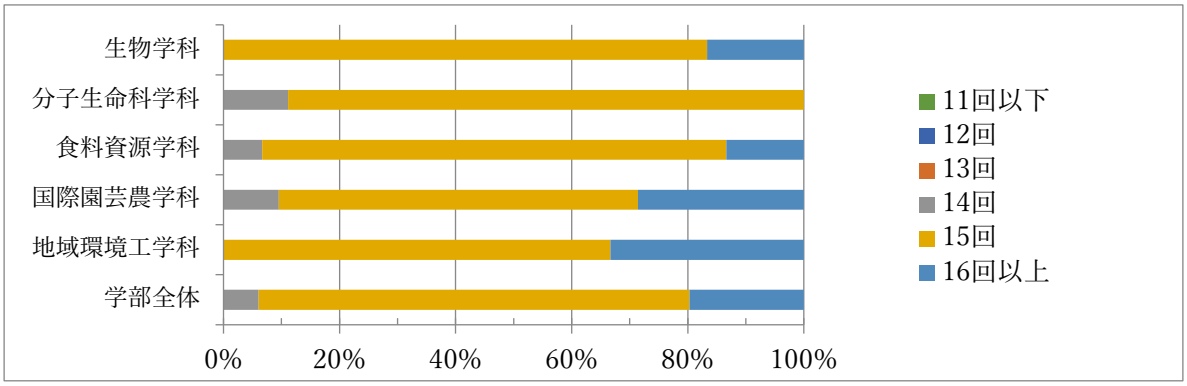
(1)　予定回数（２単位 15 回とし、集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は 90 分間を 1 回に換算して下さい。オムニバス形式の科目を除きます）



図Ⅳ－２－２(1)．授業予定回数

学部全体回答数は 69 であり、すべての回答が 15 回以上である。また 16 回以上は 20.2%と昨年度 20.6%と同水準であった。学科別に見ると，16 回以上が地域環境工学科で 33.3%と最も高かった。

(2) 実施回数（集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は 90 分間を 1 回に換算して下さい。オムニバス形式の科目を除きます）



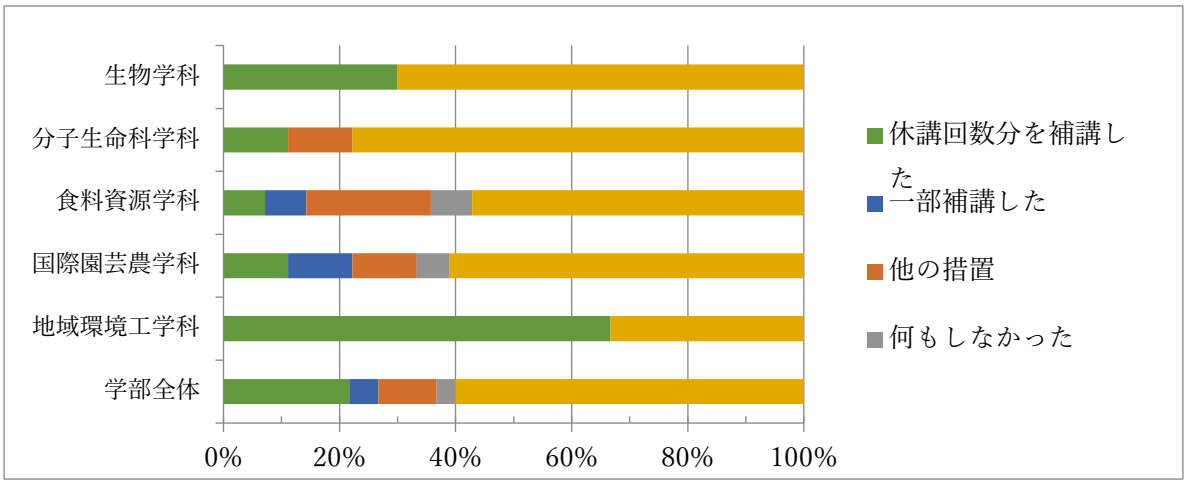
図Ⅳ- 2 - 2(2). 授業実施回数

学部全体回答数 66 で，実施回数 15 回以上が，今年度 94%と過去 2 年間で上昇傾向にある(平成 29 年度：83%，平成 30 年度:90%)。また，16 回以上実施との回答は，今年度 20%であり平成 30 年度の 21%と同水準であった（平成 29 年度：16%)。一方で，14 回以下との回答は 6%と、平成 30 年度 10%と微減し（平成 29 年度 3%)，13 回以下はいなかった。学科別で見ると，生物学科と地域環境工学科では全て 15 回以上実施と回答されている。14 回実施は，分子生物学科，食料資源学科，国際園芸農学科でそれぞれ，1 名，1 名，2 名であった。

(3) 今年度、担当されていない方は、その旨を記載下さい。

該当者はいなかった。

設問 3. 休講した場合の代償措置はどのようにしましたか。



図Ⅳ- 2 - 3. 休講の代償措置

学部全体の回答数は 60 である。休講したのは回答者全体の 40%の教員であり、そのうち休講

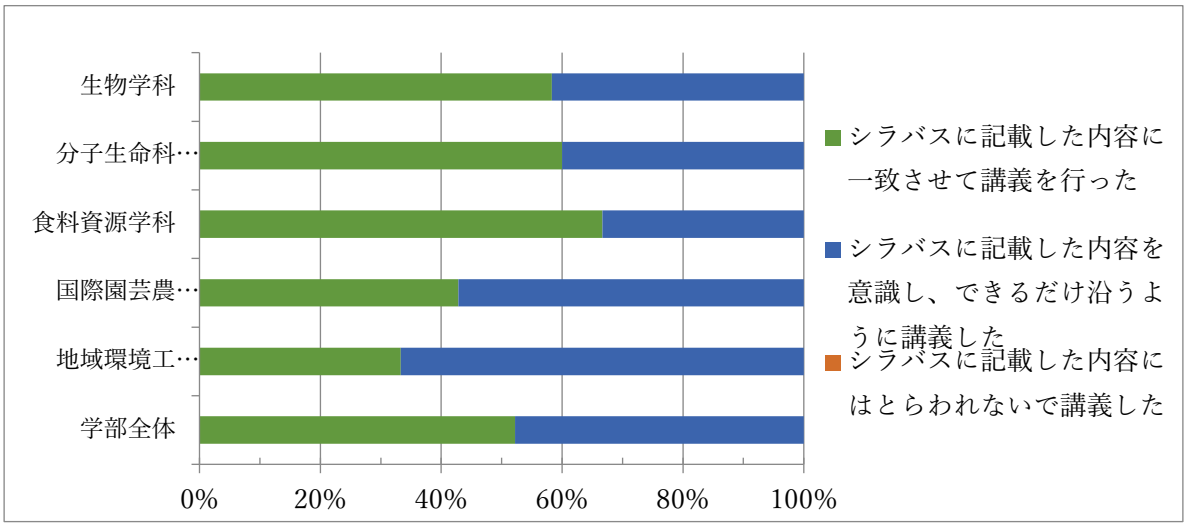
への対応がなかった教員は食料資源学科と国際園芸農学科にそれぞれ 1 名ずついた。休講回数分の補講措置が取られたのは，該当者の 54%であり、昨年度の 52%、一昨年度の 55%と同水準であった。 一方，「一部補講した」・「他の措置」も併せなんらかの措置を取ったとの回答は 92%であり、平成 29 年度 93%、平成 30 年度 88%と同水準と言える。学科別では，地域環境工学科は昨年度と同様に「休講回数分補講した」が 100%であった。

「講じた代替措置」については以下の記述があった。

・16 週中 15 回の講義を行った。（食料資源学科 1 件）

・レポート（分子生命科学科 1 件、食料資源学科 2 件、園芸農学科 2 件）

設問 4. (1) シラバス記載の内容と実際の授業内容との一致の程度について答えて下さい。



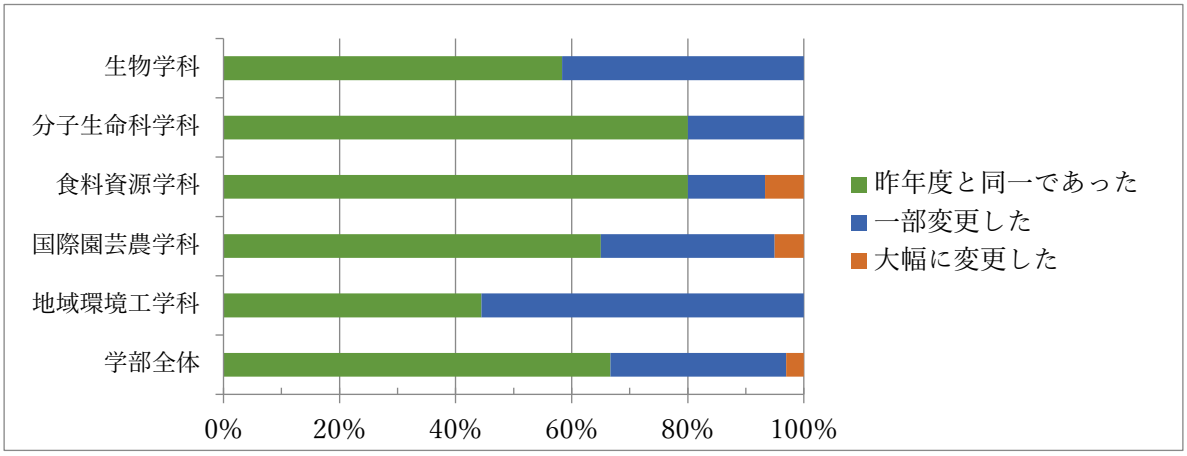
図Ⅳ- 2 - 4. シラバスと実際の授業の一致度

全体回答数は 67 である。学部全体で，「シラバスに一致させた講義を行った」が，52%であり、平成 29 年度の 55%，平成 30 年度の 49%と同水準である。「記載した内容にはとらわれないで講義した」の回答はなかった。これらから，シラバスを重視して授業が行われていると言える。学科別では，「シラバスに一致させた講義を行った」は，食料資源学科で 67%と最も高かった。

(2) 上記で，「3. 内容にはとらわれないで講義した。」と回答した方はその理由を下欄に具体的に記入して下さい。

該当者がいなかった

設問 5. (1) 本年度のシラバスの記載内容は昨年度と同一でしたか。



図Ⅳ- 2 - 5(1). 昨年度のシラバスとの比較

全体回答数は 66 である。学部全体では,「一部変更した」が 30%、「大幅に変更した」が 3%であり、「昨年度と同一」(67%) の傾向がある。「昨年度と同一」を選んだのは、平成 29 年度 68%、平成 30 年度 75%で、本年度と大きな違いはない。学科別では, 分子生命科学科および食料資源学科で「昨年度と同一」が昨年度と同様に 80%と最も高かった。

(2) 上記で,「2. 一部変更した。」または「3. 大幅に変更した。」と回答した方はシラバスを変更した理由を教えて下さい。

【生物学科】
・大学からの指示。
・より厳密に記載した。
・内容を更新したから。(2 名)
・完璧に同じにするのは、そもそも不可能である。また、教育の質を低下させる。

【分子生命科学科】
・より新しい内容を盛り込んだ。

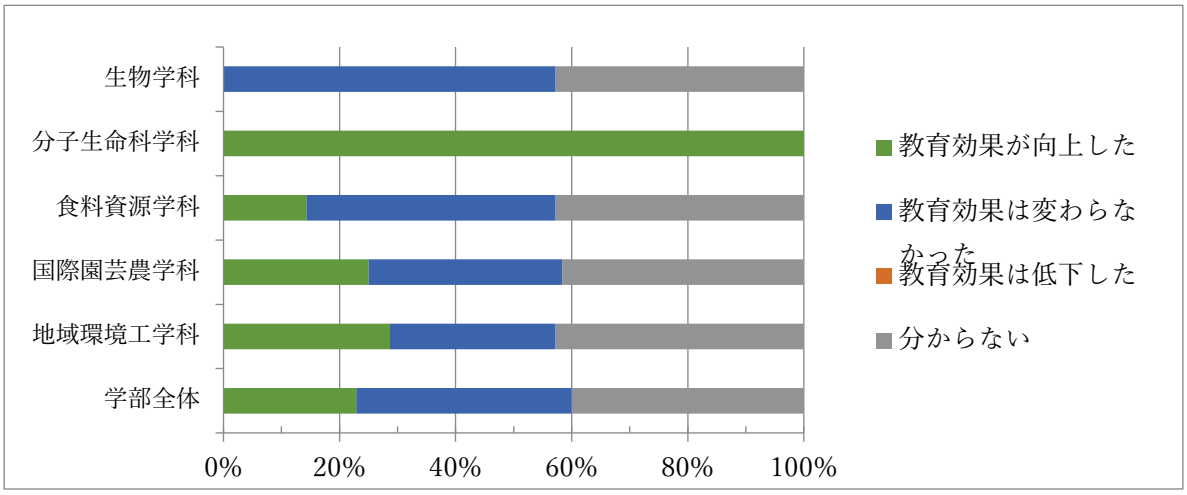
【食料資源学科】
・成績教科等を厳密に記述した。
・新規。
・改善のため。

【国際園芸農学科】
・学部から表現の変更を求められたため。実質的な内容は変更していない。
・担当教員の変更があったため。私は初年度。
・学生の興味・理解を高めるために、追加した内容について追記した。

【地域環境工学科】
・より良い授業のため。
・到達目標をより具体的なものとした。
・昨年度の反省を踏まえ、変更した。
・新しい内容を取り入れるため。(2 名)

大学からの指導を元に変更した例が多く見られた。また、知見のアップデートやより良い授業のために適宜変更されていると思われる。

(3) 上記の場合で、シラバスの変更は教育効果にどのような影響を与えたとお考えですか。



図Ⅳ－ 2 － 5(3)．シラバス変更の効果

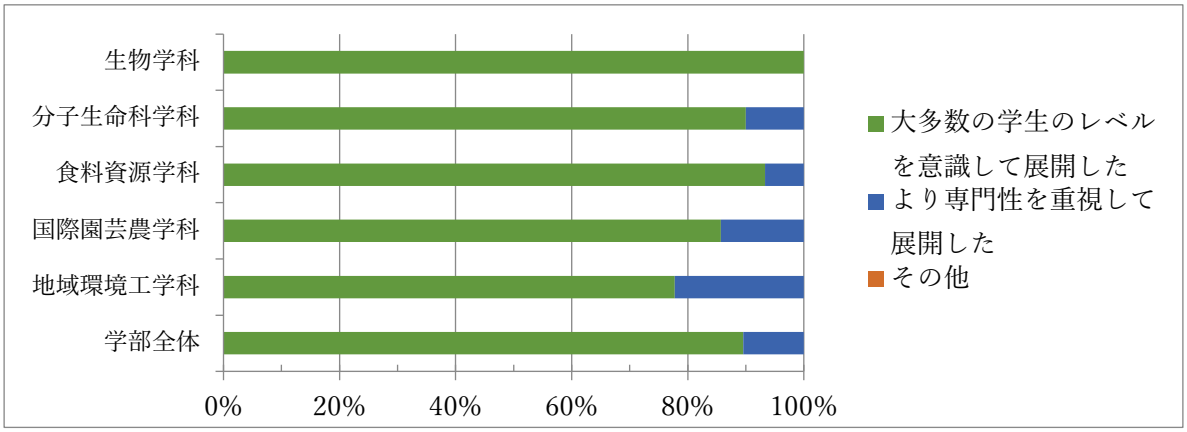
全回答数は 35 である。学部全体では，教育効果は「変わらなかった」、「分からない」を合わせて平成 30 年度の 73%と同水準の 77%であり（平成 29 年度：85%），「教育効果が向上した」に比べ回答割合は大きかった。学科別では，国際園芸農学科で 3 名、分子生命科学科と地域環境工学科でそれぞれ 2 名、食料資源学科で 1 名、「教育効果が向上した」と指摘した。この具体的内容については(4)で述べる。総じて，シラバス変更の教育効果への影響は明瞭でない場合が多いようである。

(4) 上記の設問３で「１．教育効果が向上した」と回答した方は，その具体的な事例を教えてください。

【分子生命科学科】
・授業に対する真剣さが増した。

【地域環境工学科】
・設計の授業の中に、製図を加えたことで、学生の熱心さ、成果が上がったように思える。

設問 6. 学部の担当講義はどのような考え方で展開しましたか。

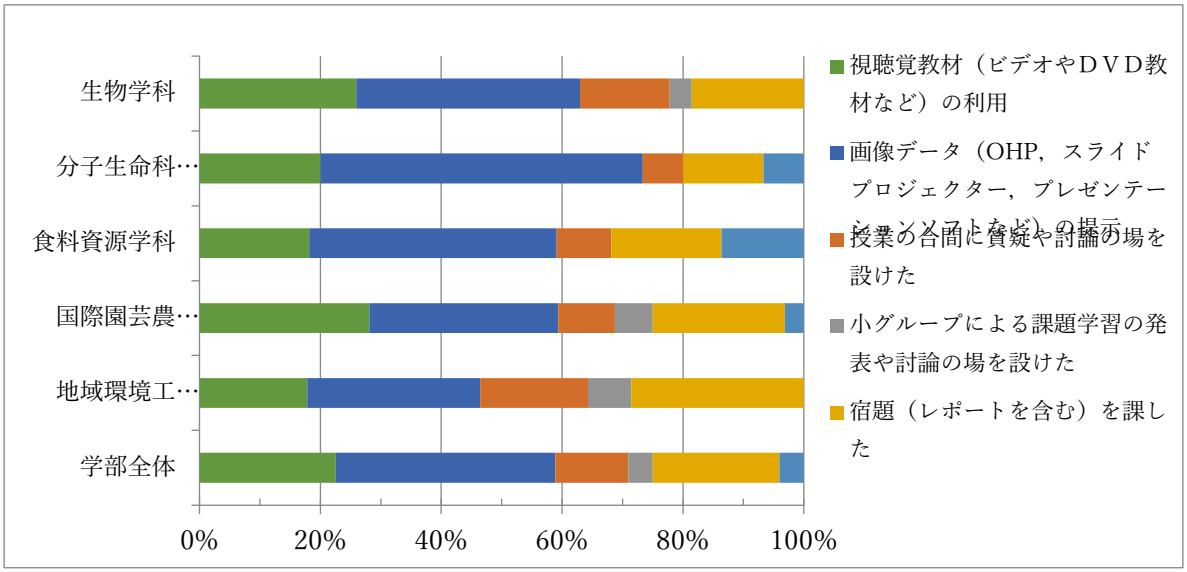


図Ⅳ- 2 - 6. 講義展開の考え方

全回答数は 67 である。学部全体では，90%が学生のレベルを意識した講義を行っており，平成 30 年度の 84%より増加した(平成 29 年度 77%)。学科別では，分子生命科学科、食料資源学科、国際園芸農学科、地域環境工学科では「専門性をより重視した講義」と回答したのがそれぞれ、1 名、1 名、3 名、2 名であった。

「その他」との回答はなかった。

設問 7. 学生の授業の理解度を上げるために工夫している点があったら教えて下さい（複数回答可）。



図Ⅳ- 2 - 7. 授業の工夫

回答は生物学科、分子生命科学科、食料資源学科、国際園芸農学科、地域環境工学科からそれぞれ、12 名、10 名、15 名、21 名、9 名から得られた。全体では，「画像データの呈示」がほかの授業の工夫と比べると過去 2 年度と同様に最も多かった状況が続き，67%の回答者が選択した。続いて「視聴覚機材の利用」を選んだ回答者は 42%いた。さらに「宿題を課す」が 39%いた。これは科目の単位取得が，授業受講だけでなく自己学習を含めたものであることから，授業外の学

習を重視した取り組みが行われていることを表している。
「その他」について、以下の回答があった。

【分子生命科学科】
・前回の講義に関連する小テストにより、要点を意識させる。

【食料資源学科】
・ノートを取らせるために板書を行う。
・社会とのつながりを強く意識させた。
・小テストの実施、小テスト&期末テストの解説。

【国際園芸農学科】
・小テストを実施した。

設問 8．成績評価に対して疑義を持つ学生がいますが，そのような場合への対応として，どのような取り組みを行なっていますか。下欄に具体的に記入して下さい。

【生物学科】
・学生が納得するまで説明する。
・答案を前に直接話すように一昨年ほどからしている。
・もしあれば対応する。
・疑義を持たれたことがないのでわからないが、授業時に成績の出し方について、丁寧に説明している。
・個別に面談する。
・答案用紙の開示。
・そのような学生はいなかった。

【分子生命科学科】
・まず、シラバスに成績評価について、具体的かつ詳細に記述する。そのうえで、疑問点について、具体的に説明する。
・テストの返却と解説。
・評価の規定を設けていること。その学生がどの点でその評価になったかを説明している。学生が納得するまで説明する。
・説明する。
・試験の採点前に採点基準のメモ書きを準備しておき、問い合わせに対応できるようにする。
・問い合わせがあれば、説明する。
・疑義を持つ学生がいない。
・質問があれば、対応する。また、答案を返却する。
・試験答案用紙を返却。

【食料資源学科】

・中間試験、期末試験ともに返却し、疑義がある場合は、いつでも受け付ける旨、伝達している。
・出席状況と採点答案を見せて、説明する。
・特になし。
・授業開始時に採点基準を明確に提示した。期末試験も模範解答を作成し、点数の根拠を示した。
・これまでにない。（2 名）
・評価の理由を資料（テストの結果など）を用いて、説明する。
・成績評価の理由を説明する。
・評価基準を初回に説明する。
・テスト返却、解答例公開。
・テストにおいて、部分点を明記している。

【国際園芸農学科】
・1. 成績評価の根拠を口頭で説明。2. 必要に応じて、根拠資料を提示。
・その根拠を示して説明。
・数値化
・テストを返却し、解説している。
・試験の後で、正解例を口頭で発表している。
・評価の基準、評価の根拠を平均点や評点分布も示しつつ、丁寧に説明しており、納得してもらっている。
・面談。
・教員の考え方を伝える。しかし、次年度の評価基準に意見を取り入れることを検討する。
・全部公開する。
・詳しく説明する（授業中を含めて）。
・疑義を持った学生はいなかった。
・評価基準を明確にし、ガイダンス時から説明するよう心がけています。

【地域環境工学科】
・レポート点数、小テスト、期末テスト点数の明細を説明。
・評価法の明示
・レポート・テストの返却
・模範解答や配点の説明。
・評価基準を説明し、試験等の評価結果を丁寧に説明する。
・そのようなケースがなかった。
・答案、レポートの返却。配点、解答例の開示。
・レポートや答案を解説し、返却した。
・説明する。

昨年度同様，成績評価に疑義を持つ学生に対して評価基準を説明・開示したり，理解するまで説明する等の対応が非常に多い。さらに，答案の返却が行われるなど，さまざまな取組がなされており，多くの教員は学生の疑義に対し積極的に対応している。

設問 9. 教育改善に関わる問題をもっと掘り下げるために，このアンケートに追加した方がよいとお考えの項目がありましたらご記入下さい。

【分子生命科学科】
・卒業研究の評価方法（もし可能なら）。

設問 10. このアンケート調査の実施や内容について他にご意見がありましたらご記入下さい。

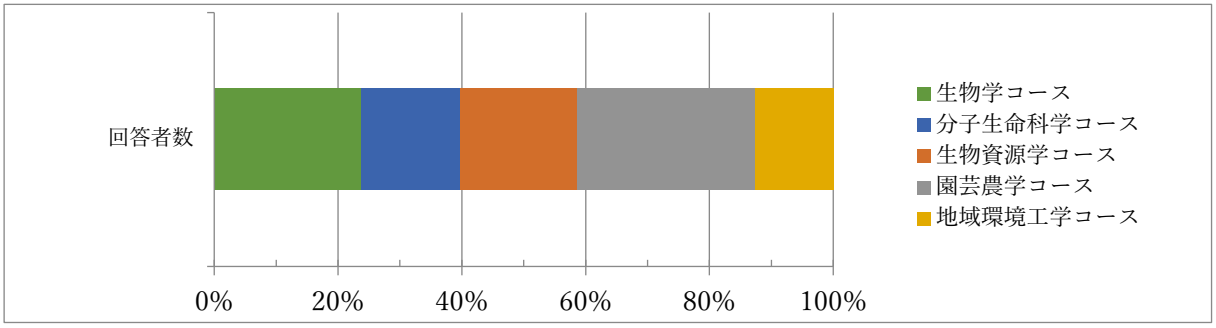
【地域環境工学科】
・今回の方法は、回収率向上のため、よいやり方であると考えている。

３．研究科授業に関する調査結果

設問 1．あなたが所属するコースを選択して下さい。

表Ⅳ- 3 - 1．回答数

所属	回答者数
生物学コース	15
分子生命科学コース	10
生物資源学コース	12
園芸農学コース	18
地域環境工学コース	8
研究科全体	63

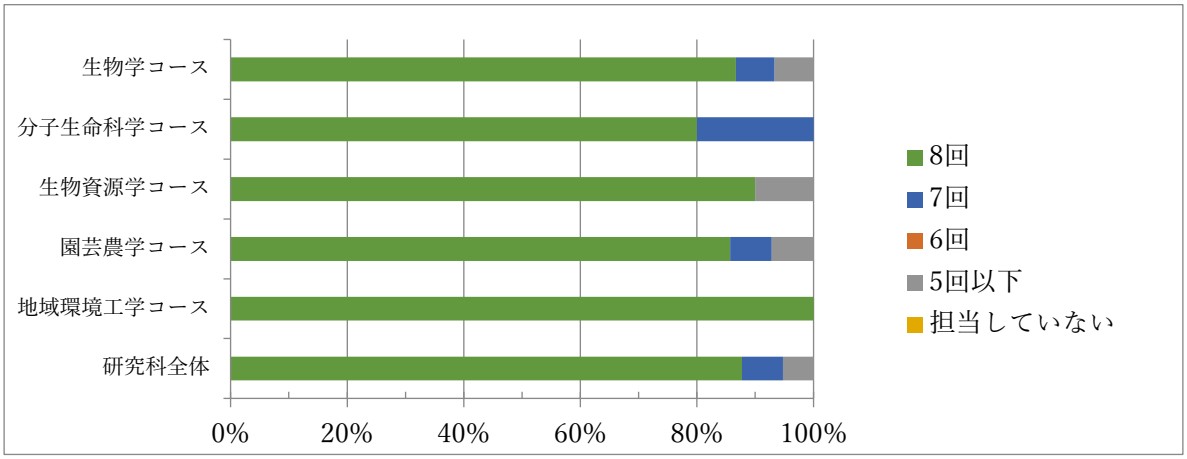


図Ⅳ- 3 – 1．コース別回答割合

研究科全体での回答割合は 78%で平成 30 年度(71%)よりやや増加した（平成 29 年度 76%)。学部授業(84%)と比べて回答率が低いことから、研究科講義を担当していない教員は設問を見ていない可能性が考えられる。

設問 2．授業の予定回数と実施回数について記入して下さい。

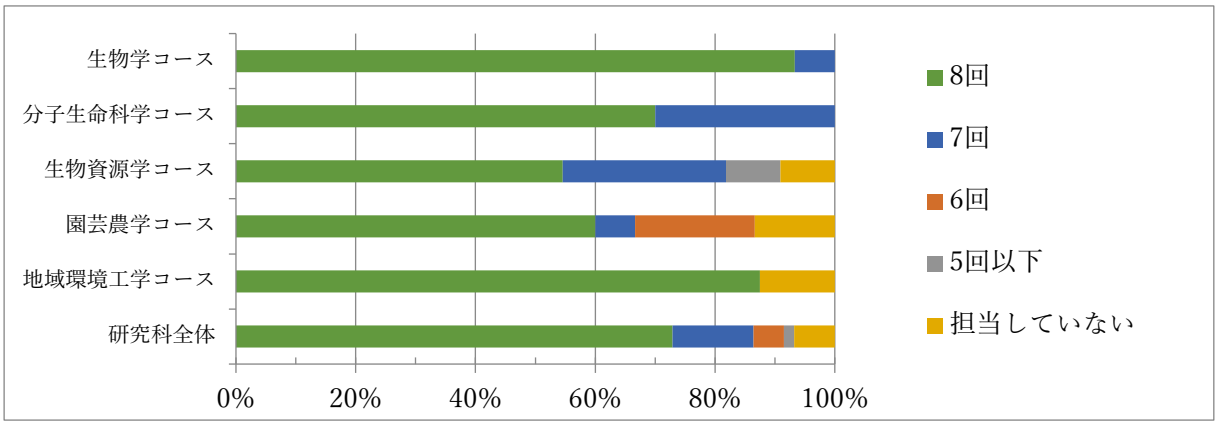
(1) 予定回数（１単位８回とし、集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は 90 分間を 1 回に換算して下さい。オムニバス形式の科目は除きます。）



図Ⅳ- 3 - 2(1)．授業予定回数

全体回答数は 57 である。研究科全体で授業予定回数は、8 回が 88%、7 回が 7%でほとんどが所定講義数を満たしているが、昨年度の 7 回以上との回答数割合 96%と比較すると概ね同じである。5 回以下との回答者は生物学コース・生物資源学コース・園芸農学コースでそれぞれ 1 名がいた。地域環境工学コースでは、回答者全員が 8 回としている。

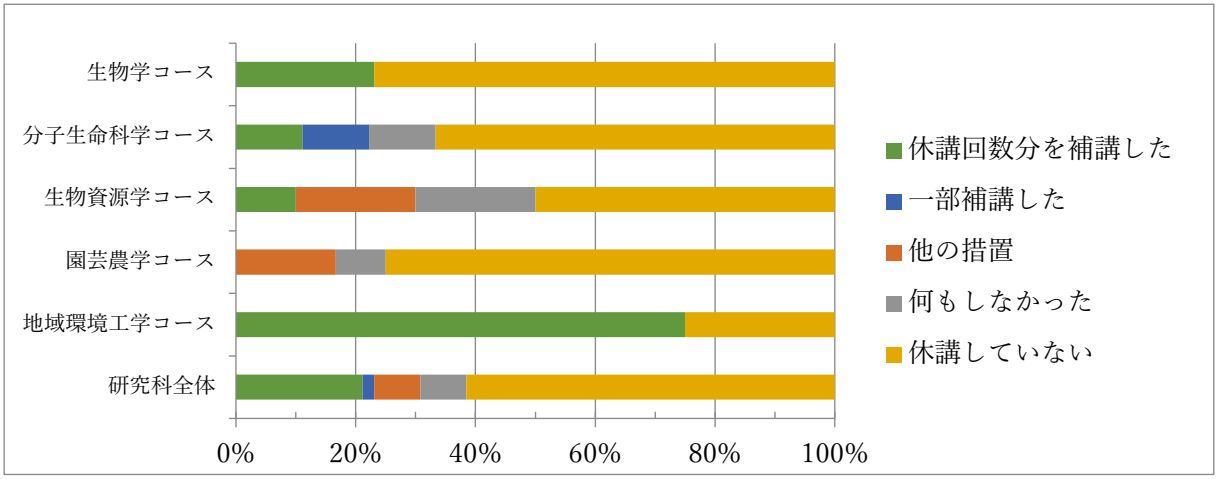
(2) 実施回数（集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は 90 分間を 1 回に換算して下さい。オムニバス形式の科目は除きます。）



図Ⅳ- 3 - 2(2). 授業実施回数

全体回答数は 59 であった。研究科全体では 73%が 8 回講義をしている（昨年度 67%）。生物学コース・分子生命科学コース・地域環境工学コースでは回答者の 70%以上が 8 回実施している。7 回が生物学コース・分子生命科学コース・生物資源学コース・園芸農学コースでそれぞれ 6.6%（1 名）、30%（3 名）、27%（3 名）と 7%（1 名）がいる。6 回が園芸農学コースで 3 名、5 回以下が生物資源学コースで 1 名いる。予定通り実施されなかったケースが数件あるようだ。担当していないという回答は、開講の計画はしたが履修者がいなかったものと思われる。

設問 3. 休講した場合の代償措置はどのようにしましたか。



図Ⅳ- 3 - 3. 休講の代償措置

全回答数は 52 である。この数は昨年度の 18 から大きく増加した。昨年度、「休講していない」の項目がなかったため、今年度は該当者が回答できるようになったと考えられる。研究科全体では、

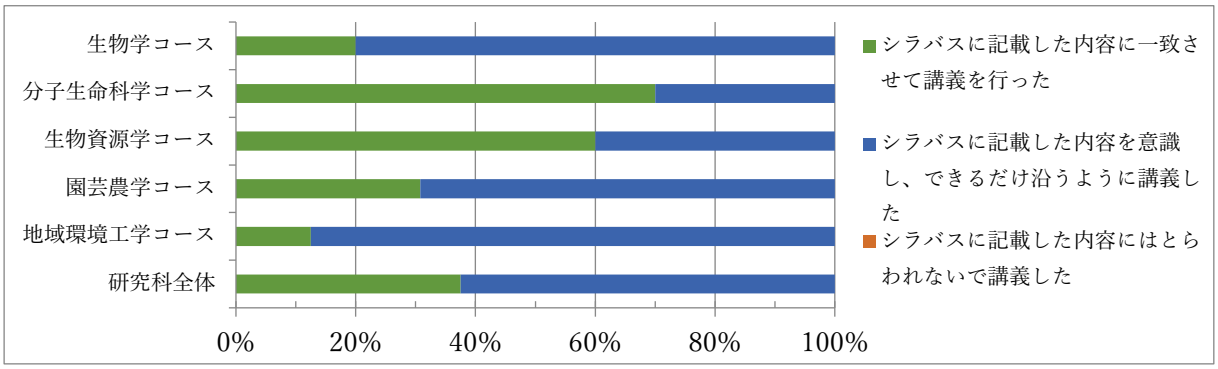
「休講していない」が 62%であった。一部補講も含め「補講した」が 23%であった。また、「何もしなかった」が研究科全体で 8%であった。「休講していない」を除き、コース別では生物学コース・地域環境工学コースで回答者全員が「補講した」としている。「他の措置」が生物資源学コースと園芸農学コースでそれぞれ 2 名いた。「何もしなかった」が生物資源学コースで 2 名、分子生命科学コースと園芸農学コースでそれぞれ 1 名いた。

「他の措置」については、以下のようであった。

【生物資源学コース】
・内容に沿ったレポートを課した（2 件）

【園芸農学コース】
・課題を課した（2 件）

設問 4. (1) シラバス記載の内容と実際の授業内容との一致の程度について答えて下さい。



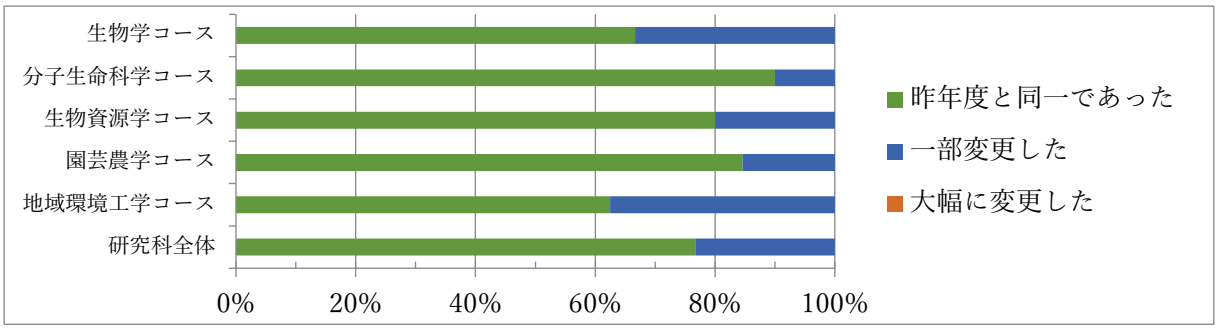
図Ⅳ- 3 - 4. シラバスと実際の授業内容との一致度合

全回答数は 56 である。研究科全体では、「シラバスと一致」,「できるだけ一致」と合わせると 100%で、昨年度（100%）と同様であり、シラバスに捉われない内容での講義がなかった。特に分子生命科学コースと生物資源学コースはシラバスに内容を一致させている。概ね大学院でもほぼシラバスに沿った講義が行われていることが分かる。

(2) 上記で,「3. 内容にとらわれないで講義した」と回答した方はその理由を下欄に具体的に記入して下さい。

該当者はいない。

設問 5. (1) 本年度のシラバスの記載内容は前年度と同一でしたか。



図Ⅳ- 3 - 5(1). 前年度のシラバスとの比較

全体回答数は 56 である。研究科全体で、「昨年度と同一」と「一部変更」がそれぞれ 77%、23%であった（昨年度は 83%と 15%)。「大幅に変更」は一人もいなかった（昨年度 1 名)。少しずつマイナーチェンジをしながら講義を構成していることがうかがえる。

(2) 上記で，「2. 一部変更した。」または「3. 大幅に変更した。」と回答した方はシラバスを変更した理由を教えて下さい。

【生物学コース】
・受講した人数により，効果的にできることが異なるため。
・進度により変更した。
・内容を一部変更した。
・講義内容を見直し，順番を入れ替えた。

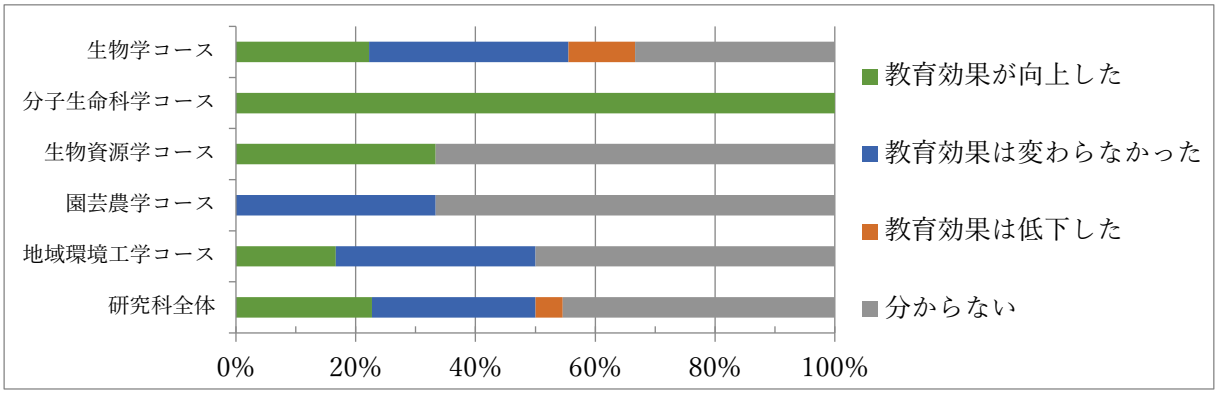
【分子生命科学コース】
・受講生の専門分野に，より近い話題を選んだ。

【生物資源学コース】
・授業内容に関する新たな知見を盛り込んだ。
・前年度が少し詰め込み過ぎたので改善した。

【園芸農学コース】
・学生のレベル，専門に応じて対応した。

【地域環境工学科】
・わかりやすくするため。
・主な受講予定者の研究分野を考慮した。
・前年度の反省を踏まえ修正した。

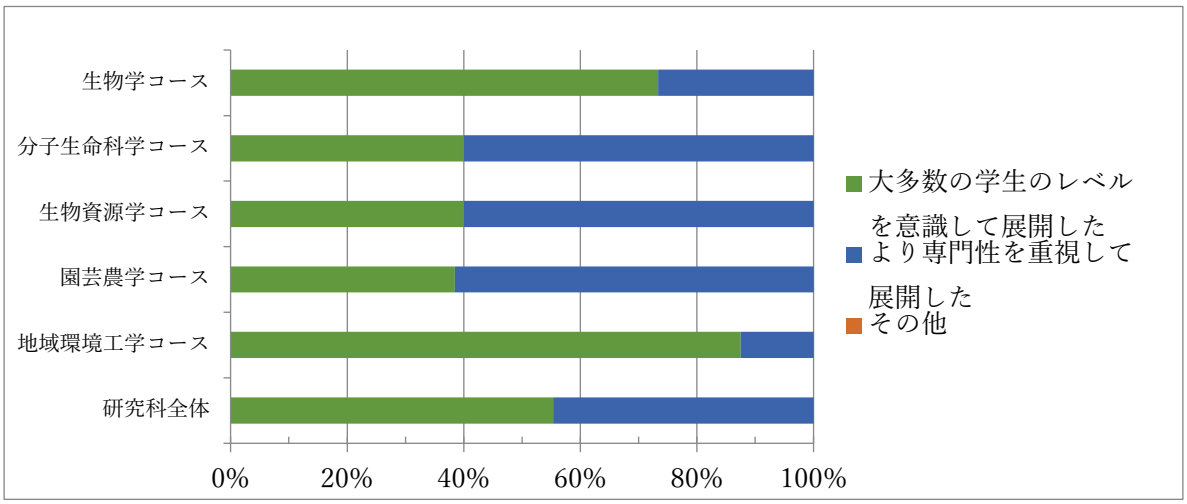
(3) 上記の場合で、シラバスの変更は教育効果にどのような影響を与えたとお考えですか。



図Ⅳ- 3 - 5(3). シラバス変更の教育効果

全回答数は 22 である。該当者のみが回答しているので、回答数は多くない。研究科全体で,「教育効果が向上した」と回答したのは 5 人(23%)いて、平成 30 年度より少し減少した（平成 29 年度：30%, 平成 30 年度：29%)。「教育効果は変わらなかった」が 27%を占める（平成 30 年度 43%)。「分からない」が 10 件（45%）と最も高く、シラバスの変更と教育効果の改善の因果関係を検証するのは困難だと思われる。

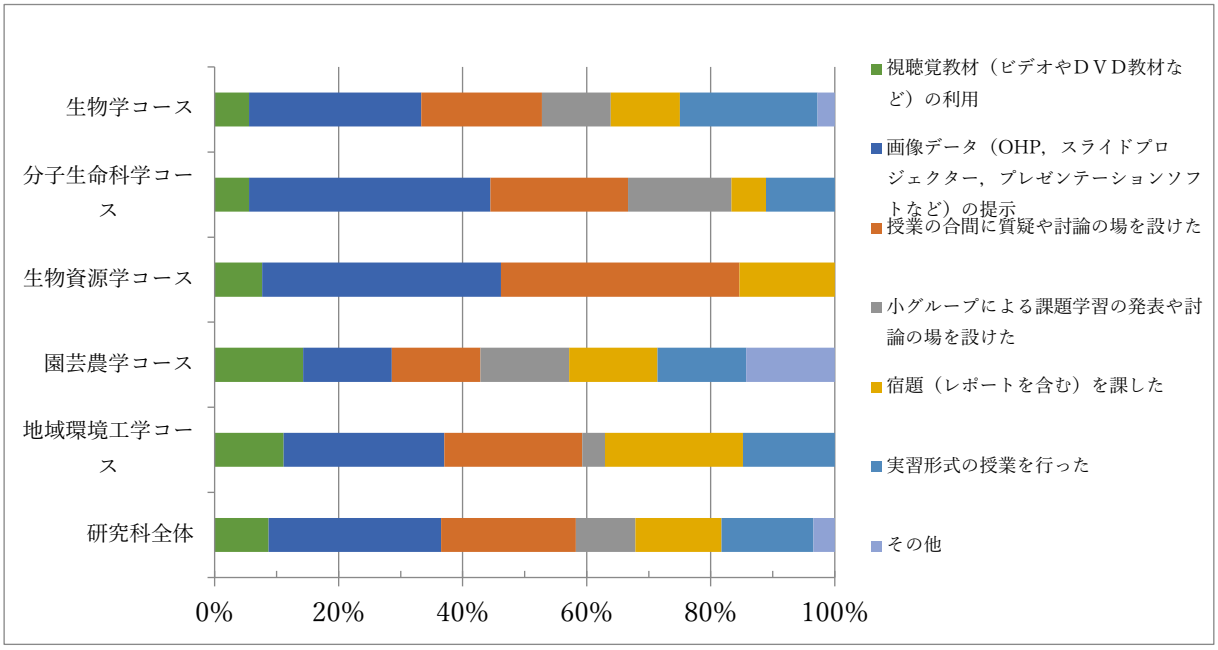
設問 6. 大学院の担当講義はどのような考え方で展開しましたか。



図Ⅳ- 3 - 6. 講義展開の考え方

全回答数は 56 である。研究科全体では、「学生のレベルを重視」が 55%（平成 30 年度 50%）で「専門性重視」とした回答が 45%（平成 30 年度 50%）であり、過去 3 年間で両者は概ね同程度と言える範囲にある(平成 29 年度：55%、45%)。学生のレベルと専門性を両立させながら講義を展開しているのが実態ではないかと思われる。

設問 7. 学生の授業の理解度を上げるために工夫している点があったら教えて下さい（複数回答可）。



図Ⅳ- 3 - 7. 授業の工夫

全体回答数は 115 件である。研究科全体で、「画像データ活用」・「視聴覚機材の利用」が計約 37%を占め，学部授業（59%）より低かった。「授業の合間に質疑・討論の場を設けた」、「小グループによる課題学習の発表や討論の場を設けた」、「実習形式の授業を行った」など学生の能動的学習としたケースが 46%となり、昨年度の 44%より上昇した。なお、このような取り組みのいずれかを実施していた教員は回答者全体の 83%を占める。

「その他」とした回答

【生物学コース】

・院の質が低下しているので、まず基礎からやり直す必要があると思う。

設問 8. 成績評価に対して疑義を持つ学生がいますが，そのような場合への対応として，どのような取り組みを行なっていますか。下欄に具体的に記入して下さい。

【生物学コース】

・学生が納得するまで説明する。

・大学院では、あまり疑義を持つ学生に会っていない（4 件）。

・もしあれば対応する。

・成績評価について、丁寧に説明している（2 件）。

・個別に対応する

【分子生命科学コース】

・成績評価についてシラバスに具体的に記述する。疑義に対しては、具体的に問題点を説明する。

・不服申し立ての制度があることを授業で説明しておく。

・納得するまで説明する（評価に基準を設けている等の説明をする）。

・課題をどこまで達成出来たら単位を認めるかという基準を前もって用意しておく。
・問い合わせがあれば、説明する（2 件）。
・疑義を持つ学生がいない（2 件）。

【生物資源学コース】
・いつでも疑義を申し出てくださいと、一回目のガイダンスで伝えている。
・出席状況や受講態度について、説明する。
・レポートの内容などに基づいて評価した旨を、実際に当人の提出物を用いて、説明する。
・初回の講義で、評価の基準を説明する。

【園芸農学コース】
・口頭で説明。必要に応じて、根拠資料を提示。
・疑義を持った学生はいなかった（2 件）。
・面談。
・全部公開する。
・授業中に丁寧に説明した。

【地域環境工学コース】
・模範解答を詳細に説明する。
・評価基準とレポート等の評価結果を丁寧に説明する。
・そのようなケースがなかった。
・レポートの返却、採点基準の開示。

全体で 32 件の記述があり。「疑義を持つ事例無し」が 9 件と多い。また、「学生に説明する」が 13 件、「レポート等を返却する」が 4 件あった。

設問 9.　教育改善に関わる問題をもっと掘り下げるために，このアンケートに追加した方がよいとお考えの項目がありましたらご記入下さい。

【生物学コース】
・全体のカリキュラムの妥当性を聞いてみたほうが良いのではないか。大学院の授業数（学生がとらないといけない単位数）は、多すぎると思う。
・掘り下げるのではなく、よりしっかりしたのにするのが、方向性だと思う。

設問 10.　このアンケート調査の実施や内容についてご意見がありましたらご記入下さい。

特になし

Ｖ．アンケート調査結果に対する各学科の見解

生物学科

学部の教育理念、教育目的、教育目標や学科の教育目標およびアドミッションポリシーについては「知らない」という回答が４割程度を占めていた。ガイダンスや基礎ゼミナールなどでこれらのことを周知する必要がある。学生の主体的学習についてみると、「講義や演習の受講にあたり講義の何倍程度の時間を講義室外での学習にあてたか」については、１～２倍未満と答えた割合、および 0.5～１倍未満と答えた割合が両方ともに約 40%であった。学生の主体的学習の意義について各授業においてさらに周知していく必要がある。一方、講義室と実験・実習室については、それぞれ約 30%、約 15%の学生がやや不十分もしくはかなり不十分という回答だった。これは簡単に解決できる問題ではないが、改善に向けた取り組みが必要である。卒業研究についての満足度は９割が肯定的な回答であったが、自由記述をみると１割程度ではあるが「希望の研究室でなかった」、「主体性を保って、研究に向かえなかった」、「求められるレベルの高さについていけなかった」など留意すべきものがあった。「本学部のカリキュラムで学んだことが進路の決定にどのように影響したか」（設問 15）については肯定的意見が約６割あり、また「大学卒業者としての知識や学力を身に付けたか」（設問 16）についても肯定的な意見が約５割あった。一方、これらの設問についての否定的な意見（もしくは「わからない」）はそれぞれ 27%、16%であり、カリキュラムについてはさらなる改善が必要である。本学部の教育活動の中で最も早急に改善すべき点については「特に問題はない」が 37%である一方で、「教育・研究設備（を改善すべき）」も 36%あった。教育・研究設備に関する具体的な要望としては、冷暖房設備、研究室の設備に言及したものがあった。さらに「学生に対する教員の指導方法（を改善すべき）」の割合が 15%あり、これは他学科よりも高い。この設問についての自由記述をみると「サポートが非常に手薄で、充分な指導や研究活動を行えなかった」、「教員の質に差がありすぎる」など研究室による教育の質の差を指摘する意見がみられた。これらの意見を真摯に受け止め、指導方法を改善していく必要がある。また、「このままでは教員が減っていく一方ではないかと感じており、次年度以降の在籍教員の確保をするべき」と本学科の教員数不足を指摘する意見もあった。教育体制の改善に向けた取り組みが必要といえる。なお、「所属する学科の教員の講義・実習・演習などにおける学生への指導や対応についての満足度」、および「総合的に判断したときの本学部・学科の教育・研究に対する取組み・姿勢に対する満足度」については肯定的な意見がそれぞれ 68%、79%を占めていた。自由記述をみると「教員によって対応に差がある」、「やる気がないと感じる教員がいる」、「単に教科書などを読み上げるだけの先生もいた」、「一部の先生の講義や実習はよくわからなかったし、理不尽なこともあった」など、設問 17 で示された意見と同様に、指導方法に対する厳しい意見が少なくなく、指導方法の改善が急務といえる。また、「研究に十分なスペースや器機が不足している」などの意見もあり、研究設備の改善を図る必要がある。

修士課程については研究科全体の調査結果であり、「本研究科を修了するにあたり大学院修了者に相応の知識および学力を身に付けたと感じているか」の問いについては肯定的な意見は 68%を占めていた。また本研究科の教育活動の中で最も早急に改善すべき点については「教員の指導方法」、「授業の方法」、「教育・研究設備」が多く、割合としてはいずれも 10～15%程度であった。これらの意見に留意し、今後も学生に対する十分な説明など、改善に向けた取り組みが必要である。

なお、「所属するコースの教員の学生への指導や対応に対する満足度」については、肯定的意見の割合が 95%と高かった。「修士研究に対する満足度」、および「総合的に判断したときの本研究科・コースの教育・研究に対する取組み・姿勢に対する満足度」についての肯定的意見の割合はおおよそ８割であり、ほぼよい結果であった。今後もさらに高めていくための取り組みや努力が必要である。

（令和２年度学科長　石田清）

分子生命科学科

30 数年前、私が学生の頃にはこのようなアンケートはなかった。シラバスもなかった。主体的学習などという言葉もなかった。学生と教官との交流は研究室に所属するまで皆無に近かった。教養部時代の人気教官は十分遅れて来て十分早く講義を終え、三回は休講してくれる教官であった。当然補講などする教官などいなかった。当時流行った「文学部唯野教授」でも人気教官はこういう人たちだったよう記されていたように思う。講義内容は高度で、基礎化学の講義では初回にもかかわらず、エントロピー・エンタルピー・自由エネルギーなどの解説はなく当然知っているものとして講義が行われた。教養教育では心理学・歴史学・政治学・地理学・哲学・文学など様々な分野を深く学ぶことが出来たがやはり講義内容は高度なものであった。なんとかゼミナールのようなお遊びのようなものはなかった。専門教育では教養教育に輪をかけて超高レベルな講義が多くあり、授業時間内に理解することはほぼ不可能であった。つまり、主体的学習などという言葉はなかったとしても主体的に学ばなければついていけなかったである。もちろん、麻雀・パチンコと主体的に遊びもした。当時の講義を今の学生に評価させるとまず最低点以外はとれないのではないだろうか。研究室に所属しても多くの教授は雲の上の存在で学生との交流といえば、宴会で酒をついでありがたく説教をいただくことだった。ただし、当時の学生は特に不満も不足も感じていなかったと思う。

ここまで書くと昔の大学教育の方が良かったと考えているように思われるかもしれない。大学改革が大学の衰退を促進していると私は考えているのでその理解は間違いではないが、今の方が良くなった面もあると思っている。当時はハラスメントという言葉も学生相談などというシステムもなく、教官との関係が悪くなった学生は我慢するか退学するかの選択肢しかなかった。女子学生を膝の上に座らせたり、バーで手をさすり続けるような教授がいても問題になることはなかった。ここまで極端な教員が現在いるとは思えないが、何気ない行為が他人には非常に不快でときには精神にダメージを与えることがありうる、などということは本人には案外わからないものである。学生によるアンケート調査は自ら行為（講義・指導）を自省する材料として捉えれば有意義なもので、教員はたとえ自身のことが言及されているのではないとしても他山の石とすべく熟読する必要があろう。

（令和 2 年度学科長　殿内暁夫）

食料資源学科

他学科と比べて学部の教育理念、教育目的、教育目標や学科の教育目標、アドミッションポリシーを知らない学生が多かったことから、年度始めに行うガイダンスや基礎ゼミ等を通して周知

することが必要である。

専門教育に満足しているかという問いには８０％以上の学生が肯定的な意見であった。一部「重複する内容が授業間で多かった」「食品の授業は機能性について扱う内容が多く、似たり寄ったりだと感じた」など授業内容の重複に関するコメントがいくつか見られたが、これらはカリキュラムの改正により今後改善されるのではないかと考えられる。

学生の主体的学習時間が短いことは大きな課題である（0.5 倍未満の 2 割を含み、1 倍未満が 5 割）。授業では丁寧な講義や指導を心がけることは当然だが、学生が時間外に学習に取り組む姿勢を培う方策も施すべきであろう。

卒業研究については肯定的意見が８０％を超えていたが、一部「指導教員による指導がない」とのコメントもあり、教員と学生のコニュミケーション不足が懸念されるため改善の余地があると思われる。

学生の支援体制に関しては、学業関係では教員（クラス担任+指導教員+指導教員以外の教員）への相談が最も多いことから、今後も学生の相談には積極的かつ適切に応じるよう心がけるべきである。

本学部の教育活動の中で最も早急に改善すべき点として、本学科では「成績評価の方法」が他学科よりも高かった。「テストの返却がないと成績がわかりづらい」「問題が例年と同じなので、いかに過去問を手に入れるかが勝負になる」などのコメントがあり、改善の余地があると思われる。

研究科の調査結果ではプレゼンテーション演習Ｉに対して肯定的な意見がある一方、否定的な意見が複数あげられていたため、引き続き研究科全体で考えなければいけない問題であると思われる。

教員に対するアンケートでは学習環境や研究環境の施設・設備面での不十分さを指摘する教員が他学科より多く、これは前年度からあまり改善されていない。新任教員が多いことから前所属と比較してそのように感じている部分があると思われるが、同様の指摘は学生にもある。特に実習室の空調については早急な対応が必要と思われる。

（令和２年度学科長 中島　晶）
（令和２年度コース長 千田　峰生）

国際園芸農学科

アンケートの配布時期や回収方法の工夫で，学部学生の回収率は学部平均とほぼ同率の約 93%と例年より高くなった。よって，アンケートの結果は学部卒業生の意見を概ね集約できていると考える。今後この回収率を維持・向上するにはさらなる工夫が必要であろう。

学科の専門教育などに対する満足度は昨年より低くなったが，80%以上の良好な結果を示している。詳細を見ると、シラバスへの満足度は 80%以上、教員の指導は約 80%、卒業研究を行ったことへの満足度は 85%以上、カリキュラムと進路決定の関係は約 70%であった。

今回のアンケートは，国際園芸農学科の 1 期生に対するもので，学部改組で新設した国際関係科目や海外研修入門に対する肯定的なコメントが複数あり，特に印象に残った科目の設問では，

海外研修入門が挙げた学生が多数で，改組の趣旨に合った教育効果が認められたと考える。

一方で、大学卒業者に相応の知識や学力を身に付けたと感じている学生の割合は学部平均とほぼ同率の約 45%と低い。これらは，第一に学部全体として低い傾向にある点が挙げられるが、もうひとつ、本学科の学生の就職先が専門分野以外になる学生が多く、様々な分野に就職する現状から、大学で学んだことが将来の職業に直接結び付きにくく、学生が実感しにくいことを表していると考えられる。

改善点としては、一部教員の講義や研究室での指導が暴言やハラスメントなどの不適切であったとの学生回答があり，これらはその講義や指導教員を特定して具体的な解決策を取る必要があろう。講義に関しては授業アンケートで特定できるので、卒業研究についても授業アンケートのような形式のアンケートが必要かもしれない。また、研究室の狭さについての不満については現状では解決が難しいが、冷暖房施設については徐々に改善が図られている。

以上の結果、本学科の教育研究に対して、教員などの努力で一定水準の成果を上げ続けていると学生から評価されているが、学生の評価が低い項目もあるので、ガイダンス等を通じて、教育目標の周知を一層進め、学生の主体的学習意欲を促し，学生の多様な要望に応えられるよう，さらに努力していくことが望まれる。

（令和２年度学科長　張　樹槐）

地域環境工学科

卒業生のアンケート回答率は平成 30 年度と同様に 93%で、平成 29 年度より全体的に上昇傾向にあることから、今後とも、学科長ならびに各指導教員を通じての積極的な協力要請が必須だと考えられる。

教育目標等の認識に関して、肯定的な意見が平成 30 年度では 60%を上回る結果であったが、令和元年度は 50%に減少していることから、各学年に対する年度初めのガイダンスの他に、卒業時にでも、再度、本学部の教育理念や教育目標等を認識出来るよう工夫してく必要があると考える。

カリキュラムやガイダンス内容の適切さに関しては、平成 30 年度に引き続き肯定的な回答が 80%を上回り、シラバスへの評価も肯定的な回答がほぼ 90%以上である。特に、学科で受けた教育への満足度では、「強くそう思う」「そう思う」の回答が 100%となっていることから、本学科の教育は学生に高く評価されており、学科教員の教育への努力に対する成果であると考えられる。

学生の主体的学習に関して、授業時間の 2.0 倍～3.0 倍未満の学生が平成 30 年度よりも減少しているが、1.0 倍～2.0 倍未満の学生は平成 30 年度よりも 2 倍程増加しており、他学科と比較してもその割合が高い。

学生の学習環境や教員の相談体制については、平成 30 年度と同様に、学業の相談窓口における教員「学生センター」との面談が 50%程度であると共に、「指導教員以外の教員と面談」の割合が他学科と比較して高く、学生への学習指導が学科教員全体で丁寧に行われていることを示している。また、施設・設備面では、全体に否定的な回答は目立たず、大きな問題は無いと考えられる。

卒業後の進路に関しては、カリキュラム、進路支援への取組みとも 80%を上回る肯定的な回答を得ており、学部内で最も高い水準である。また、大学卒業者として修得した知識・学力について肯定的な回答が平成 30 年度よりも 20%程減少していることから、その原因も含めて注視する

必要があると考える。

教育活動全体に関しては、まず早急に改善すべき点について、「特に問題はない」という回答が平成 30 年度は 40%程度であったが、令和元年度は 50%を上回っており、総合的判断による肯定的な回答も平成 30 年度に引き続き 90%（学部内で最も高い）を上回っていることから、一定程度の水準はクリアーしていると判断出来る。しかし、今後とも、こうした評価を継続出来るよう努力が望まれると考える。

地域環境工学コース（修士課程）の教育活動に関しては、学部に準じた教育活動が行われているため、大きな問題は存在しないものと推測しているが、修士学生が平成 30 年度に引き続き 2 名のみであるため、学生の定員充足が最大の課題である。

教員対象教育評価アンケートに関して、本学科教員は平成 30 年度と同様に学科の教育目標とカリキュラムとの関係を強く意識し、予習復習を学生に課し、学生の反応を見ながら授業運営していることがいずれの設問からも伺える。また、学科会議内で行われていた学生に関する情報交換を学科主催 FD と位置付けているため、平成 30 年度と同様に FD の参加回数が他学科と比較して多くなっていると考えられる。また、施設・設備面については、一部否定的な回答も存在するが、概ね一定水準には達していると評価している。卒業研究の必要性の意識は毎年度高く、卒業生に相応する知識と学力を身に着けさせたとの回答が 90%にも達しており、高水準である。

教員対象授業アンケートに関しては、平成 30 年度に引き続き令和元年度も回答率が 100%に至らず残念であるが、学部の授業実施では規定回数に達しない授業は皆無であり、休講時には補講が 100%実施されている。授業実施に際しては、70%がシラバス通りではなく、シラバスに沿うように授業を行っており、平成 30 年度のシラバスとの比較では 50%（他学科と比較して高い）を上回る割合で一部変更していることからも、常に教育改善を意識して、授業実施に当たっていることが伺える。また、研究科の授業実施についても、学部と同様であると推測される。

以上、地域環境工学科では教育実施に対し、これまでの努力を継続しつつ、一定水準の成果を上げ続けているが、部分的には学生の評価が高くない事項もあるので、ガイダンス等を通じて、教育目標の周知を一層進め、主体的学習意欲を高めていくことが望まれる。

（令和２年度学科長　森　洋）

VI. 教育改善委員会（令和元年度教育改善にむけたアンケート調査についての意見）

・学部卒業時・研究科修了時学生対象教育評価アンケートについて

（１） 学部・研究科の教育理念、教育目的、教育目標、学部の教育目標、アドミッションポリシーについて

学部の教育理念、教育目的および教育目標の認知度はおおむね５割程度であり、学生への周知を引き続き進めていく必要がある。学科やコース毎の教育目標とカリキュラムの内容とは８割近い学生が合致していると肯定的に答えており、数値は年々改善されている。

（２） 学科／コースの専門教育について

専門教育についての満足度は学部では８割以上が満足していると答えている。学科別に見ると地域環境工学科で全ての学生が満足と答えている一方、分子生命科学科では６割を下回っている。学科の専門科目の広がりをどのように感ずるか、学生側の相違が見られる。研究科では７割以上が受けた教育に満足したと答え、毎年この割合が上向いている。

（３） 教員の指導について

教員による指導、対応への満足度は学部全体で８割、生物でやや低く７割を切っていたが、地域環境工学科では９割を超えており、全体として改善されている。研究科では否定的な意見はなかった。

（４） 主体的学習について

主体的学習に充てた時間は、必要とされる講義室での学習時間の２倍未満と答えた学生の割合は学部、研究科共に全体のおよそ８割を占め、例年、あまり変わっていない。講義・実習での姿勢についても「真面目に取り組んだ、出来るだけ休まない」など、当たり前の行為や受動的な姿勢をうかがわせる意見が多い。主体的に学ぶことを目的とした何らかの対策が強く求められる。

（５） 教育支援、施設・設備について

空調機（特に夏場の冷房）の要望が高いが、講義室については毎年改善されており、不満はこの先減少していくと見込まれる。講義室に時計の設置を希望する声が毎年見られるが、理由があるため実施していない。大学では学業、学生生活、進路などについて様々な相談窓口を用意しているが、学生の利用は全体として少ない。引き続き学生への周知を続けていく必要があると思われる。

（６） 卒業研究、修士研究に対する満足度

卒業/修士研究に対して学部全体では約９割、研究科では８割が満足と肯定的に答えており、評価が高い。今後もさらなる向上を目指すために、教員と学生間のコミュニケーションを良好に保ち、個々の教員が丁寧な指導を続けることが望まれる。

（７） 進路指導について

本学および本学部の進路支援に対する取り組みについては、学科間で回答の差が大きく、地域環境工学科では充分と答えた割合９割近くが達したのに対し、分子生命、生物では３割程度に留まった。これらの学科間での就職／進学率の違いも無関係ではないと思われるが、前向きな対応を期待したい。

（８） 教育のあり方について

卒業/修了時に相応の知識や学力が身に付いたかとの問いに対し、学部全体では５割弱、研究科では７割弱が肯定的に答えている。一方で否定的に答えた学生は学部で 1.5 割、研究科で 0.5 割だった。その理由を見ると自らの勉強不足に対する反省が多く見られることから、学生が心地よく学べる環境を整備し、主体的に目標を持って学ぶ雰囲気の醸成と、それに向けての導きが必要であると思われる。

・教員対象教育評価アンケートについて

学部/研究科の理念、教育目的、教育目標、学科/コースの教育目標とアドミッションポリシーについては、ほとんどの教員に認知されている。また、全ての教員がシラバス作成時に教育目的、教育目標に沿った講義内容にしようと意識していると答えた。学生の授業時間外学習を増やす工夫として、昨年のこのアンケートでは課題を出すことが有効ではないかと考察されたが、今年度の学生対象アンケートの結果は必ずしも相関しておらず、さらに他の方法も加味する必要があると思われる。施設・設備について教員が望むのはスペースの改善であるが、現状では対応が難しい。

・教員対象授業アンケートについて

教員の９割以上が学部授業科目（2 単位）では 15 回以上、研究科（１単位）で７回以上の授業を実施した。シラバスについては全教員がシラバスと授業内容を一致させた、またはシラバスに沿うように講義を行っていた。学部授業では、専門性よりも学生のレベルを意識しながら授業を行っている教員の割合が高い（90%）。一方、本格的な専門教育を大学院で実施していることが回答からうかがえた。

（令和２年度副委員長　中村　剛之）